

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第1集

海津横馬場遺跡 I

福岡県三池郡高田町所在遺跡の調査

2005

福岡県教育委員会

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第1集

海津横馬場遺跡 I

福岡県三池郡高田町所在遺跡の調査

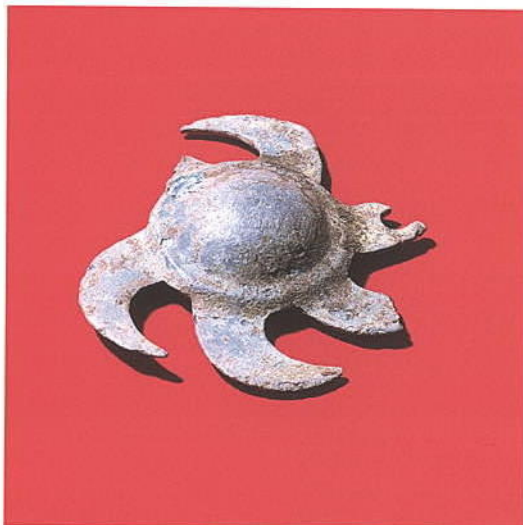


1. 海津横馬場遺跡遠景（東から）



2. 海津横馬場遺跡遠景（西から）





出土巴形銅器 (ほぼ実大)

序

福岡県教育委員会では、平成13年度から独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（旧日本鉄道建設公団）の委託を受けて、九州新幹線建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しております。本報告書は平成13・14年度に発掘調査を実施した三池郡高田町大字海津に所在する海津横馬場遺跡第1・2次調査の記録です。同遺跡からは弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡や土坑、石棺墓などが多数見つかかり、先人の足跡を知る貴重な成果を得ることができました。

この成果が、教育・研究・文化財愛護思想の普及の一助になれば幸いに存じます。

なお、発掘調査及び本書の作成にあたりまして、多くの方々に御協力・御助言をいただきました。ここに深甚の謝意を表します。

平成17年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 森 山 良 一

例言

1. 本書は平成13・14年度に九州新幹線建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県三池郡高田町大字海津字横馬場に所在する海津横馬場遺跡（第1・2次）の報告で、九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告の第1集である。
2. 発掘調査・整理・報告書作成は日本鉄道建設公団（平成15年度より独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構）の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。
3. 本書に掲載した遺構写真については進村真之、宮地聡一郎が行った。遺物写真は九州歴史資料館 参事 石丸洋、文化財保護課整理指導委員 北岡伸一が撮影し、空中写真は東亜航空技研株式会社（第1次）、九州航空株式会社（第2次）に委託した。
4. 本書に掲載した遺構図は進村、宮地が作成した。掲載した遺構図の方位は全て座標北である。
5. 出土遺物の整理作業は九州歴史資料館で行った。
6. 炭化種子の分析については株式会社古環境研究所に委託し、その成果をⅣに収録した。
7. 第1次調査で出土した巴形銅器については、X線撮影を福岡市埋蔵文化財センター 比佐陽一郎氏、片田雅樹氏に依頼した。
8. 出土遺物の実測は進村、宮地の他、平田春美、中川陽子、中川真理子、中村陽子、掘江圭子、西原節子、田中典子、若松三枝子、栗林明美、寺岡和子、久富美智子、橋口雅子、荒川妙、棚町陽子、坂田順子が行った。
9. 遺構・遺物の製図等は豊福弥生・原カヨ子・宮地が行った。
10. 本書の執筆はⅢ－2を進村、Ⅳを除く他を宮地が行った。
11. 本書のⅣは依頼原稿である関係上、挿図版及び表番号は別個となっている。
12. 本書の編集は第1次調査分を進村が、第2次調査分を宮地が行い、全体の調整を宮地が行った。

本文目次

| | |
|----------------|-----|
| I. はじめに | 1 |
| 1. 調査の経緯 | 1 |
| 2. 調査の組織 | 3 |
| II. 位置と環境 | 5 |
| III. 発掘調査の記録 | 9 |
| 1. 基本層序 | 9 |
| 2. 第1次調査の内容 | 10 |
| (1) 概要 | 10 |
| (2) 竪穴住居跡 | 10 |
| (3) 石棺墓 | 17 |
| (4) 土坑 | 18 |
| (5) 溝 | 21 |
| (6) 包含層出土遺物 | 24 |
| (7) 石器 | 40 |
| (8) 土製品 | 42 |
| (9) 小結 | 42 |
| (10) 巴形銅器について | 43 |
| 3. 第2次調査の内容 | 47 |
| (1) 概要 | 47 |
| (2) 竪穴住居 | 47 |
| (3) 土坑 | 65 |
| (4) ピット出土土器 | 125 |
| (5) 包含層出土土器 | 125 |
| (6) 石器 | 137 |
| (7) 土製品・鉄製品・玉類 | 144 |
| (8) 小結 | 146 |
| IV. 自然科学的分析 | 148 |

図版目次

| | |
|--------|-----------------------|
| 巻頭図版 1 | 1. 海津横馬場遺跡遠景（東から） |
| | 2. 海津横馬場遺跡遠景（西から） |
| 巻頭図版 2 | 第2次調査区全景（空中写真合成）（南から） |
| 巻頭図版 3 | 巴形銅器 |
| 図版 1 | 1. 海津横馬場遺跡遠景（南から） |
| | 2. 第1次調査区全景（南から） |

- 図版2 1. 1号竪穴住居跡（東から）
2. 1号竪穴住居跡 移動式カマド（北東から）
3. 1号竪穴住居跡 土器No2（北東から）
- 図版3 1. 2号竪穴住居跡（西から）
2. 3号竪穴住居跡（南東から）
3. 4号竪穴住居跡（北東から）
- 図版4 1. 1号石棺墓（北西から）
2. 1号石棺墓（南西から）
3. 1号石棺墓掘り方（北西から）
- 図版5 1. 1号土坑（西から）
2. 1号土坑（西から）
3. 1号土坑（南から）
- 図版6 1. 1号土坑（西から）
2. 2号土坑（北から）
3. 3号土坑（南から）
- 図版7 1・2号竪穴住居跡出土土器
- 図版8 2号竪穴住居跡出土土器
- 図版9 2号竪穴住居跡、1・2号土坑出土土器
- 図版10 3号土坑、1号溝、包含層出土土器①
- 図版11 包含層出土土器②
- 図版12 包含層出土土器③
- 図版13 包含層出土土器④
- 図版14 包含層出土土器⑤、出土土製品
- 図版15 巴形銅器
- 図版16 出土青銅器、鉄器、石器①
- 図版17 出土石器②
- 図版18 出土石器③
- 図版19 出土石器④
- 図版20 出土石器⑤
- 図版21 1. 第2次調査区南半空中写真（北から）
2. 第2次調査区北半空中写真（北から）
3. 上層遺構（4～8号土坑）（南から）
- 図版22 1. 3号竪穴住居跡（南西から）
2. 4号竪穴住居跡（南東から）
3. 5・6号竪穴住居跡（南西から）
- 図版23 1. 7号竪穴住居跡（南東から）
2. 8号竪穴住居跡（南東から）
3. 9号竪穴住居跡（南西から）

- 図版24 1. 10・11号竪穴住居跡（南東から）
2. 12号竪穴住居跡（南東から）
3. 13号竪穴住居跡（南東から）
- 図版25 1. 14号竪穴住居跡（北西から）
2. 15号竪穴住居跡（南西から）
3. 16号竪穴住居跡（南東から）
- 図版26 1. 17号竪穴住居跡（南西から）
2. 4号土坑（南東から）
3. 5号土坑（南から）
- 図版27 1. 6号土坑（南から）
2. 7号土坑（西から）
3. 8号土坑（南から）
- 図版28 1. 9号土坑（北西から）
2. 10・11号土坑（北から）
3. 12号土坑（南東から）
- 図版29 1. 13号土坑土器出土状況（南西から）
2. 13号土坑（北西から）
3. 14号土坑（南東から）
- 図版30 1. 15号土坑（北から）
2. 16号土坑（西から）
3. 17号土坑（北西から）
- 図版31 1. 18号土坑（北から）
2. 19号土坑（北から）
3. 20号土坑（北西から）
- 図版32 1. 21号土坑（北西から）
2. 22号土坑（南から）
3. 23号土坑（西から）
- 図版33 1. 24号土坑（南東から）
2. 25号土坑（北東から）
3. 26号土坑（南から）
- 図版34 1. 27号土坑（西から）
2. 28号土坑（南から）
3. 29号土坑（北東から）
- 図版35 1. 30号土坑（東から）
2. 31号土坑（南西から）
3. 32号土坑（南西から）
- 図版36 1. 33号土坑（南西から）
2. 34号土坑検出状況（東から）

3. 34号土坑（北東から）
- 図版37 1. 35号土坑（北西から）
2. 36・37号土坑（南東から）
3. 38号土坑（北から）
- 図版38 1. 39号土坑（北西から）
2. 40号土坑（西から）
3. 41・42号土坑（北東から）
- 図版39 1. 43・44号土坑（北西から）
2. 45号土坑（東から）
3. 46号土坑（南西から）
- 図版40 1. 47号土坑（南東から）
2. 48号土坑（南東から）
3. 50号土坑（北西から）
- 図版41 1. 51号土坑（東から）
2. 52号土坑（北東から）
3. 53号土坑（東から）
- 図版42 1. 54号土坑（北から）
2. 55号土坑（東から）
3. 56号土坑（南西から）
- 図版43 1. 57号土坑（北東から）
2. 58号土坑（西から）
3. 48・59号土坑（北西から）
- 図版44 1. 60号土坑（北から）
2. 61号土坑（北から）
3. 62号土坑（北西から）
- 図版45 1. 63号土坑（西から）
2. 64号土坑（南から）
3. 65号土坑（東から）
- 図版46 1. 66号土坑（南東から）
2. 67号土坑（西から）
3. 68・69号土坑（西から）
- 図版47 1. 70号土坑（北東から）
2. 71号土坑（南西から）
3. 72号土坑（南から）
- 図版48 1. 73号土坑（北から）
2. 74号土坑（西から）
3. 75号土坑（北から）
- 図版49 1. 76号土坑（南から）

2. 77号土坑（南から）
3. 78号土坑（北東から）
- 図版50 1. 79号土坑（東から）
2. 80号土坑（北から）
3. 81号土坑（北から）
- 図版51 1. 82号土坑（北東から）
2. 83号土坑（南から）
3. 84号土坑（北西から）
- 図版52 1. 85号土坑（南から）
2. 86号土坑（西から）
3. 88号土坑（北東から）
- 図版53 1. 89号土坑土器出土状況（北から）
2. 89号土坑（南から）
3. 90号土坑（北から）
- 図版54 1. 91号土坑（東から）
2. 92号土坑（東から）
3. ピット25軽石出土状況（南東から）
- 図版55 3～6号竪穴住居跡出土土器
- 図版56 5～8・12・13・15号竪穴住居跡出土土器
- 図版57 15号竪穴住居跡、5号土坑出土土器
- 図版58 13・24号土坑出土土器
- 図版59 27・29・33・70・76号土坑出土土器
- 図版60 79・84・89号土坑、ピット出土土器、包含層出土土器①
- 図版61 包含層出土土器②
- 図版62 包含層出土土器③
- 図版63 包含層出土土器④、ピット25出土軽石
- 図版64 1. 出土石器①
2. 出土石器②
3. 出土石器③
- 図版65 1. 出土石器④
2. 出土石器⑤
3. 出土石器⑥
- 図版66 1. 出土石器⑦
2. 出土石器⑧
3. 出土石器⑨
- 図版67 1. 出土石器⑩
2. 出土石器⑪
3. 出土石器⑫

- 図版68
1. 出土土製品①
 2. 出土土製品②
 3. 出土鉄器

挿図目次

| | | |
|------|-------------------------------|----|
| 第1図 | 九州新幹線位置図 (1/500000) | 2 |
| 第2図 | 周辺遺跡分布図 (1/25000) | 6 |
| 第3図 | 発掘調査区周辺地形図 (1/2000) | 8 |
| 第4図 | 基本土層図 (1/40) | 9 |
| 第5図 | 第1次調査遺構配置図 (1/200) | 11 |
| 第6図 | 1・2号竪穴住居跡実測図 (1/60) | 12 |
| 第7図 | 1号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、7は1/8) | 13 |
| 第8図 | 2号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3) | 14 |
| 第9図 | 2号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3) | 15 |
| 第10図 | 2号竪穴住居跡出土土器実測図③ (1/3) | 16 |
| 第11図 | 1号石棺墓実測図 (1/30) | 16 |
| 第12図 | 1～3号土坑実測図 (1/30) | 17 |
| 第13図 | 1号土坑出土土器実測図 (1/3) | 18 |
| 第14図 | 2・3号土坑出土土器実測図 (1/3) | 20 |
| 第15図 | 1号溝出土土器実測図① (1/4) | 22 |
| 第16図 | 1号溝出土土器実測図② (27～35は1/4、他は1/3) | 23 |
| 第17図 | 包含層出土土器① (1/4) | 25 |
| 第18図 | 包含層出土土器② (1/4) | 27 |
| 第19図 | 包含層出土土器③ (1/4) | 28 |
| 第20図 | 包含層出土土器④ (59～70は1/4、他は1/3) | 29 |
| 第21図 | 包含層出土土器⑤ (1/3) | 31 |
| 第22図 | 包含層出土土器⑥ (1/3) | 32 |
| 第23図 | 出土青銅製品実測図 (1/1) | 33 |
| 第24図 | 出土鉄器実測図 (1/2) | 33 |
| 第25図 | 出土石器実測図① (1/2、28～33は2/3) | 34 |
| 第26図 | 出土石器実測図② (1/2) | 35 |
| 第27図 | 出土石器実測図③ (1/2、54～59は1/3) | 36 |
| 第28図 | 出土石器実測図④ (2/3) | 37 |
| 第29図 | 出土石器実測図⑤ (2/3) | 38 |
| 第30図 | 出土石器実測図⑥ (2/3) | 39 |
| 第31図 | 出土石器実測図⑦ (2/3) | 40 |
| 第32図 | 出土土製品 (2/3) | 41 |

| | | |
|------|---------------------------------------|-----|
| 第33図 | 第2次調査遺構配置図 (1/200) | 折込 |
| 第34図 | 3・4号竪穴住居跡実測図 (1/60) | 48 |
| 第35図 | 3・4号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4) | 49 |
| 第36図 | 5・6号竪穴住居跡実測図 (1/60) | 50 |
| 第37図 | 5号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4) | 52 |
| 第38図 | 7・8号竪穴住居跡実測図 (1/60) | 53 |
| 第39図 | 5～7号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4) | 54 |
| 第40図 | 9号竪穴住居跡実測図 (1/60) | 56 |
| 第41図 | 8～11号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4) | 57 |
| 第42図 | 10～12号竪穴住居跡実測図 (1/60) | 58 |
| 第43図 | 13・14号竪穴住居跡実測図 (1/60) | 60 |
| 第44図 | 15号竪穴住居跡実測図 (1/60) | 61 |
| 第45図 | 12～15号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4) | 62 |
| 第46図 | 15号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4) | 63 |
| 第47図 | 16・17号竪穴住居跡実測図 (1/60) | 64 |
| 第48図 | 4～8号土坑実測図 (1/30) | 66 |
| 第49図 | 4～7号土坑出土土器実測図 (1/4) | 67 |
| 第50図 | 9～16号土坑実測図 (1/30) | 68 |
| 第51図 | 9～12号土坑出土土器実測図 (1/4) | 69 |
| 第52図 | 13号土坑出土土器実測図 (1/4) | 70 |
| 第53図 | 17～21号土坑実測図 (1/30) | 73 |
| 第54図 | 14～23号土坑出土土器実測図 (1/4) | 75 |
| 第55図 | 22～24号土坑実測図 (1/30) | 76 |
| 第56図 | 25～28号土坑実測図 (25・26・28号は1/30、27号は1/40) | 77 |
| 第57図 | 24～26号土坑出土土器実測図 (1/4) | 79 |
| 第58図 | 27号土坑出土土器実測図 (1/4) | 81 |
| 第59図 | 29～34号土坑実測図 (1/30) | 82 |
| 第60図 | 28～33号土坑出土土器実測図 (1/4) | 84 |
| 第61図 | 35～38号土坑実測図 (1/30) | 86 |
| 第62図 | 34～38号土坑出土土器実測図 (1/4) | 87 |
| 第63図 | 39～42号土坑実測図 (1/30) | 89 |
| 第64図 | 39～43号・45～47号土坑出土土器実測図 (1/4) | 91 |
| 第65図 | 43～49号土坑実測図 (1/30) | 92 |
| 第66図 | 50～53号土坑実測図 (1/30) | 95 |
| 第67図 | 49～55号土坑出土土器実測図 (1/4) | 96 |
| 第68図 | 54～56号土坑実測図 (54・56号は1/30、55号は1/40) | 98 |
| 第69図 | 57～61号土坑実測図 (1/30) | 100 |
| 第70図 | 56～58・60～63・65・66号土坑出土土器実測図 (1/4) | 102 |

| | | |
|------|---|-----|
| 第71図 | 62～67号土坑実測図 (1/30) | 104 |
| 第72図 | 68～71号土坑実測図 (1/30) | 106 |
| 第73図 | 67～70号土坑出土土器実測図 (1/4) | 107 |
| 第74図 | 72～76号土坑実測図 (1/30) | 109 |
| 第75図 | 71～75号土坑出土土器実測図 (1/4) | 110 |
| 第76図 | 77～79号土坑実測図 (1/30) | 112 |
| 第77図 | 76・77号土坑出土土器実測図 (1/4) | 113 |
| 第78図 | 80～83号土坑実測図 (1/30) | 116 |
| 第79図 | 84～86・88号土坑実測図 (1/30) | 117 |
| 第80図 | 78～86号土坑出土土器実測図 (1/4) | 118 |
| 第81図 | 89～92号土坑、ピット25実測図 (1/30) | 120 |
| 第82図 | 88・89号土坑出土土器実測図 (1/4) | 121 |
| 第83図 | 89～92号土坑出土土器実測図 (1/4) | 122 |
| 第84図 | ピット出土土器実測図 (1/4) | 124 |
| 第85図 | 包含層出土土器実測図① (1/4) | 126 |
| 第86図 | 包含層出土土器実測図② (1/4) | 128 |
| 第87図 | 包含層出土土器実測図③ (1/4) | 129 |
| 第88図 | 包含層出土土器実測図④ (1/4) | 130 |
| 第89図 | 包含層出土土器実測図⑤ (1/4) | 131 |
| 第90図 | 包含層出土土器実測図⑥ (1/4) | 133 |
| 第91図 | 包含層出土土器実測図⑦ (1/4) | 134 |
| 第92図 | 包含層出土土器実測図⑧ (161～185は1/4、186～198は1/3) | 136 |
| 第93図 | 包含層出土土器実測図⑨ (207は1/4、他は1/3) | 137 |
| 第94図 | 出土石器実測図① (2/3) | 138 |
| 第95図 | 出土石器実測図② (36～42は2/3、43・44は1/2) | 139 |
| 第96図 | 出土石器実測図③ (1/2) | 140 |
| 第97図 | 出土石器実測図④ (1/3) | 141 |
| 第98図 | 出土石器実測図⑤ (1/3) | 142 |
| 第99図 | 出土土製品、鉄製品、玉類実測図 (1～18は1/2、19は1/1) | 145 |

表目次

| | | |
|-----|----------------------------|-----|
| 第1表 | 第1次調査出土土製品観察表 | 43 |
| 第2表 | 第1次調査出土青銅製品観察表 | 44 |
| 第3表 | 第1次調査出土鉄製品観察表 | 44 |
| 第4表 | 第1次調査出土石器観察表 | 44 |
| 第5表 | 第2次調査出土石器観察表 | 143 |
| 第6表 | 第2次調査出土土製品、鉄製品、玉類観察表 | 146 |

I. はじめに

1. 調査の経緯

九州新幹線は国民経済の発展及び国民生活領域の拡大並びに地域の振興を図るため「全国新幹線鉄道整備法」に基づき建設される新幹線鉄道で、博多から船小屋、八代を經由し鹿児島に至る総延長257kmの路線である。このうち新八代―鹿児島中央間については既に平成16年3月13日に部分開業したが、九州新幹線の全線開業は社会、経済、文化活動を活性化し、新たな産業の立地、観光産業の振興等に寄与するものとして大いに期待される場所である。

九州新幹線全区間のうち船小屋～新八代間については、平成8年12月25日の政府与党合意により、新規着工区間として示され、平成10年3月12日に工事実施計画が認可され、同年3月21日に建設工事が起工された。

福岡県は平成10年4月8日に企画振興部交通対策課のもと、関係部局で九州新幹線鹿児島ルート情報連絡会議を設置し、鹿児島ルートに関する情報等についての連絡調整を行うこととした。この会議は同年4月22日に行われた後、同年8月27日、平成11年4月26日、平成12年5月16日、平成13年1月23日、平成13年6月13日に開催された。文化財についての取り扱いについては平成10年6月18日付で日本鉄道建設公団九州新幹線建設局（当時）から福岡県教育委員会に対し、九州新幹線建設に伴う埋蔵文化財の有無及び取扱についての照会がなされた。これに対し平成10年7月13日付で、周知の遺跡の範囲を示し、用地買収が完了した時点で、現地の踏査及び全線の試掘調査が必要である旨を回答した。

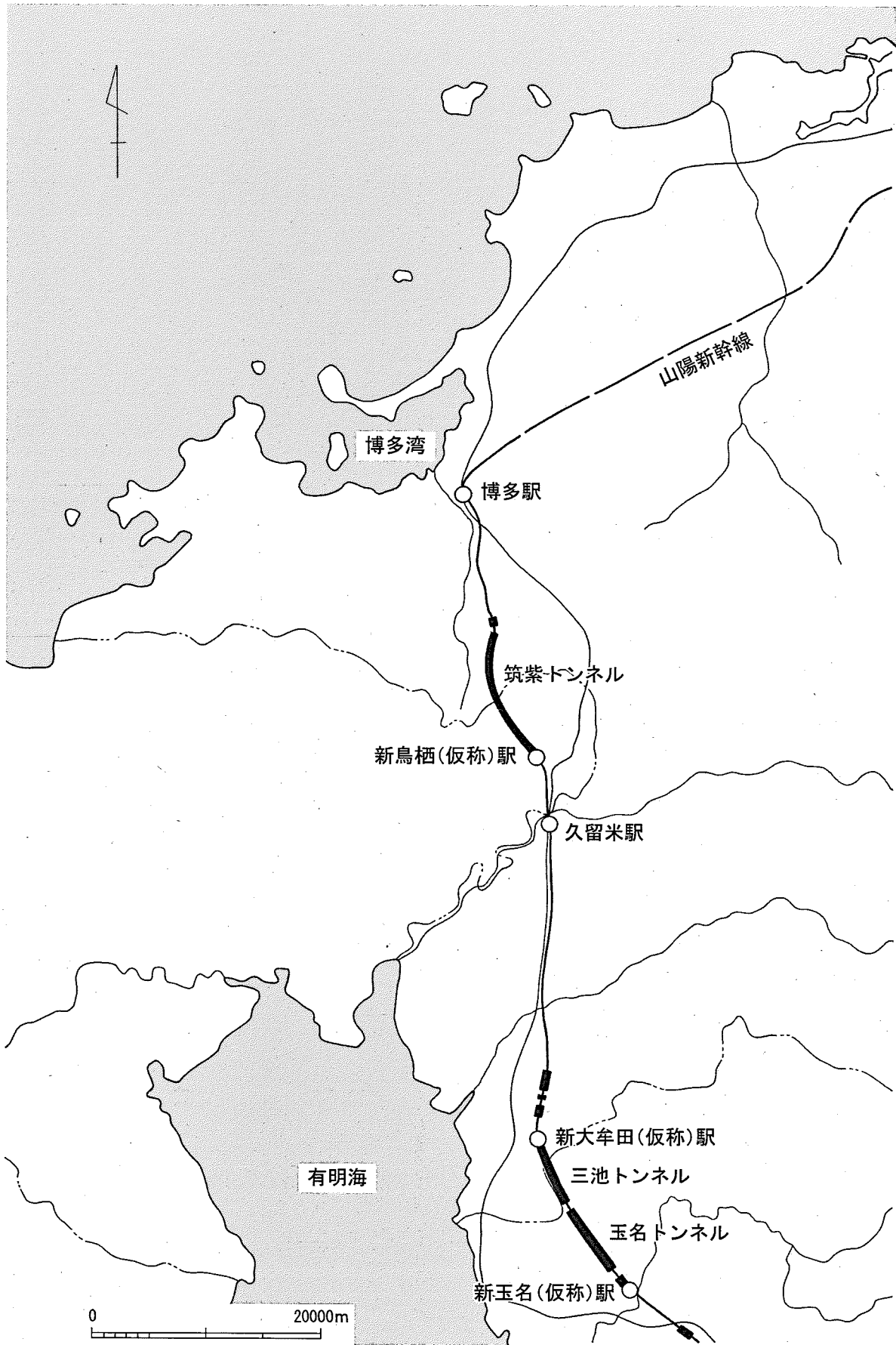
工事の具体的な計画については平成10年8月27日に情報連絡会議にて、日本鉄道建設公団九州新幹線建設局から示され、測量、ボーリング調査、弾性波探査による地質調査、水利用調査、今後の工事発注時期等についての説明を受けた。実際の工事は高田トンネル部分の南側で、文化財が存在しないことを確認したうえで、平成10年12月19日に着工した。

船小屋～新八代間のうち、用地買収の進んでいた高田トンネル北側出入口～高田町散田地区については、平成13年9月11日付で、日本鉄道建設公団より当該地の文化財試掘確認調査についての依頼があり、これを受けて平成13年9月28日（一部は12月18・19日）に福岡県教育委員会文化財保護課が現地の試掘調査を行い、高田町大字海津字横馬場の地については本調査の必要がある旨を回答した。

この地についての実際の本調査は、平成13年11月20日～平成14年3月8日に「海津横馬場遺跡」として第1次調査を行った。第1次調査は廃土置き場の確保等の事情により、約400㎡の範囲で、遺物包含層を切り込む遺構の調査及び、包含層の掘削のみの調査で終了した。

第2次調査は平成14年6月3日～平成15年3月14日に行い、第1次調査区の下層の調査及び、隣接する北側の範囲にまで調査区を延ばして調査を行った。

第3次調査は平成15年4月18日～平成16年3月10日に、第1・2次調査区の南から飯江川の堤防に至るまでの箇所を行った。今回報告するのはこのうちの第1・2次調査分であり、第3次調査分については平成17年度事業として整理・報告を行う。



第1図 九州新幹線位置図 (1/500000)

2. 調査の組織

発掘調査から本報告書作成にいたる間の関係者は以下のとおり。

日本鉄道建設公団 九州新幹線建設局

(平成15年10月1日から独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構 鉄道建設本部
九州新幹線建設局)

| | 平成13年度 | 平成14年度 | 平成15年度 | 平成16年度 |
|------------|--------------------|-------------------|--------------------|--------------------|
| 局長 | 田中 健二 (～H14.2) | 高山 博文 | 高山 博文 | 高山 博文 (～H16.11) |
| | 高山 博文 (H14.3～) | | | 北川 隆 (H16.12～) |
| 次長 | 伊神 英二 | 伊神 英二 | 伊神 英二 | 伊神 英二 |
| 用地第一課長 | 川原 久紘 | 川原 久紘 (～H15.2) | 関根 茂 | 田中 等 |
| | | 関根 茂 (H15.3～) | | |
| 用地第一課長課長補佐 | 安尾 好次 | 有屋田 幸郎 | 有屋田 幸郎 (～H15.7) | 木佐一 正和 |
| | | | 木佐一 正和 (H15.8～) | |
| 用地第一課 担当係長 | 大畑 毅 (～H13.8) | 柳内 恭介 | 入江 万久 | 入江 万久 |
| | 柳内 恭介 (～H13.8～) | | | |
| 工事第三課長 | | | 石徳 博行 | 石徳 博行 (～H16.9) |
| | | | | 北原 太一 (H16.9～) |
| 工事第七課長 | 奈良 明浩 | | | |
| 工事第八課長 | | 奈良 明浩 | | |
| 工事第三課長補佐 | | | 立分 雅史 | 立分 雅史 |
| | | | 上野 登 | 上野 登 |
| 工事第七課長補佐 | 立分 雅史 | | | |
| | 上野 登 | | | |
| 工事第八課長補佐 | | 立分 雅史 | | |
| | | 上野 登 | | |
| 大牟田鉄道建設所長 | 松室 哲彦 | 松室 哲彦 | 渡邊 修 | 渡邊 修 |

| | | | | |
|---------------|-------|-------|-------------------|--------------------|
| 大牟田鉄道建設所担当副所長 | 武藤 和久 | 武藤 和久 | 武藤 和久 (~H15.8) | 赤坂 勝徳 (~H16.12) |
| | | | 赤坂 勝徳 (H15.9~) | 畑山 修 (H16.12~) |

福岡県教育委員会

| | 平成13年度 | 平成14年度 | 平成15年度 | 平成16年度 |
|-------------|----------------|----------------|---------------|------------------------|
| 総括 | | | | |
| 教育長 | 光安 常喜 | 森山 良一 | 森山 良一 | 森山 良一 |
| 教育次長 | 森山 良一 | 三瓶 寧夫 | 三瓶 寧夫 | 清水 圭輔 |
| 総務部部長 | 三瓶 寧夫 | 松本 通憲 | 清水 圭輔 | 中原 一憲 |
| 文化財保護課長 | 井上 裕弘 | 井上 裕弘 | 井上 裕弘 | 井上 裕弘 |
| 参事兼課長技術補佐 | 橋口 達也 川述 昭人 | 橋口 達也 川述 昭人 | 川述 昭人 木下 修 | 川述 昭人 木下 修 新原 正典 |
| 参事兼課長補佐 | 平野 義峰 | 久芳 昭文 | 久芳 昭文 | 安川 正郷 |
| 参事補佐兼調査第二係長 | 児玉 真一 | 児玉 真一 | 中間 研志 | 中間 研志 |

庶務

| | | | | |
|-----------|------------------------|---------------|--------------|---------------|
| 参事補佐兼管理係長 | | 古賀 敏生 | 古賀 敏生 | 稲尾 茂 |
| 管理係長 | 三笠 ひとみ | | | |
| 事務主査 | | 宮崎 志行 | 宮崎 志行 | 宮崎 志行 |
| 管理係主任主事 | 井上 雅之 鎮守 俊明 秦 俊二 | 鎮守 俊明 秦 俊二 | 秦 俊二 末竹 元 | 石橋 伸二 末竹 元 |

調査・報告書作成

| | | | | |
|------|-----------------|------------------|-----------------|---------------------------------------|
| 主任技師 | 進村 真之 (調査担当) | 宮地 聡一郎 (調査担当) | | 進村 真之 (報告書作成) 宮地 聡一郎 (報告書作成) |
| 技師 | | | 坂元 雄紀 (整理担当) | 坂元 雄紀 (整理担当) |

Ⅱ. 位置と環境

海津横馬場遺跡は福岡県三池郡高田町大字海津字横馬場に所在する。遺跡は飯江川右岸の扇状台地が西側に突出した先端付近の標高約9mに位置し、至近距離に位置する竹海校遺跡、竹海校東遺跡等を含めた遺跡群の一角をなすと考えられる。この扇状台地は筑肥山地より流れ出る飯江川や大根川によって形成され、現在は主に果樹園としての利用がなされている。北側の低地部との境は段丘状となり、海津横馬場遺跡付近ではその比高差は約3mである。この扇状台地上には多くの遺跡が知られ、上記の竹海校遺跡や竹海校東遺跡の他、満願寺遺跡、岩畑遺跡、南本村遺跡でも弥生時代の遺構や遺物が確認されていることから、この扇状台地西側突出部の広い範囲に遺跡群の広がりが想定されよう。海横馬場遺跡はこの中であって西に向かって標高を減じた箇所を占拠している。

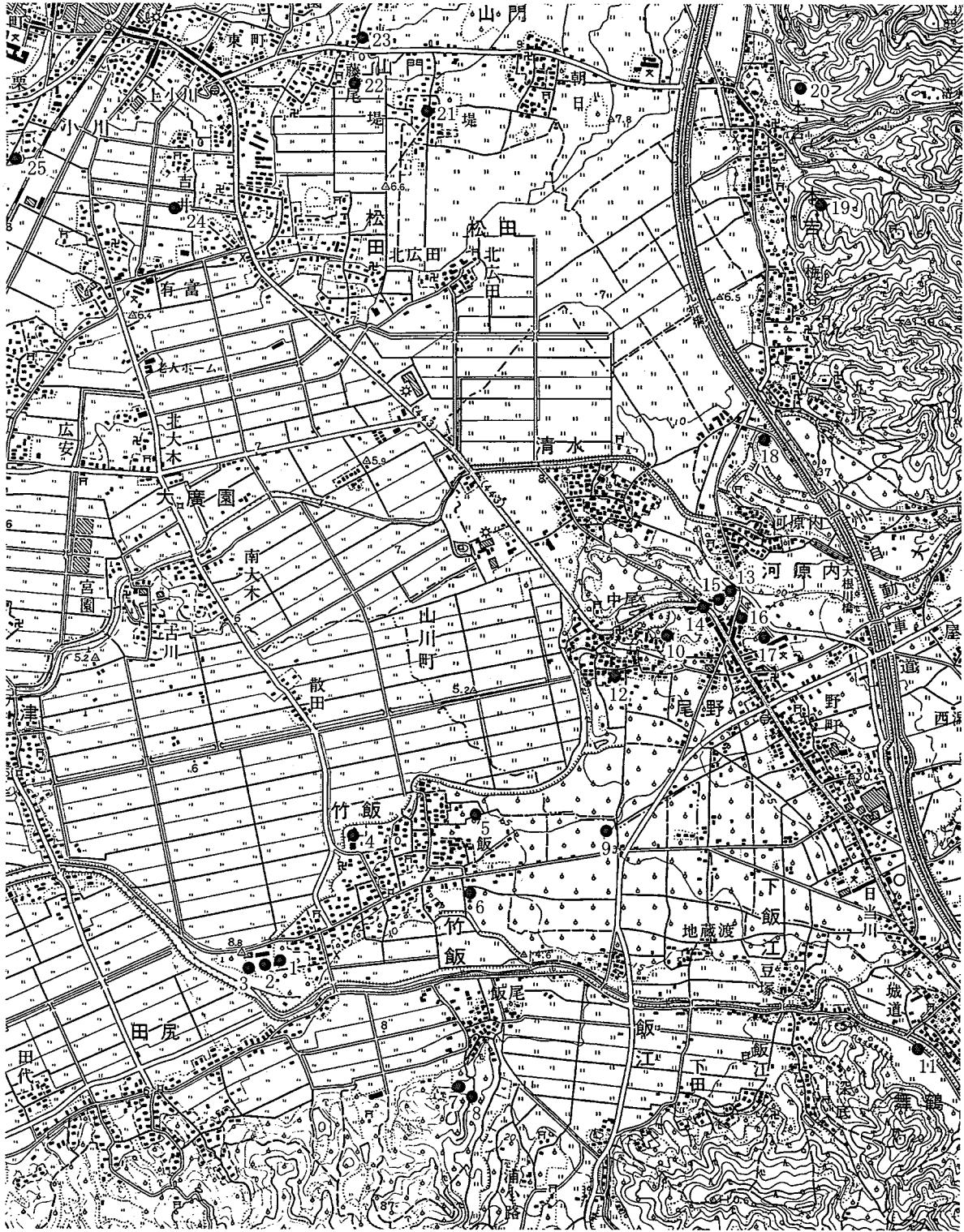
付近の遺跡で縄文時代の遺跡は点的にしか存在せず、遺物の出土量も少ないことから詳細は不明であるが、その中であって山川町の山ノ上遺跡では縄文晩期終末（弥生時代早期）の土器棺墓群がまとまって調査されており、注目される。⁽¹⁾

弥生時代になると遺跡数は飛躍的に増加し、瀬高町内では沖積平野の中の微高地上に遺跡が展開する。鉢田遺跡では弥生時代中期の甕棺墓群が調査され、その中の特定墓群のみに細形銅剣の破片や磨製石鏃、紡錘車がそれぞれ副葬されていた。後期のものでは小型仿製鏡が出土している。⁽²⁾ また、藤の尾垣添遺跡でも中期の甕棺墓群や後期の竪穴住居跡が確認されており、甕棺墓からは1点翡翠製の勾玉が出土している。⁽³⁾ 至近距離にある車塚古墳の周囲は甕棺墓群として知られており、車塚古墳の傍の畑から1面の銅鏡が出土したとされ、⁽⁴⁾ 甕棺墓の副葬品の可能性もある。その他、上枇杷遺跡からは中期初頭～前半の貯蔵穴群や、中期後半の祭祀遺構が調査されている。⁽⁵⁾ また、これらの遺跡を望む筑肥山地西麓裾部の標高約50mに位置する三船山遺跡では、弥生時代中期後半～後期前半を主体とする集落跡が調査されており、⁽⁶⁾ その立地の特異性も注目される場所である。

高田町では海津横馬場遺跡の傍を流れる飯江川の上流約2.5kmの城道遺跡で中細形銅剣が発見されており、⁽⁷⁾ 遺構は明確でないものの飯江川の形成した扇状台地上の遺跡群と密接な関係があるものと思われる。

古墳時代では飯江川の扇状台地北側先端部に5世紀初頭の面の上1号墳、⁽⁸⁾ 5世紀末にはクワンス塚、⁽⁹⁾ 赤坂1・2号墳、⁽¹⁰⁾ 中尾3号墳が、6世紀前半に九折大塚古墳、中尾2号墳、6世紀後半に面の上2号墳⁽¹¹⁾と次々に古墳が築造される。この中でクワンス塚は全長約65m程の帆立貝タイプの墳形で、赤坂1号墳と九折大塚古墳（全長約50m）は前方後円墳である。古墳の立地する扇状台地上に古墳時代の集落跡のまとまった調査例はないが、これだけの規模の首長墓と目される古墳が狭い範囲に築かれる背景には興味深いものがある。

瀬高町では5世紀代に先述の車塚古墳が築かれる。かなりの改変を受けているが、前方後円墳であり、全長は約55mである。内部構造等は不明であり、詳細は不明なもののかつて銅鏡が2面出土したとされる。また沖積微高地に立地する堤古墳群はかなり破壊されているものの、横穴式石室を主体とする群集墳と考えられる。⁽¹²⁾ 6世紀後半には筑肥山地西麓裾部の標高約60mの箇所、横穴式石室内に石棚を持つ成合寺谷1号墳が築かれる。石室内には三角文や菱形文が描かれ、装飾古墳として注目される。⁽¹³⁾ 集落跡では藤の尾垣添遺跡で古墳時代前期～中期の住居跡が多数調査されている。⁽¹⁴⁾

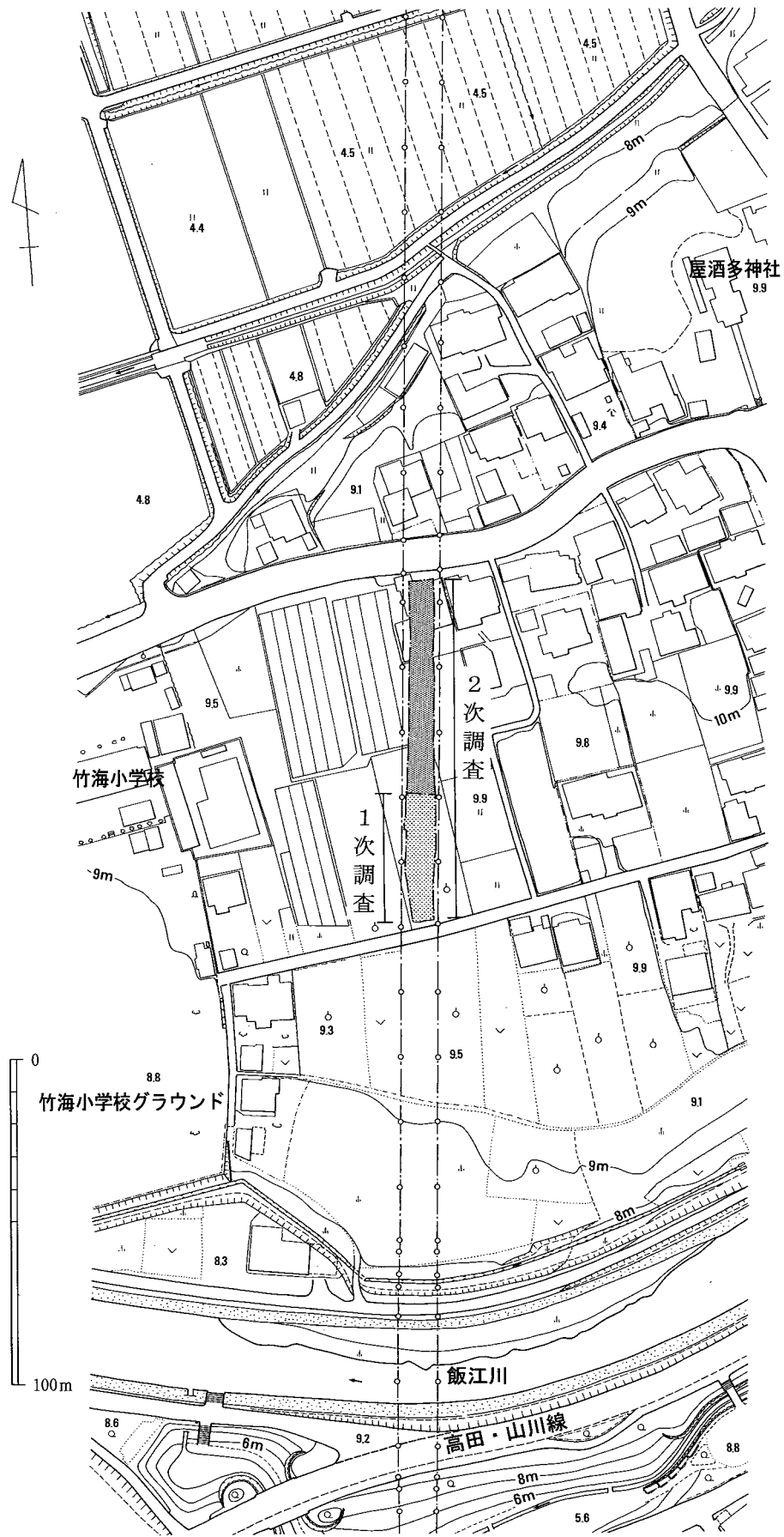


- | | | | | |
|------------|------------|------------|-------------|-------------|
| 1. 海津横馬場遺跡 | 6. 南本村遺跡 | 11. 城道遺跡 | 16. 赤坂古墳群 | 21. 堤古墳群 |
| 2. 竹海校東遺跡 | 7. 飯尾1・2号墳 | 12. 中尾古墳群 | 17. クワンス塚古墳 | 22. 藤の尾垣添遺跡 |
| 3. 竹海遺跡 | 8. 飯尾横穴墓 | 13. 山ノ上遺跡 | 18. 九折大塚古墳 | 23. 車塚古墳 |
| 4. 満願寺遺跡 | 9. 長者原遺跡 | 14. 面の上1号墳 | 19. 成合寺谷1号墳 | 24. 上枇杷遺跡 |
| 5. 岩畑遺跡 | 10. 前畑遺跡 | 15. 面の上2号墳 | 20. 三船山遺跡 | 25. 鉾田遺跡 |

第2図 周辺遺跡分布図 (1/25000)

註

- (1) 東竜雄・新原正典2002『山ノ上遺跡』(山川町文化財調査報告書第4集) 山川町教育委員会
- (2) 鏡山猛1972『九州考古学論攷』吉川弘文館
- (3) 田中康信1988『藤の尾垣添遺跡』(瀬高町文化財調査報告書第4集) 瀬高町教育委員会
- (4) 渡辺村尾1915『耶馬臺国探見紀』
- (5) 川述昭人1988『上枇杷・金栗遺跡』(福岡県文化財調査報告書第82集) 福岡県教育委員会
- (6) 川述昭人1985『観音丸遺跡・向野古墳群・三船山遺跡』(福岡県文化財調査報告書第71集) 福岡県教育委員会
- (7) 猿渡真弓1999「福岡県三池郡高田町出土の中細形銅剣」『九州考古学』第75号
- (8) 佐々木隆彦1995「山川町・面上1号墳の再検討」『九州歴史資料館研究論集』20
- (9) 小田和利2001『山ノ上遺跡・赤坂古墳群』(福岡県文化財調査報告書第164集) 福岡県教育委員会
- (10) 註9に同じ。
- (11) 佐々木隆彦1993『面上2号古墳』(山川町文化財調査報告書第1集) 山川町教育委員会
- (12) 村山健治1967『堤古墳群』筑後地区郷土研究会・邪馬台郷土史会
- (13) 田中康信2002『成合寺谷1号墳』(瀬高町文化財調査報告書第16集) 瀬高町教育委員会
三池賢一・石山勲・小川泰樹ほか2004『成合寺谷1号墳』(瀬高町文化財調査報告書第17集) 瀬高町教育委員会
- (14) 田中康信1989『藤の尾垣添遺跡Ⅱ』(瀬高町文化財調査報告書第5集) 瀬高町教育委員会



第3図 発掘調査区周辺地形図 (1/2000)

Ⅲ. 発掘調査の記録

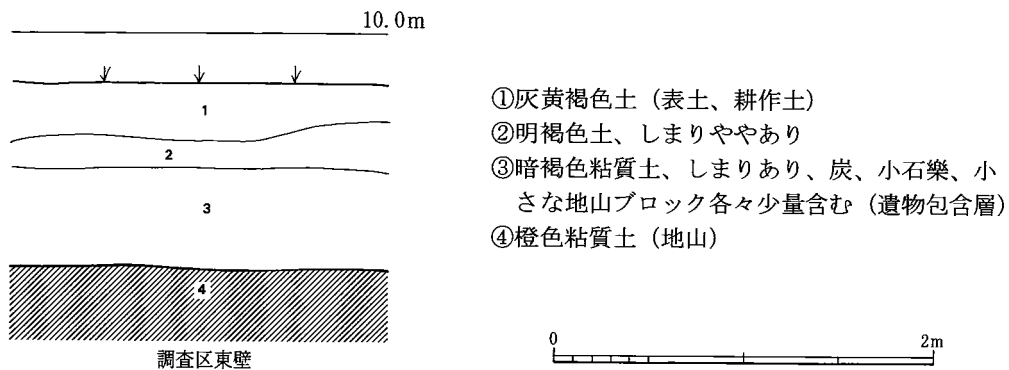
1. 基本層序 (第4図)

海津横馬場遺跡はⅡの位置と環境の章で述べたように、飯江川が形成した扇状台地上に立地する。従って真の意味で地山と呼べる土層は、拳大ほどの円礫層が該当すると思われるが、実際にはこの円礫層の上に分厚く、橙色～明黄褐色のきれいな粘質土層が堆積しており、この土層中からは全く遺物を確認することができなかった。この粘質土層の成因は今回の調査では明らかにできなかったが、上記の状況から一応地山と考え調査を進めた。

第1層は灰黄褐色土の表土であり、耕作土である。第2層は明褐色土でややしまりがある。第3層は暗褐色粘質土で、炭や小さな地山ブロックを各々少量含み非常に堅くしまっている。この土層中には多量の遺物が含まれており、報告で包含層と呼ぶ土層はこの層を指す。当初は地山ブロック等を含み埋め戻し土と想定されたこと、及びその土質のしまり具合から、整地した層ではないかとも考えられたが、隣接する竹海校東遺跡の調査でもこの土層が確認でき、また周囲の畑の開墾時にも一部確認されているとのことから、相当な広がりをもつことが確実であり、建物等を建てる際の整地とは考えにくい。遺構の一部はこの第3層暗褐色粘質土層を切り込む格好で存在する。第1次調査で確認した遺構、及び第2次調査時の上層遺構がそれに該当する。この第3層からは弥生時代から中世までの土器が出土するが、その色調から遺構の埋土との峻別が困難なこともあり、相当数の遺構がこの層を切り込んでいると考えられる。第1次調査でこの第3層を切り込む格好で古墳時代前期の遺構が存在することから、第3層の形成時期は弥生時代を想定しておきたい。

第4層は先述した橙色粘質土層の地山である。第2次調査時のほとんどの遺構はこの第4層上面で確認できたが、第3層が暗褐色の色調を呈し、遺構の埋土との峻別が困難であったことから、第3層から切り込んでいる遺構も多いと思われる。

調査回数と層序との関係であるが、第1次調査では第3層を切り込む遺構の調査、及び第3層の掘削までの調査で終了した。第2次調査では第1次調査区の残りの第3層掘削及び第4層上面の遺構の調査、それと新たに北側に伸ばした調査区での第3層を切り込む上層遺構の調査と、第4層上面の下層遺構の調査を行ったことになる。



第4図 基本土層図 (1/40)

2. 第1次調査の内容

(1) 概要

第1次調査は最初に用地買収が終了し、発掘調査の着手できる状況になった約350㎡の部分について調査を行った。南北に長い調査範囲のほぼ中央付近にあたる。調査区内の本来の地形は南の飯江川に向かってなだらかに傾斜しているが、大量の遺物を含む包含層が南に向かって厚く堆積しており、現状では耕土下はほぼ水平となっている。2号竪穴住居跡付近になると地山が露出している。遺構は包含層に切り込まれるため、プラン検出には困難を極めた。調査の経過は下記のとおりである。

| | |
|-------------|-------------|
| 平成13年11月20日 | 重機による表土剥ぎ開始 |
| 11月26日 | 人力掘削開始 |
| 12月10日 | 巴形銅器出土 |
| 平成14年1月25日 | ラジコンヘリによる撮影 |
| 3月6日 | 現場撤収 |

(2) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（図版2、第6図）

調査区のほぼ中央、西よりに位置する方形プランの竪穴住居跡である。東壁を1号溝により切られる。西側は調査区外へ延びる。平面では確認できなかったが、トレンチの断面で遺構の存在を確認した。南北5.0m、東西3.1+ α m、深さ15cmを測る。床面の精査を行ったがピット等の掘り込みは検出できなかった。また、移動式のカマドが出土しているが、焼面等は確認できなかった。

出土土器（図版7、第7図）

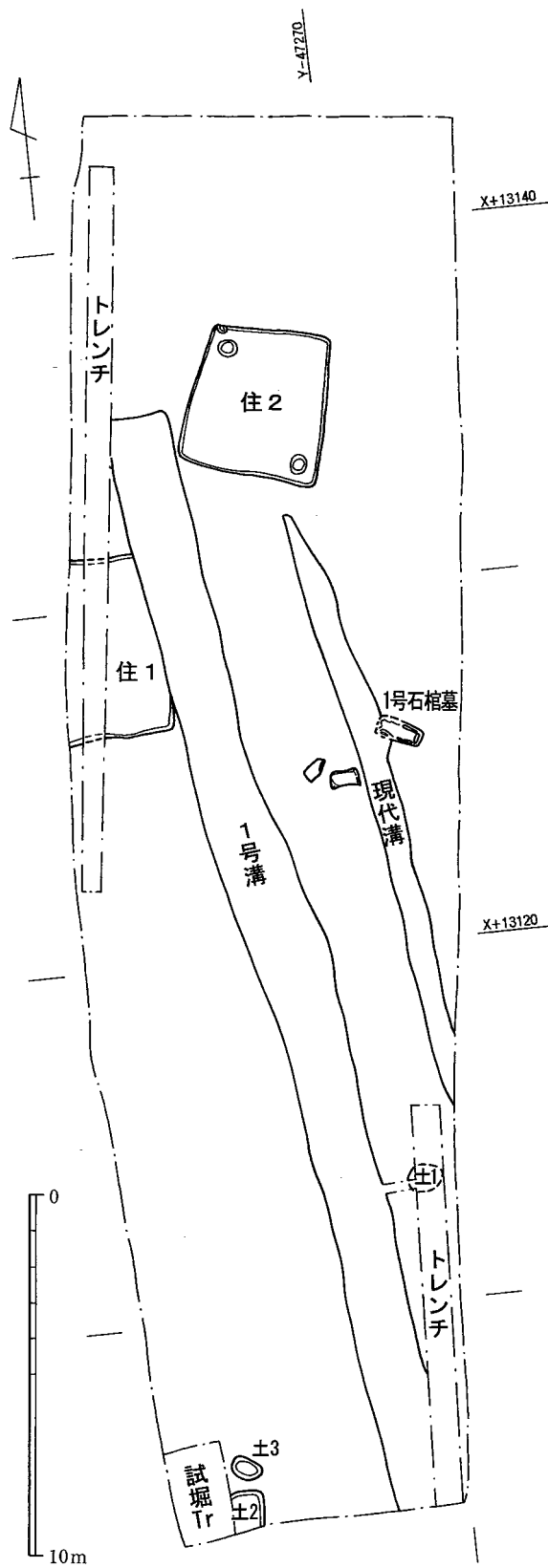
1～7は土師器である。1は直口の壺である。外面調整にはわずかにハケメが残り、内面は強いケズリで仕上げる。No2の位置から出土した。2は壺の口縁であろうか。内外面ともにナデ調整である。3は甕の口縁部である。口縁部は短く強く屈曲する。胴部は大きく張る。胴部外面の調整はハケメ、内面の調整はケズリである。No1の位置から出土した。4も甕である。胴部内面のやや下がった位置からケズリを行う。それ以外の部分の調整はナデである。No1の位置から出土した。5は鉢である。浅めで口縁部をわずかに外反させる。底部外面にはハケメが残る。6は高杯の脚部である。外面の調整はケズリ、内面には絞り痕が残る。7は移動式のカマドである。外面の調整はハケメが中心であり、内面の調整はハケメである。天井部と窓の部分を大きく切り開け、窓の部分には底を貼り付けている。下向きの把手は貼り付けで大きくがっしりしている。No1の位置から出土した。8・9は混入の弥生土器である。いずれも胴部片で、突帯を貼り付け、刻目を施す。

2号竪穴住居跡（図版3、第6図）

調査区の北より、中央付近に位置する長方形プランの竪穴住居跡である。南北4.2m、東西3.3m、深さ15cmを測る。床面やや南より中央付近に焼面を確認している。北西および南東の隅にピットを検出している。床面の中央付近から土器が大量に投棄された状態で出土している。

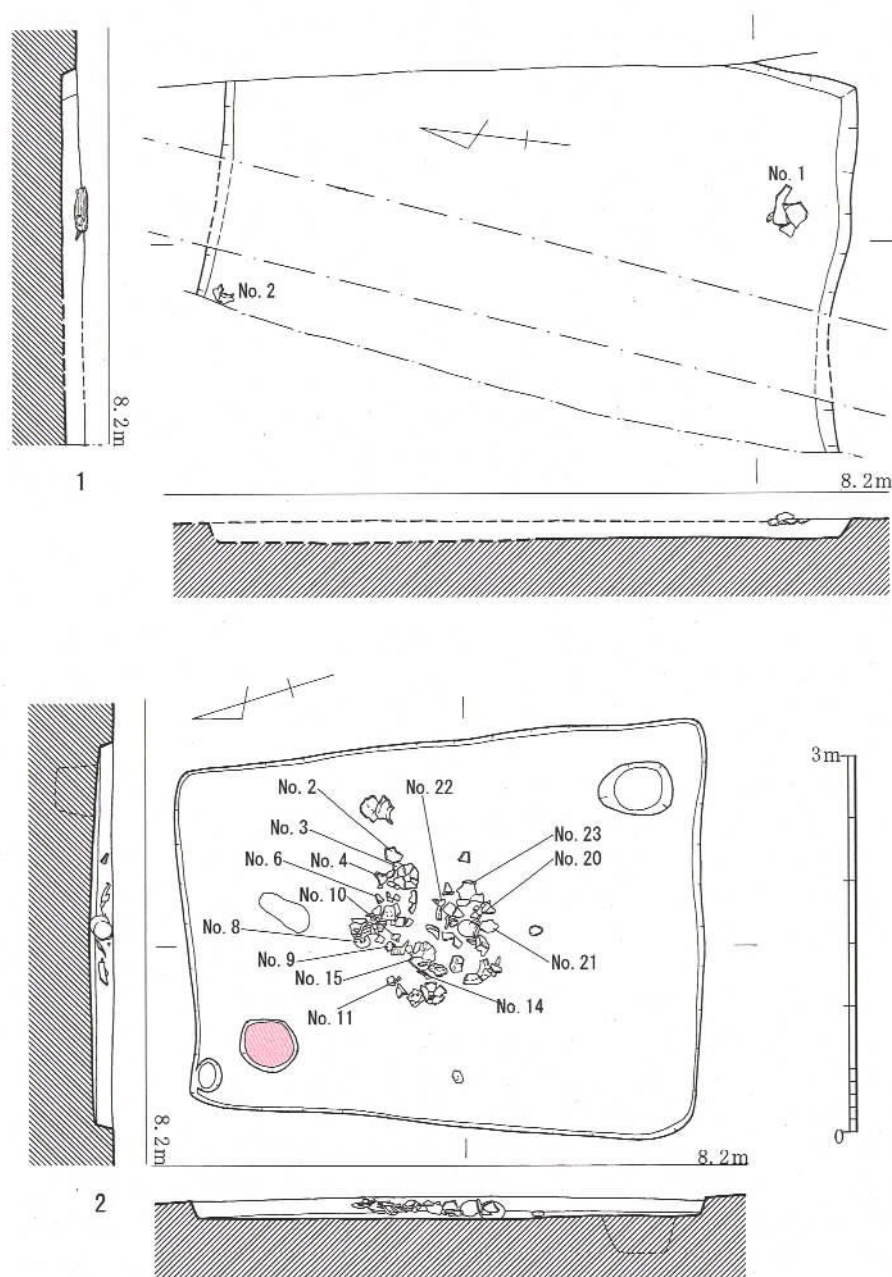
出土土器（図版7～9、第8～10図）

1～40は土師器である。1は壺の口縁部である。庄内期に多い加飾壺である。複合口縁の接合部の下部に粘土帯を貼り付け、上部には二条の波状文、下部には円形の粘土を貼り付ける。外面の調整は



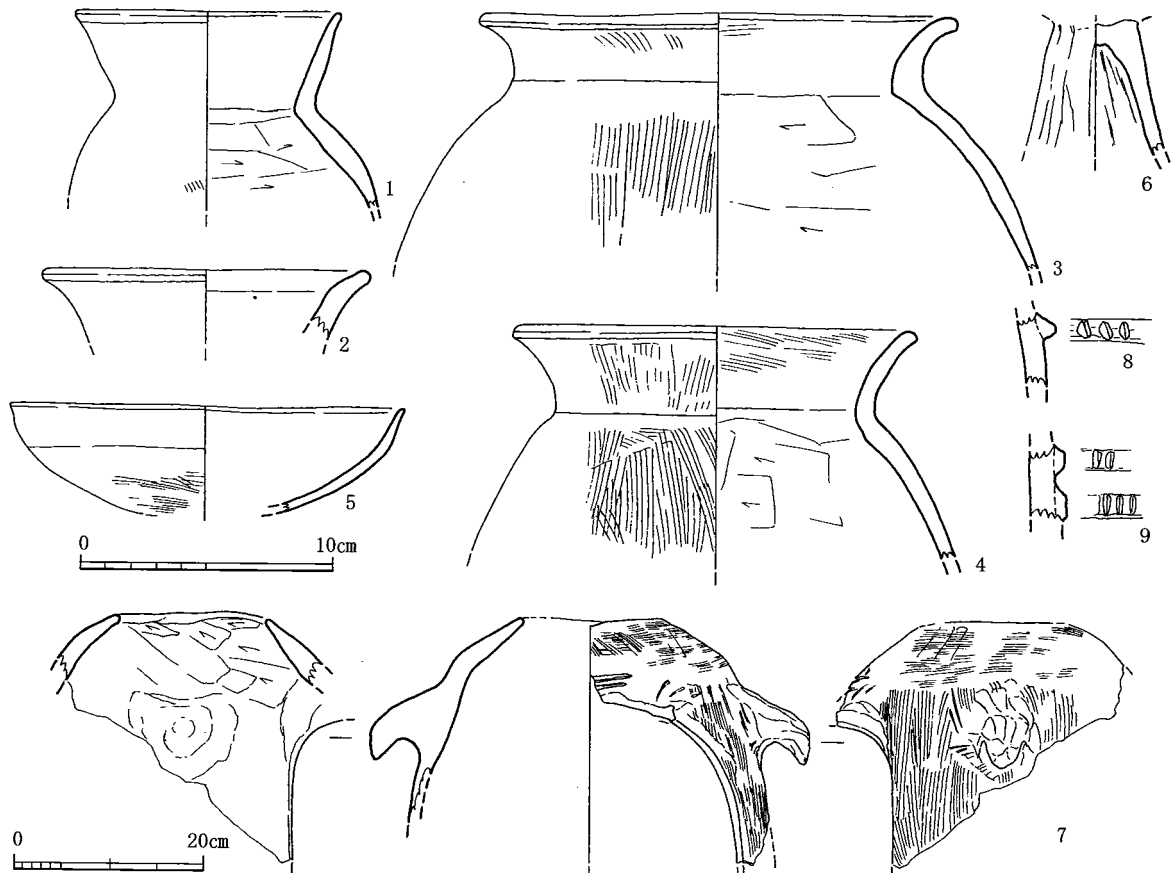
第5図 第1次調査遺構配置図 (1/200)

ナデ、内面はミガキを施す。2は球形の胴部に大きく広がる口縁をもつ壺である。胴部内面に粘土の接合痕が明瞭に残る。3は球形の壺の胴部である。外面には部分的にミガキが残り、胴部下位に接合痕が明瞭に見られる。また、内面にも接合痕が見られる。No21から出土している。4は壺の底部である。厚い底部を持つ。内外面の調整は摩滅により不明である。5～16は外来系の甕である。5～12の外面にはタタキが残り、その上から程度の差はあれ、ハケメ調整を施す。内面は基本的にケズリ調整であるが、ハケメのものもある。12はNo14の位置から出土している。13・16の外面はハケメ調整である。13はNo15及びNo23の位置から出土している。14はNo10の位置から出土している。16はNo9の位置から出土している。17は在地系の小形甕である。器壁は薄く、外面の調整はハケメ、内面の調整は強いケズリである。No20の位置から出土している。18～21は外来系の小形甕である。18の外面底部付近

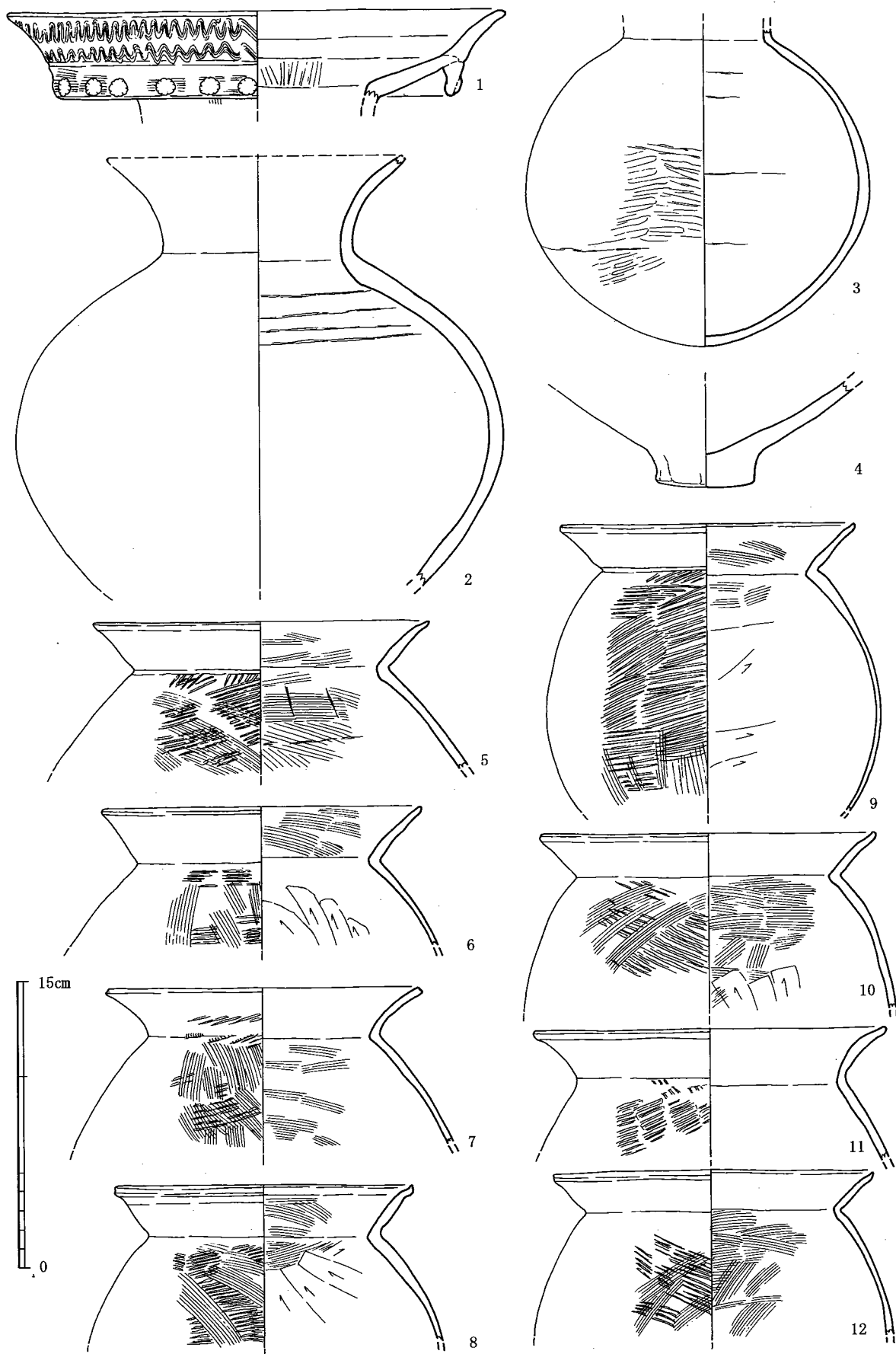


第6図 1・2号竪穴住居跡実測図 (1/60)

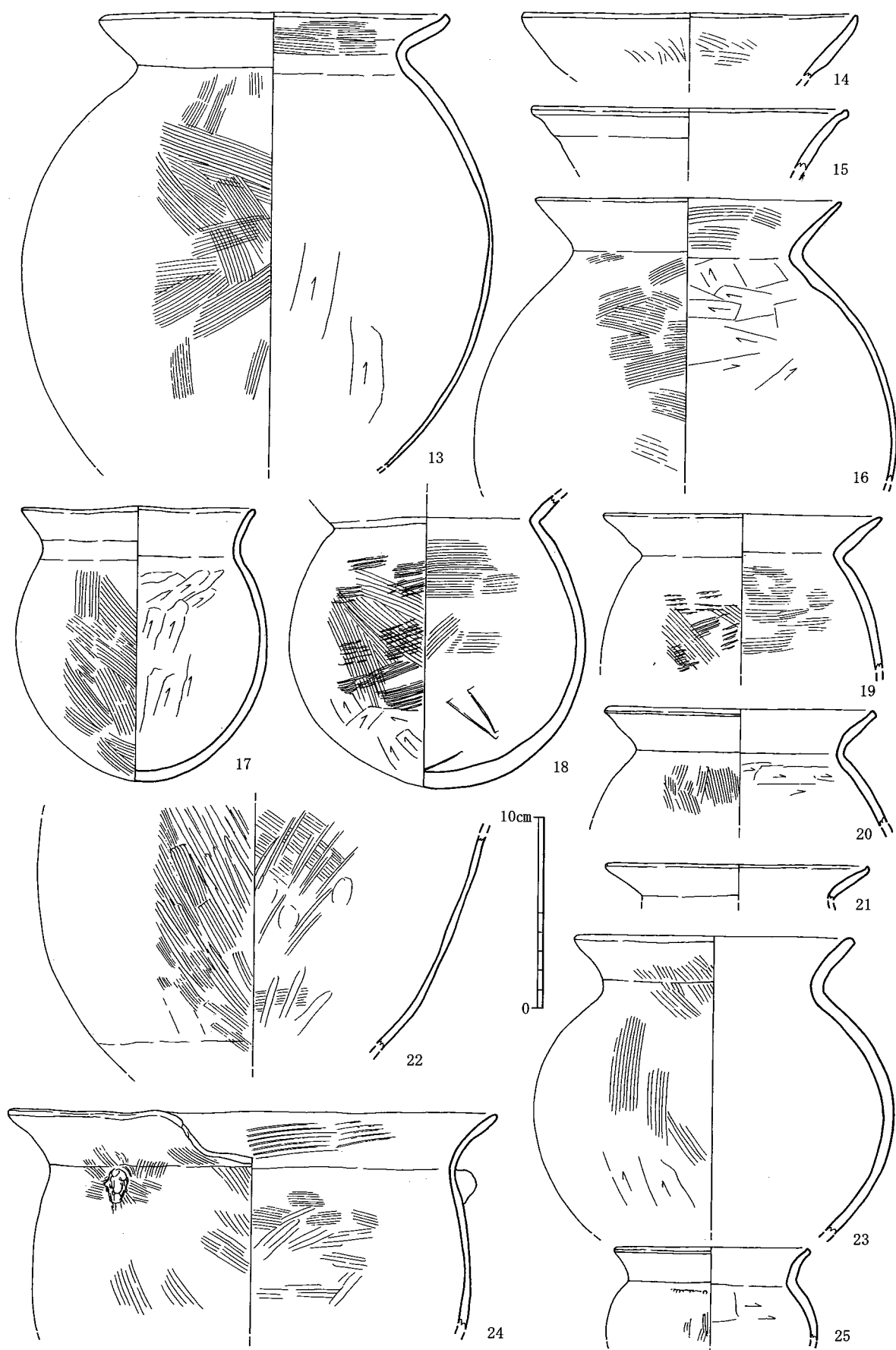
はケズリ、内面底部付近には工具痕が残る。20はNa6の位置から出土している。22は在地系の甕の胴部か。内外面はハケメとミガキ調整である。23は甕である。器壁が厚く重い。外面底部付近はケズリ、それより上位はナデ調整である。内面の調整はナデである。Na22の位置から出土している。24は鉢である。歪みの大きい口縁部の一ヶ所が注口として折り曲げられる。外面の調整はハケメ、外面には瘤状に二ヶ所の把手が貼り付けられる。内面の調整はハケメ調整の後、ナデである。Na2の位置から出土している。25は小形の甕である。26・27は高杯の杯部である。いずれも屈曲後、口縁部が直線的に大きく開く。内外面の調整はナデである。28・29は半球形の杯部をもつ高杯である。28は造りが粗く、ミガキの後、ナデ調整を行う。Na3の位置から出土している。29の外面はハケメの後、ミガキ調整。30～32は高杯の脚部になるものである。30は短く大きく開く脚部で、内外面の調整はナデである。Na8の位置から出土している。31は29の脚部になるものであろうか。中位よりやや上に穿孔を施す。外面の調整はハケメの後、粗いミガキ、内面の調整はハケメ及びナデである。Na4の位置から出土している。32も短い脚部で大きく開くものである。33～36は鉢である。いずれも口縁が屈曲しないものである。33は浅く小型のものである。内外面の調整はナデであろう。34は深めで内外面ともにミガキを施すものである。脚部がつく可能性もある。35の外面には工具痕が、内面には圧痕が残る。Na10の位置から出土している。36は大型のもので、外面の調整は上半部がタタキ、下半部がナデ調整である。内面にはハケメを施す。Na13の位置から出土している。37も鉢であるが、口縁端部を短く屈曲させるものである。外面はケズリの後、ナデ調整。内面には圧痕が残る。38は外来系の鉢か。内外面



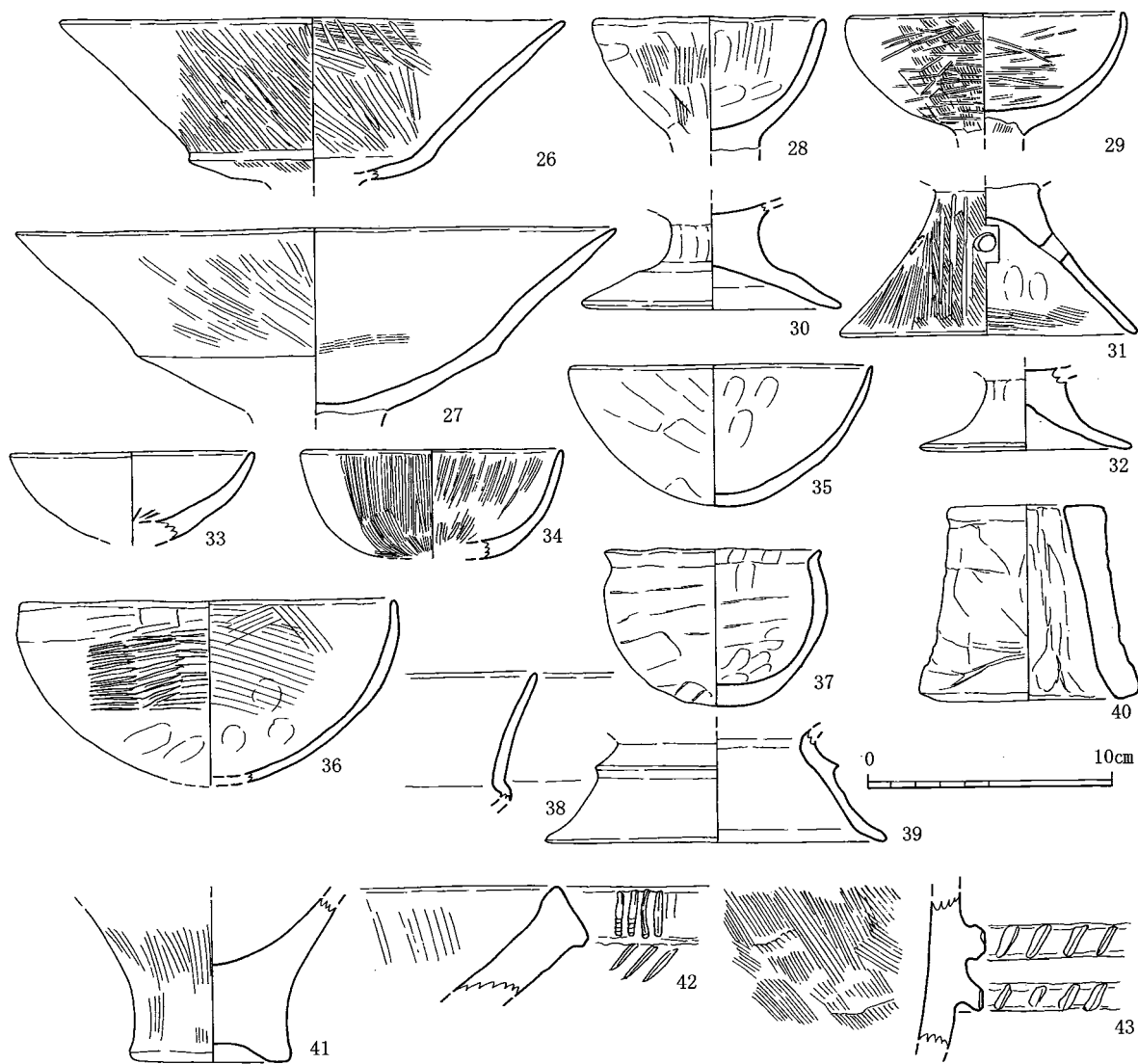
第7図 1号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、7は1/8)



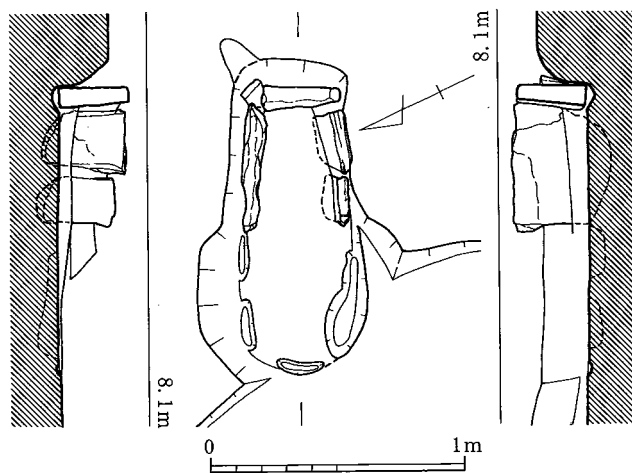
第8图 2号竖穴住居迹出土土器实测图① (1/3)



第9图 2号竖穴住居迹出土土器实测图② (1/3)



第10图 2号竖穴住居跡出土土器实测图③ (1/3)



第11图 1号石棺墓实测图 (1/30)

の調整はナデである。39は外来系の器台である。40は支脚である。上がすぼむ円筒状で、器壁は厚い。内外面の調整は粗く強いナデである。No24の位置から出土している。41~43は混入の弥生土器である。41は甕の底部である。わずかに上げ底気味で、外面はハケメ調整である。42は大型の甕の口縁部である。厚い器壁で、口縁端部に刻み目を施す。43は大型の甕胴部である。大きな二条の突帯を貼り付け、斜めに刻み目を施す。内面はハケメ調整である。

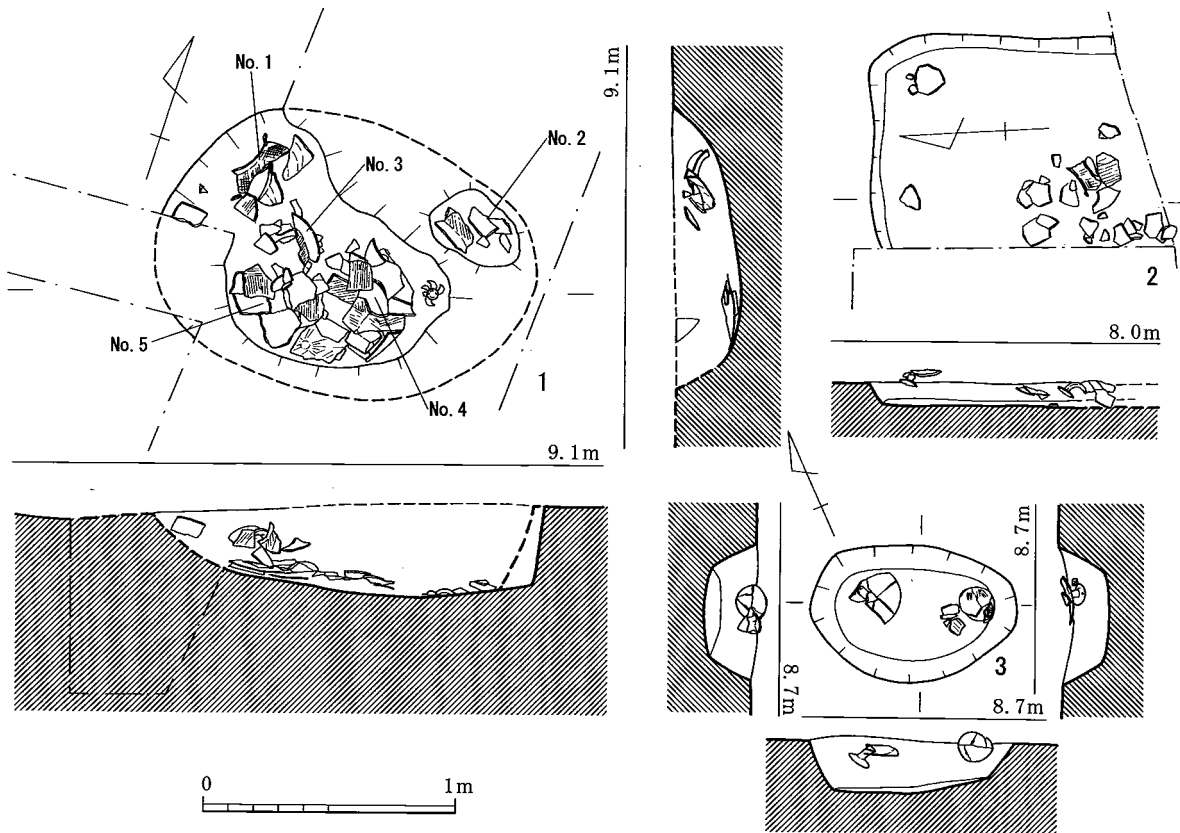
出土鉄器（図版16、第24図）

1は鉄鎌である。直線器な刃部から基部を折り曲げるが、基部の半分を欠失している。刃部は極めて短いため、極めて使い込んだものである可能性が高い。No11の位置から出土している。

(3) 石棺墓

1号石棺墓（図版4、第11図）

調査区の中央付近やや東よりで検出した。現代溝に切られ、石材の大半を失う。また、現代溝を隔て西側に2枚の石材を検出しており、元々1号石棺墓に使用されていたものと推定される。現代溝は戦後、葡萄畑にするために元所有者が掘削したものであり、その際に石材が出土したとの証言も得ることができた。石棺のプランは残存する掘り方から南北1.2m、幅0.4mである。出土遺物はない。



第12図 1～3号土坑実測図 (1/30)

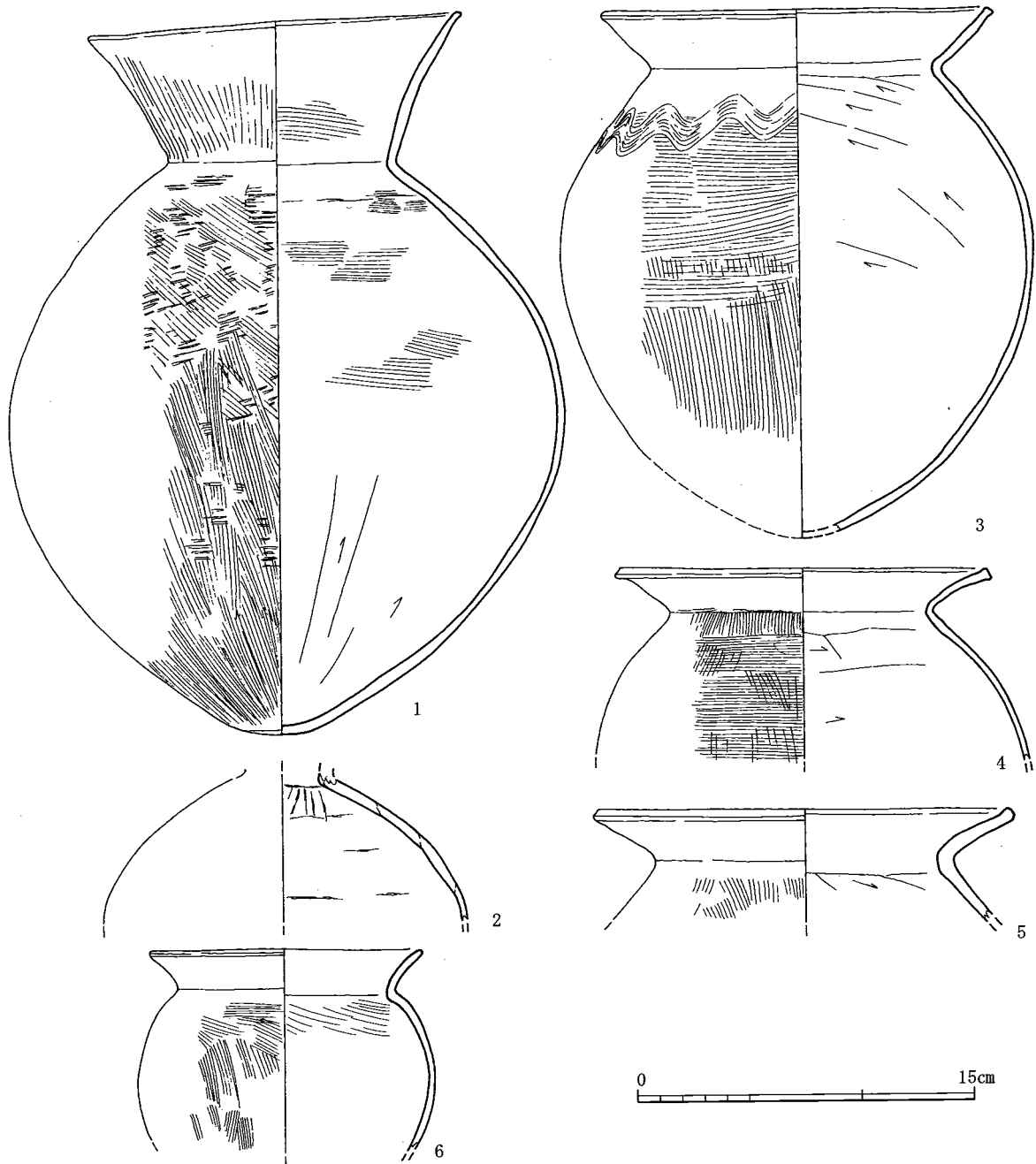
(4) 土坑

1号土坑 (図版5・6、第12図)

調査区南寄り東端部に南北のトレンチを設定し掘削中に土器の集中している部分があり、土坑とした。そのため、上端のほとんどを掘削してしまい本来の規模は不明である。西側の壁の立ち上がりは小トレンチにより確認した。推定では南北0.7m、東西0.9mの楕円形で、深さは25cmである。壁は緩やかに掘り込まれる。内部からは土器が大量に出土し、その土器の下から巴形銅器がほぼ水平の状態出土した。

巴形銅器 (巻頭図版3、図版15、第23図)

1は巴形銅器である。銅質は良好とはいえず、風化も進んでいるが状態は安定している。半球形の座で、座外縁部には緩やかであるが段を有する。座内面中央には瘤鈕が配され、現在は土により埋まっ



第13図 1号土坑出土土器実測図 (1/3)

ているが、X線写真によれば、小さな孔をもつ。脚は左振りの6脚である。仮に図面上の上位の欠失した脚を第1脚とし、時計回りに順に呼称する。第1脚は根元から折れているが、その断面の風化は他の箇所と同様に進んでいる。第2脚以降に見られる裏面の細い凸線は鑄出されていない。第2脚は中央付近で土圧により曲がる。欠失はなく完存しており、表面は平坦であり、これは他の脚も同様である。裏面は中央に細い凸線が鑄出され、端部は丸く仕上げている。第3脚は1/3を残し欠失するが、裏面は中央に細い凸線が鑄出される。欠失部分には鋭く穿孔が施され、半円状に残る。第4脚の欠失部分は断面が新しく、元々完存していたが調査時に失ったと考えられる。掘削土を精査したが破片は見つけることができなかった。裏面は剥離しており、そのためか中央の細い凸線は見られない。第5脚は最も残りのよいもので、裏面中央の細い凸線が鑄出されている様子が良くわかる。第6脚の中央にもわずかながら中央に凸線の痕跡が見られる。座径は2.9cm、脚を含めた径は5.5cm、高さは0.9cmである。重量は14.2gである。

出土土器 (図版9、第13図)

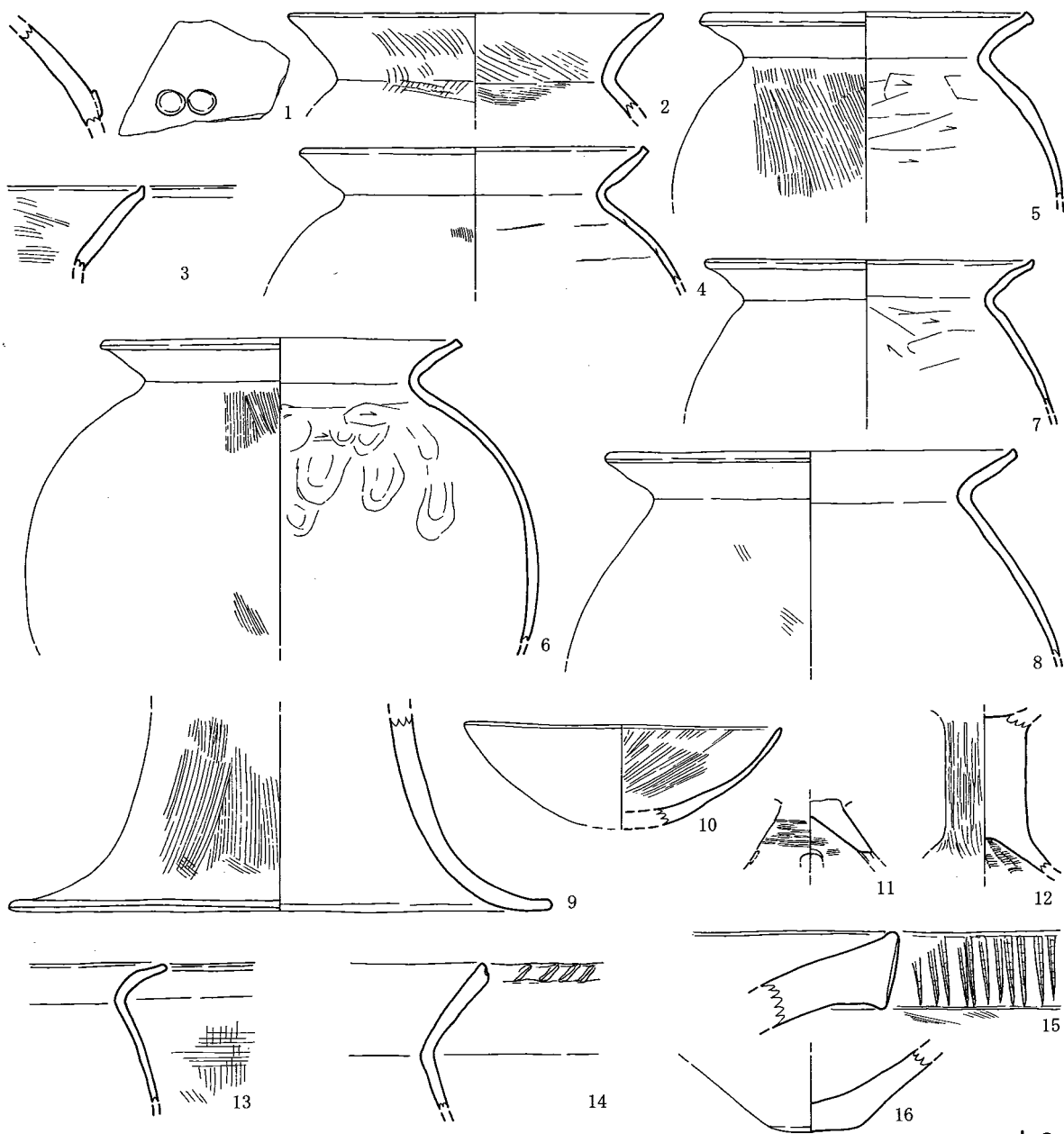
1～6はいずれも土師器である。1は外来系の壺である。直線的に広がる口縁部で、胴部は卵形に近く、底部の痕跡がわずかに残る。外面の調整はハケメ調整で、内面は底部付近はケズリ、それより上位はハケメである。No5の位置から出土している。2は壺の胴部か。球形の胴部から大きくすぼまり、口縁へとつながる。内面には、2cm幅の粘土帯の接合痕が残り、口縁部との境には絞り痕が強く残る。3は甕である。外面の調整はハケメであり、肩部に波状文を施す。内面は口縁部からわずかに下がった位置からケズリを行い、器壁は薄い。No3、4、5の位置から出土している。4は甕である。口縁部は外湾気味で大きく広がる。外面の調整はハケメ。内面の調整は口縁と肩部の境からかなり下がった位置からケズリを行う。No1の位置から出土している。6は小型の甕である。内外面の調整はナデである。No2の位置から出土している。

2号土坑 (図版6、第12図)

調査区の南西端部で検出した。北端は調査区外へ延び、西側は試掘時に掘削してしまった。南北1.2+ α m、東西0.8+ α m、深さ15cmである。覆土からは土器が大量に出土している。

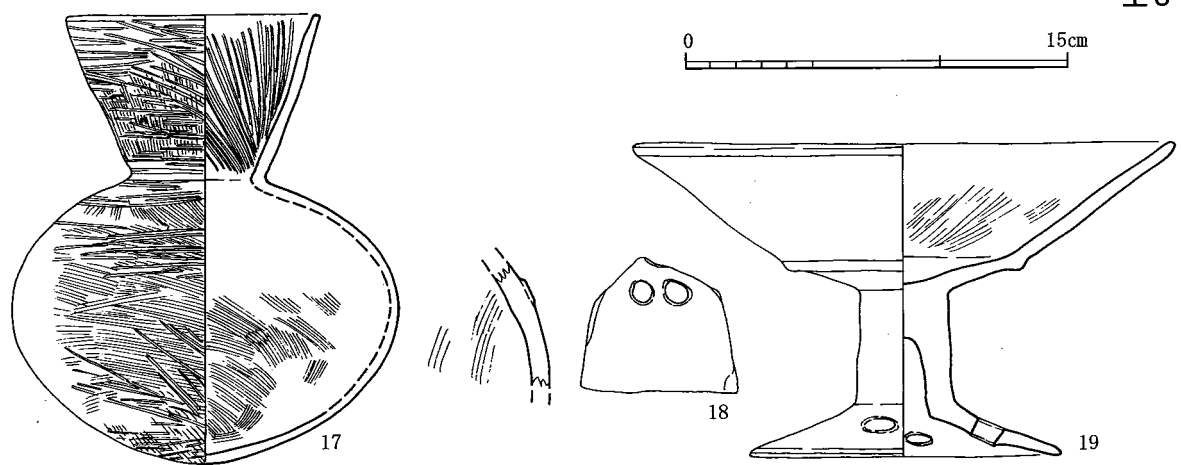
出土土器 (図版9、第14図)

1～12は土師器である。1は壺の肩部であろうか。丸い粘土を二個並んで貼り付けている。内外面の調整はナデである。2～8は甕である。2は口縁が外反するもの。内外面の調整はハケメである。3は口縁が直線に近いもので、端部を摘み上げている。内面の調整はハケメである。4も口縁が直線に近く、端部は丸く仕上げる。内面に粘土の接合痕が残り、粘土帯の幅は1.5cmである。5はやや下った位置からケズリを行うが、肩部は肥厚する。6は内面に圧痕が強く残る。やや下った位置から横方向のケズリを行うがその幅はわずかである。7は他のものよりやや小ぶりのもの。口縁端部をつまみあげる。9は大型の器台の脚部であろうか。端部は外側に大きく開く。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。10は鉢である。口縁部はわずかに内湾し、内面はミガキを行う。11は器台の脚部である。2ヵ所に穿孔が残り、本来、4ヵ所に穿孔が行われていたものであろう。外面は丁寧に横方向にミガキを施し、内面にはわずかにハケメが残る。12は高杯である。脚部で中実である。外面は縦方向のミガキ、脚部内面の調整はハケメである。13～16は混入の弥生土器でいずれも甕である。13は大きく外反する口縁部をもち、器壁は薄い。外面の調整はハケメである。14は直線的に広がる口縁部



± 2

± 3



第14图 2·3号土坑出土土器实测图 (1/3)

で、胴部はあまり張らない。口縁端部は肥厚し、斜めに刻みを施す。15は大型の甕で、大きく外反する口縁端部をわずかに肥厚させて仕上げる。口縁端部には縦の刻みを施すが、上端部が広く、下端部が狭くなる。16は底部片で、わずかに底が残る。

3号土坑（図版6、第12図）

調査区の南西端部、2号土坑の北側で検出した。南北0.5m、東西0.8mの楕円形で、深さ20cmである。覆土上層から土器および滑石製玉を検出している。

出土土器（図版10、第14図）

1～3は土師器である。1は長頸壺である。口縁部はわずかに内湾気味であるがほぼ直線的に開く。胴部はわずかに扁平な球形を呈する。器壁は薄く丁寧なつくりで、頸部外面にはハケメ、後に斜め方向のミガキを施す。口縁部付近は密に横方向のミガキを施している。内面は上から見るとやや斜めの放射状に粗めにミガキを施す。胴部外面は横方向のハケメの後、横方向にまばらにミガキを行い、内面の調整はハケメである。18は壺の肩部であろうか。丸い粘土を二個並んで貼り付けており、胎土等も2号土坑出土の1と酷似しており、遺構も近接することから同一個体の可能性も考えられる。19は高杯である。杯部は屈曲部が突帯状に肥厚した後、直線的に広がる。脚部は筒状を呈し、大きく直線的に開く。4ヶ所に穿孔を行う。杯部内面はミガキ調整、その他の部分は摩滅している。

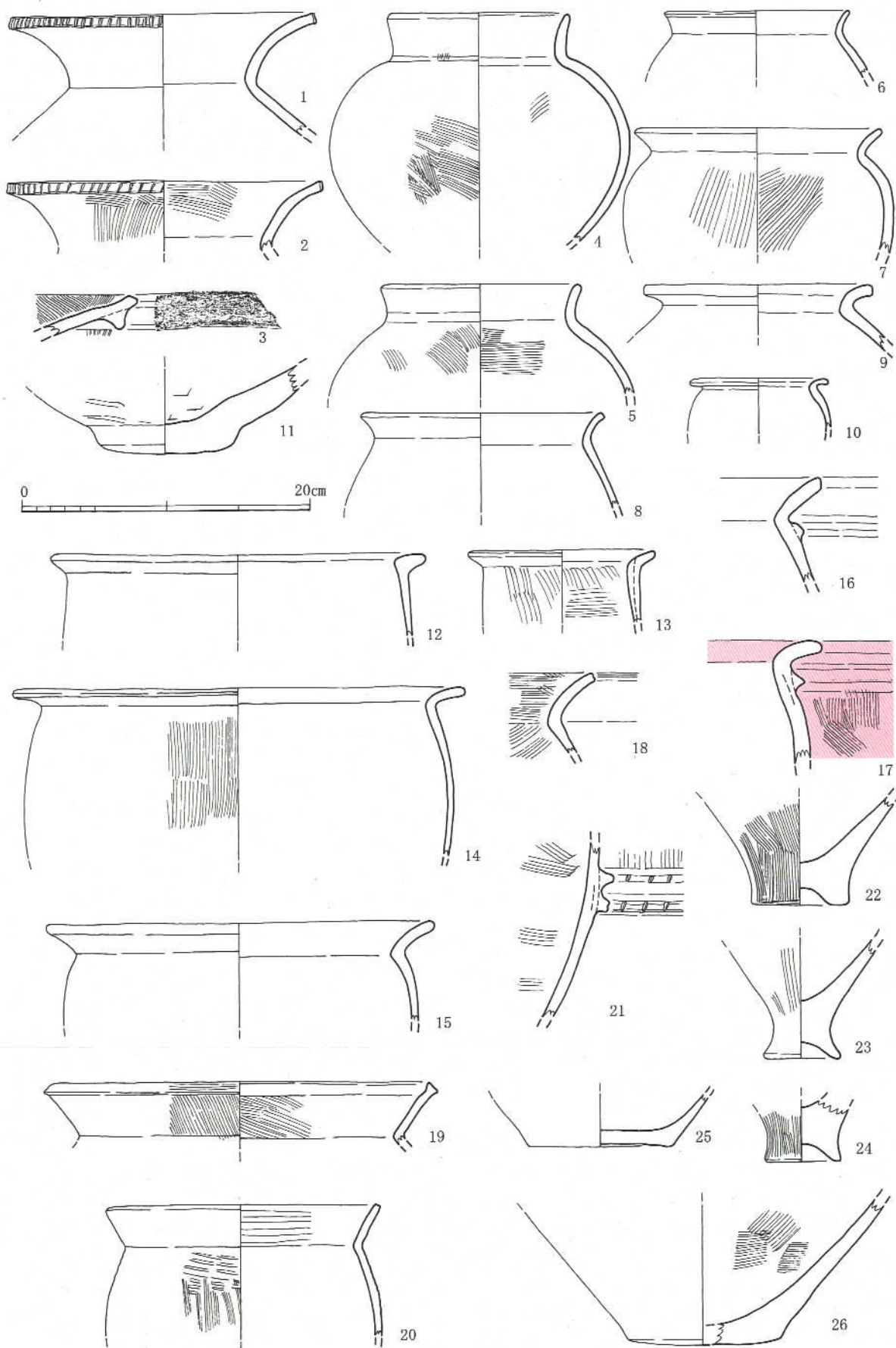
(5) 溝

1号溝（第5図）

南北に掘削される幅約2.0mの溝である。調査中に現代溝と同様に元土地所有者が葡萄畑にする時に掘削したものと判明した。

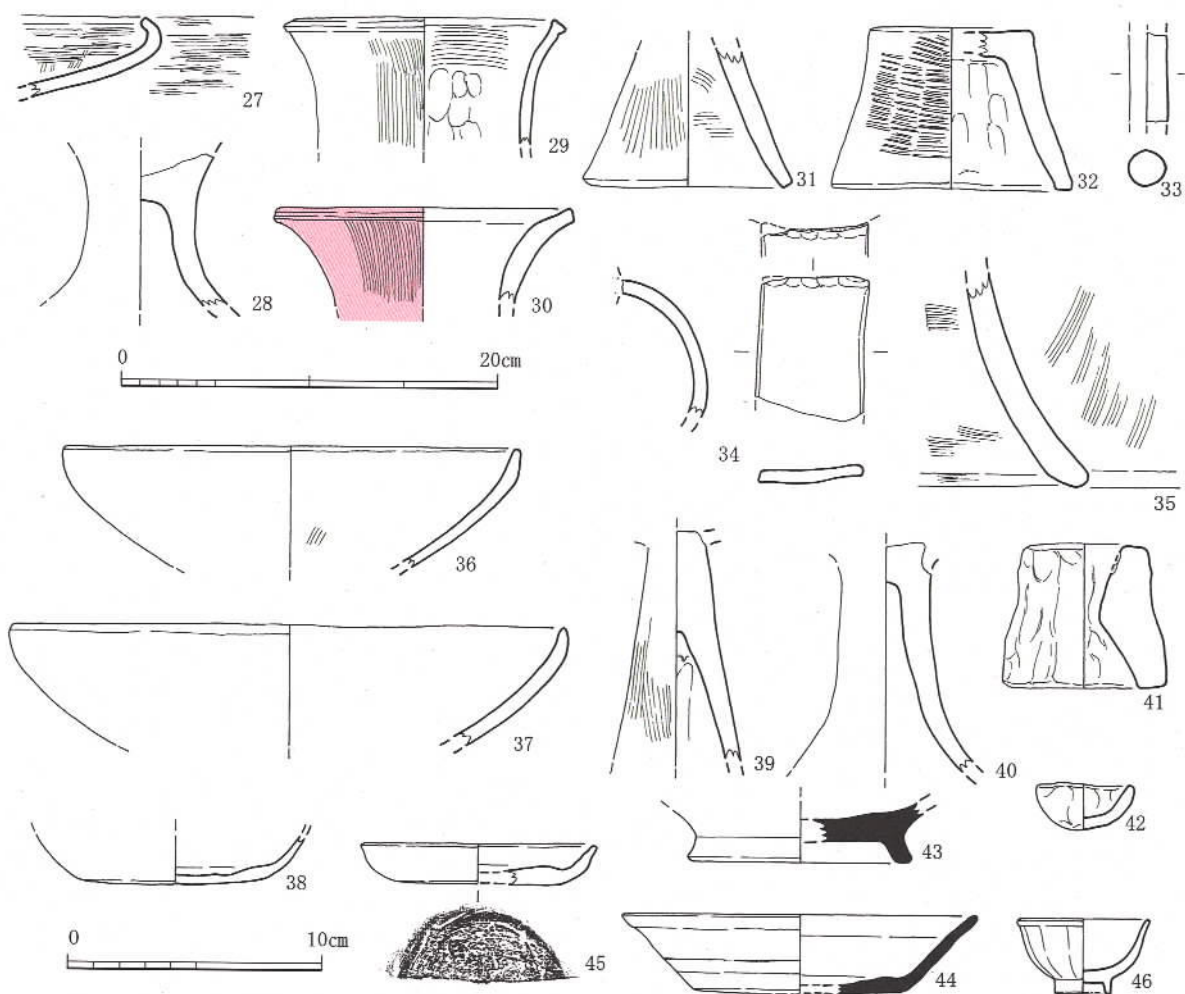
出土土器（図版10、第15・16図）

1～35は弥生土器である。1は口縁が外反しながら大きく開く壺である。口縁端部には縦の刻み目を施す。内外面の調整はナデであろうか。2も同様の器形である。内外面は粗いハケメ調整を施す。3は大型の壺の口縁部か。直線的に大きく広がる口縁の外側に断面三角形に近い突帯を貼り付ける。そのやや窪んだ面に波状文を施している。内面の調整はハケメである。4～10は球形に近い胴部を持つ短頸壺である。4・5は直口縁に近い頸部を持ったもので、内外面の調整はハケメである。6はわずかに開くもので器壁が薄い。7は開きが大きくなったもので、内外面の調整はハケメである。8は胴部の張りがやや小さい。9・10は口縁が大きく開くものである。10は小型である。11は大型の壺の底部であろう。丸く厚い底部から胴部に向かって大きく広がる。器壁は厚く、内外面の調整はナデであるが、一部に板状の工具痕が残る。12～26は甕である。12は口縁が断面三角形に近いものである。口縁端部はやや内側に傾く。13は小型の甕で口縁部を強く折り曲げたもの。胴部の内面に粘土を貼り付け、肥厚させている。外面は粗い縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメで口縁部付近は縦方向にハケメを施している。14は口縁を外反するように強く折り曲げたもので外面はハケメを施す。15は肩部で一度内傾して口縁部が外反するものである。内外面の調整は摩滅のため不明である。16は口縁部が直線的に開くもので、口縁部と肩部の境、やや下った位置に断面三角形の突帯を貼り付ける。17も肩部に断面三角形の突帯を貼り付けたもので、突帯貼り付け後にハケメ調整を施している。18～20は弥生後期に属する甕の口縁部である。いずれも内外面にハケメ調整を施す。19は口縁端部の断面を尖り



第15图 1号沟出土土器实测图① (1/4)

気味に仕上げる。20の胴部外面にはタタキ痕が残り、その後ハケメを施している。21は甕の胴部片である。外面には断面台形の突帯を二条貼り付け、上下同時に刻み目を施す。内外面の調整はハケメである。22~24は甕の底部である。いずれも上底である。外面はハケメ調整、内面はナデ調整である。25はわずかに上底となる甕の底部である。内外面ともにナデ調整か。底部にかけて内面には黒斑が付着する。26はレンズ状に膨らむ底部である。内面の調整はハケメである。27は高杯の杯部片である。杯部下半はゆるやかに内湾し、口縁端部で強く屈曲し内側に折り込まれる。口縁端部は平坦面をつくる。内外面の調整はミガキである。29は大型の高杯の脚部である。29~31は器台。いずれも内外面をハケメにより仕上げる。29の内面には成形時の圧痕が残る。32は支脚である。上端部は平坦面をつくる。内面には圧痕、外面にはタタキ痕が残る。33は筒状の土製品である。中実で両端部は欠失している。ナデ調整である。34はジョッキ形土器の握り部分である。横から眺めると正円に近い。図面での上端は貼り付け時の痕跡を残している。下端は欠失しており、まだ下方へ伸びていたのであろう。中央部分がわずかにくぼむ。図面上の左側部と右側部の径を比べた場合、右側部の方がかなり大きく、一見天地があるように感じる。おそらく粘土を円筒状に成形した後、半裁したため、このような形態になったのであろう。35は大型の器台か。脚端部は丸く仕上げられる。内外面の調整はハケメであろう。36・37は土師器の鉢である。いずれも内外面の調整は摩滅により不明である。38は土師器の椀か。平底で内外面ハケメにより仕上げている。39・40は高杯の脚部である。39の外面はハケメ、内面はな



第16図 1号溝出土土器実測図② (27~35は1/4、他は1/3)

で調整である。41は支脚である。短く太い。器壁は厚く、強いナデにより仕上げる。42は手捏土器である。内外面ナデにより仕上げている。43は須恵器の杯身である。器壁は厚く、やや踏ん張る高台がつく。内外面の調整はナデである。44は須恵器の杯である。器壁は薄く、内外面の調整はナデである。4は中世の小皿である。底部は糸切り底である。46は磁器の杯である。杯部はゆるやかに広がる。直線的な高台がつき、全面に白色の釉が施されるが、畳付の部分は露胎である。

出土鉄器（図版16、第24図）

2は鋤先状の鉄器である。半分を欠失するが、残存部分から全体の形を復元できる。端部はゆるやかに折り曲げられ、刃部はない。錆は著しいが鉄の部分はしっかりしている。

現代溝（第5図）

現代溝は戦後、葡萄畑にするために元所有者が掘削したものであり、その際に石材が出土したとの証言も得ることができた。

(6) 包含層出土遺物

包含層からは銅鏃、不明銅製品をはじめとし、大量の遺物が出土しているのでここで報告する。

銅鏃（図版16、第23図）

2は銅鏃である。全体の形態は左右対称に近い。有茎であるが、検出時に茎部を欠失した。茎部の断面は楕円形を呈する。逆刺はなく、基部に向かいわずかながら内湾する。鏃は比較的しっかりしている。全体に土が付着し、本来の面は観察しづらいが、鏃から刃部にかけてわずかにくぼんでいる。刃部および鏃部分には、刃を研ぎだす時の斜め方向の粗い研磨痕が残存するが、くぼみ部分は研磨されず、鑄出された当時の面が帯状に残っている。銅質は比較的良好で、風化もあまり進んでいない。形態から弥生時代に属するものと考えている。北西隅の包含層を掘削している時に出土した。

不明青銅製品（図版16、第23図）

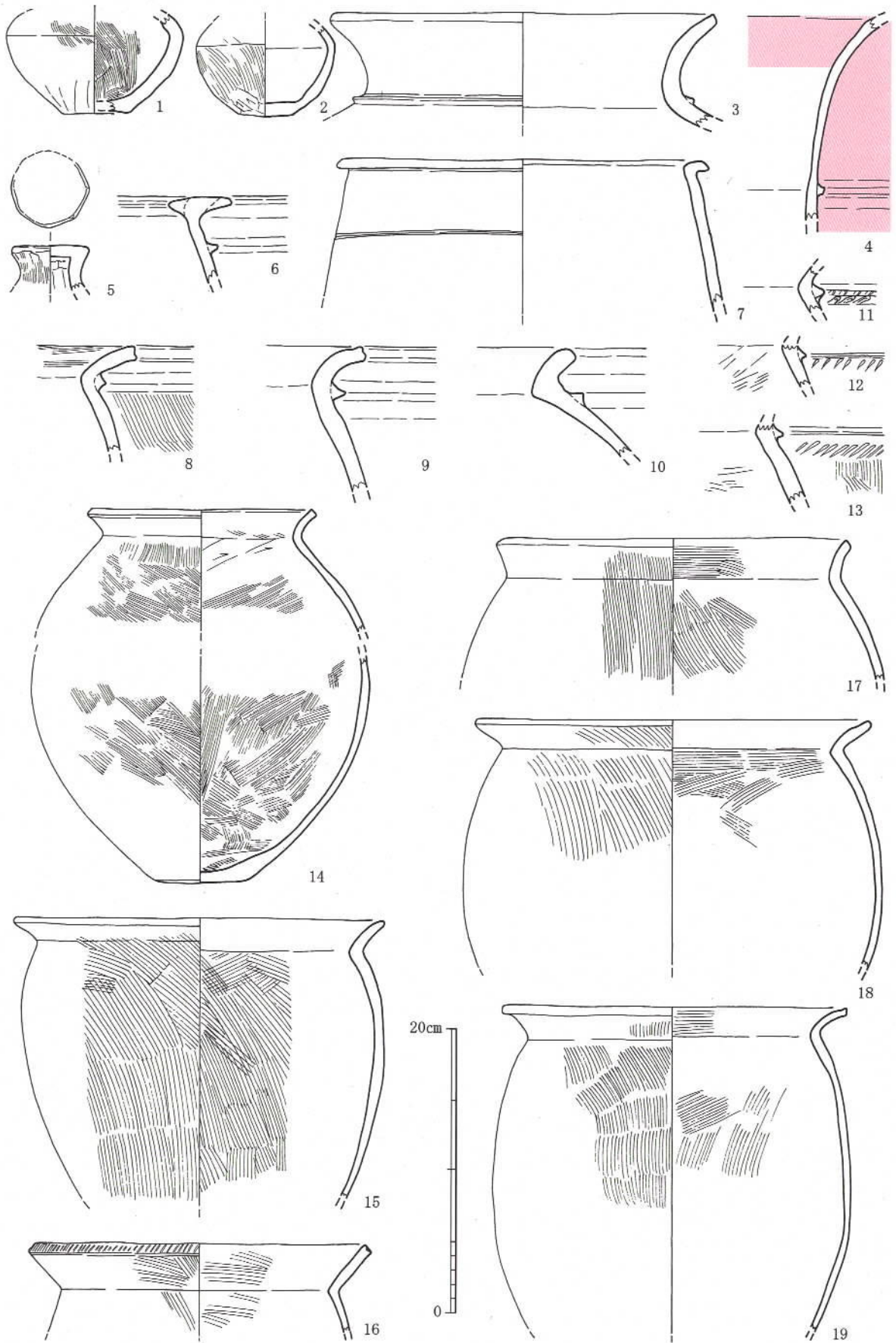
3は円形の盤を貼り合わせたようにも見える不明の青銅製品である。直径は8mmで厚さは4mmである。土が付着しているが、極めてもろいため、除去することもできない。銅質は悪く、風化が極めて進んでいる。

出土鉄器（図版16、第24図）

3は鋤先状の鉄器である。半分を欠失する。端部はゆるやかに折り曲げられる。先端にあたる部分は欠失して存在しない。錆は著しいが鉄の部分はしっかりしている。4は不明の鉄片である。図面上の下部が刃部となり、ゆるやかに弧を描く。

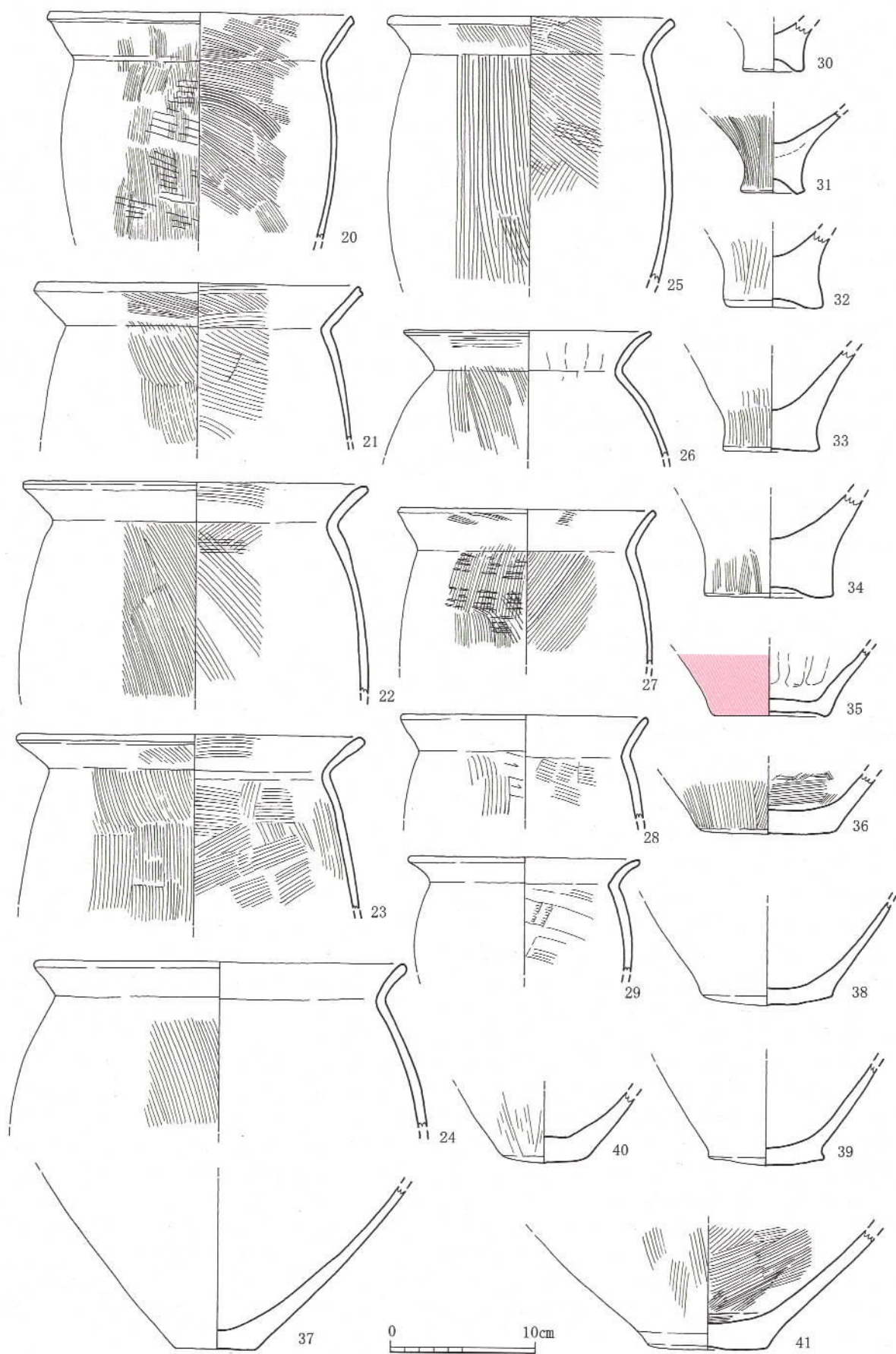
出土土器（図版10～14、第17～22図）

1～70は弥生土器である。1～4は壺である。1は小型の壺で口縁部を欠失する。胴部最大径は胴部のやや上位に位置する。底部は平底でやや上底気味である。内外面の調整はハケメであるが、底部付近はナデ調整を行う。2も同様の器形であるが、底部はややレンズ状を呈する。内外面の調整はハ

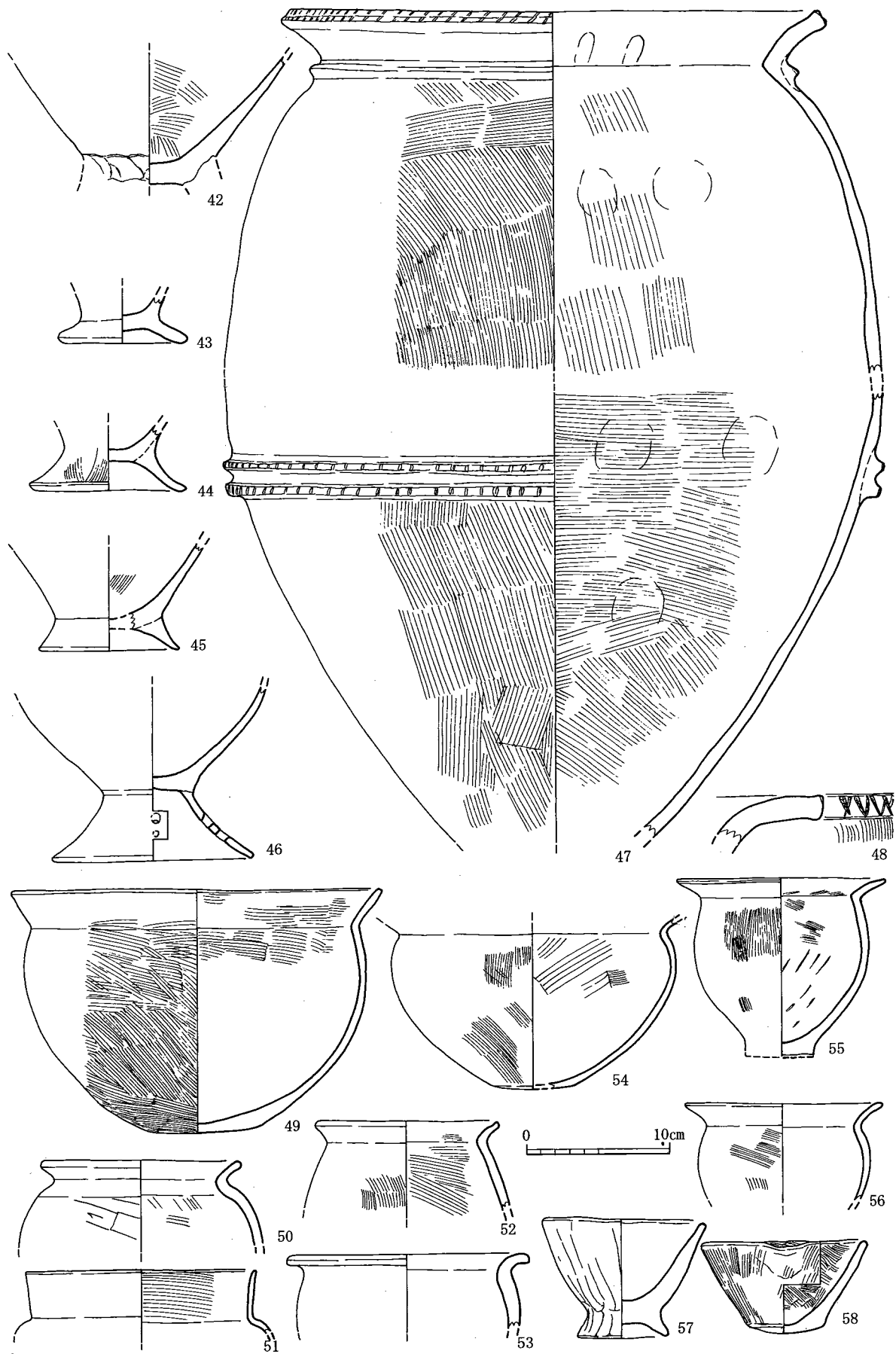


第17図 包含層出土土器① (1/4)

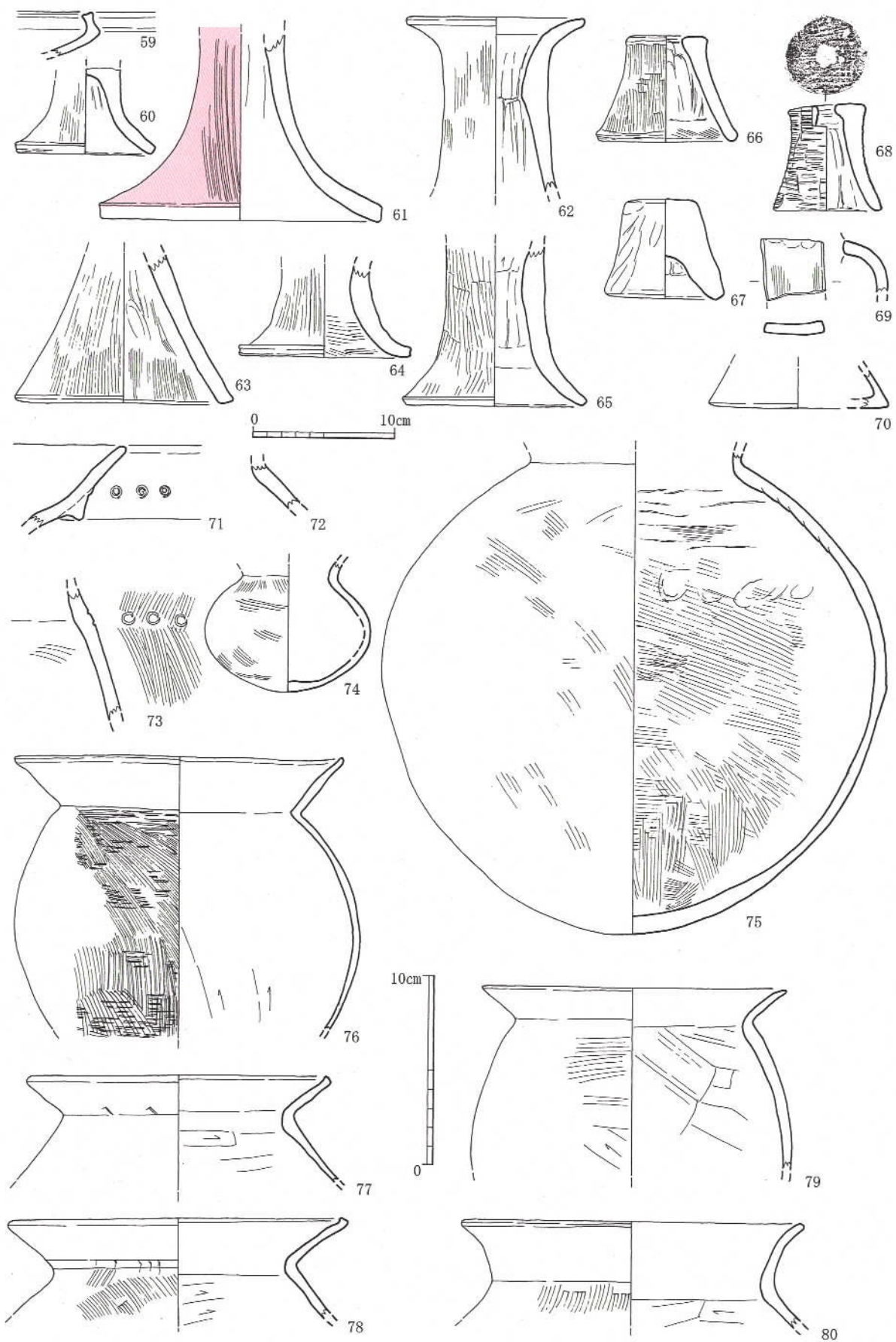
ケメであるが、胴部上半部はナデ調整、底部付近はケズリ調整を施す。3は口縁が外反しながら広がる壺で、頸部と胴部の境に小さな三角突帯を貼り付けている。4は丹塗りの広口であろうか。口縁はゆるやかに外反する。外面には断面台形の突帯を貼り付け、内外面の調整はナデである。外面全体と内面の上部付近に丹塗りを施している。5は蓋である。上端部は平坦で上から見ると八角形に面取りをしているように見える。外面はハケメ調整、内面はナデ調整を施す。6～48は弥生土器の甕である。6は鋤先状に口縁が発達したもので、口縁下には小さな三角突帯を貼り付ける。内外面の調整はナデである。7は口縁を直角に小さく折り曲げるもので、口縁下のやや下った位置に一条の沈線をめぐらす。内外面の調整はナデである。8～10は「く」字の口縁に断面三角形の突帯を貼り付けるものである。8の外面のハケメ調整は突帯貼り付け前に行われている。10は大きく内側に傾くものである。11～13は口縁部を欠失するが、8と同様の器形であると思われる。11は三角突帯の部分に刻み目を施す。12・13は三角突帯の下に斜めに刻み目を施している。14は胴部が卵形に張る甕である。上下が接合しないが明らかに同一個体である。口縁は短く直線的に外反する。底部はわずかにレンズ状を呈する。内外面の調整はハケメである。15～29は在地系の甕で、古墳時代前期まで存続するものであるが、ここでは弥生土器として報告する。15は口縁端部を丸く仕上げるもので、内外面の調整はハケメである。16は口縁端部がわずかに肥厚するもので、口縁端部には斜めに刻み目を施す。内外面の調整は粗いハケメである。17は口縁部があまり広がらないものである。19は口縁端部をわずかに摘み上げるものである。20の胴部はタタキの後、ハケメを施すものである。21は口縁端部に刻み目を施す。26は口縁部がわずかに外反し、器壁も薄いことから土師器の可能性もある。口縁部内面は横方向のハケメである。27は外面にタタキの痕がわずかに残る。30～46は甕の底部である。30～34は上底もしくはわずかに上底を呈するものである。いずれも厚い。35はわずかに上底であるが底は薄いものである。内面に縦方向の強い圧痕が残る。36～41はわずかにレンズ状になりかけている底部である。42～46は脚台付の甕である。42は脚部が欠失している。43は小さい脚が大きく広がる。44は長い脚が大きく広がるものである。脚部外面にもハケメを施す。45は短く断面三角形の脚部を貼り付けている。46は薄く長い脚部を貼り付けたものであるが、脚の中位、二ヶ所に穿孔を施している。土師器の可能性もある。47は大型の甕である。「く」字の口縁端部には斜めの刻み目を施す。胴部は卵形に広がり、胴部最大径よりやや下がった位置に断面台形の突帯二条を貼り付ける。内外面の調整はハケメである。48は大型の甕の口縁部である。口縁端部には「V」字に連続して刻み目を施す。49～56は鉢である。49は口縁部は直線的に広がるもので、胴部はあまり張らない。底部はレンズ状に近い平底である。外面の調整はハケメ、底部はナデ調整。内面は口縁部付近は横方向のハケメ、内面は強いナデである。50は口縁が強く外反するもので、外面の調整は横方向の工具によるナデ、内面はハケメである。51は口縁部が長く直立するものである。口縁部内面はハケメ調整である。53は口縁部がさらに強く外反するものである。内外面の調整は摩滅のため不明である。54はレンズ状の底部をもつもので、器壁は薄い。内外面の調整はハケメである。55は強く外反する口縁にしっかりした平底の底部をもつものである。外面の調整はハケメ、内面は上半部がハケメ、下半部は板状工具によるナデである。57は小型の鉢で手捏ねによる成形である。器壁は厚く、短い脚をつける。内外面の調整はナデ調整である。58は底部がレンズ状の底部をもち、直線的に開くもので、一ヶ所を注口として広げている。内外面の調整はハケメである。59～61は高杯である。59は杯部で、口縁部を内側に屈曲させるものである。内外面の調整はナデである。60は短い脚部であり開かないものである。外面はハケメ調整である。61は丹塗りの脚部である。



第18图 包含層出土土器② (1/4)

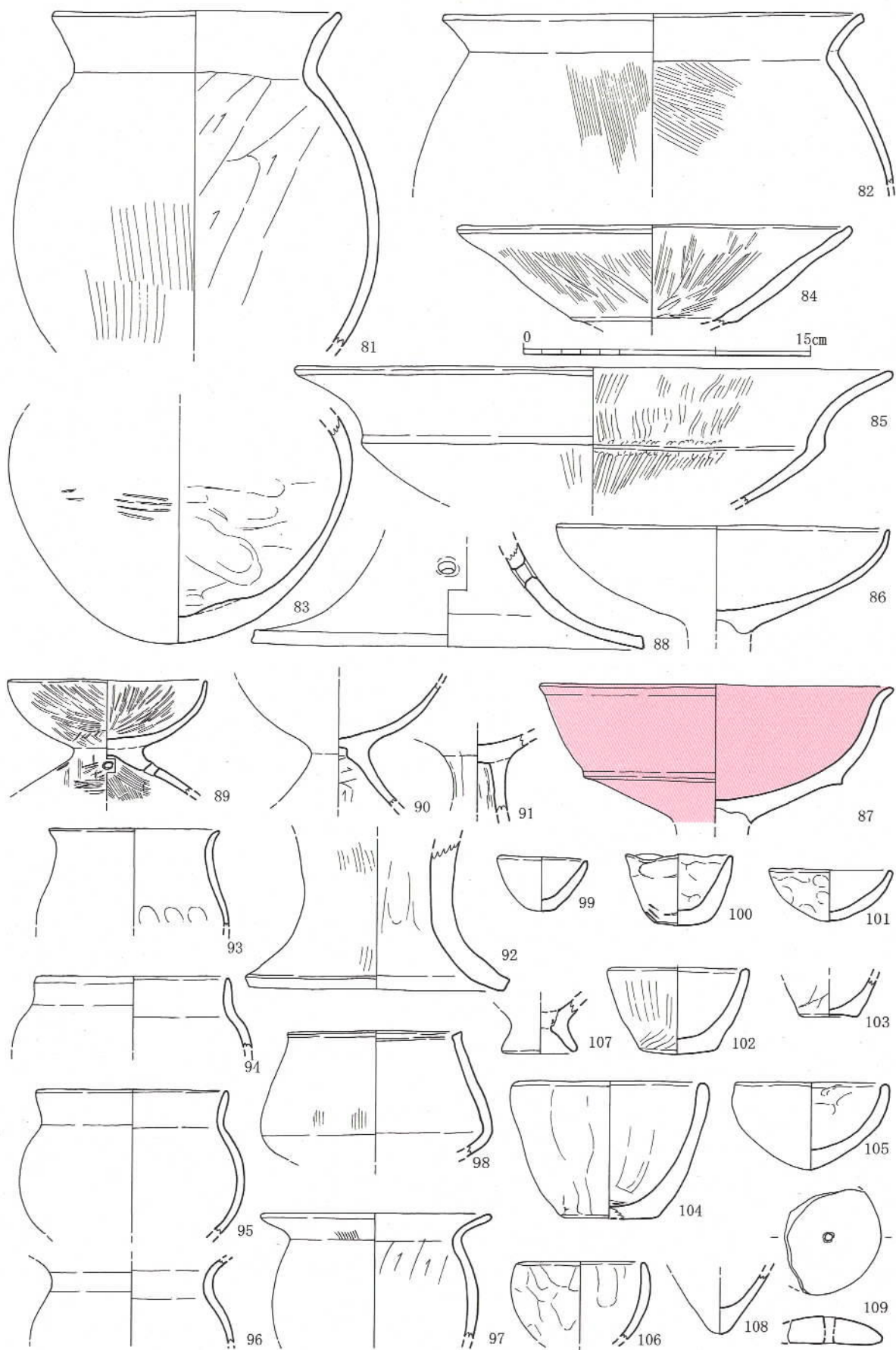


第19图 包含層出土土器③ (1/4)

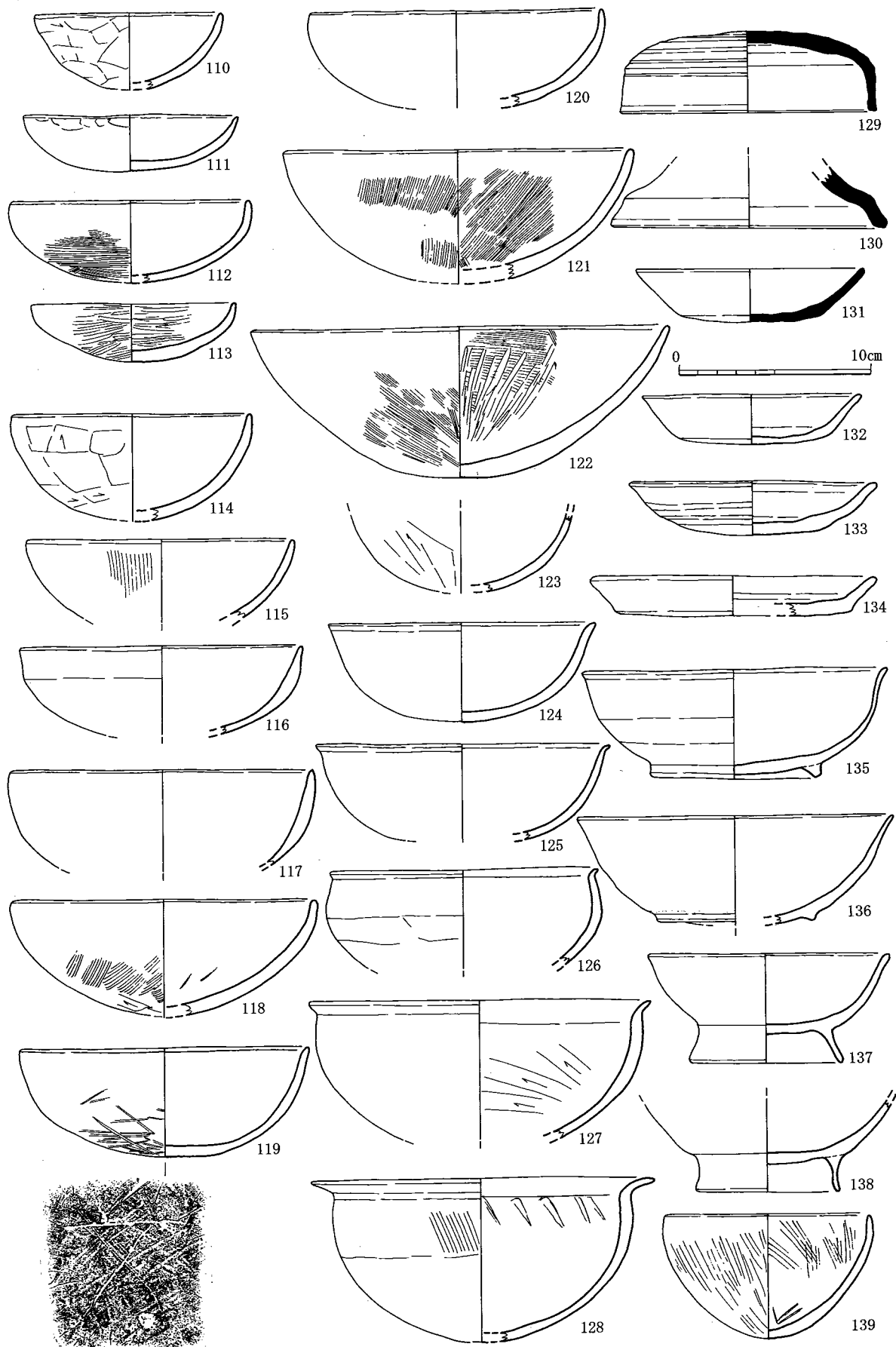


第20図 包含層出土土器④ (59~70は1/4、他は1/3)

外面はハケメ調整でその上から外面のみに丹塗りを施している。62～65は支脚である。62は口縁が大きく開くものである。外面の調整はハケメ、内面は上部からと下部から成形を施した境が明瞭に残る。63は直線的に開く脚部である。外面と内面底部付近はハケメ調整、内面上位は強いナデ圧痕がのこる。66～68は器台である。66は筒状をなすもので、外面はハケメ調整、内面はナデ調整である。67はナデにより成形されたものである。68も筒状を呈するもので、外面はタタキ痕が残る。内面には強い圧痕が残るが、これはタタキ成形時の痕跡であろう。69・70はジョッキ形土器である。69はジョッキ形土器の握り手の部分である。図面上の上端が杯部へ貼り付けた場合の上位にあたる部分であろう。この69も1号溝出土34と同様に粘土帯を円筒状につくり、半裁したものであろう。70はジョッキ形土器の底部である。胴部が内側に強く折り曲げられる。内外面の調整はナデである。つくりは丁寧である。71～75は土師器の壺である。71は口縁下に断面三角の突帯を貼り付ける。口縁部外面には竹管文を巡らせる。内外面の調整はナデである。73は肩部に竹管文を巡らせるものである。外面はハケメ調整、内面はハケメの後、ナデ調整である。74は小型の壺で、外面はハケメ調整の後、ナデ、内面はナデ調整である。75は球形の胴部をもつ壺である。器壁は比較的薄く、外面は丁寧なつくりである。内面には粘土の接合痕が明瞭に残る。粘土帯の幅は1cm弱と短い。外面の調整はハケメの後、ナデ調整。内面の調整はハケメの後、ナデであるが、一部に圧痕が残る。76～83は土師器の甕である。76は庄内系の甕で直線的に開く口縁部で、器壁は薄い。外面はタタキの後、ハケメで、内面はケズリを施す。77・78は布留系の甕である。77の口縁部外面には工具痕が残る。胴部内面のケズリはかなり下がった位置から始められる。78は口縁端部が平坦に近いもので、外面の調整はハケメ、内面の調整はかなり下がった位置からケズリを行う。79は口縁端部が丸い甕で器壁は厚い。外面は横方向のハケメで、内面はケズリである。80は口縁が外反するもので、外面の調整はハケメ、内面の調整はケズリである。82は在地系の甕である。内外面の調整はハケメである。83は卵形の胴部をもつ甕で器壁が全体に厚いが、底部付近は特に厚い。外面は摩滅するが、一部にタタキが残る。内面はケズリであろう。84～91は土師器の高杯である。84は口縁が直線的に大きく開くもので、屈曲部で剥離している。内外面はハケメの後、縦方向のミガキである。85は屈曲部から大きく広がるもので、外面は摩滅しているがミガキであろう。内面はミガキ調整で、屈曲部分にミガキ原体の痕跡が残る。86は杯部がゆるやかに内湾するもの。87は杯部中位に段をつけ、ゆるやかに立ち上がり、口縁端部で強く外反するものである。内外面の調整はナデで、両面に赤色の化粧土が塗られる。88は脚部片である。大きく広がり、端部は角張って仕上げられる。中位に丸い穿孔が施される。内外面の調整はナデ調整である。89は小型の高杯で半球形の杯部をもつ。脚部は直線的に大きく広がり、丸い穿孔を施す。全体に丁寧なつくりで杯部内外面および脚部外面はミガキ調整、脚部内面はハケメ調整である。90も半球形の杯部をもつ高杯であるが、つくりはやや粗い。脚部内面の調整はケズリである。92は大型の支脚である。外面の調整はハケメ、内面はナデ調整である。93～98は土師器の鉢である。93はやや膨らんだ胴部からわずかにすぼまり、口縁が外反するもので、器壁は薄い。内外面はナデ調整で、胴部内面には圧痕が残る。94・95は胴部が膨らみ、口縁が直立するもの。96は口縁がやや開き気味になるもの。97は口縁が大きく開くものである。98は胴部から直線的に口縁がすぼまるもので、高杯の杯部となる可能性もある。外面の調整はハケメである。99～106は手捏ねの土器である。99～101は小型のもので、内外面の調整はナデ調整である。102～104は底部をもつものである。107は不明の小型器種で、内外面の調整はナデである。109は紡錘車と考えられるが、穿孔の位置が中心からずれている。110～128・139は土師器の鉢である。

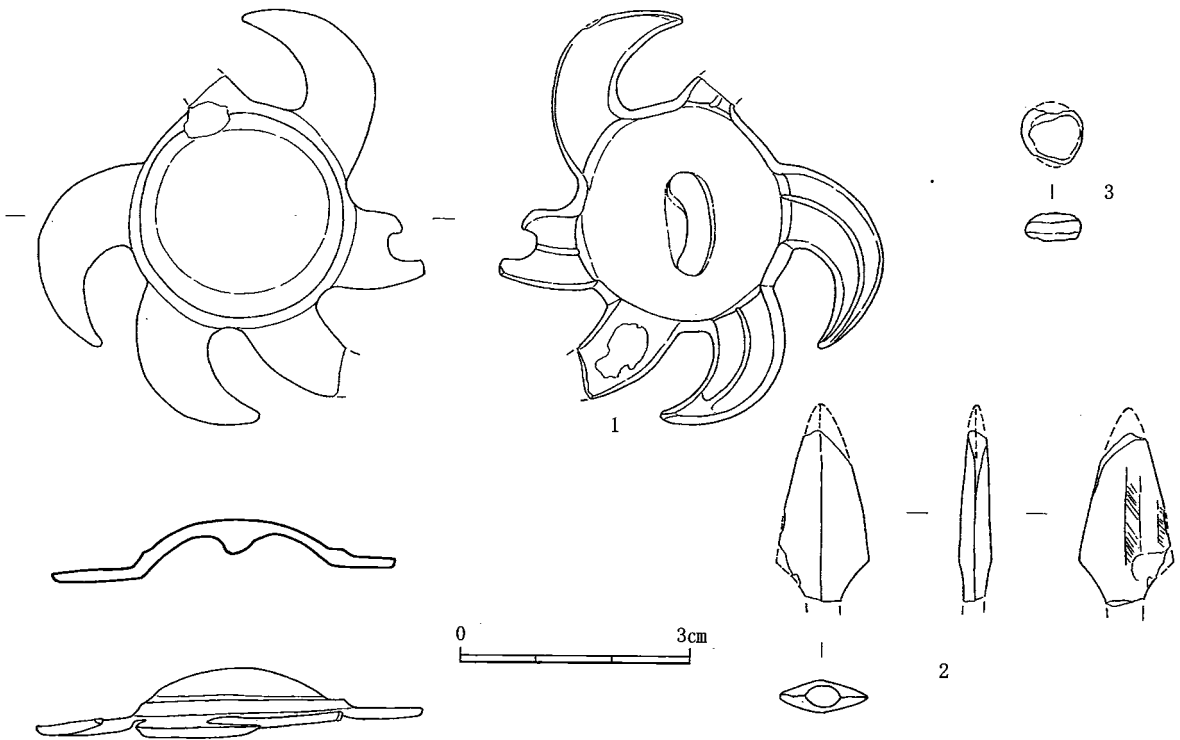


第21图 包含層出土土器⑤ (1/3)

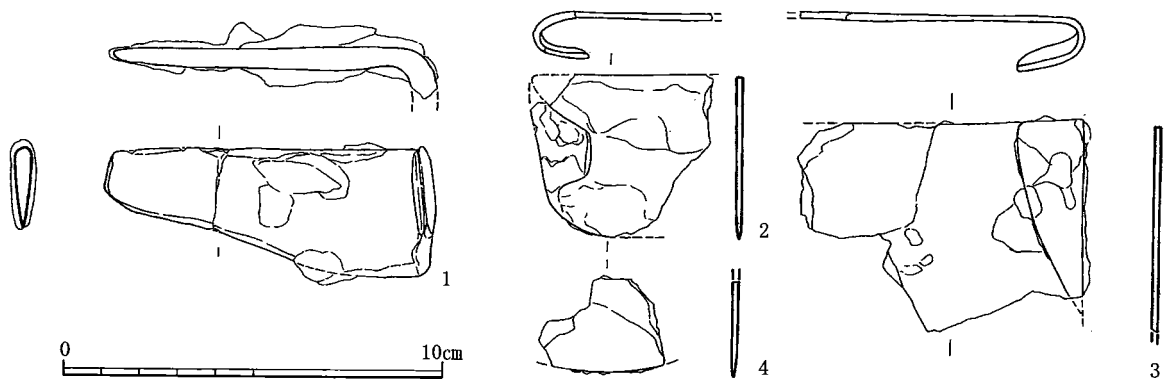


第22图 包含層出土土器⑥ (1/3)

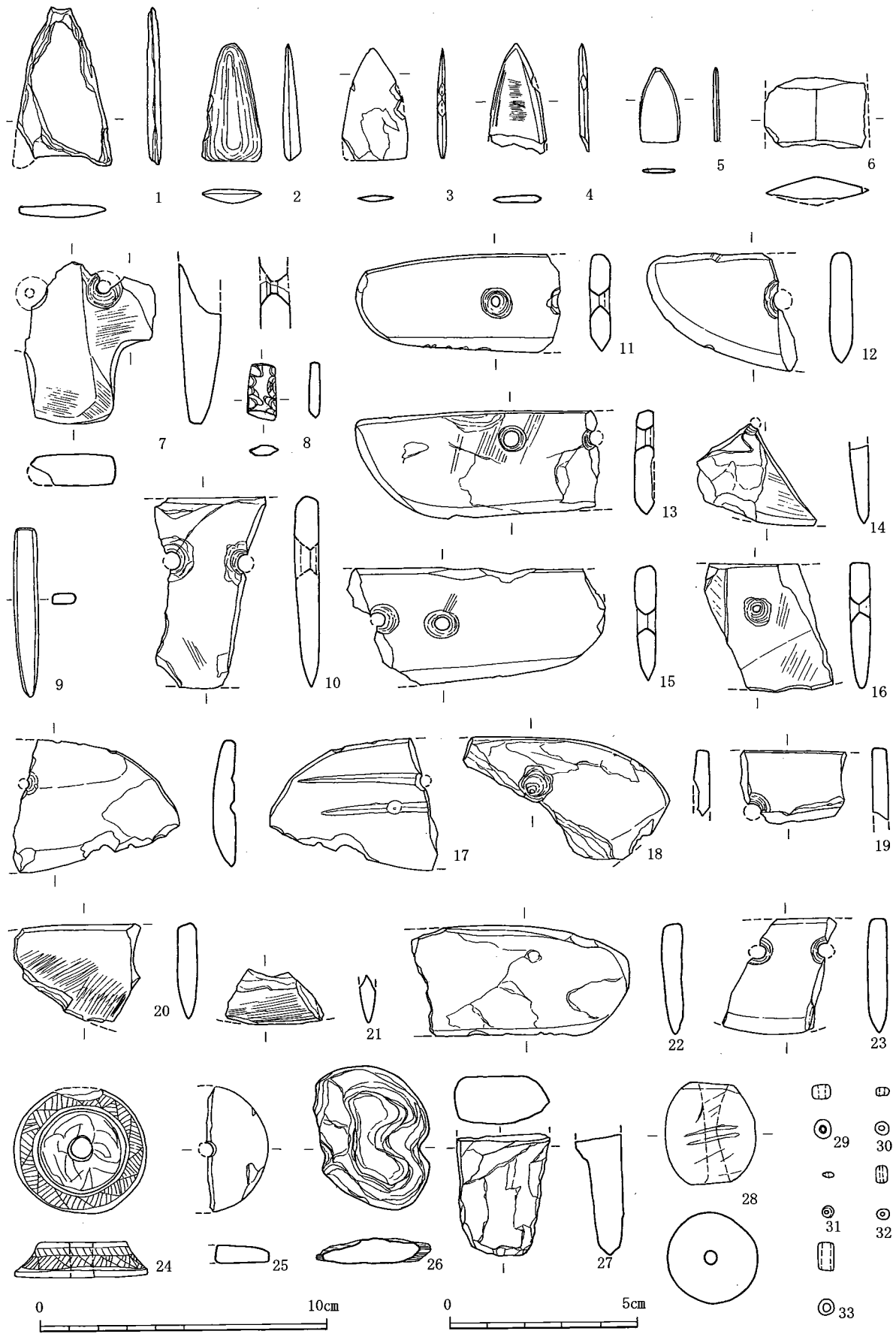
110は外面が不定方向のケズリである。112の外面底部はハケメ調整。113は内外面ともにミガキである。114の外面は不定方向のケズリである。115の外面は縦方向のハケメである。118は外面底部はケズリ、それより上位はハケメである。119の外面底部はミガキで、ヘラ記号状のものが刻まれる。121は内外面、細かいミガキ。122は大型の鉢で外面はハケメ、内面はハケメの後、縦方向のミガキが施される。123は深いもので、外面はケズリである。124～128は口縁端部が外反するものである。124・125は口縁端部をわずかに外反させるものである。126は一度内湾して、口縁端部を外反させるものである。127は大型で口縁端部の外反度も大きい。内面の調整はケズリである。128は口縁端部が強く外反するもので、外面はハケメ調整、内面には工具痕が残る。139は尖り底気味の底部をもつ鉢である。内外面の調整はともにハケメである。129は須恵器の杯蓋である。口縁端部には段が残る。また、肩



第23図 出土青銅製品実測図 (1/1)



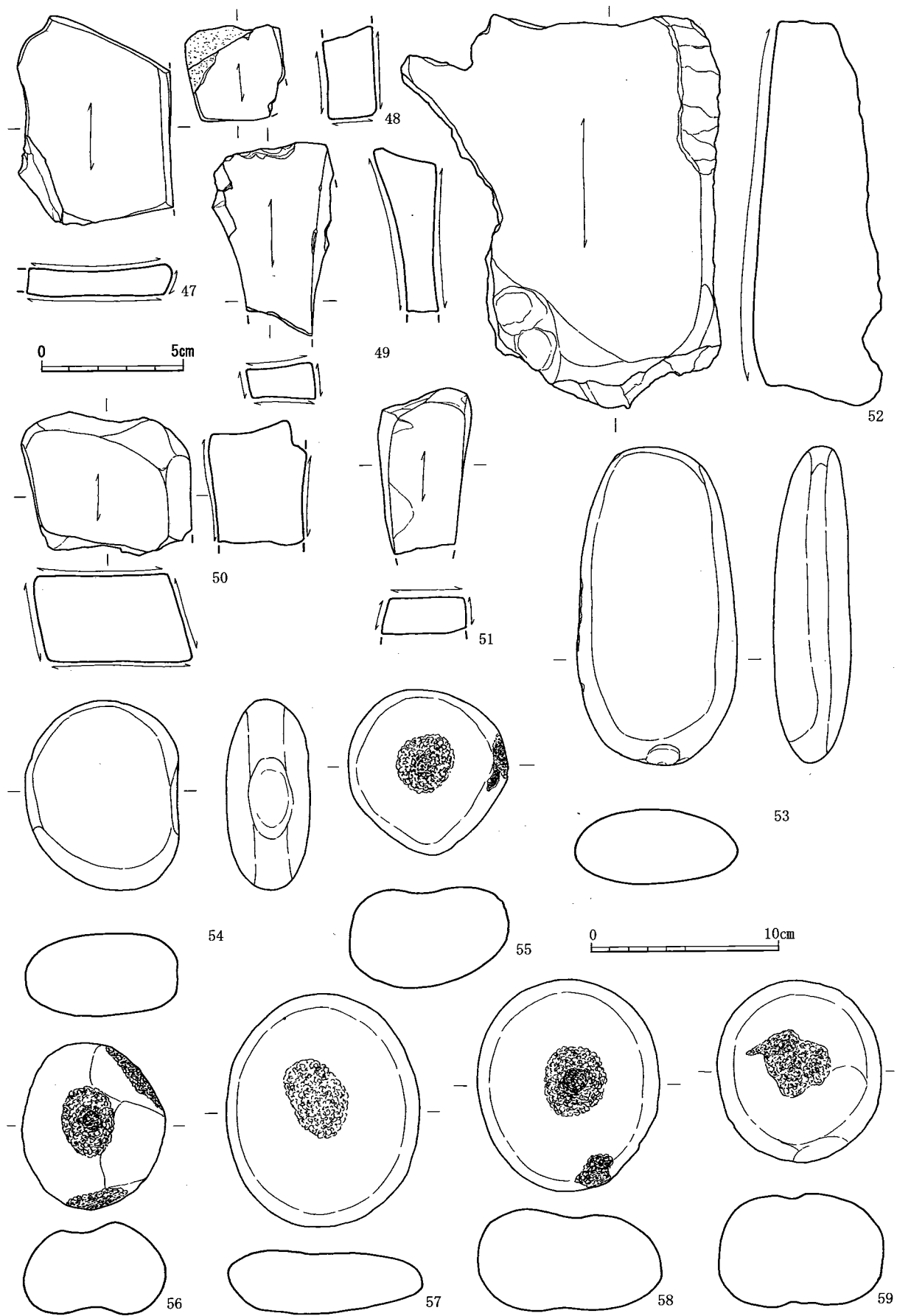
第24図 出土鉄器実測図 (1/2)



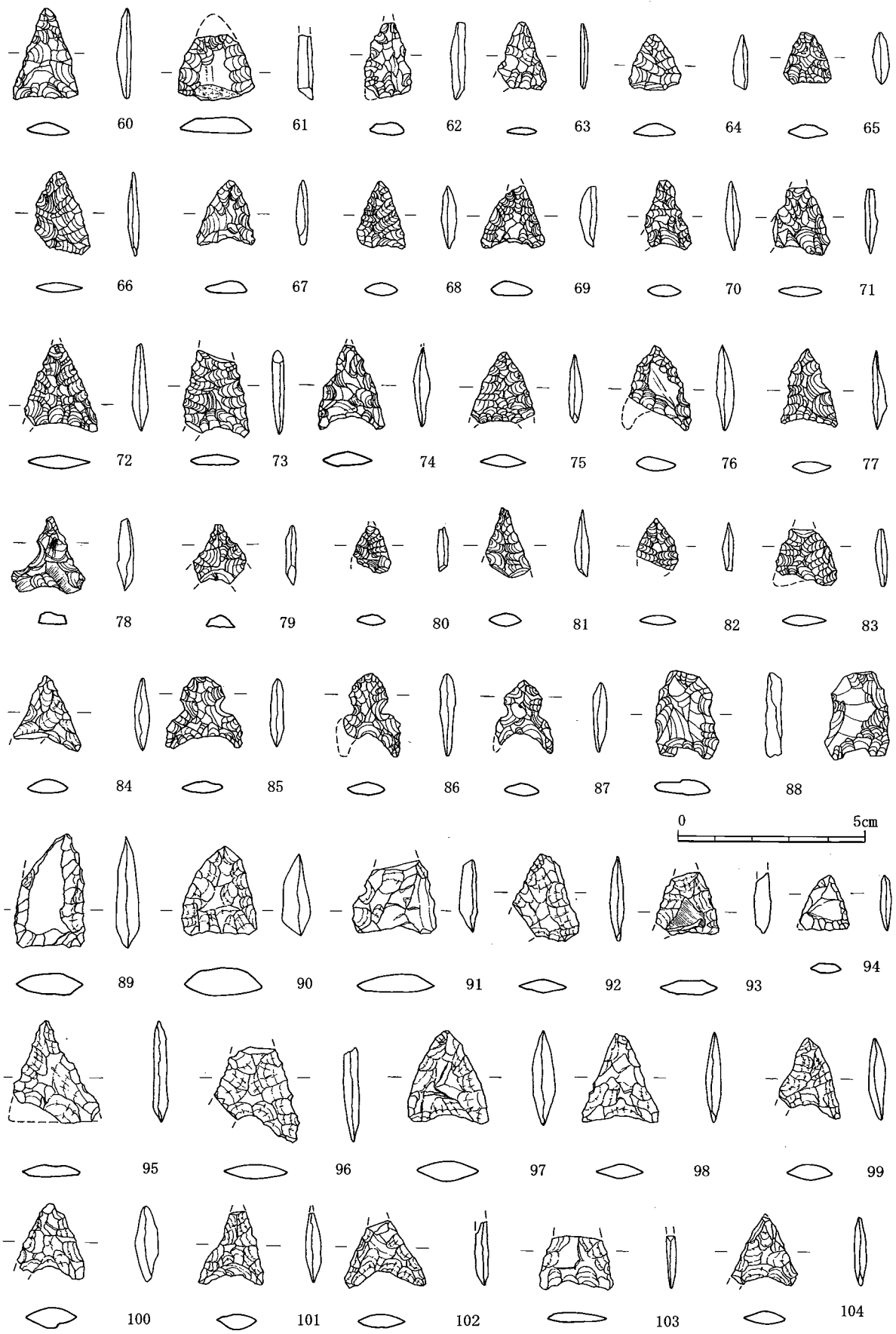
第25図 出土石器実測図① (1/2、28~33は2/3)



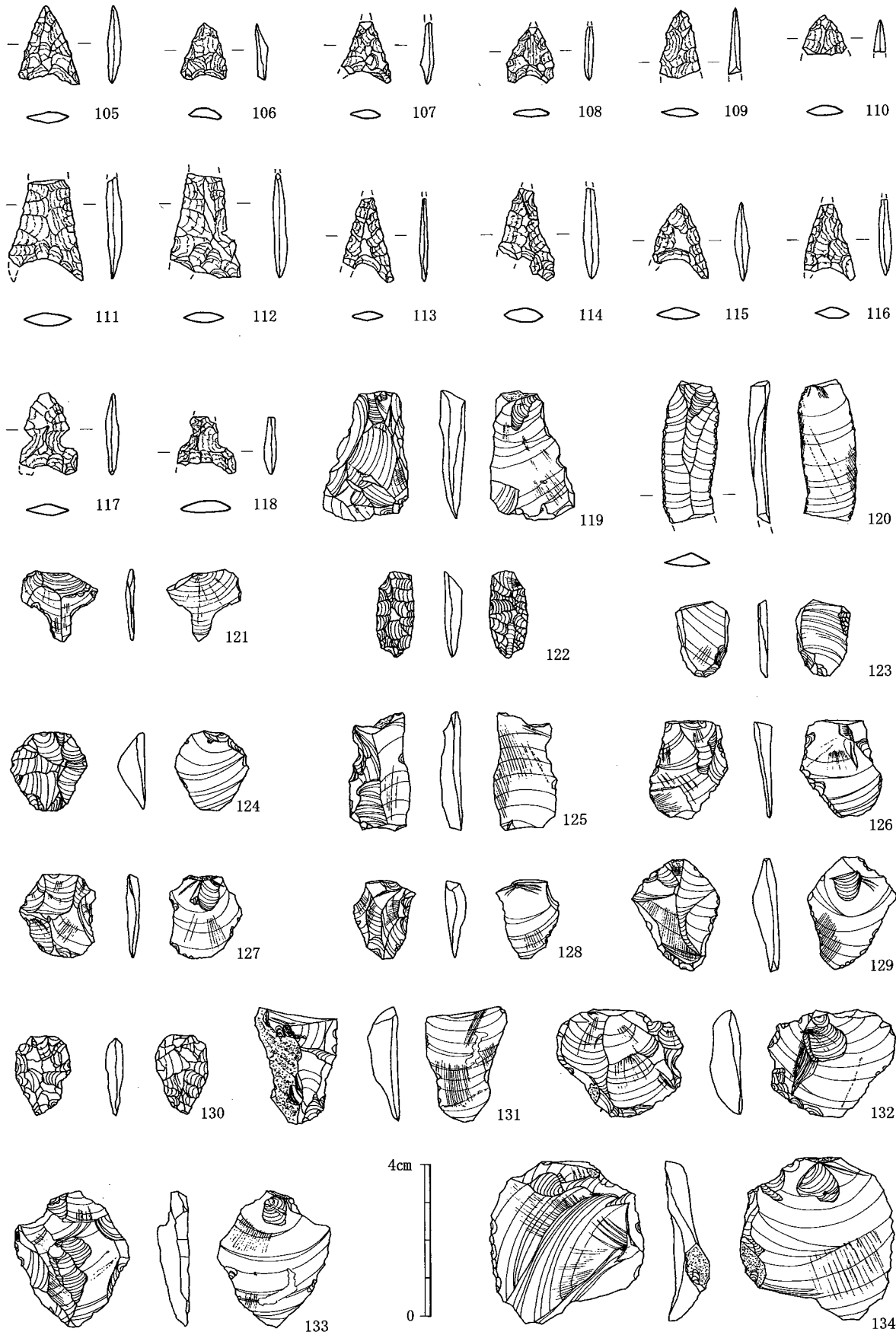
第26图 出土石器实测图② (1/2)



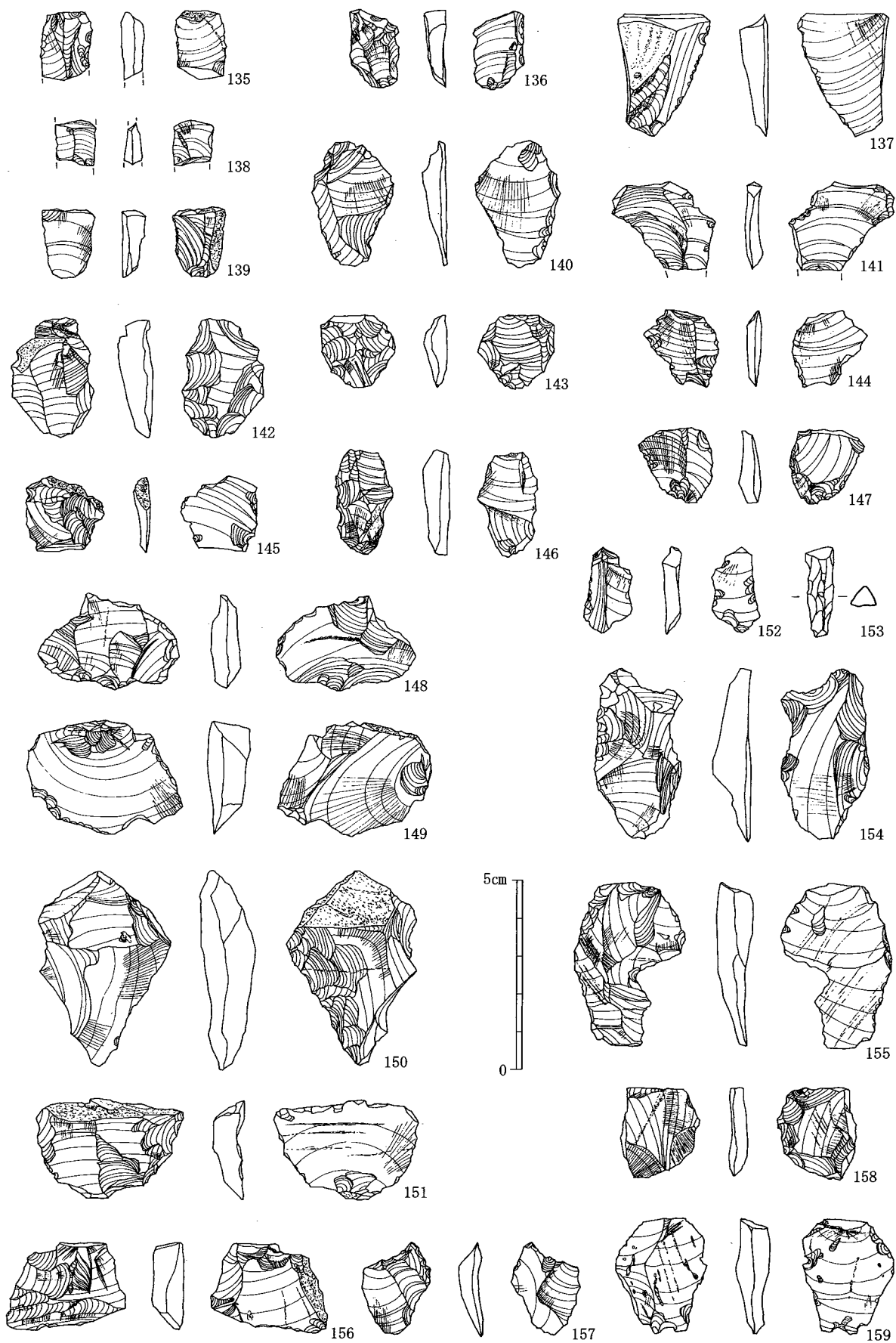
第27図 出土石器実測図③ (1/2、54~59は1/3)



第28图 出土石器实测图④ (2/3)



第29图 出土石器实测图⑤ (2/3)

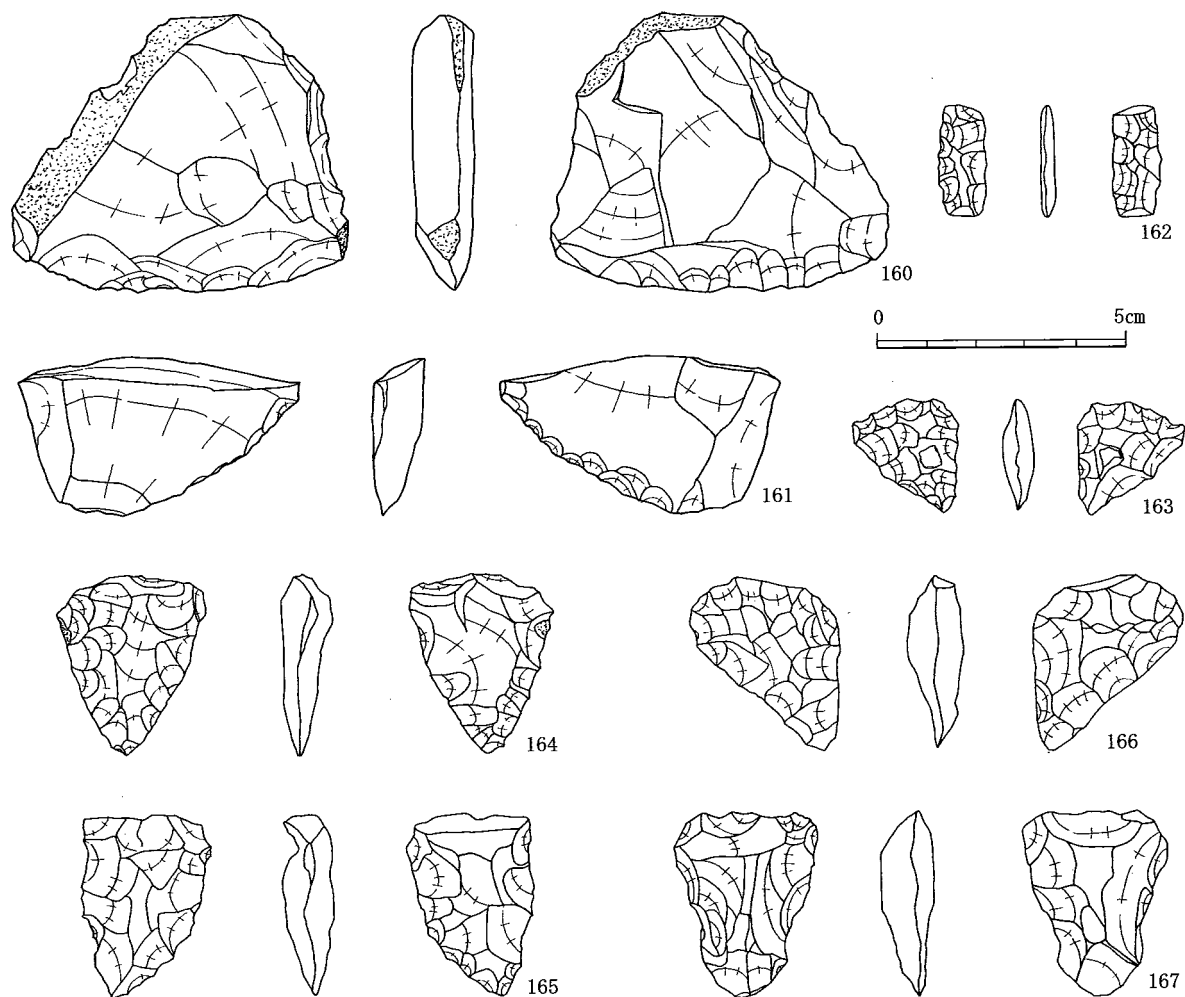


第30图 出土石器实测图⑥ (2/3)

部にも段の痕跡が残る。天井部の回転ヘラケズリは範囲が広く丁寧である。130は須恵器の脚部である。端部の仕上げはかなり丸い。131は須恵器の杯である。口縁は直線的に大きく広がる。焼成は良好である。132・133は中世の土師器杯である。134は須恵器の皿である。口縁は短く直線的に立ち上がり、焼成は良好である。135は内外面ともに炭化物が付着している。136は土師質の椀である。137は内面および高台以外の外面に炭化物が付着。138はいわゆる内黒の黒色土器である。

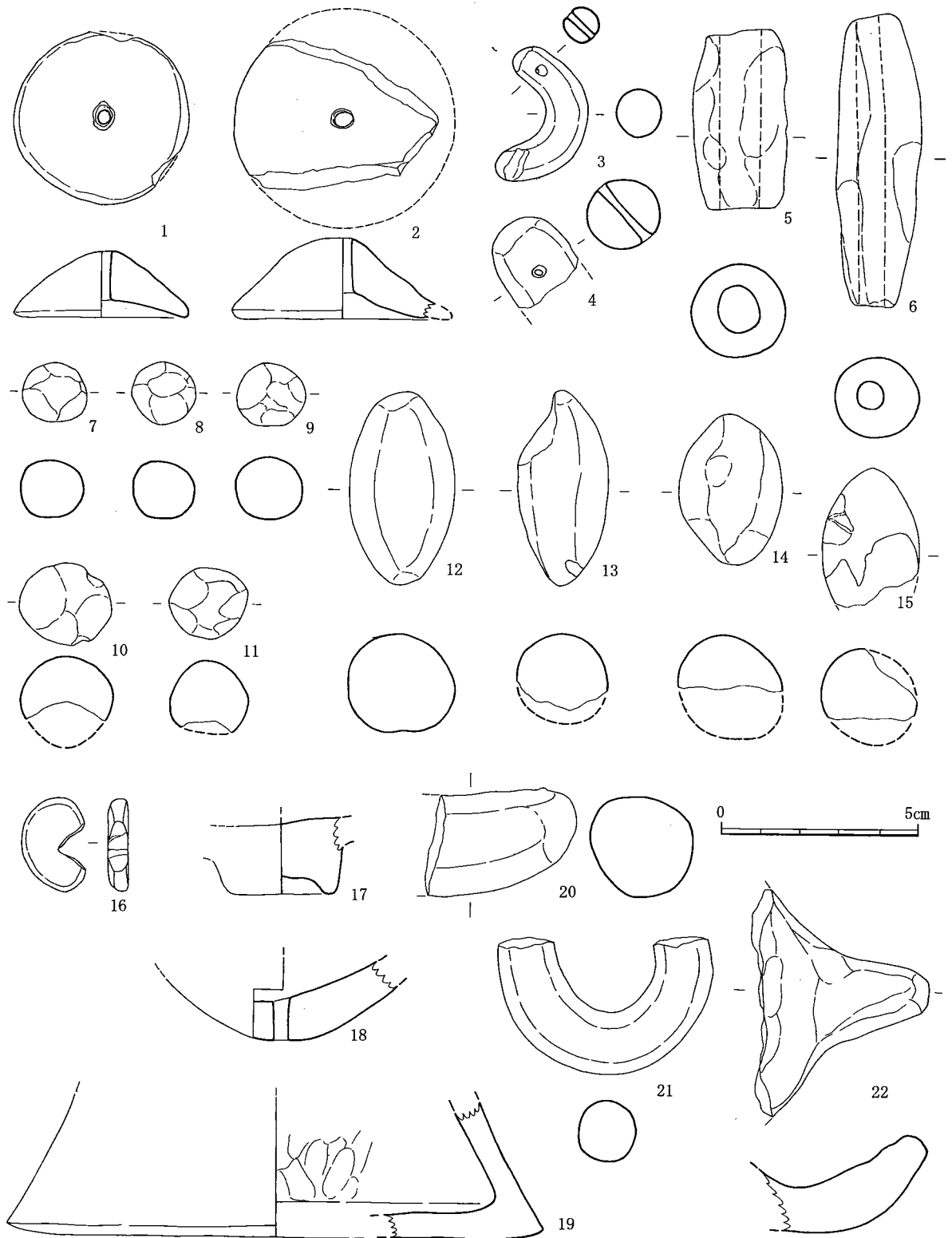
(7) 出土石器 (図版16~20、第25~31図)

1~5は磨製の石鏃である。1は凹基式のもので大型である。2・3・5は平基式である。6は石剣の一部で刃部はほぼ欠落する。7は石戈の基部付近で2孔を穿つ。8は小型の石鏃で、敲打により成形した後、全体を研磨、最後に刃部を研ぎ出している。9は研磨により断面四角形の棒状に成形したものである。10~23は石庖丁である。15の穿孔部分には使用痕が残る。17は溝を2条掘り込み、一ヶ所は穿孔途中である。18も穿孔の途中で止めている。22は石庖丁の未製品で、敲打による穿孔の途中で止めている。24は紡錘車である。断面台形を呈し、中央には浅く蝶もしくは花を線刻し、周囲には強く鋸歯文を刻む。なお、この鋸歯文には一ヶ所刻む方向を間違えている部分がある。鋸歯文部分には一部赤色顔料が残存している。26は石錘であろうか。円形の石の両端を打ち欠いている。35~38



第31図 出土石器実測図⑦ (2/3)

は蛤刃石斧である。39は刃部がやや傾くものである。40~43は柱状の石斧である。43には敲打による
 抉りが見られる。44~46は打製の石斧で、44には一部研磨痕が残る。47~52は砥石である。52は白色
 と赤色の層が互層になっている。53は敲石である。先端部に一部欠失が見られる。54~59は磨石である。
 60~88は黒曜石製の石鏃である。60~63は平基式、64は凸基式、その他は凹基式である。85~87



第32図 出土土製品 (2/3)

は刃部の部分を深く抉りこんだものである。88は石鏃の未製品で基部の凹部を抉り出しているが、刃部は割り出していない。89～117は安山岩製の石鏃である。89～95は平基式のものである。93は一部研磨を行っている。111・112は長く大型のものである。117・118は刃部に深く抉りを入れるものである。119～159は黒曜石の使用剥片である。119は縦長の剥片で両側に調整を加える。120は縦長の剥片で先端を失うが両側には微細な剥離が行われている。121は穿孔具の類であろう。122は縦長の剥片で全体に調整を加えている。123～152は一部に調整を加えたものである。いずれも不整形であるが、何らかの目的で使用されたものであろう。153は穿孔具であろうか。断面三角形に仕上げられる。157は使用痕のある剥片であるが、他の黒曜石より色が薄く、透明度が高い。160～167は安山岩製の使用剥片である。160・161はスクレイパーである。両面から剥離調整を加えている。162は縦長の剥片で、全面に剥離調整を加えている。163～167は三角形を呈する。いずれも両面から剥離調整を加えている。

(8) 土製品

1・2は紡錘車である。いずれも断面が三角形で上底状となる。3・4は勾玉である。3は完形で、全体に細身である。4は大型のものであるが、頭部のみである。5・6は土錘である。5は焼成が良好で、風化の度合いも低い。新しいものである可能性もある。6は大型で焼成は良好であるが、風化は著しい。7～11は土製玉である。いずれも手捏ねにより成形している。12～15は投弾である。16は土器に貼り付けられていたものが剥離したものであろう。18は小型の甑になるものか。底部に小さな穿孔を施す。19はジョッキ形土器の底部。内面には圧痕が残り、焼成は良好である。外面に黒斑が付着する。20は何らかの把手であろうか。21は「U」字型を呈する把手であろうか。22も把手であろうか。天地は不明である。

(9) 小結

1. 遺構について

第1次調査では竪穴住居跡2棟、土坑3基、石棺墓1基の調査を行った。これらは出土した大量の遺物に対して、決して多いとはいえない。遺物も含め、新しいものから時期別に見ていくと、現在の耕作土層下の第3層暗黒褐色粘質土層（包含層）から中世の陶磁器や土師器類を検出している。特に土師器類は完形に近いものも出土しており、第3層暗黒褐色粘質土層（包含層）に切り込む古墳時代の遺構の検出が非常に困難であった点を考慮すると、中世の遺構を検出できずに掘り飛ばした可能性が高い。この遺跡が中世にも存続していたことがわかる。また、中世以前の土器は奈良時代の須恵器が数点出土しており、わずかながらも生活の痕跡をうかがい知ることができる。

遺構として明確なものに古墳時代後期の1号竪穴住居跡がある。この地域では珍しい移動式カマドや鋸歯文を刻む滑石製の紡錘車の出土が特筆される。古墳時代前期の遺構としては2号竪穴住居跡、1～3号土坑を検出している。特に3号土坑からは県内では発掘調査での出土の初例である巴形銅器が出土している。また、遺物が出土していないために時期は特定できないが恐らく古墳時代に属するであろう石棺墓1基を検出している。以上が今回調査された遺構であるが、調査面積、出土土器量に比して非常に少ない。台地の縁辺部ということもあるが、包含層に含まれる弥生土器の量および第2次調査の遺構数と比べても極めて少なく、古墳時代以降も、この集落は存続するが、それは大規模なものではなかったことを物語っている。

(10) 巴形銅器について

今回の調査で1号土坑から出土した巴形銅器は後藤直氏の分類基準⁽¹⁾に従えば、I類 外縁部に段を有する半球形の座、裏面は瘤状鈕で左振りの6脚を配するものである。この形態のものは、長崎県佐保ソウダイ遺跡⁽²⁾から2点、大分県雄城台遺跡⁽³⁾1点、佐賀県桜馬場遺跡⁽⁴⁾3点の計6点出土している。この中で桜馬場遺跡の2点の有鉤で特異な形態である。

この形態のものは分類を行った各研究者によって時期の比定が異なる場合があるが、いずれも弥生後期初頭から後期前半とされているものであり、海津横馬場遺跡出土のものも大幅に外れるものではないであろう。しかし、布留式古段階の土坑から出土した点に関しては、現状では一定期間の伝世の可能性を考えている。

脚の裏面の文様に注目してみると佐保遺跡、雄城台遺跡のものは、脚部の裏面に中央線のある綾杉の文様を有し、なおかつ脚端部も盛り上がっている。次に桜馬場遺跡の無鉤のものは、脚部裏面は中央の凸線および脚端部の盛り上がりを残し、内部の綾杉文様は欠落している。一方、桜馬場遺跡の有鉤のものは全く無文となっている。先学が指摘するとおり、綾杉文→中央線のみ→無文への流れが見られる。

海津横馬場遺跡のものは中央の凸線のみを残し、脚端部の盛り上がり欠落している。これは桜馬場遺跡の無鉤のものと同有鉤のものとの間に位置する形態であり、無文への変遷する過程を示す興味深い資料といえよう。

註

- (1) 後藤直「7. 巴形銅器」『弥生文化の研究 6』 雄山閣 1986
- (2) 永留久恵「対馬・豊玉村佐保発見の馬鐸・巴形銅器調査報告」『九州考古学』32 1967
- (3) 『大分県 埋蔵文化財年報 4 平成6(1994)年度版』大分県教育委員会 1996
- (4) 梅原末治「肥前唐津市発見の甕棺遺物」『考古学雑誌』36巻1号 1950

第1表 土製品観察表

| 番号 | 種類 | 出土位置 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重量 | 備考 |
|----|---------|-------|------|-----|-----|------|----|
| 1 | 紡錘車 | 包含層 | 4.4 | — | 1.6 | 16.6 | |
| 2 | 紡錘車 | 包含層 | — | — | 2.0 | — | |
| 3 | 勾玉 | 包含層 | 3.4 | 1.0 | 1.2 | 5.2 | |
| 4 | 勾玉 | 1号溝 | — | 1.8 | 1.8 | — | |
| 5 | 土錘 | 試掘溝 | 4.5 | — | 2.3 | 14.8 | |
| 6 | 土錘 | 包含層 | 7.4 | — | 2.1 | 27.0 | |
| 7 | 土製玉 | 包含層 | 1.5 | — | 1.5 | 2.7 | |
| 8 | 土製玉 | 1号溝 | 1.6 | — | 1.6 | 2.4 | |
| 9 | 土製玉 | 包含層 | 1.6 | — | 1.7 | 3.9 | |
| 10 | 土製玉 | 包含層 | 2.2 | — | 2.0 | — | |
| 11 | 土製玉 | 包含層 | 1.7 | — | 1.9 | — | |
| 12 | 投弾 | 包含層 | 4.8 | 2.7 | 2.5 | 27.5 | |
| 13 | 投弾 | 石棺検出面 | 4.9 | 2.2 | — | — | |
| 14 | 投弾 | 包含層 | 3.7 | 2.5 | — | — | |
| 15 | 投弾 | 石棺検出面 | — | 2.4 | — | — | |
| 16 | 不明土製品 | 包含層 | 2.3 | 1.5 | 0.5 | 1.6 | |
| 17 | 小形土器 | 包含層 | 2.4 | — | 1.9 | — | |
| 18 | 甌? | 表土剥ぎ | — | — | — | — | |
| 19 | ジョッキ形土器 | 包含層 | 13.2 | — | 0.6 | — | |
| 20 | 甌把手 | 攪乱 | — | 2.5 | 2.6 | — | |
| 21 | 把手 | 包含層 | — | 1.5 | 1.5 | — | |
| 22 | 把手 | 包含層 | — | — | 1.2 | — | |

第2表 青銅製品観察表

| 番号 | 種類 | 出土位置 | 材質 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重量 | 備考 |
|----|--------|------|----|-----|-----|-----|------|----|
| 1 | 巴形銅器 | 1号土坑 | 青銅 | 5.5 | — | 0.9 | 14.2 | |
| 2 | 銅鏃 | 包含層 | 青銅 | 2.3 | 1.2 | 0.4 | — | |
| 3 | 不明青銅製品 | 包含層 | 青銅 | 0.8 | — | 0.4 | — | |

第3表 鉄製品観察表

| 番号 | 種類 | 出土位置 | 材質 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重量 | 備考 |
|----|--------|------|----|-----|-----|-----|----|----|
| 1 | 鉄鏃 | 2号住居 | 鉄 | 8.7 | 3.3 | 0.6 | — | |
| 2 | 鋤先状鉄器 | 1号溝 | 鉄 | — | 4.3 | 0.1 | — | |
| 3 | 鋤先状鉄器 | 包含層 | 鉄 | — | — | 0.1 | — | |
| 4 | 鋤先状鉄器? | 包含層 | 鉄 | — | — | 0.1 | — | |

第4表 石器観察表

| 番号 | 種類 | 出土位置 | 石材 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重量 | 備考 |
|----|-------|----------|-----|-------|-------|-------|---------|----|
| 1 | 磨製石鏃 | 包含層 | 片岩 | 5.6 | (4.2) | 0.5 | (9.6) | |
| 2 | 磨製石鏃 | 包含層 | 頁岩 | 4.1 | 2.1 | 0.6 | 4.7 | |
| 3 | 磨製石鏃 | 試掘溝 | 片岩 | 3.9 | 2.2 | 0.2 | 2.7 | |
| 4 | 磨製石鏃 | 包含層 | 粘板岩 | (3.9) | 2.0 | 0.3 | (2.2) | |
| 5 | 磨製石鏃 | 廢土中 | 頁岩 | 2.6 | 1.4 | 0.2 | 0.8 | |
| 6 | 石劍 | 包含層 | 頁岩 | (2.4) | 3.6 | 0.8 | (8.5) | |
| 7 | 石戈 | 北試掘溝 | 粘板岩 | (4.8) | (4.4) | (1.4) | (30.1) | |
| 8 | 石鏃 | 包含層 | 粘板岩 | 2.0 | 1.1 | 0.4 | 1.1 | |
| 9 | 不明石製品 | 包含層 | 片岩 | 6.0 | 0.8 | 0.4 | 3.8 | |
| 10 | 石庖丁 | 1号住居 | 凝灰岩 | (3.9) | 6.8 | 0.8 | (25.6) | |
| 11 | 石庖丁 | 包含層 | 凝灰岩 | (7.2) | 3.5 | 0.7 | (26.5) | |
| 12 | 石庖丁 | 包含層 | 片岩 | (4.6) | (4.0) | 0.8 | (21.4) | |
| 13 | 石庖丁 | 包含層 | 頁岩 | (8.4) | 3.7 | 0.7 | (28.6) | |
| 14 | 石庖丁 | 包含層 | 凝灰岩 | — | — | 0.6 | (7.1) | |
| 15 | 石庖丁 | 包含層 | 凝灰岩 | (9.0) | 4.1 | 0.7 | (42.2) | |
| 16 | 石庖丁 | 包含層 | 頁岩 | — | 4.4 | 0.7 | (20.4) | |
| 17 | 石庖丁 | 包含層 | 砂岩 | (5.8) | (4.7) | 0.8 | (17.0) | |
| 18 | 石庖丁 | 包含層 | 片岩 | (7.2) | — | 0.6 | (21.0) | |
| 19 | 石庖丁 | 廢土中 | 頁岩 | — | — | 0.5 | (9.1) | |
| 20 | 石庖丁 | 試掘溝 | 凝灰岩 | — | — | 0.7 | (15.1) | |
| 21 | 石庖丁 | 包含層 | 頁岩 | — | — | 5.5 | (3.3) | |
| 22 | 石庖丁 | 包含層 | 片岩 | (7.6) | 3.9 | 0.8 | (38.4) | |
| 23 | 石庖丁 | 包含層 | 片岩 | — | 4.0 | 0.7 | (13.7) | |
| 24 | 紡錘車 | 1号住居床直 | 滑石 | 4.6 | — | 1.3 | (32.9) | |
| 25 | 紡錘車 | 包含層 | 片岩 | 4.5 | — | 0.6 | (8.1) | |
| 26 | 石錘 | 包含層 | 片岩 | 5.1 | 4.0 | 0.8 | 22.8 | |
| 27 | 不明石製品 | 包含層 | 砂岩 | 4.3 | 3.2 | 1.6 | 25.7 | |
| 28 | 滑石製玉 | 3号土坑No.1 | 滑石 | 2.7 | — | 2.4 | 21.7 | |
| 29 | ガラス小玉 | 包含層 | ガラス | 0.4 | — | 0.5 | — | |
| 30 | ガラス小玉 | 1号溝 | ガラス | 0.2 | — | 0.4 | — | |
| 31 | ガラス小玉 | 包含層 | ガラス | 0.3 | — | 0.2 | — | |
| 32 | ガラス小玉 | 包含層 | ガラス | 0.5 | — | 0.3 | — | |
| 33 | 管玉 | 包含層 | 碧玉 | 0.7 | — | 0.5 | — | |
| 34 | 磨製石斧 | 1号溝 | 玄武岩 | — | 7.7 | 5.0 | (541.4) | |
| 35 | 磨製石斧 | 包含層 | 玄武岩 | — | — | — | (50.4) | |
| 36 | 磨製石斧 | トレンチ | 玄武岩 | — | — | — | (20.6) | |
| 37 | 磨製石斧 | 包含層 | 蛇紋岩 | — | 6.5 | 2.7 | (167.2) | |
| 38 | 磨製石斧 | 1号溝 | 玄武岩 | — | — | — | (154.1) | |
| 39 | 磨製石斧 | 北試掘溝 | 玄武岩 | 9.7 | 5.0 | 1.8 | (111.7) | |
| 40 | 扁平石斧 | 包含層 | 砂岩 | — | 3.0 | 1.7 | (47.6) | |
| 41 | 扁平石斧 | 包含層 | 砂岩 | — | 5.3 | 2.3 | (200.2) | |
| 42 | 扁平石斧 | 包含層 | 頁岩 | — | — | 1.6 | (9.0) | |
| 43 | 扁平石斧 | 包含層 | 安山岩 | — | 4.7 | 2.2 | (130.6) | |
| 44 | 打製石斧 | 廢土中 | 片岩 | — | 4.1 | 1.2 | (80.5) | |
| 45 | 打製石斧 | 1号溝 | 片岩 | — | 7.3 | 2.1 | (203.0) | |
| 46 | 打製石斧 | 包含層 | 片岩 | — | 4.8 | 1.0 | (69.3) | |
| 47 | 砥石 | 石棺検出面 | 砂岩 | 7.5 | 5.5 | 1.1 | (68.9) | |
| 48 | 砥石 | 北試掘溝 | 砂岩 | 3.4 | 3.4 | 1.8 | (35.2) | |

| 番号 | 種類 | 出土位置 | 材質 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重量 | 備考 |
|-----|----|----------|-----|------|------|-----|---------|----|
| 49 | 砥石 | 包含層 | 粘板岩 | 6.9 | 4.3 | 2.2 | (60.9) | |
| 50 | 砥石 | 包含層 | 砂岩 | 5.0 | 6.0 | 3.4 | (148.8) | |
| 51 | 砥石 | 石棺検出面 | 砂岩 | 5.6 | 3.3 | 1.3 | (38.0) | |
| 52 | 砥石 | 2号住居No.8 | 砂岩 | 13.8 | 11.4 | 4.6 | 821.3 | |
| 53 | 搞石 | 石棺検出面 | 玄武岩 | 11.3 | 5.7 | 2.7 | 273.6 | |
| 54 | 凹石 | 包含層 | 花崗岩 | 10.2 | 8.0 | 4.5 | 525.3 | |
| 55 | 凹石 | 石棺検出面 | 花崗岩 | 8.9 | 8.4 | 5.3 | 524.5 | |
| 56 | 凹石 | 2号住居 | 花崗岩 | 9.0 | 7.5 | 4.9 | 459.3 | |
| 57 | 凹石 | 包含層 | 花崗岩 | 12.5 | 10.2 | 3.4 | 615.3 | |
| 58 | 凹石 | 包含層 | 花崗岩 | 11.3 | 9.6 | 5.4 | 853.4 | |
| 59 | 凹石 | 1号溝 | 花崗岩 | 9.8 | 8.7 | 6.0 | 587.1 | |
| 60 | 石 | 鑿包含層 | 黒曜石 | 2.4 | 1.7 | 0.4 | 1.1 | |
| 61 | 石 | 鑿石棺検出面 | 黒曜石 | — | 1.9 | 0.4 | (1.6) | |
| 62 | 石 | 鑿西側トレンチ | 黒曜石 | — | 1.3 | 0.3 | 0.8 | |
| 63 | 石 | 鑿北試掘溝 | 黒曜石 | 1.8 | — | 0.2 | (0.3) | |
| 64 | 石 | 鑿石棺検出面 | 黒曜石 | 1.5 | 1.4 | 0.4 | (0.6) | |
| 65 | 石 | 鑿包含層 | 黒曜石 | 1.4 | 1.3 | 0.4 | (0.6) | |
| 66 | 石 | 鑿包含層 | 黒曜石 | 2.1 | — | 0.3 | (0.8) | |
| 67 | 石 | 鑿北試掘溝 | 黒曜石 | 1.7 | 1.5 | 0.3 | 0.8 | |
| 68 | 石 | 鑿石棺検出面 | 黒曜石 | 1.8 | 1.3 | 0.4 | (0.7) | |
| 69 | 石 | 鑿北試掘溝 | 黒曜石 | — | 1.7 | 0.4 | (0.9) | |
| 70 | 石 | 鑿包含層 | 黒曜石 | 1.9 | — | 0.3 | (0.6) | |
| 71 | 石 | 鑿包含層 | 黒曜石 | — | — | 0.2 | (0.8) | |
| 72 | 石 | 鑿1号溝 | 黒曜石 | — | — | 0.4 | (1.2) | |
| 73 | 石 | 鑿北試掘溝 | 黒曜石 | — | 1.8 | 0.3 | (1.4) | |
| 74 | 石 | 鑿包含層 | 黒曜石 | 2.3 | 1.8 | 0.4 | 1.0 | |
| 75 | 石 | 鑿北試掘溝 | 黒曜石 | — | — | 0.3 | (0.8) | |
| 76 | 石 | 鑿包含層 | 黒曜石 | 2.3 | — | 0.4 | (1.0) | |
| 77 | 石 | 鑿包含層 | 黒曜石 | 2.1 | 1.4 | 0.3 | 0.7 | |
| 78 | 石 | 鑿包含層 | 黒曜石 | 2.0 | 1.9 | 0.4 | 1.0 | |
| 79 | 石 | 鑿石棺検出面 | 黒曜石 | — | — | 0.3 | (0.6) | |
| 80 | 石 | 鑿北試掘溝 | 黒曜石 | — | — | 0.2 | (0.4) | |
| 81 | 石 | 鑿包含層 | 黒曜石 | — | — | 0.4 | (0.6) | |
| 82 | 石 | 鑿包含層 | 黒曜石 | — | 1.1 | 0.3 | (0.3) | |
| 83 | 石 | 鑿包含層 | 黒曜石 | — | — | 0.3 | (0.7) | |
| 84 | 石 | 鑿包含層 | 黒曜石 | 2.0 | — | 0.3 | (0.9) | |
| 85 | 石 | 鑿トレンチ | 黒曜石 | 1.8 | 2.0 | 0.3 | 1.0 | |
| 86 | 石 | 鑿包含層 | 黒曜石 | 2.2 | — | 0.4 | (0.8) | |
| 87 | 石 | 鑿包含層 | 黒曜石 | 1.9 | 1.5 | 0.3 | 1.5 | |
| 88 | 石 | 鑿包含層 | 黒曜石 | 2.3 | 1.7 | 0.4 | 1.8 | |
| 89 | 石 | 鑿2号住居 | 安山岩 | — | 1.8 | 0.6 | (3.1) | |
| 90 | 石 | 鑿北試掘溝 | 安山岩 | 2.3 | 2.0 | 0.8 | 3.0 | |
| 91 | 石 | 鑿包含層 | 安山岩 | — | 2.2 | 0.5 | (0.9) | |
| 92 | 石 | 鑿包含層 | 安山岩 | 2.3 | — | 0.3 | (1.2) | |
| 93 | 石 | 鑿包含層 | 安山岩 | — | — | 0.4 | (1.1) | |
| 94 | 石 | 鑿2号住居 | 安山岩 | 1.5 | — | 0.2 | (0.5) | |
| 95 | 石 | 鑿北試掘溝 | 安山岩 | 2.7 | — | 0.3 | (1.3) | |
| 96 | 石 | 鑿包含層 | 安山岩 | — | — | 0.4 | (1.6) | |
| 97 | 石 | 鑿北試掘溝 | 安山岩 | 2.4 | 2.1 | 0.6 | 2.4 | |
| 98 | 石 | 鑿石棺検出面 | 安山岩 | 2.4 | 2.0 | 0.4 | 1.6 | |
| 99 | 石 | 鑿1号溝 | 安山岩 | 2.1 | — | 0.4 | (1.0) | |
| 100 | 石 | 鑿包含層 | 安山岩 | 2.0 | — | 0.6 | (1.3) | |
| 101 | 石 | 鑿包含層 | 安山岩 | — | 1.7 | 0.4 | (1.1) | |
| 102 | 石 | 鑿包含層 | 安山岩 | — | 2.1 | 0.4 | (1.0) | |
| 103 | 石 | 鑿包含層 | 安山岩 | — | 2.0 | 0.3 | (1.8) | |
| 104 | 石 | 鑿石棺検出面 | 安山岩 | — | — | 0.4 | (0.8) | |
| 105 | 石 | 鑿石棺検出面 | 安山岩 | 2.1 | — | 0.3 | (0.8) | |
| 106 | 石 | 鑿1号溝 | 安山岩 | 1.5 | 1.2 | 0.2 | 0.6 | |
| 107 | 石 | 鑿廢土中 | 安山岩 | — | — | 0.2 | (0.5) | |
| 108 | 石 | 鑿北試掘溝 | 安山岩 | — | 1.2 | 0.2 | (0.4) | |

| 番号 | 種類 | 出土位置 | 材質 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重量 | 備考 |
|-----|------|---------|-----|-----|-----|-----|-------|----|
| 109 | 石 | 鍬 包含層 | 安山岩 | — | — | 0.2 | (0.4) | |
| 110 | 石 | 鍬 包含層 | 安山岩 | — | — | 0.2 | (0.3) | |
| 111 | 石 | 鍬 北試掘溝 | 安山岩 | — | 1.9 | 0.3 | (1.5) | |
| 112 | 石 | 鍬 包含層 | 安山岩 | — | — | 0.3 | (1.6) | |
| 113 | 石 | 鍬 北試掘溝 | 安山岩 | — | — | 0.2 | (0.6) | |
| 114 | 石 | 鍬 北試掘溝 | 安山岩 | — | — | 0.4 | (0.9) | |
| 115 | 石 | 鍬 包含層 | 安山岩 | 2.0 | — | 0.3 | (0.6) | |
| 116 | 石 | 鍬 石棺検出面 | 安山岩 | — | — | 0.3 | (0.6) | |
| 117 | 石 | 鍬 包含層 | 安山岩 | 2.1 | 1.5 | 0.3 | (0.7) | |
| 118 | 石 | 鍬 1号溝 | 安山岩 | — | 1.5 | 0.3 | (0.5) | |
| 119 | 使用剥片 | 2号住居 | 黒曜石 | 3.4 | 2.2 | 0.7 | 4.5 | |
| 120 | 使用剥片 | 包含層 | 黒曜石 | — | 1.4 | 0.5 | (2.3) | |
| 121 | ドリル | 石棺検出面 | 黒曜石 | 1.8 | 1.9 | 0.2 | 0.6 | |
| 122 | 使用剥片 | 包含層 | 黒曜石 | — | 1.0 | 0.4 | (0.9) | |
| 123 | 使用剥片 | 試掘溝 | 黒曜石 | 2.1 | 1.4 | 0.2 | 0.7 | |
| 124 | 使用剥片 | 北試掘溝 | 黒曜石 | 2.1 | 2.0 | 0.7 | 2.1 | |
| 125 | 使用剥片 | 包含層 | 黒曜石 | 3.1 | 1.5 | 0.6 | 2.1 | |
| 126 | 使用剥片 | 1号溝 | 黒曜石 | 2.6 | 2.0 | 0.4 | 1.7 | |
| 127 | 使用剥片 | 包含層 | 黒曜石 | 2.2 | 1.9 | 0.3 | 1.4 | |
| 128 | 使用剥片 | 石棺検出面 | 黒曜石 | 2.0 | 1.6 | 0.6 | 1.3 | |
| 129 | 使用剥片 | 包含層 | 黒曜石 | 3.0 | 2.3 | 0.7 | 3.0 | |
| 130 | 使用剥片 | 1号住居 | 黒曜石 | 2.0 | 1.4 | 0.5 | 1.1 | |
| 131 | 使用剥片 | 包含層 | 黒曜石 | 3.0 | 2.1 | 0.8 | 3.3 | |
| 132 | 使用剥片 | 石棺検出面 | 黒曜石 | 2.8 | 3.2 | 0.8 | 7.1 | |
| 133 | 使用剥片 | 包含層 | 黒曜石 | 3.6 | 3.0 | 0.4 | 4.3 | |
| 134 | 使用剥片 | 石棺検出面 | 黒曜石 | 4.8 | 4.0 | 0.6 | 12.2 | |
| 135 | 使用剥片 | 石棺検出面 | 黒曜石 | — | 1.3 | 0.6 | (1.3) | |
| 136 | 使用剥片 | 石棺検出面 | 黒曜石 | 2.1 | 1.3 | 0.6 | 1.5 | |
| 137 | 使用剥片 | 包含層 | 黒曜石 | 3.2 | 2.4 | 0.7 | 4.1 | |
| 138 | 使用剥片 | 包含層 | 黒曜石 | — | 1.0 | 0.5 | (0.5) | |
| 139 | 使用剥片 | 包含層 | 黒曜石 | 1.8 | 1.3 | 0.6 | 1.5 | |
| 140 | 使用剥片 | 包含層 | 黒曜石 | 3.3 | 2.2 | 0.6 | 2.7 | |
| 141 | 使用剥片 | 東側トレンチ | 黒曜石 | — | 2.7 | 0.4 | (2.2) | |
| 142 | 使用剥片 | 試掘溝 | 黒曜石 | 3.1 | 2.1 | 0.9 | 4.9 | |
| 143 | 使用剥片 | 包含層 | 黒曜石 | 1.9 | 1.9 | 0.6 | 2.1 | |
| 144 | 使用剥片 | 西側トレンチ | 黒曜石 | 2.0 | 2.0 | 0.4 | 1.1 | |
| 145 | 使用剥片 | 石棺検出面 | 黒曜石 | 2.0 | 2.0 | 0.4 | 2.0 | |
| 146 | 使用剥片 | 北試掘溝 | 黒曜石 | 2.8 | 1.5 | 0.7 | 2.3 | |
| 147 | 使用剥片 | 石棺検出面 | 黒曜石 | 1.9 | 1.9 | 0.6 | 1.4 | |
| 148 | 使用剥片 | 包含層 | 黒曜石 | 2.5 | 3.6 | 0.8 | 5.5 | |
| 149 | 使用剥片 | 石棺検出面 | 黒曜石 | 3.0 | 4.0 | 1.1 | 8.8 | |
| 150 | 使用剥片 | 包含層 | 黒曜石 | 5.3 | 3.4 | 1.3 | 18.3 | |
| 151 | 使用剥片 | 石棺検出面 | 黒曜石 | 2.7 | 3.8 | 0.8 | 8.2 | |
| 152 | 使用剥片 | 西側トレンチ | 黒曜石 | 2.3 | 1.2 | 0.4 | 0.9 | |
| 153 | 使用剥片 | 北試掘溝 | 黒曜石 | 2.4 | 0.7 | 0.6 | 1.3 | |
| 154 | 使用剥片 | 表土剥ぎ | 黒曜石 | 4.5 | 2.3 | 1.0 | 7.8 | |
| 155 | 使用剥片 | 石棺検出面 | 黒曜石 | — | 2.9 | 1.0 | (8.4) | |
| 156 | 使用剥片 | 包含層 | 黒曜石 | 2.3 | 3.0 | 0.8 | 5.3 | |
| 157 | 使用剥片 | 石棺検出面 | 黒曜石 | 2.5 | 1.7 | 0.5 | 1.2 | |
| 158 | 使用剥片 | 包含層 | 黒曜石 | 2.4 | 2.1 | 0.5 | 3.2 | |
| 159 | 使用剥片 | 1号溝 | 黒曜石 | 3.1 | 2.4 | 0.8 | 4.6 | |
| 160 | 使用剥片 | 試掘溝 | 安山岩 | 5.5 | 6.7 | 1.2 | 49.0 | |
| 161 | 使用剥片 | 試掘溝 | 安山岩 | 3.2 | 5.5 | 1.0 | 16.5 | |
| 162 | 使用剥片 | 西側トレンチ | 安山岩 | 2.2 | 1.0 | 0.3 | 0.7 | |
| 163 | 使用剥片 | 包含層 | 安山岩 | 2.2 | 2.1 | 0.6 | 2.1 | |
| 164 | 使用剥片 | 東側トレンチ | 安山岩 | 2.9 | 3.6 | 1.0 | 7.2 | |
| 165 | 使用剥片 | 包含層 | 安山岩 | 3.6 | 2.5 | 1.0 | 7.4 | |
| 166 | 使用剥片 | 1号溝 | 安山岩 | 3.5 | 3.0 | 1.1 | 7.6 | |
| 167 | 使用剥片 | 北試掘溝 | 安山岩 | 3.7 | 2.8 | 1.0 | 9.0 | |

图 版



1. 海津横馬場遺跡遠景（南から）



2. 第1次調査区全景（南から）



1. 1号竪穴住居跡（東から）



2. 1号竪穴住居跡 移動式カマド
（北東から）



3. 1号竪穴住居跡 出土土器
（北東から）



1. 2号竪穴住居跡（西から）



2. 2号竪穴住居跡（南東から）



3. 2号竪穴住居跡（北東から）



1. 1号石棺墓（北西から）



2. 1号石棺墓（南西から）



3. 1号石棺墓 掘り方（北西から）

1. 1号土坑（西から）



2. 1号土坑（西から）



3. 1号土坑（南から）





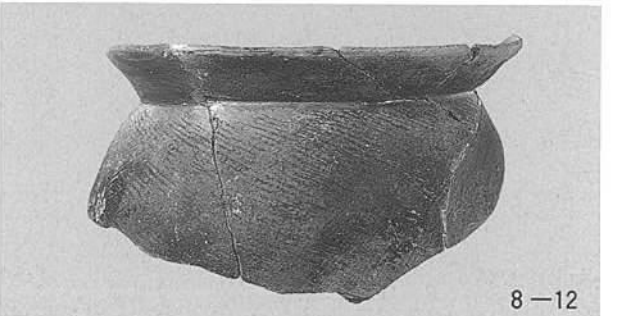
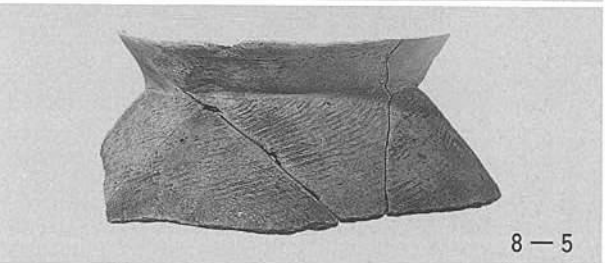
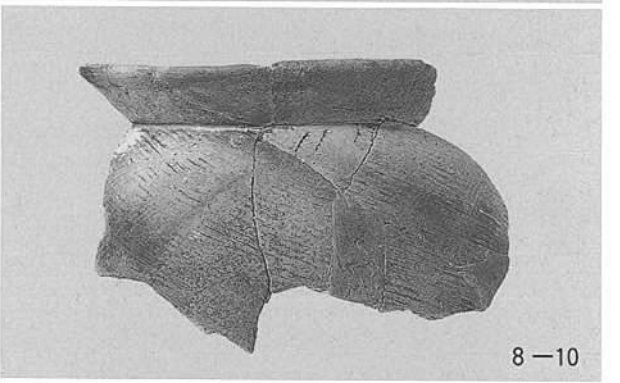
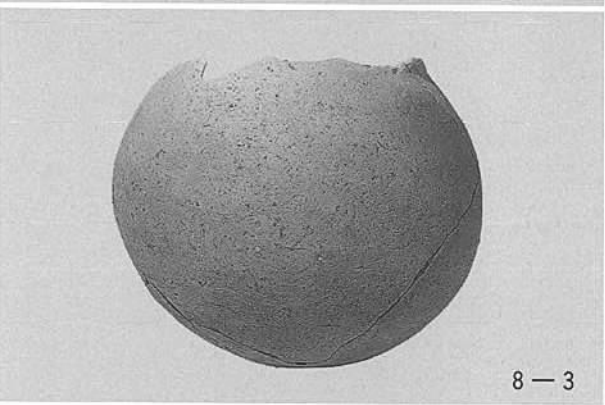
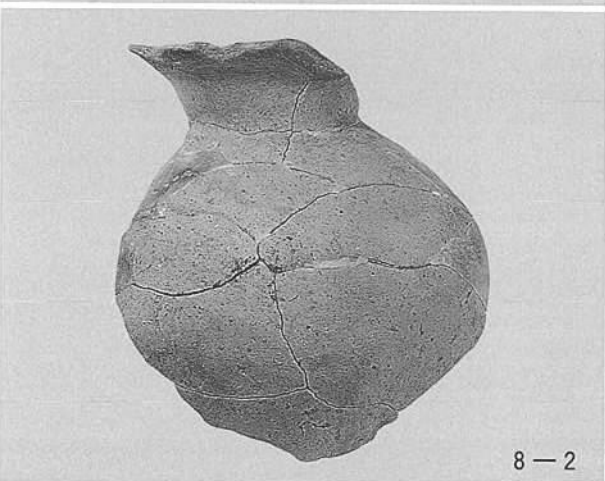
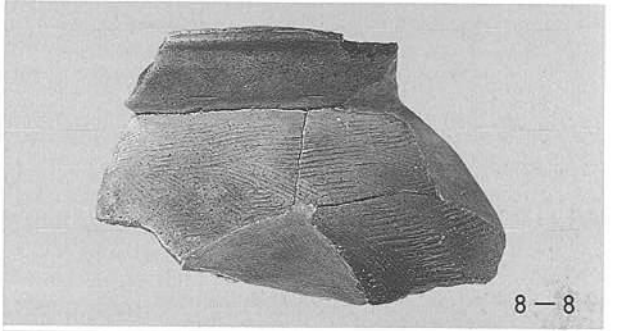
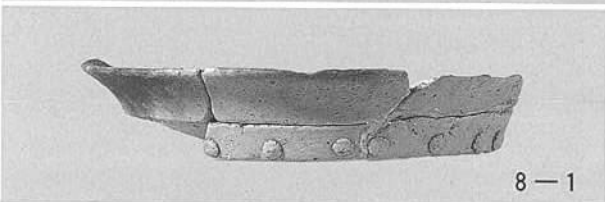
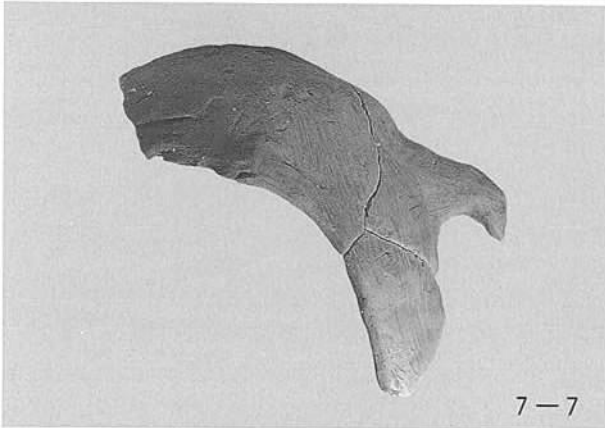
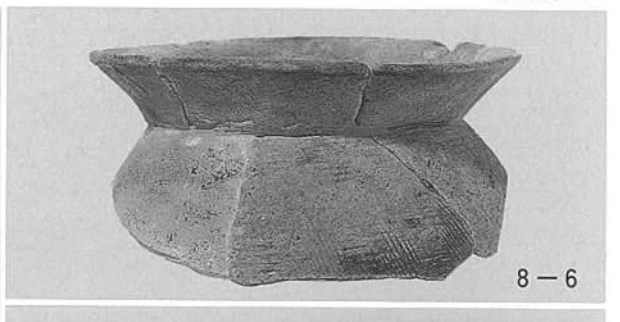
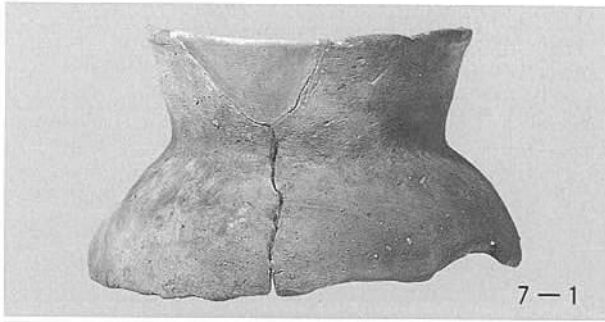
1. 1号土坑 (西から)

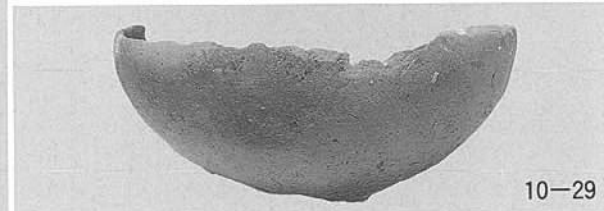
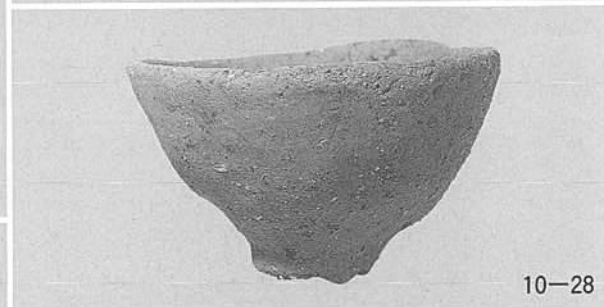
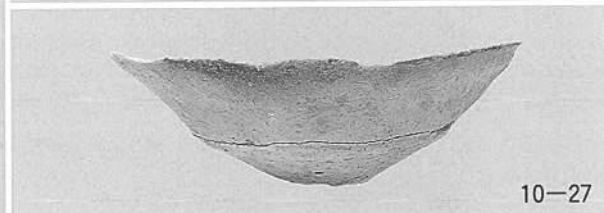
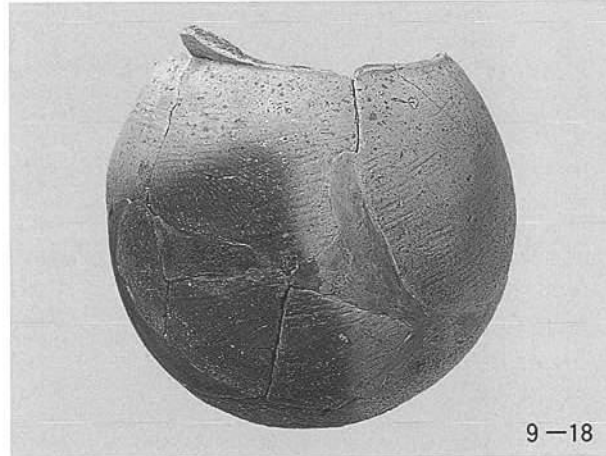
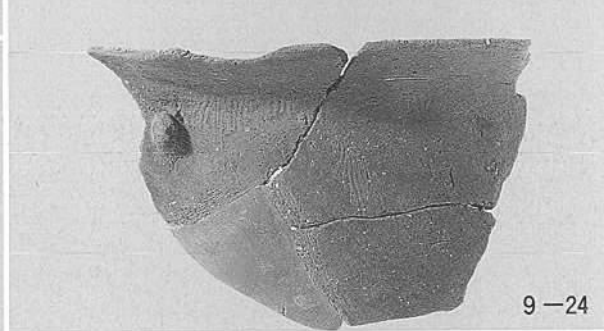
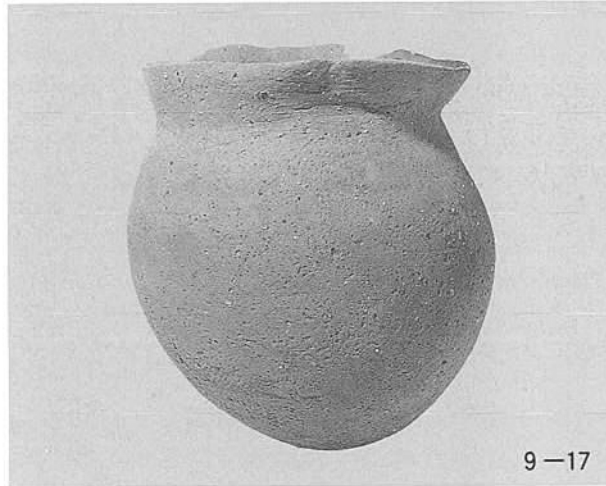
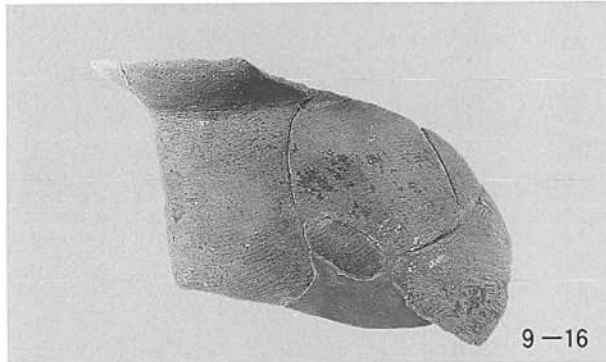


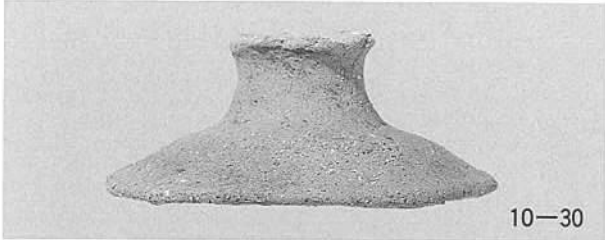
2. 2号土坑 (北から)



3. 3号土坑 (南から)



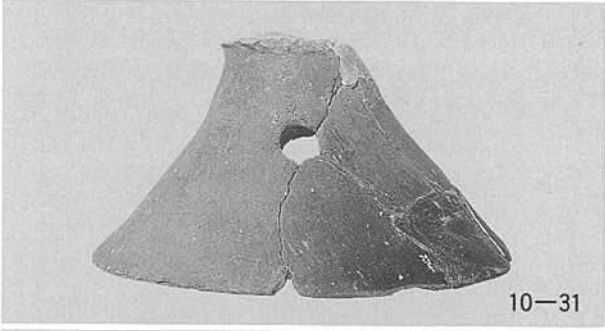




10-30



13-3



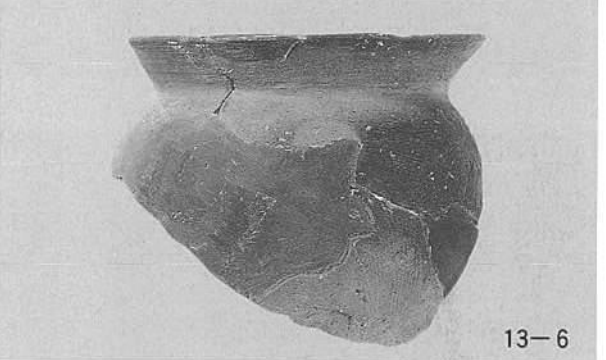
10-31



13-4



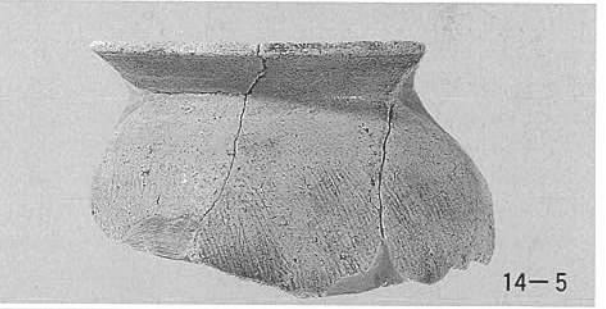
10-35



13-6



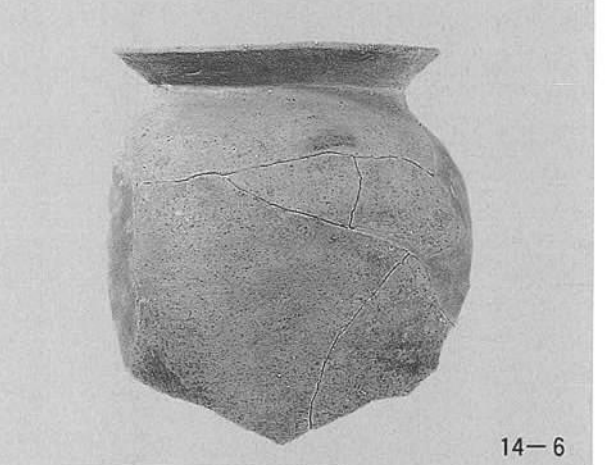
10-36



14-5



10-37



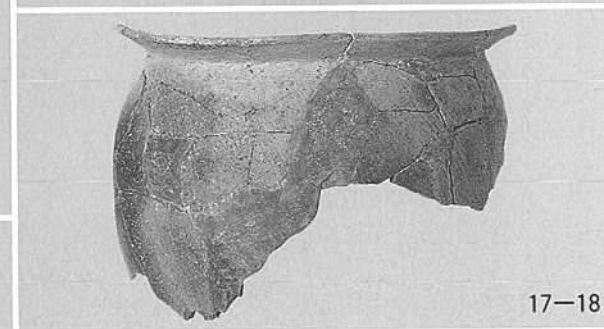
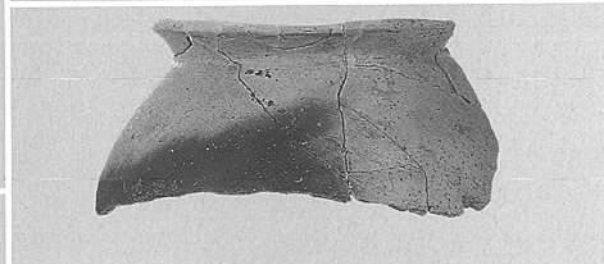
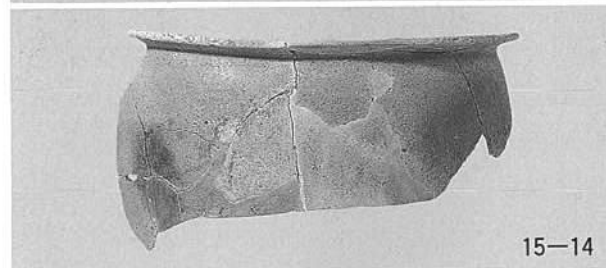
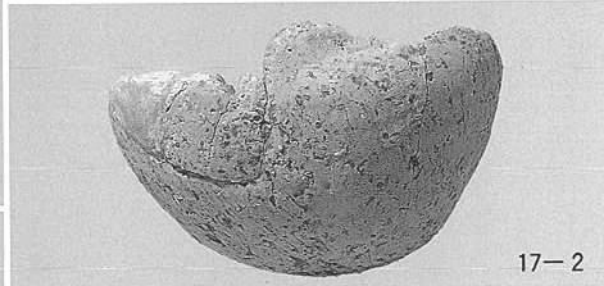
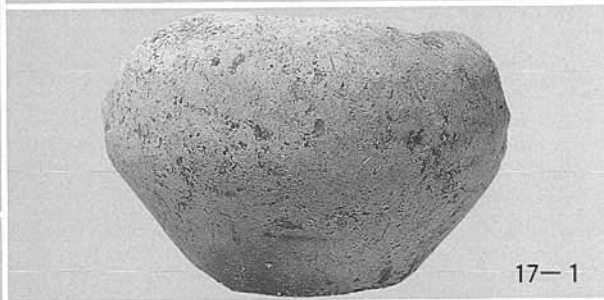
14-6



13-1

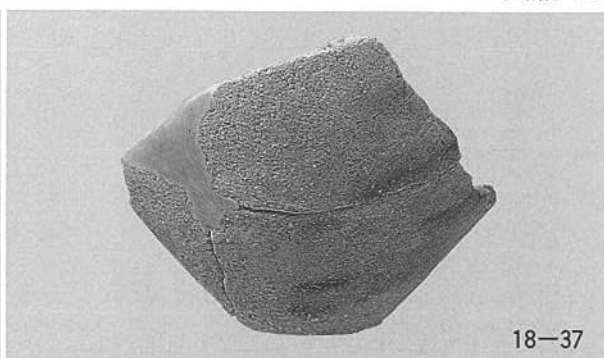


14-10

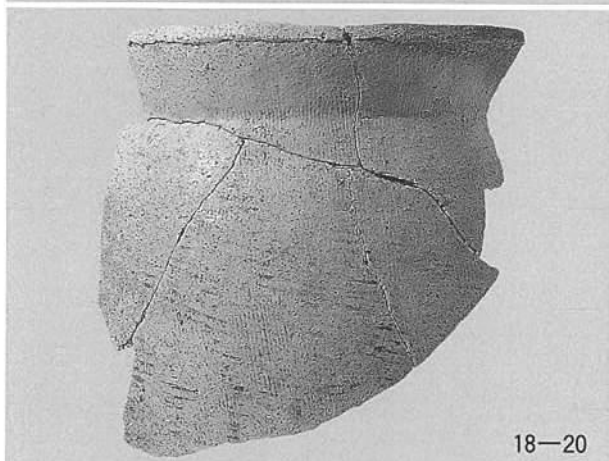




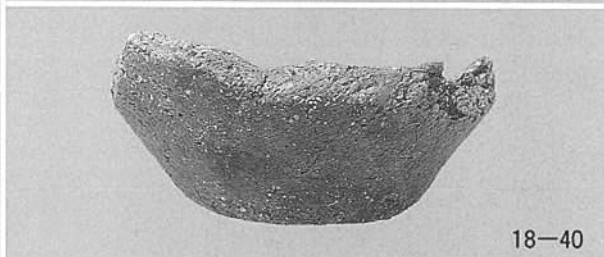
17-19



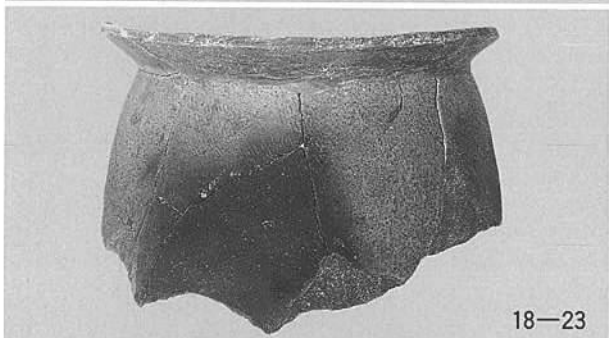
18-37



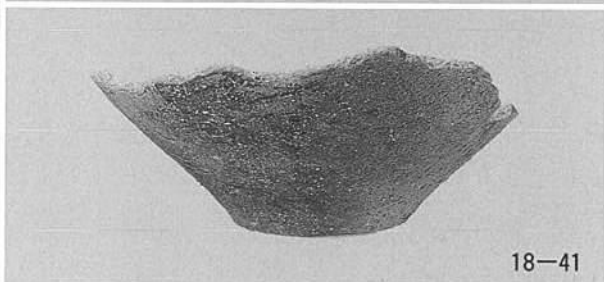
18-20



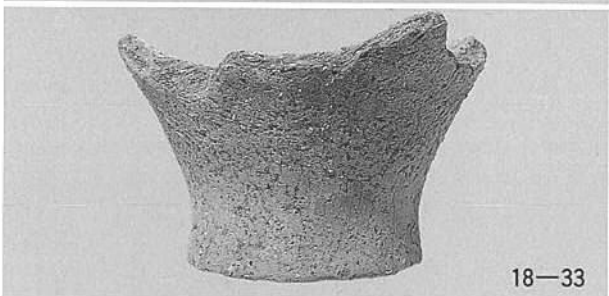
18-40



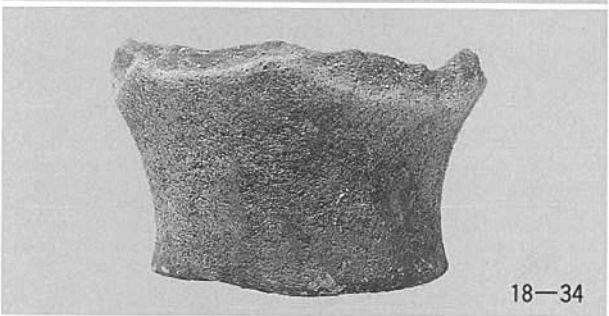
18-23



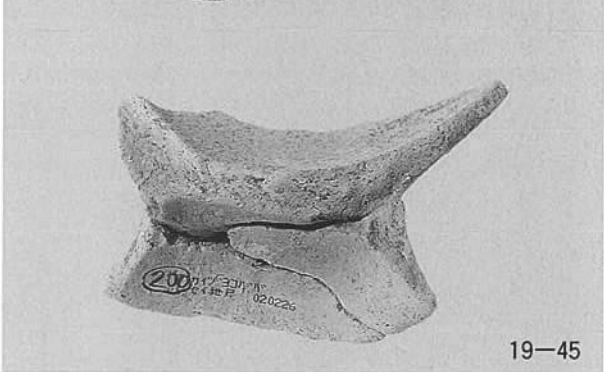
18-41



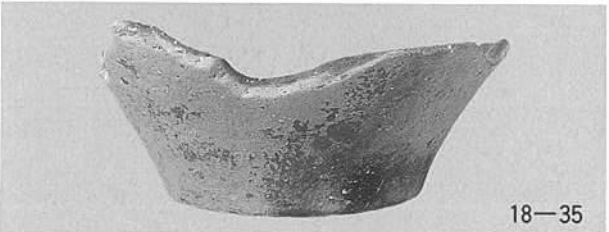
18-33



18-34



19-45



18-35



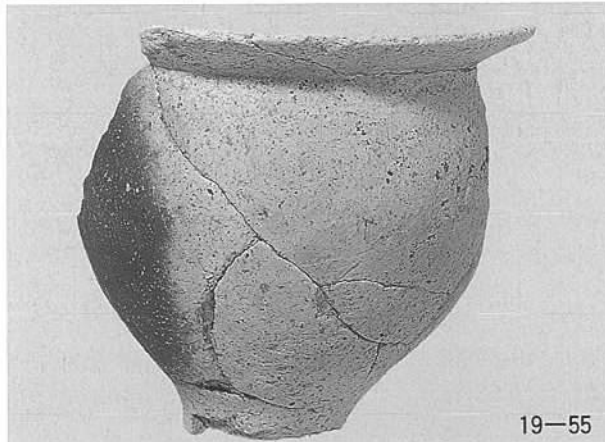
19-46



19-47



19-49



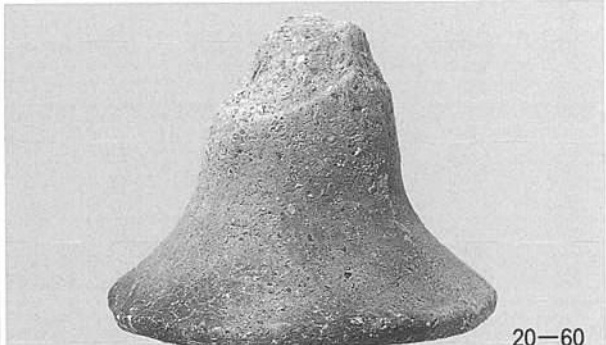
19-55



19-57



19-58



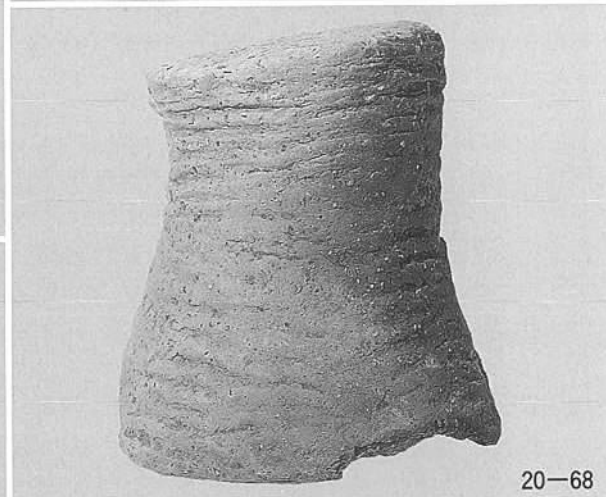
20-60



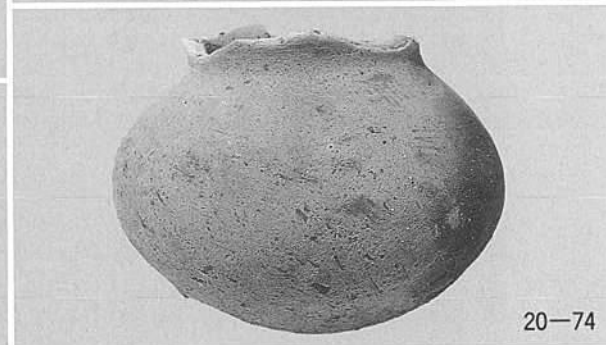
20-62



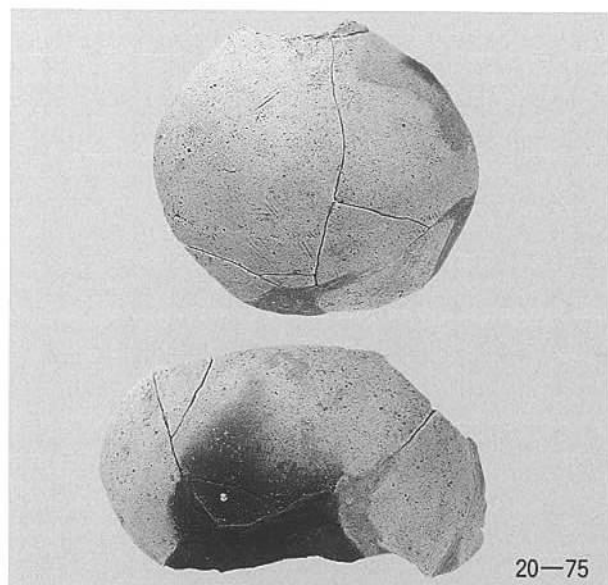
20-67



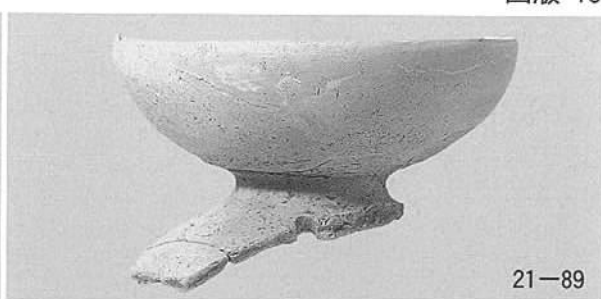
20-68



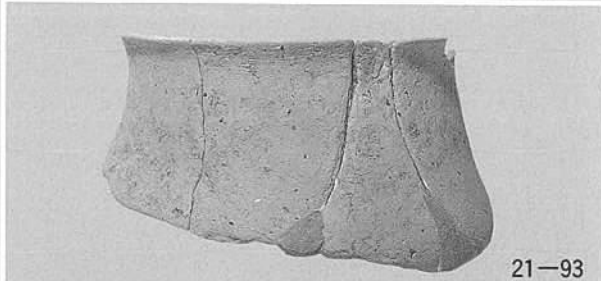
20-74



20-75



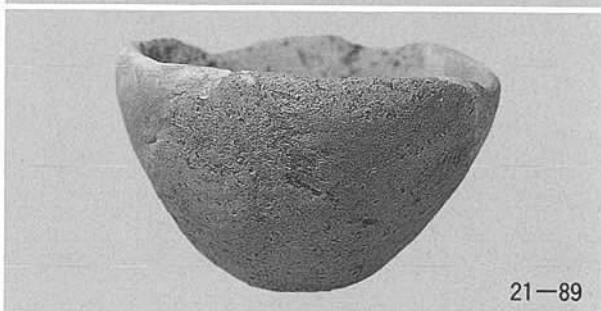
21-89



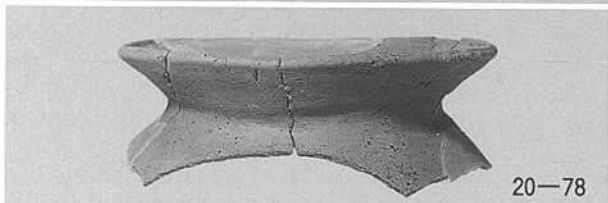
21-93



20-76



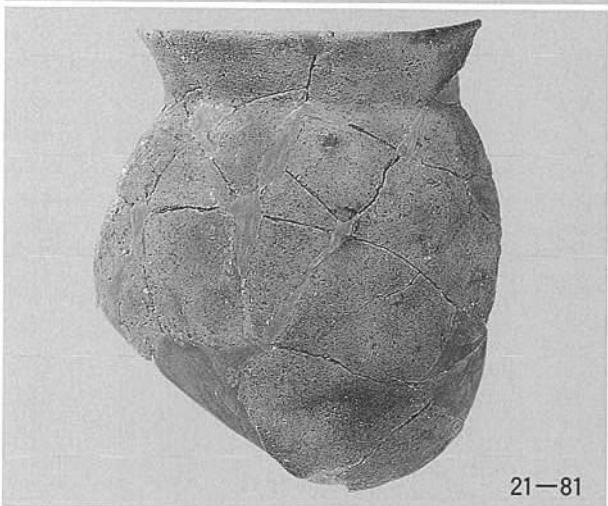
21-89



20-78



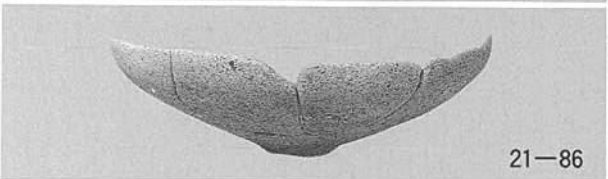
21-100



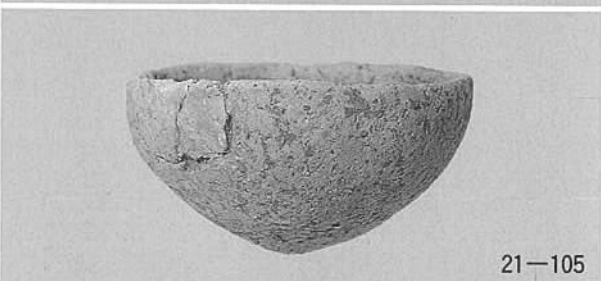
21-81



21-103



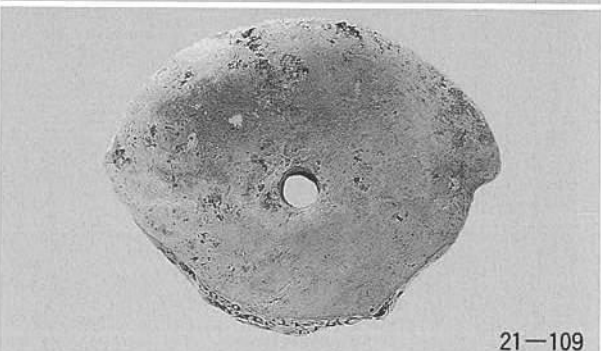
21-86



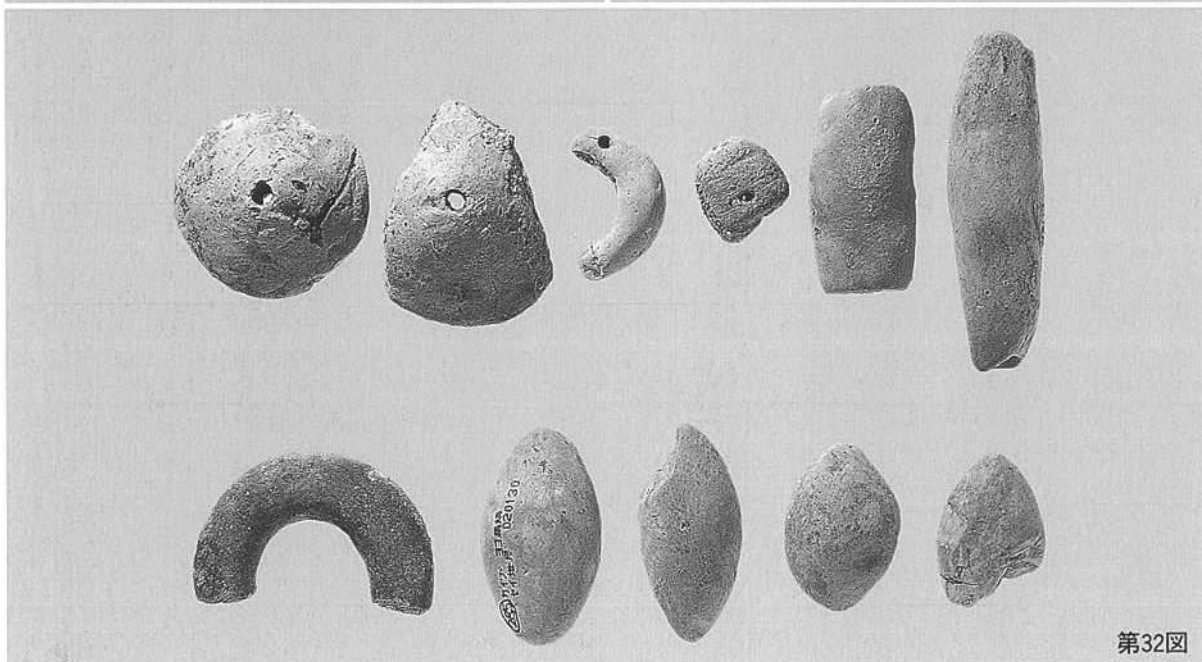
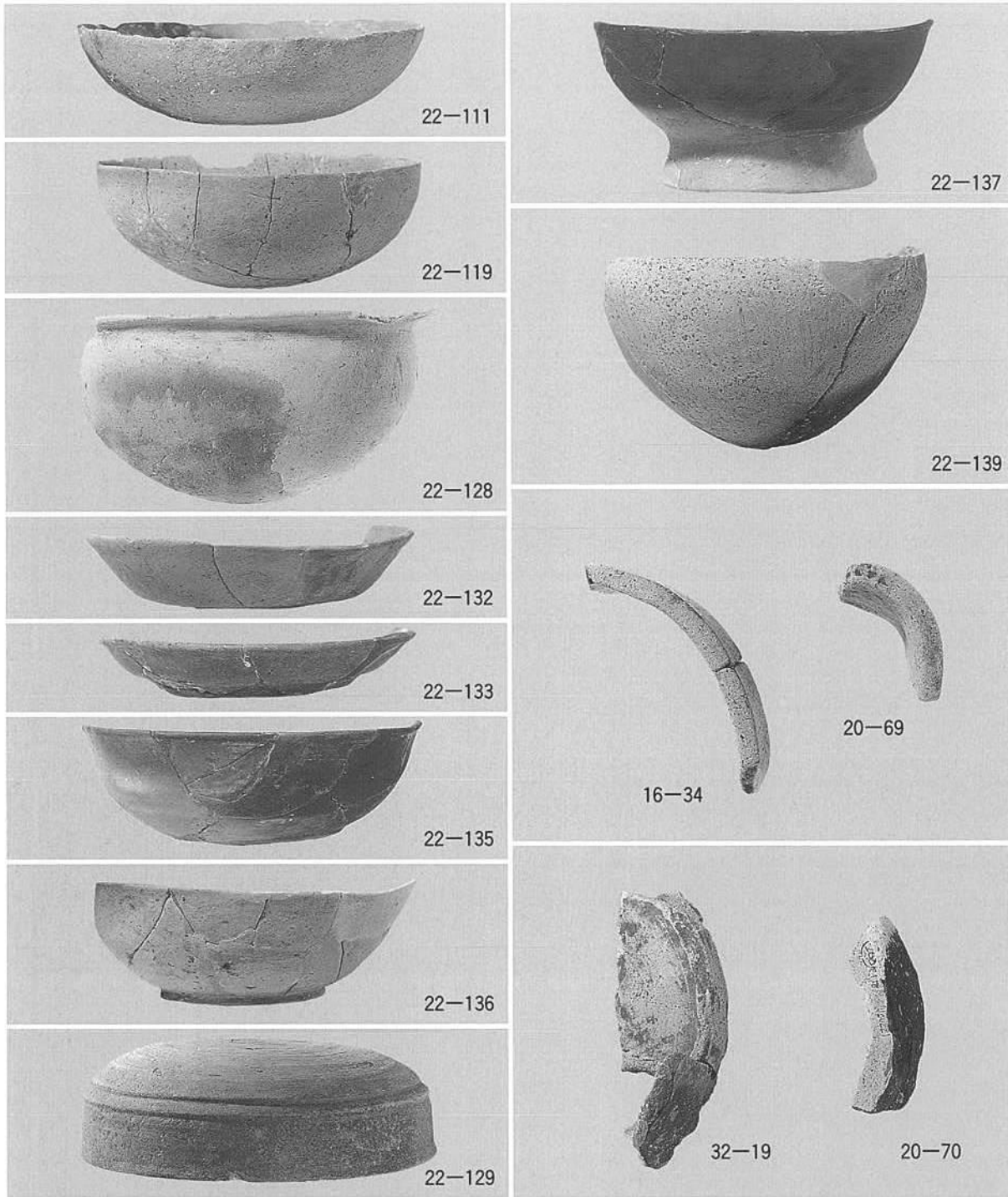
21-105

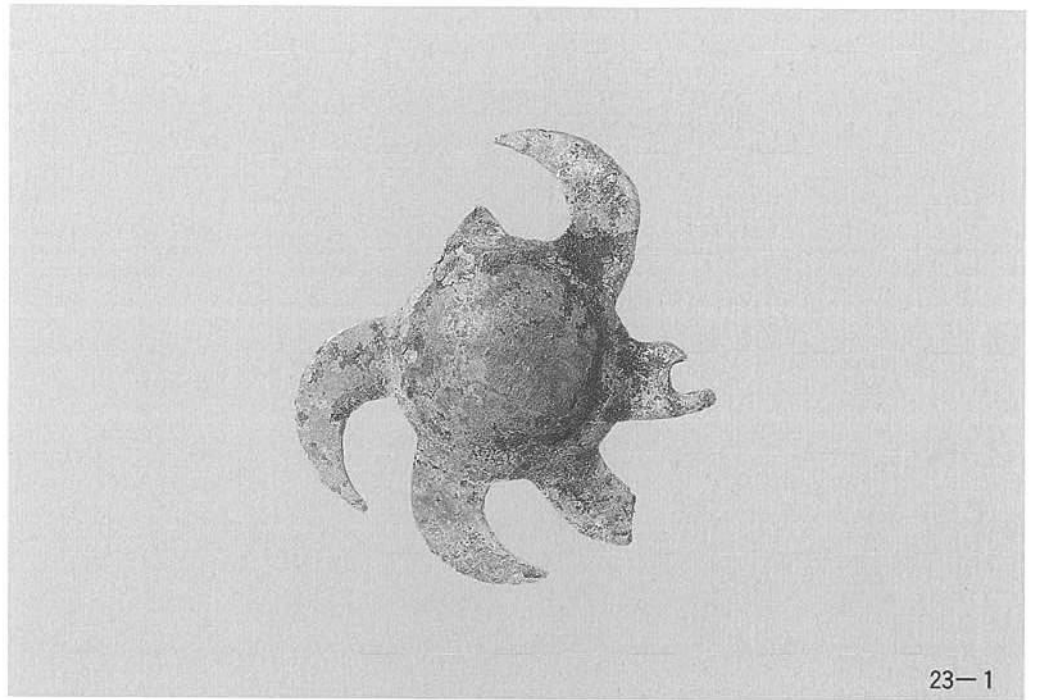


21-87

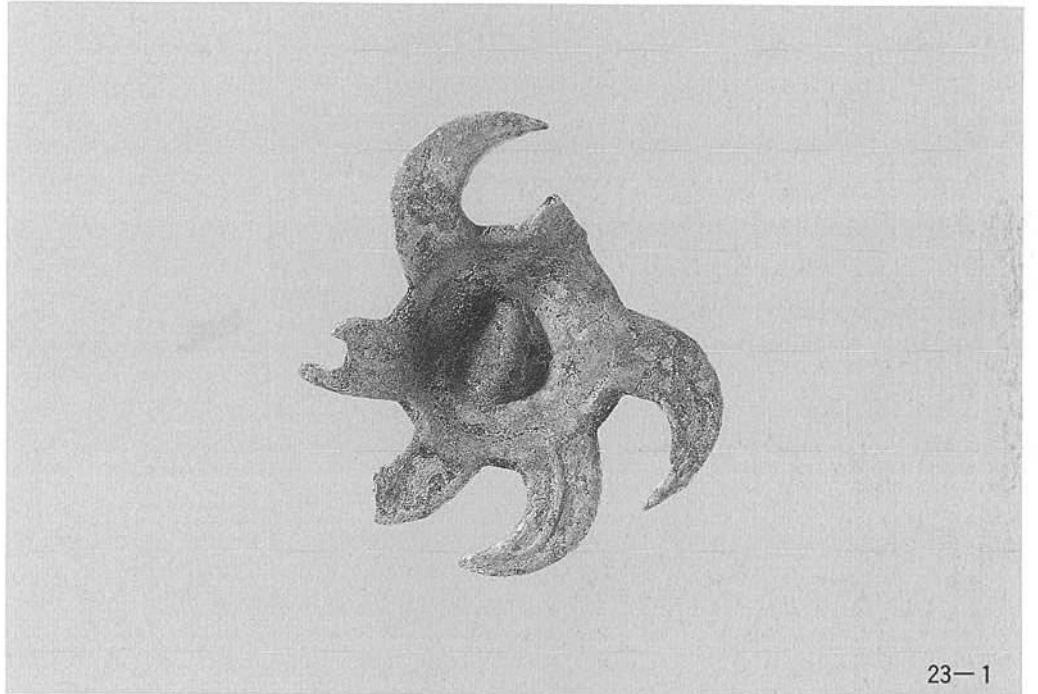


21-109

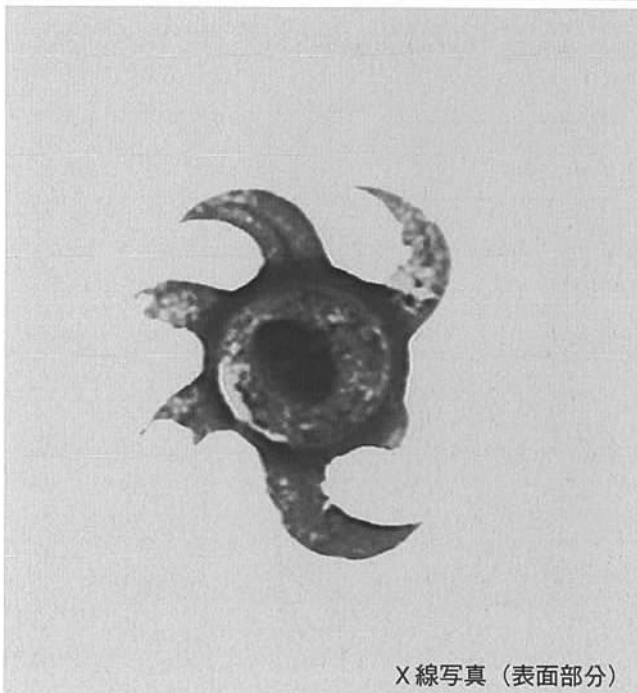




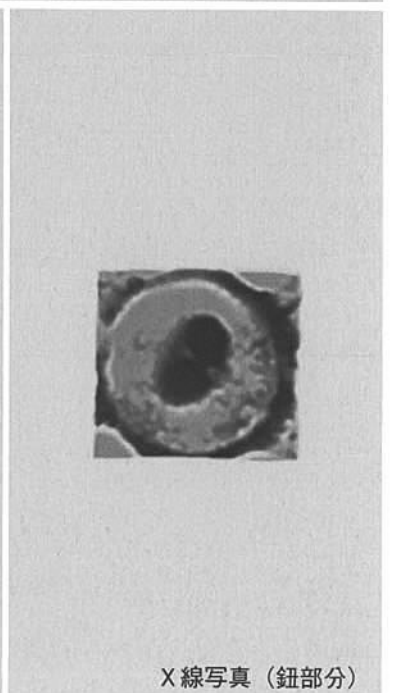
23-1



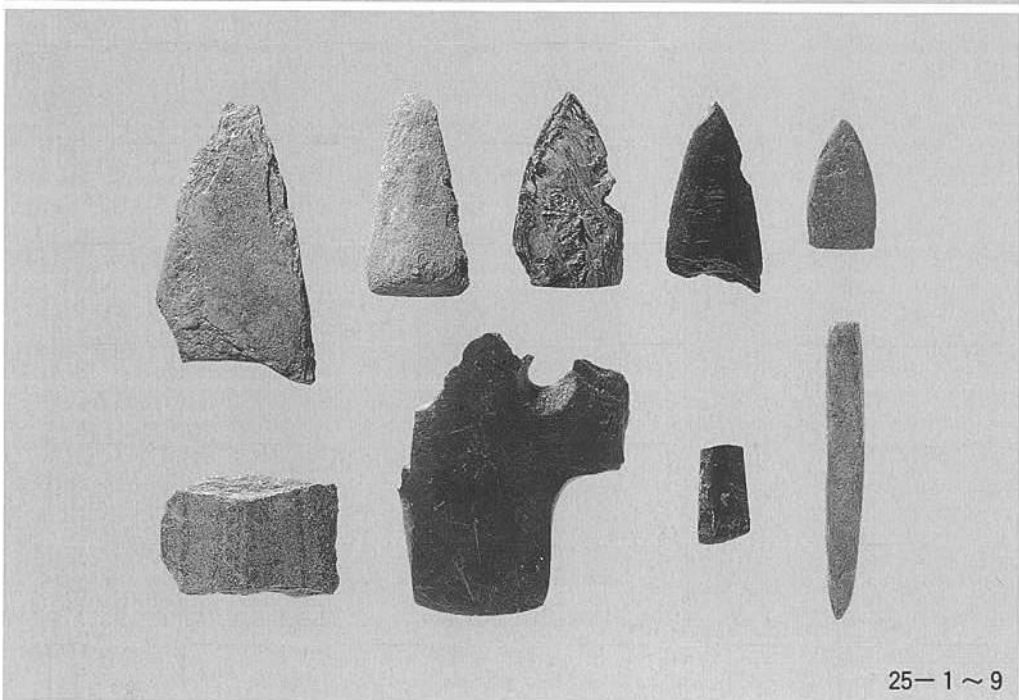
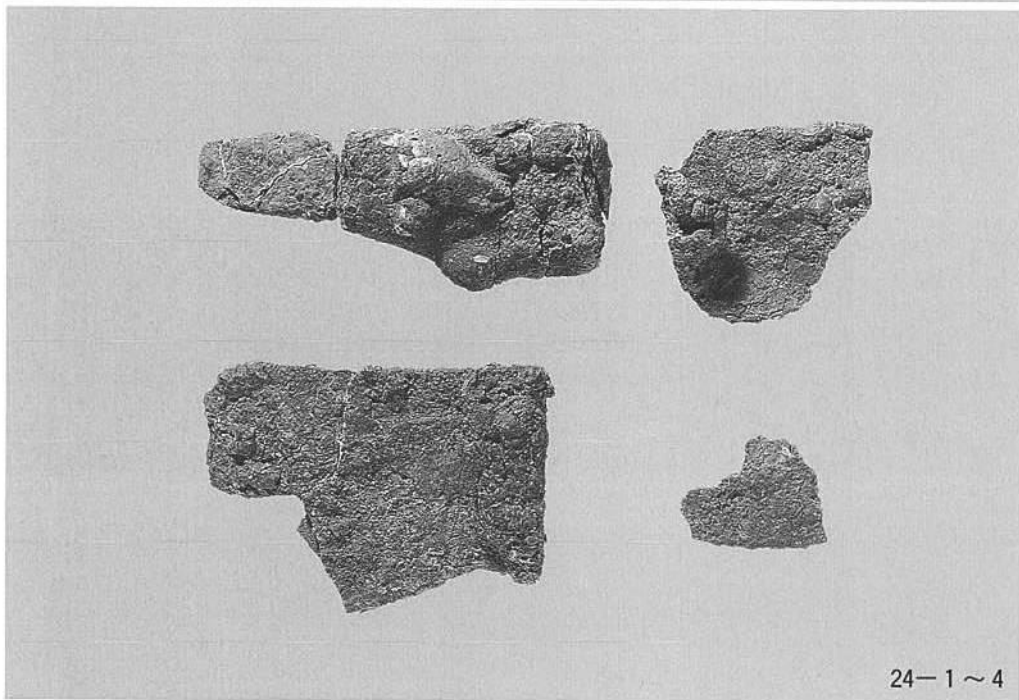
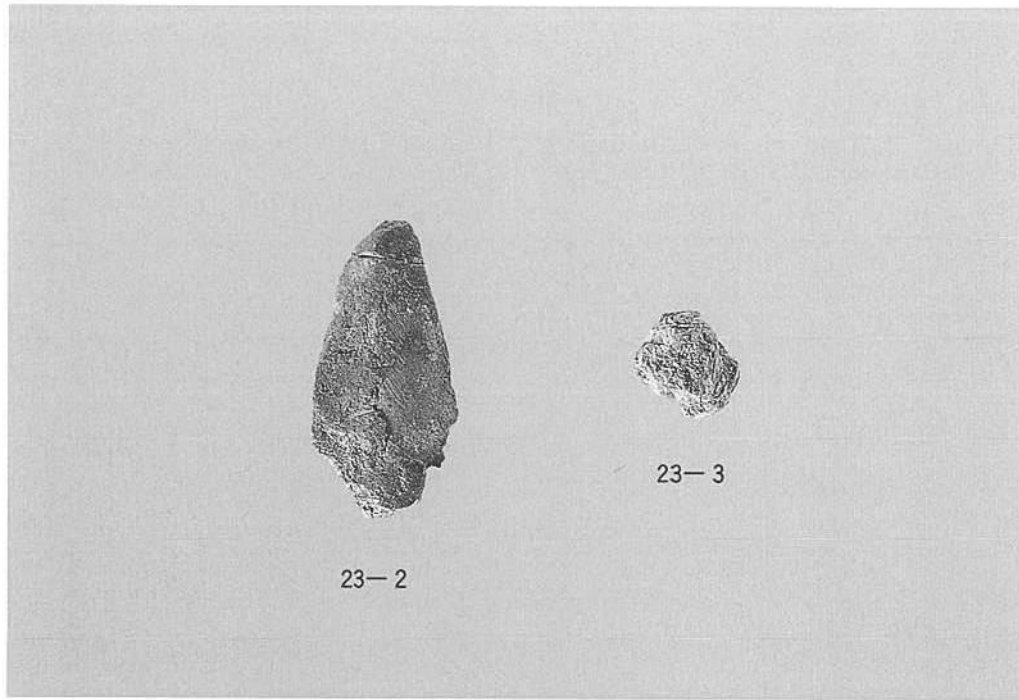
23-1

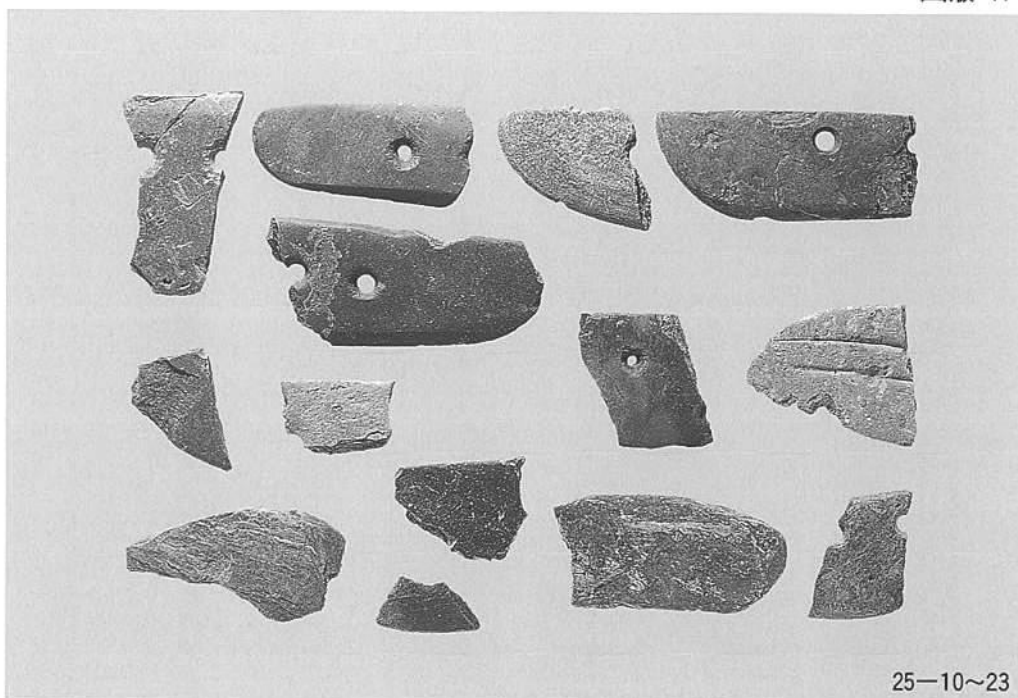


X線写真（表面部分）

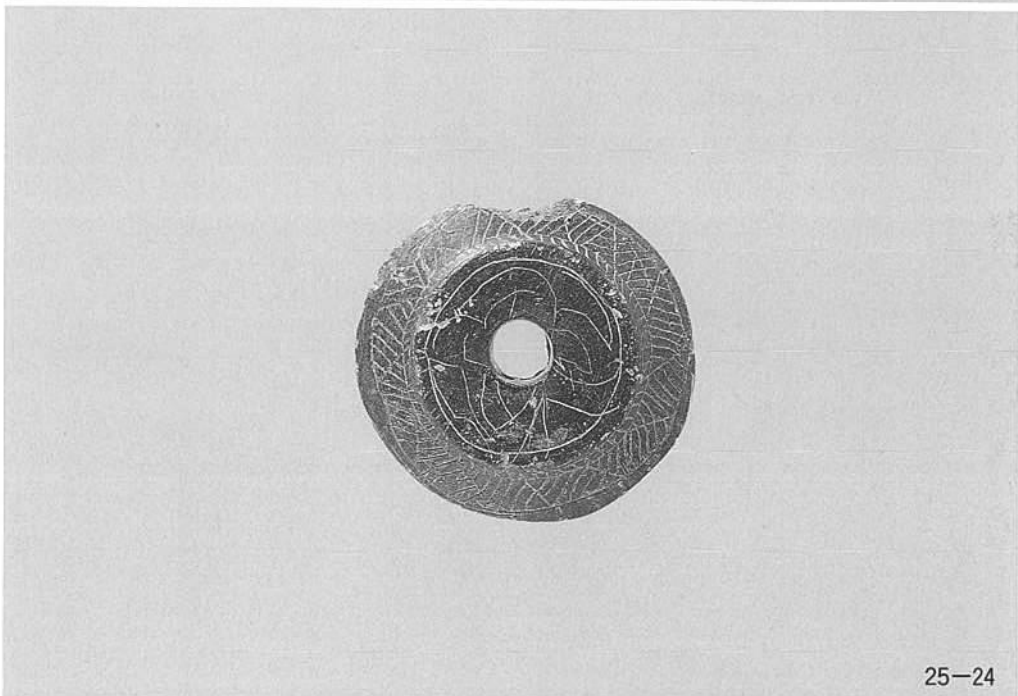


X線写真（鈕部分）

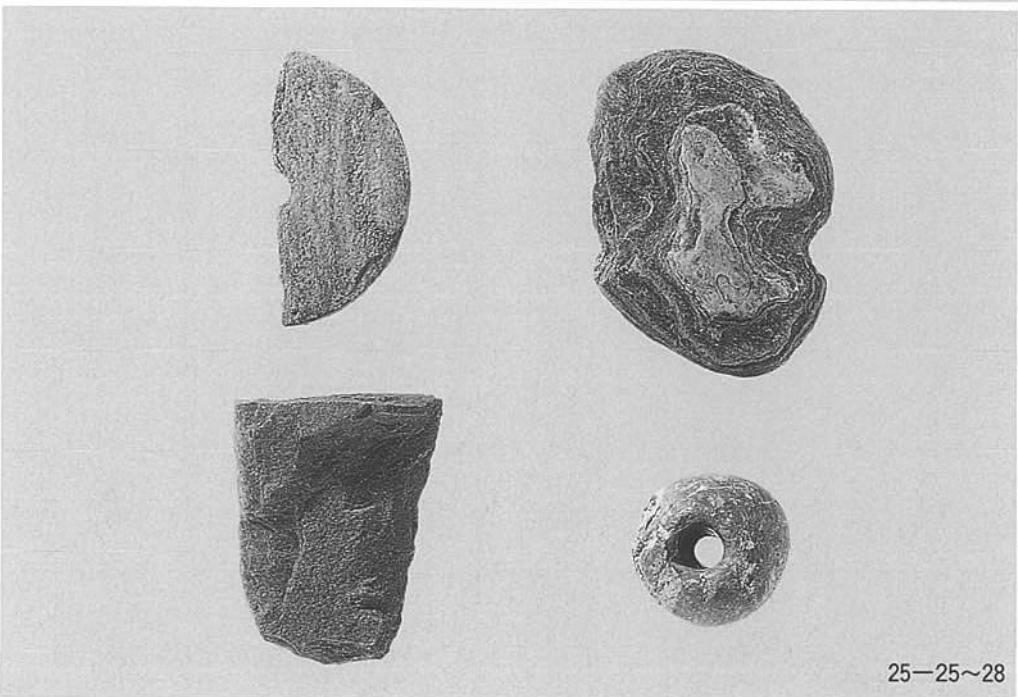




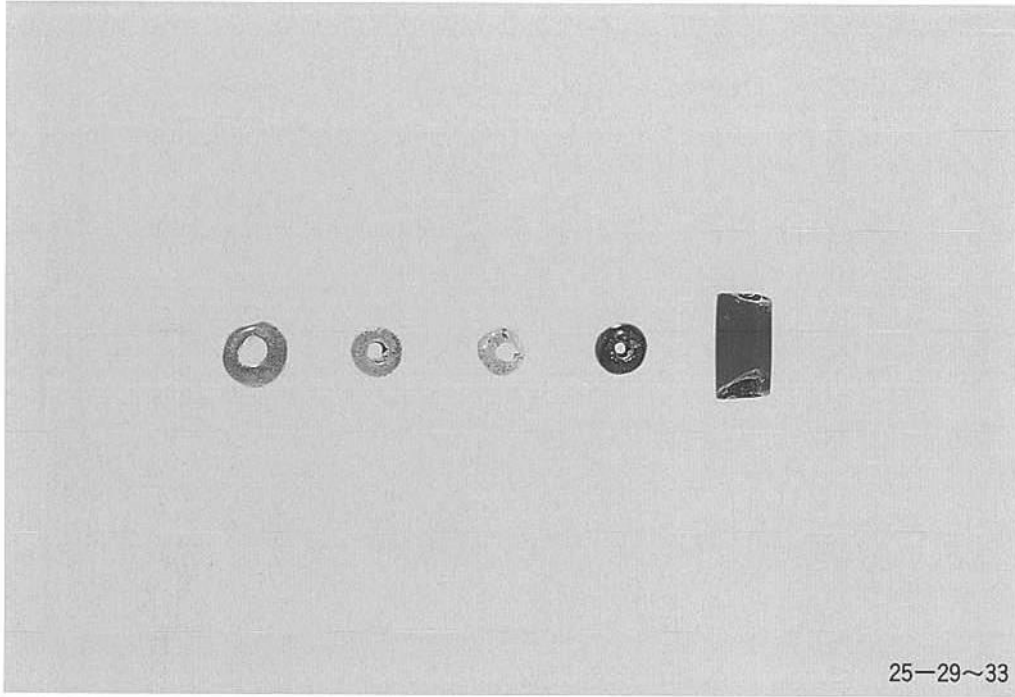
25-10~23



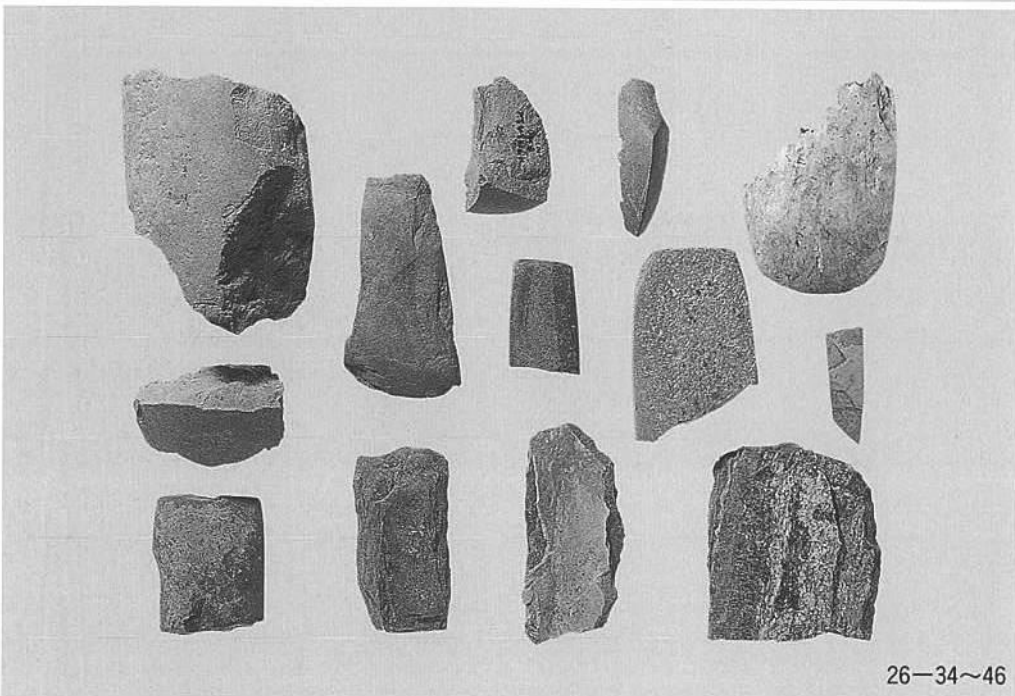
25-24



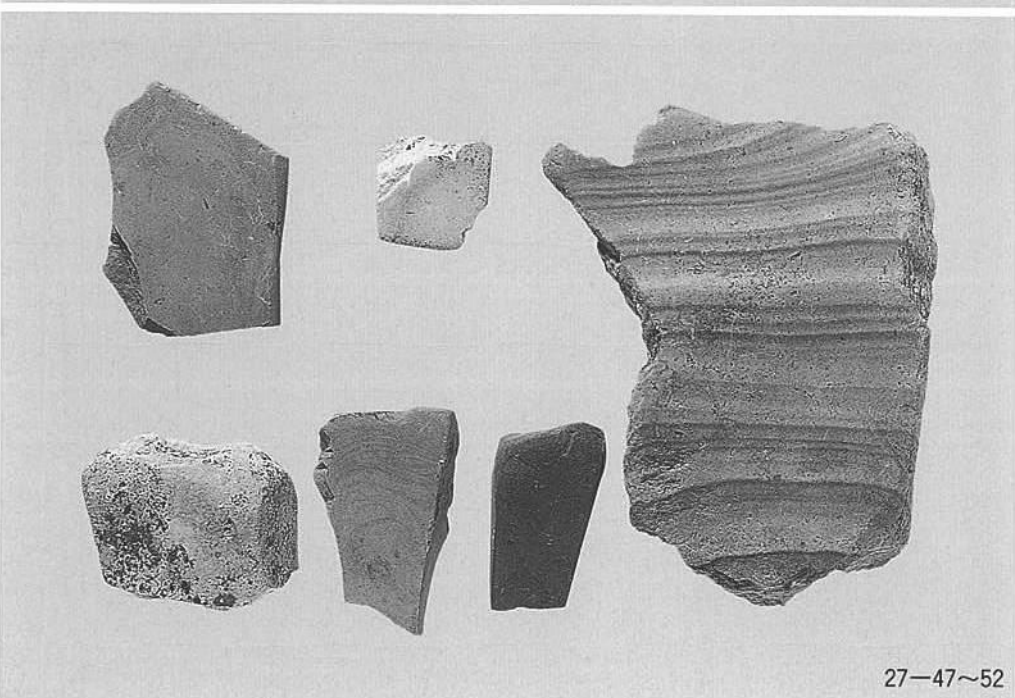
25-25~28



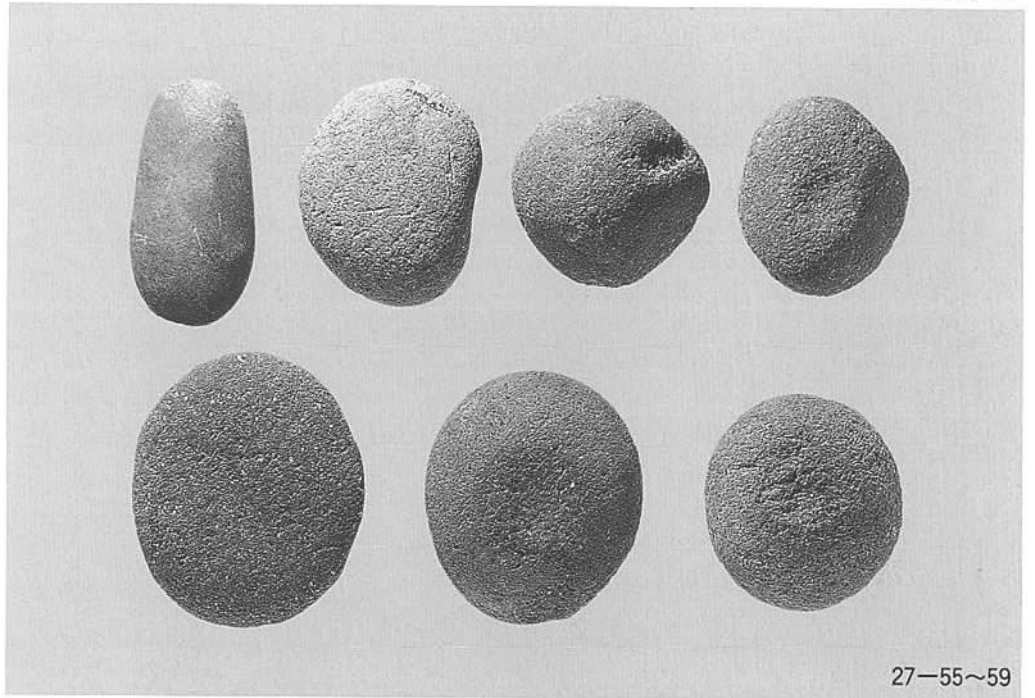
25—29~33



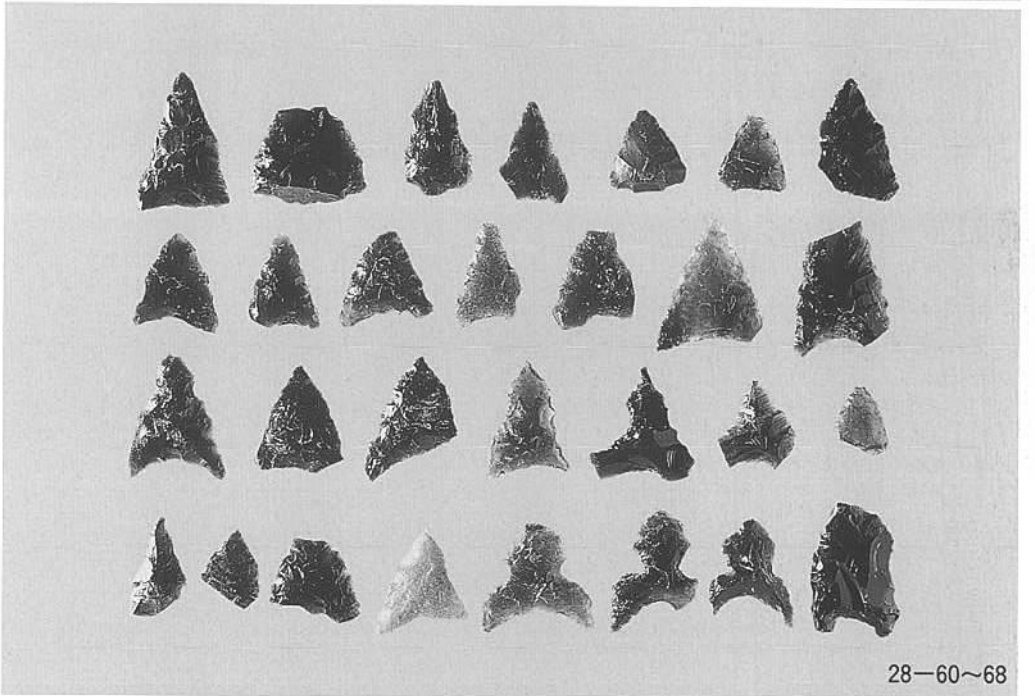
26—34~46



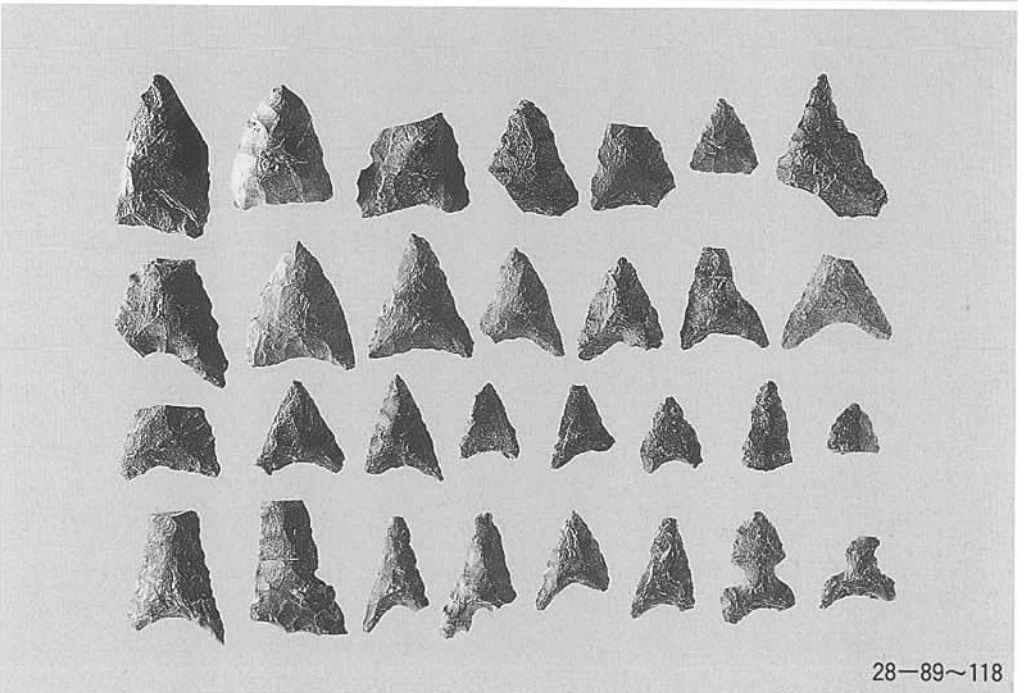
27—47~52



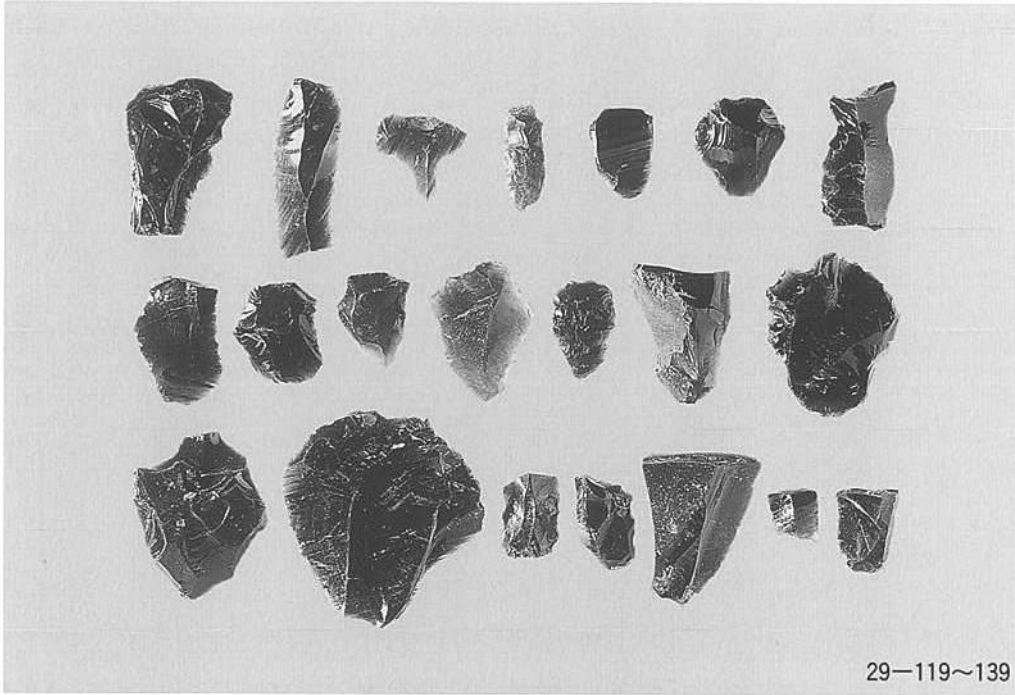
27—55~59



28—60~68



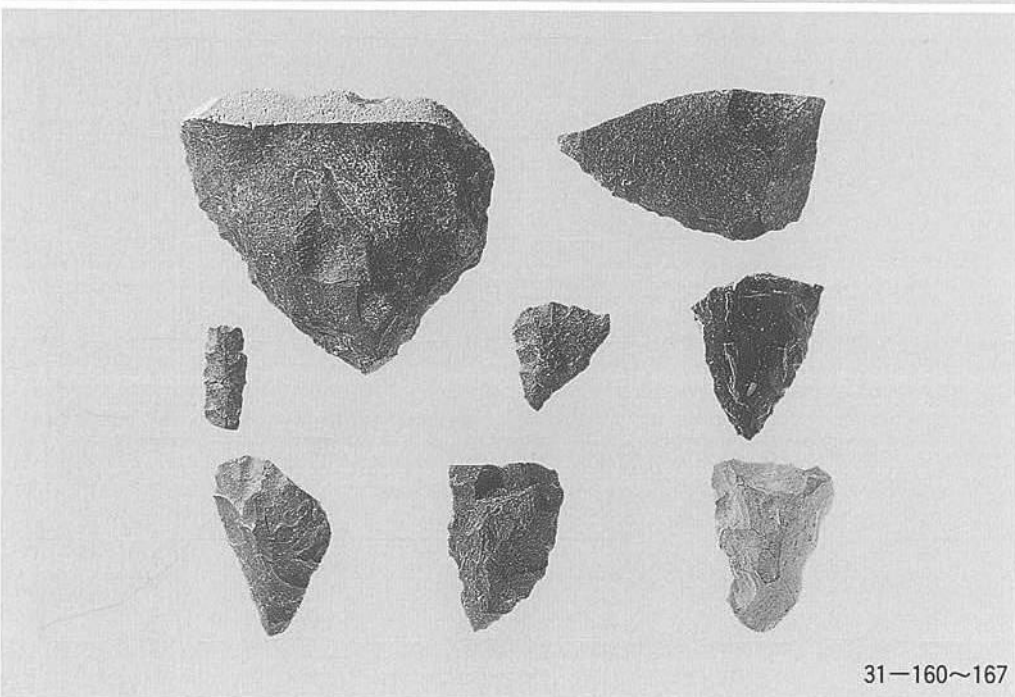
28—89~118



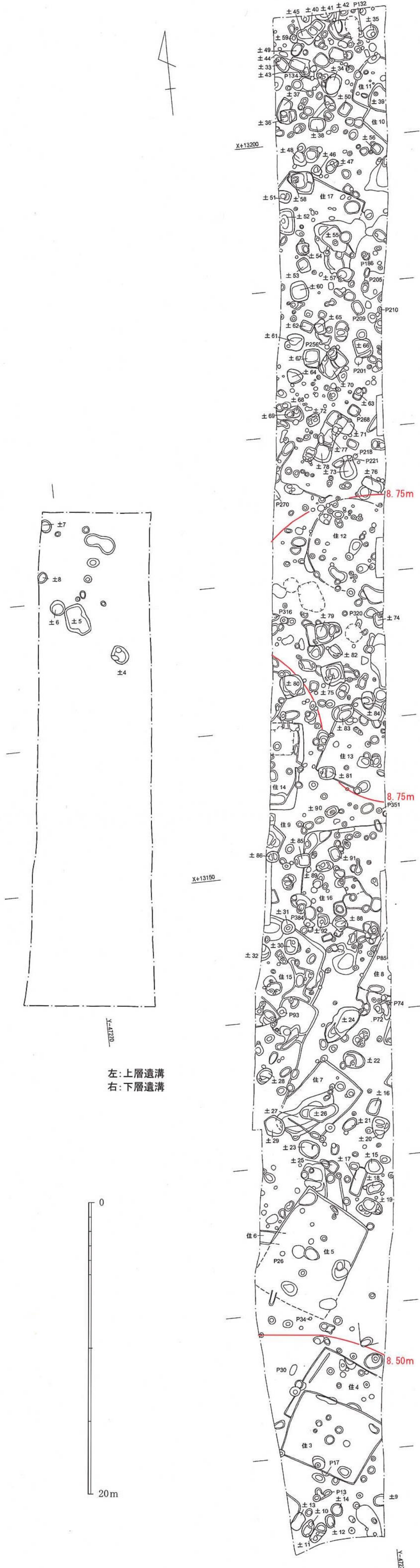
29—119~139



30—140~159



31—160~167



左:上層遺溝
右:下層遺溝

第33図 第2次調査遺構配置図 (1/200)

3. 第2次調査の内容

(1) 概要

第2次調査は第1次調査区下層、及びその北側を含めた計950㎡を対象として調査区を設定した。第1次調査では第3層暗褐色粘質土層の遺物包含層において遺構面が確認できたため、第2次調査でも当初は第3層上面で遺構の検出に努めた。しかし実際には遺構は第2次調査区中央付近（第2次調査区南半部分の北側）を除いては確認できず、上層遺構の調査では少数の土坑（4～8号土坑）を確認するに留まった。この上層遺構も正確には第3層上面では確認することができず、約35cm程下げたレベルにおいて確認することができたものである。第2次調査区北半部分においては上層遺構は確認できなかった。

第3層暗褐色粘質土層の下には褐色粘質土の地山が確認でき、この地山上面で下層遺構の調査を行った。上層遺構の4～8号土坑以外の全ての遺構は、この地山上面で確認できたものである。この下層遺構は9～92号土坑、3～17号竪穴住居の他、多数のピットを含み、遺構密度は極めて高い。埋土はほとんどの遺構が暗褐色粘質土であり、第3層との区別、及び遺構同士の切り合い関係等の確認ができなかった場面が多々存在した。

調査の経過は以下のとおりである。

平成14年

- 6月3日 第1次調査の際の廃土搬出作業を開始。
- 6月5日 第1次調査区北端より北側34mまでの箇所（第2次調査区南半部分）の表土剥ぎ開始。
- 6月11日 プレハブ等設営。機材搬入。
- 6月12日 人力掘削開始。新たにあげた調査区の上層遺構の調査着手。
- 7月1日 上層遺構検出面まで再度重機による掘削。
- 7月15日 上層遺構の調査終了。第1次調査区も含め、下層遺構面まで包含層の掘削。
- 8月9日 下層遺構の掘削着手。
- 10月11日 空中写真撮影。
- 10月12日 高田町教育委員会主催「ふるさと探検隊」開催。小学生60名体験発掘に参加。
- 10月17日 第2次調査区南半部分調査終了。
- 10月21日 廃土搬出作業開始。ひきつづき第2次調査区北半部分調査着手。プレハブ等移動。
- 11月18日 第2次調査区北半部分の遺構掘削開始。

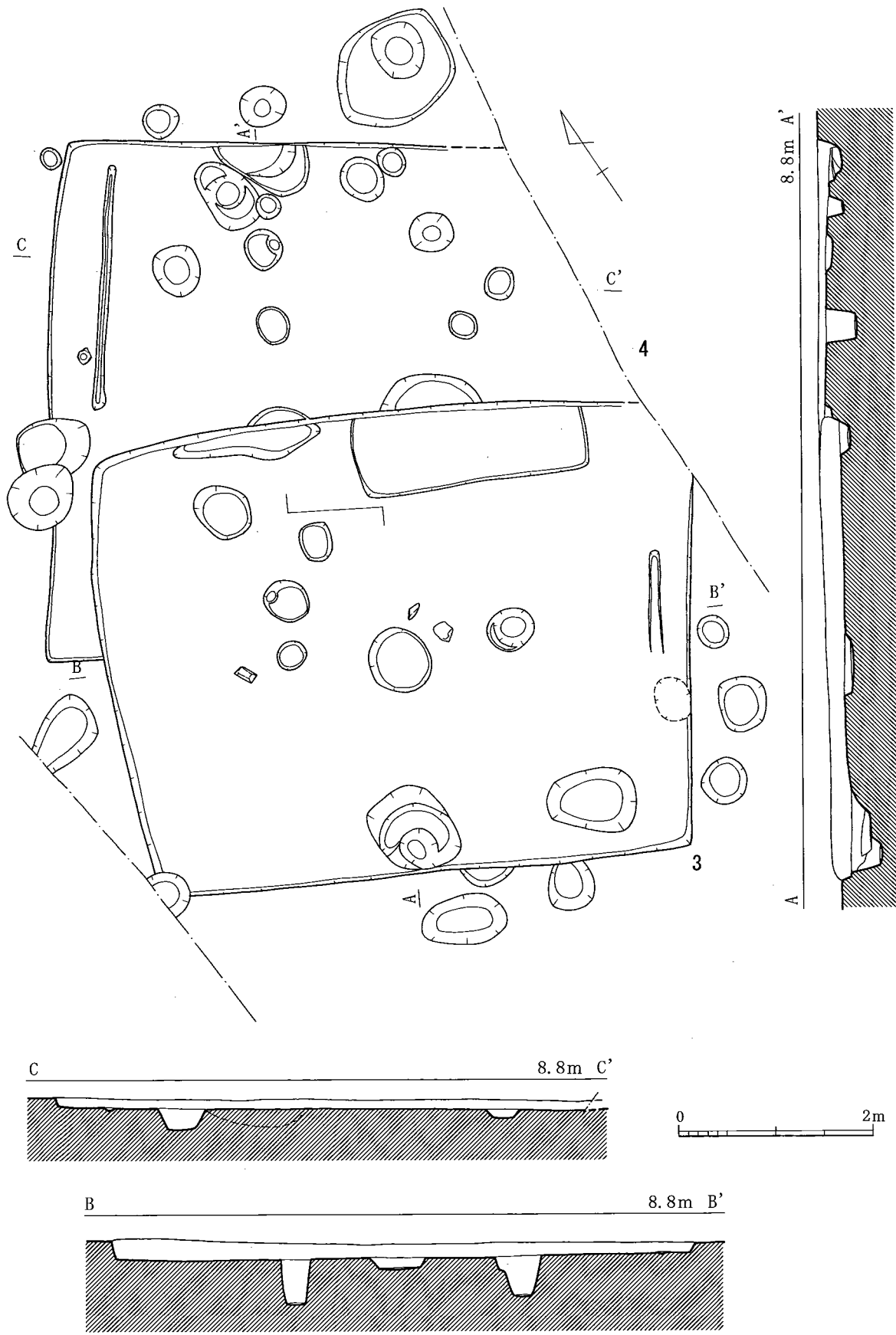
平成15年

- 2月21日 遺構完掘後、空中写真撮影。
- 2月26日 図面作成終了。
- 3月14日 埋め戻し終了後、引渡し。

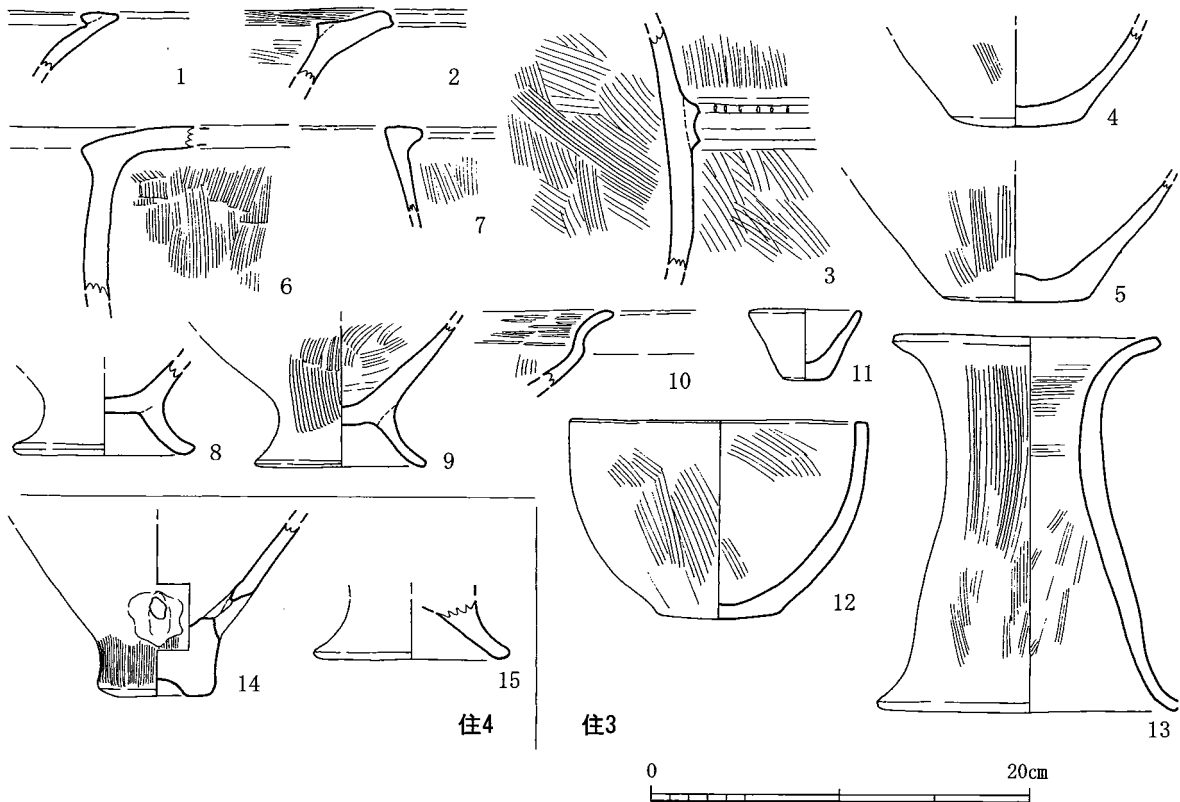
(2) 竪穴住居跡

3号竪穴住居跡（図版22、第34図）

調査区南部に位置し、4号竪穴住居跡を切る。平面形態は長方形で長軸606cm、短軸484cmである。西壁際では一部、床面の認定を誤り掘りすぎてしまった。中央に炉跡と思われる径35cm程のピットが存在する。床面は焼けていないが埋土に炭は含まれていた。主柱穴は長軸方向に2本配置される。東



第34图 3·4号竖穴住居迹实测图 (1/60)



第35図 3・4号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

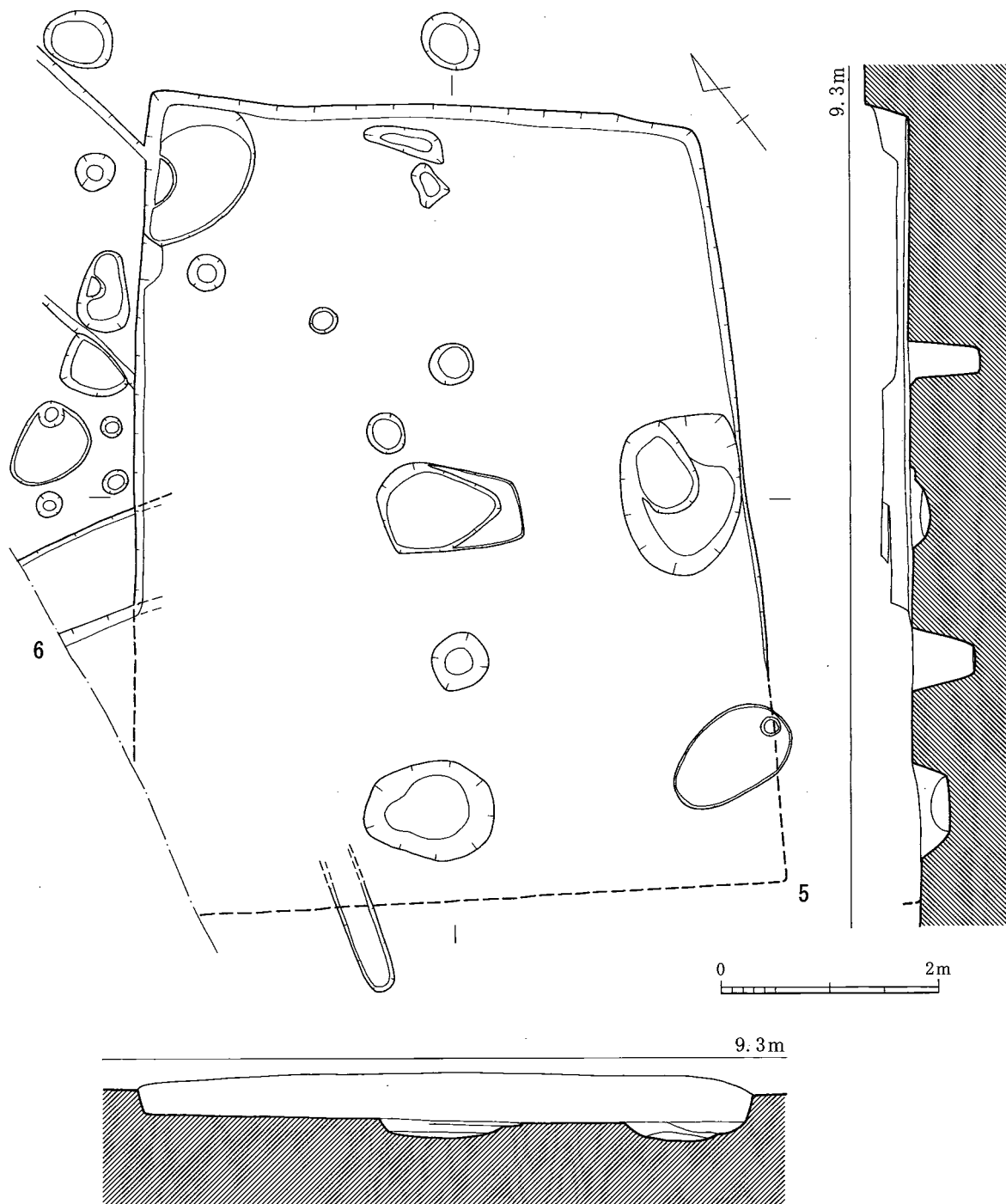
側の柱穴の埋土は暗褐色粘質土なのに対し、西側の柱穴の埋土は黄灰色粘質土で、上層に灰色粗砂が堆積し特異である。南壁際中央には屋内土坑が存在する。東壁際床面に部分的に周溝が見られたが、全周にわたっては確認できなかった。住居の埋土は暗褐色粘質土である。

出土土器 (図版55、第35図)

1は口縁部内面が肥厚する壺で、端部内面に突帯を貼り付け三角形に仕上げる。2は大型壺で口縁部内面に突帯を貼り付ける。口縁部上面は粗いハケ調整を行う。3は壺の胴部でM字形突帯を貼り付け上側に刻目を施す。下側はやや小さく三角形に仕上げる。内外面粗いハケ調整を行う。4は壺の底部と思われ、底面はやや突出ぎみに仕上げる。外面に一部ハケ調整が確認できる。5も壺の底部で、内面にユビオサエを施す。外面はハケ調整を行う。6は大型甕で、口縁部は長く水平ぎみに延び内面は大きく突出する。口縁端部は欠損している。内面は摩滅が著しいが、外面は縦方向のハケ調整を行う。一部丹塗の痕跡が残る。7は口縁部外面に大きな突帯を貼り付け、外面は縦方向のハケ調整を行う。8・9は脚状の甕の底部である。10は高杯で、屈曲し口縁部が短く外反する。摩滅しているが内面はミガキ調整が確認できる。11は小型の鉢で全体をナデで仕上げる。12は深い椀状の鉢で底面はやや突状に仕上げる。内外面ハケ調整を行う。13は器台で口縁部と脚部は器壁が薄くなる。内外面ともハケ調整を行う。当住居跡は出土土器に時期幅が見られるが、やや突出した底部や、10の高杯の形態から弥生時代後期後半頃を考えておきたい。

4号竪穴住居跡 (図版22、第34図)

3号竪穴住居跡の北に位置し、南半を切られる。平面形態は長方形と思われ、長軸は540cm、短軸



第36図 5・6号竪穴住居跡実測図 (1/60)

は東壁をうまく確認できなかったが、炉の位置から推定で450cm程に復元できる。炉跡と思われる落ちが存在するが、南半を3号竪穴住居跡に切られてしまっている。主柱穴は2本と思われ、そのうち1本は炉跡の北側のピットが概当すると想定できることから、3号竪穴住居跡とは主軸が約90°異なることが分かる。西壁際に周溝が見られたが、全周にわたっては確認できなかった。北壁際には屋内土坑が存在する。住居の埋土は暗褐色粘質土である。

出土土器（図版55、第35図）

14・15は甕の底部である。14は底面中央が窪み、底部直上に焼成後穿孔を行う。外面はハケ調整である。15は脚状のものである。

5号竪穴住居跡（図版22、第36図）

4号竪穴住居跡の北西に位置する。6号竪穴住居跡と切り合い関係にあるが、埋土が酷似しており明確に確認することはできなかった。調査時の所見からおそらく6号竪穴住居跡が新しいと思われる。南壁は検出時にうまく確認することができなかったが、平面形態は長方形と思われ、長軸は推定730cm、短軸は565cmである。中央に粘性の高い埋土の炉跡と思われる落ちが存在するが、焼土等は確認できなかった。この炉跡を挟むように支柱穴が2本存在する。北西隅と東壁際には屋内土坑が存在し、床面より10～20cm程の深さを有する。南側支柱穴の南にも落ちが存在し、これも屋内土坑になる可能性はある。住居の埋土は暗褐色粘質土である。

出土土器（図版55・56、第37図）

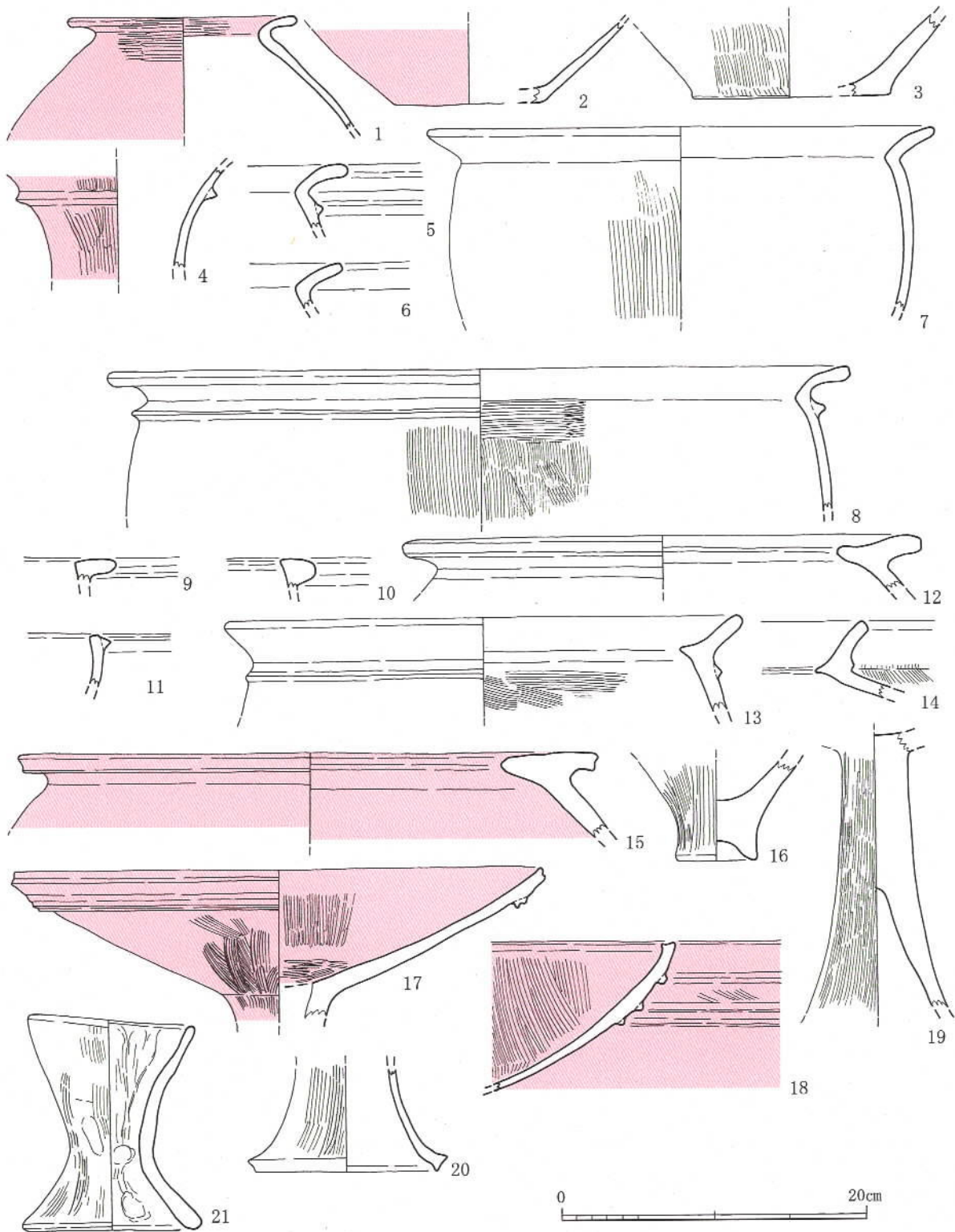
1は丹塗磨研の無頸壺で、内面の丹塗は口縁部付近に限定される。2は1と同一個体と思われる丹塗磨研壺の底部である。破片が小さく復原径にはやや不安をおぼえる。3は壺の底部で外面はハケ調整を行う。4は長い頸部に1条の突帯を持つ丹塗磨研壺で、ミガキの方向は縦方向である。5～8は稜を持って屈曲し口縁部が外に開く甕である。5・8は屈曲部下に1条の三角突帯を貼り付け、口縁端部は丸みを持って肥厚する。9～11は口縁部外面に突帯を貼り付ける甕である。9は口縁部が長く延び、逆L字状を呈する。10は丸みを帯びた大きな突帯を貼り付け、内面は端部のみわずかに突出する。11は小さな三角突帯を貼り付ける。調整はナデで仕上げる。12～15は鋤先口縁もしくはT字状口縁を呈する大型の甕である。13は口縁部直下に1条の三角突帯を貼り付ける。外面はナデ、内面は横方向のハケ調整を行う。14は外面に縦方向のハケ調整を行い、口縁部の際で止まり、小さな段状になる。15は丹塗を施しており、口縁端部はナデのため窪む。16は甕の底部で高い上げ底となる。17・18は丹塗磨研の直口口縁高杯である。17は外面に1条のM字形突帯を貼り付ける。口縁端部はナデのため窪む。脚部との接合部では充填粘土が剥がれ擬口縁が確認できる。全体的に摩滅しているが外面にハケ調整が確認できる。18は三角突帯を3条貼り付ける。口縁端部はナデによって窪む。全体的に摩滅しているが内面にハケ調整が確認できる。19は高杯の脚部で、ストロークの長い縦方向のミガキ調整を密に行う。20は高杯脚部で、端部は肥厚し強いナデにより窪む。21は器台で外面にハケ調整とユビオサエを行い、内面はユビオサエが顕著で絞り目も確認できる。当住居跡は古い時期の土器の混入も見られるが、弥生時代中期後半～末の土器が多く、概ねその頃に比定できよう。

6号竪穴住居跡（図版22、第36図）

5号竪穴住居跡の西側に位置し、おそらく5号竪穴住居跡を切っていたと思われる。西側は調査区外に延び、南壁は確認することができなかった。北側の一部のみ確認するに留まったが、落ちが2段存在することから、おそらくベッド状の施設を持つのではないと思われる。

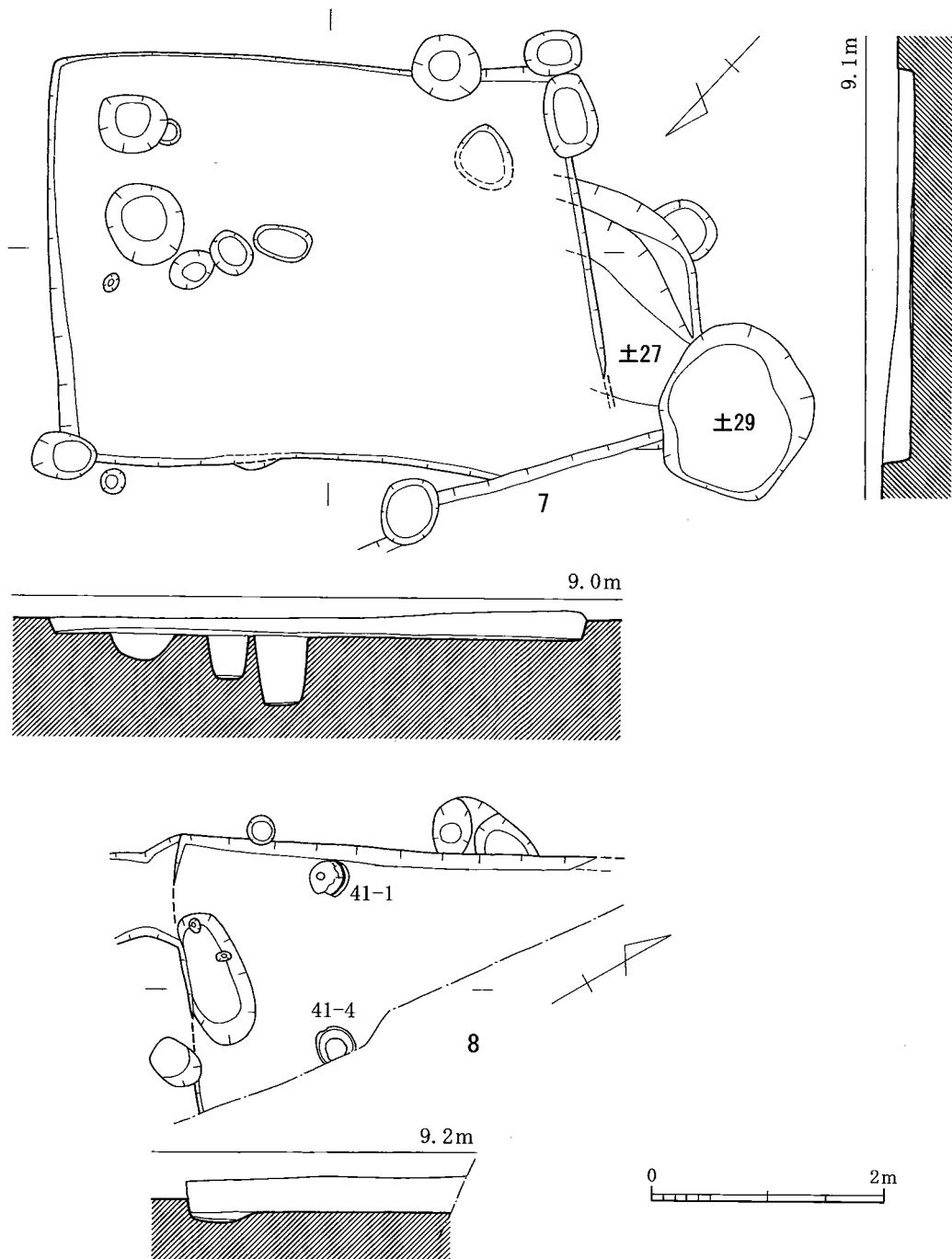
出土土器（図版55・56、第39図）

1は鋤先口縁の大型甕で、口縁部上面は幅広く緩やかに窪む。端部に工具の圧痕が残る。2・3は稜を持って屈曲し、口縁部が外に大きく開く甕である。2は屈曲部下に1条の三角突帯を貼り付け、

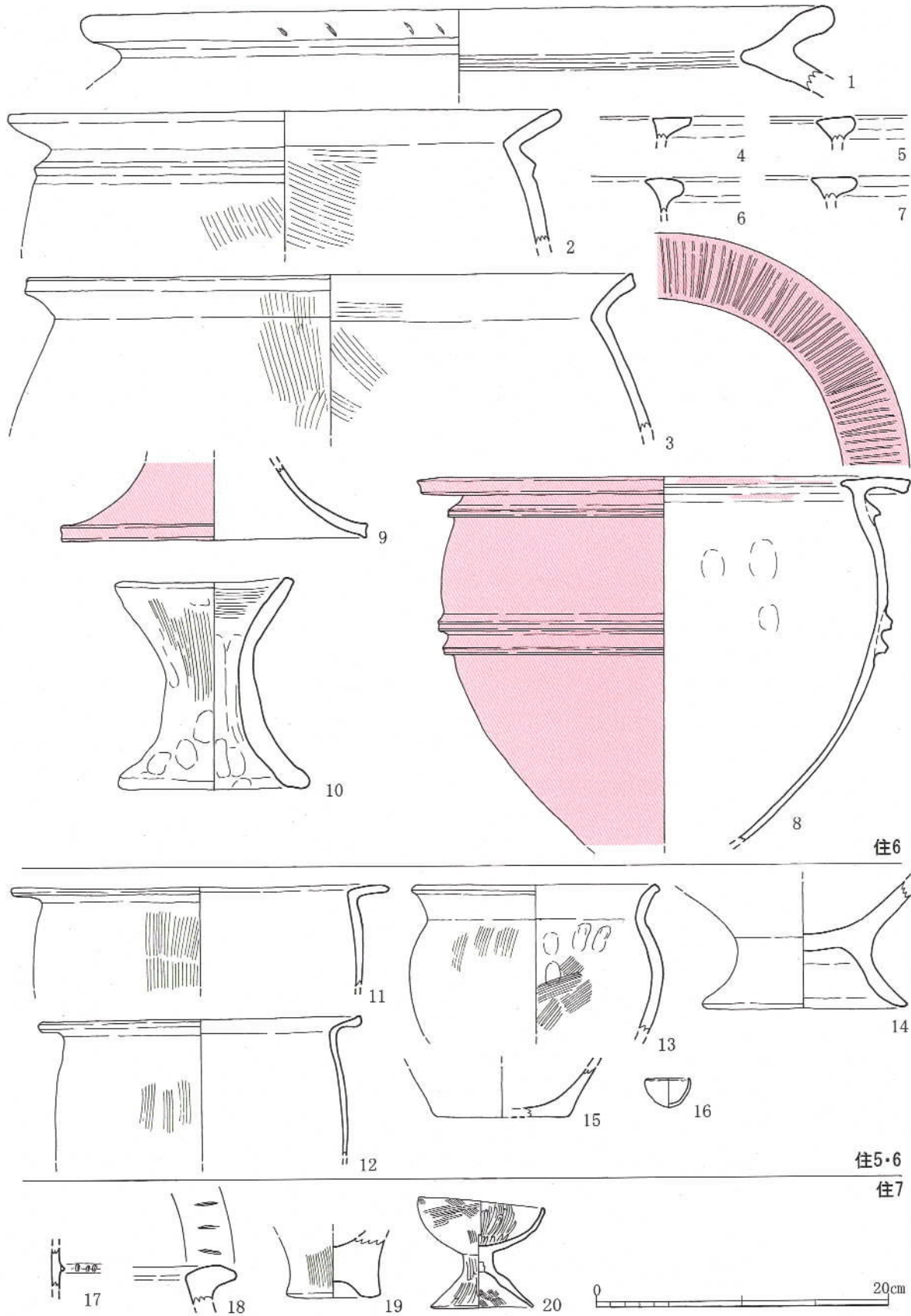


第37图 5号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)

胴部内外面は粗いハケ調整を行う。3は口縁端部がナデによって窪む。器面は摩滅しているが内外面とも粗いハケ調整が確認できる。4～7は口縁部外面に突帯を貼り付ける甕である。8は丹塗磨研の甕で、口縁部は鋤先状を呈し上面に暗文状のミガキを施す。口縁部下に1条、胴部に2条のM字形突帯を貼り付ける。内面は摩滅しており丹塗も残りが悪い。9は丹塗磨研の高杯脚部で、端部は肥厚し強いナデによって窪む。10は器台で脚端部は接地面をしっかりと持つ。下位は内外面ともユビオサエを



第38図 7・8号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第39图 5~7号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/4)

施す。上位は外面が縦方向、内面が横方向のハケ調整を行う。内面は絞り目も確認できる。当住居跡は古い時期の土器の混入も見られるが、弥生時代中期後半～末の土器が多く、概ねその頃に比定できよう。

11～16は5号、6号竪穴住居跡のどちらに帰属するかは不明である。11～13は甕である。11・12は稜を持って屈曲し、口縁部が外に大きく開く。12は口縁端部が肥厚し若干跳ね上げぎみに収める。13は屈曲が弱く胴部が張り出す。口縁外端部は外へ突出する。14・15は甕の底部で、14は大きな脚台状になる。15は平底になろうか。16は精製のミニチュア土器でナデによって仕上げる。

7号竪穴住居跡（図版23、第38図）

調査区南寄り、5号竪穴住居跡の北に位置する。平面形態は長方形で、長軸460cm、短軸345cmである。本住居跡よりも古い26、27号土坑と切り合っており、掘削途中は床面が分かりにくい状況であったため、若干掘りすぎてしまい古い時期の遺物が混じってしまった。主柱穴は判然とせず、炉跡等も明確に確認できなかった。埋土は暗褐色弱粘質土である。

出土土器（図版56、第39図）

17は残りが悪く傾きも不明であるが、甕の口縁部に近い箇所と思われる。小さな三角突帯を貼り付け刻目を施す。18はやや大きな突帯を貼り付け逆L字状を呈する。端部は先細りぎみになる。口縁部上面に工具の圧痕が残る。19は甕の底部で底面中央が窪む。20は小型の高杯で、椀状の体部は外面が横方向のミガキ、内面は暗文状のミガキを行う。脚部は屈曲部より下は直線的である。外面は縦方向のミガキ、裾部内面は細かいハケ調整を行う。

8号竪穴住居跡（図版23、第38図）

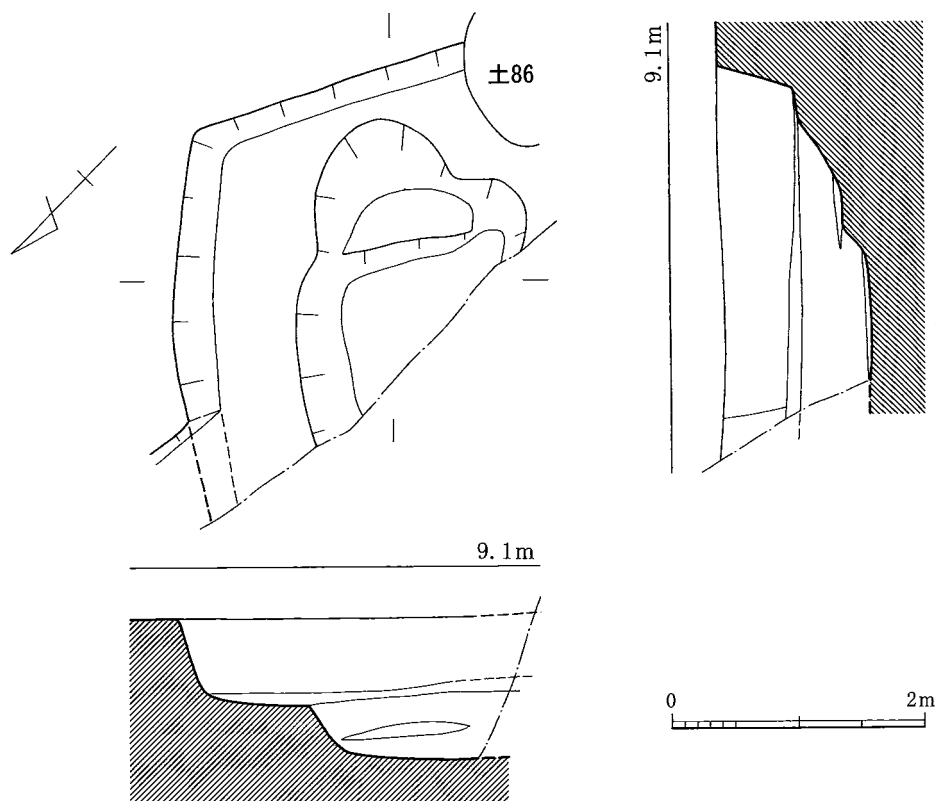
調査区中央、7号竪穴住居跡の北東に位置する。東側は調査区外に延びる。平面形態は長方形と思われる。検出当初は南壁が判然としなかったため、かなりの部分を壊してしまった。南壁際には浅い落ち込みが存在し、屋内土坑の可能性もある。主柱穴及び炉跡は確認できなかった。埋土は他の住居跡と異なり、暗褐色粘質土に赤褐色弱粘質土のブロックを多く含む。

出土土器（図版56、第41図）

1は長胴の壺で、全体にメリハリがなく頸胴部界の屈曲も弱い。胴部最大径の位置に1条突帯を貼り付け刻目を施す。器面は摩滅しているが、胴部下半外面にタタキの痕跡が残る。底部は平底である。2は鉢で、稜を持って屈曲し口縁部は外に開く。外面は縦方向のハケ調整、内面はナデ主体で一部ハケ調整が確認できる。底部は平底である。3・4は稜を持って屈曲し口縁部が外に開く甕である。3は底部が高い脚状となる。4は外面はナデ主体だが、ハケ調整も確認できる。内面は胴部上位は横方向、以下は縦方向のハケ調整を行う。胴部下半は赤変が著しい。5は甕の底部で高い脚状を呈する。脚部内面は粘土の接合痕が残る。当住居跡は出土土器の量が少ないが、弥生時代後期前半～中頃に比定できるだろう。

9号竪穴住居跡（図版23、第40図）

調査区中央、14号竪穴住居跡の南、16号竪穴住居跡の西に位置する。西側は調査区外に延び、平面形態は方形と思われる。南側は86号土坑に切られる。床面に不整形の大きな落ちが存在するが、掘



第40図 9号竪穴住居跡実測図 (1/60)

削当初に住居跡と認識せず同時に掘削してしまったため、当住居跡の付属施設なのか、時期の古い落ち込みなのかは判断ができなかった。

出土土器 (第41図)

6は丹塗磨研壺の口縁部で端部は欠損している。内面は大きく突出する。7は屈曲し口縁部が大きく外に開く甕で、端部は若干肥厚し丸く収める。8は鋤先口縁の甕で口縁部下に三角突帯を貼り付ける。摩滅が著しい。9は脚状の甕底部で端部は欠損している。10は底面中央が窪む甕の底部である。11は鉢の底部と思われ平底を呈する。外面はナデ、内面は一部ハケ調整が確認できる。

10号竪穴住居跡 (図版24、第42図)

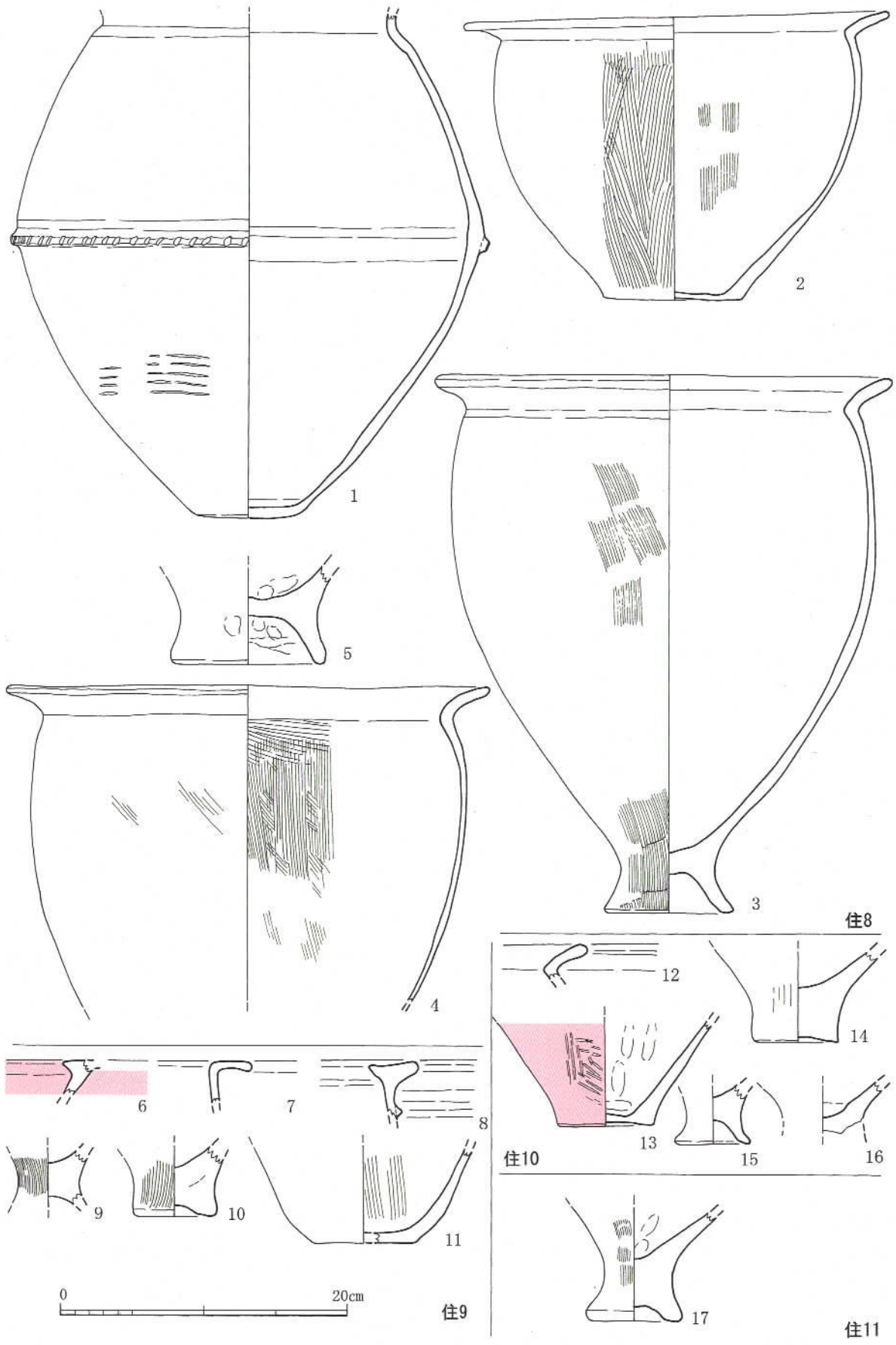
調査区北寄りに位置し、11号竪穴住居跡と切り合う。埋土が酷似していたため、新旧関係は確認できなかった。東側は調査区外に延びる。平面形態は長方形と思われる。

出土土器 (第41図)

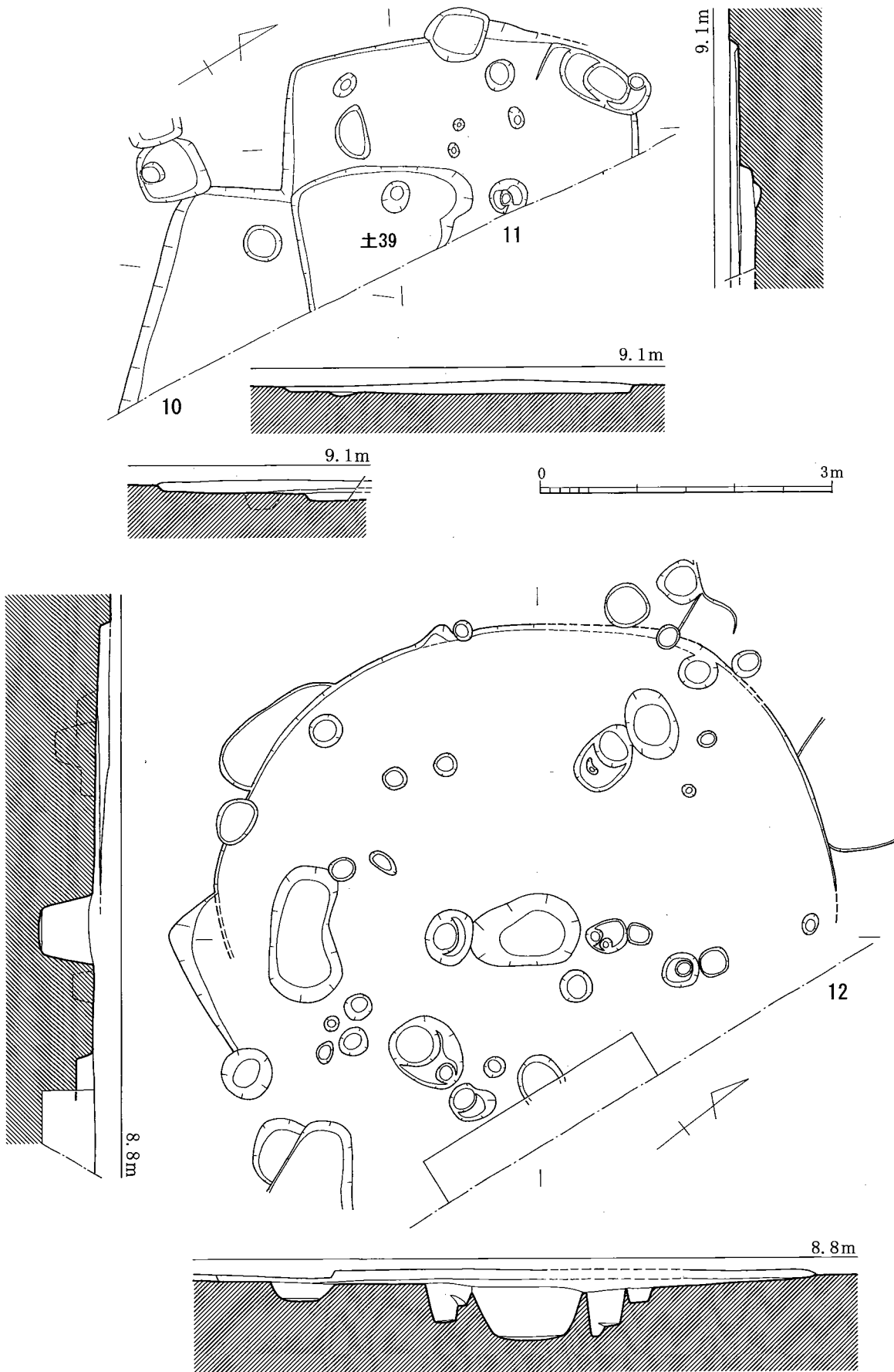
12は稜を持って屈曲し、口縁部が外に開く甕である。13は丹塗磨研の甕で、内面にユビオサエを施す。14・15は甕の底部である。14は浅い上げ底で、15はやや脚状になる。16は高杯の杯部と脚部との接合部と思われ、擬口縁が認められる。杯部の底はへそ状に窪む。

11号竪穴住居跡 (図版24、第42図)

調査区北寄りに位置し、10号竪穴住居跡と切り合うが、新旧関係は不明である。東側は調査区外に延びる。南寄りの位置の床面では39号土坑を確認している。平面形態は長方形と思われる、南北軸は364



第41图 8~11号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)



第42図 10~12号竖穴住居跡実測図 (1/60)

cmである。北西隅は当住居跡よりも新しいピットによって切られている。

出土土器（第41図）

17は甕の底部で底面は中央が窪む。外面はハケ調整、内面はユビオサエを施す。

12号竪穴住居跡（図版24、第42図）

調査区中央に位置する。東側は調査区外に延びると思われる。付近は他の遺構との切り合いが激しく、全体をかなり掘り下げた段階でようやくプランを確認できたため壁面の残り具合は悪い。南東及び北東側の壁面は飛ばしてしまった。平面形態は円形で、径は632cmと大きい。中央に長軸110cm、短軸74cmの楕円形の土坑があり、両脇に径20～30cm程のピットが存在する。この土坑とピットは下層に地山ブロックを多く含んだ黄褐色粘質土、上層に暗黄灰褐色粘質土の埋土である。土坑には焼土や炭は含まれていなかった。またこのピットを結ぶ軸上の南西側には楕円形の屋内土坑が存在する。ピットの配置状況からいわゆる松菊里タイプの流れで考えることができる住居と思われる。支柱穴は判然としなかった。

出土土器（図版56、第45図）

1～3は甕である。1は口縁部がやや長めの逆L字状となる。胴部上位に小さな三角突帯を貼り付け、上側を強くナデするためやや下を向く。突帯の下側はきれいにナデが行われていない。器面は摩滅しているが、内面にユビオサエが確認できる。2は口縁部が薄い逆L字状を呈する。胴部上位に1条沈線を巡らせる。外面はハケ調整、内面はナデ調整である。3は口縁部外面に丸みを帯びた大きな突帯を貼り付け、内面に鋭く突出する。胴部上位に1条沈線を巡らせる。器面は摩滅が著しい。4～6は甕の底部である。4は底面中央が窪む。5・6は高い上げ底になる。7は器台で外面はハケ調整、内面はナデで端部付近はユビオサエを施す。上記の土器のうち1・3・5・7は住居内の屋内土坑からの出土である。当住居跡は弥生時代中期初頭～前半に比定できよう。

13号竪穴住居跡（図版24、第43図）

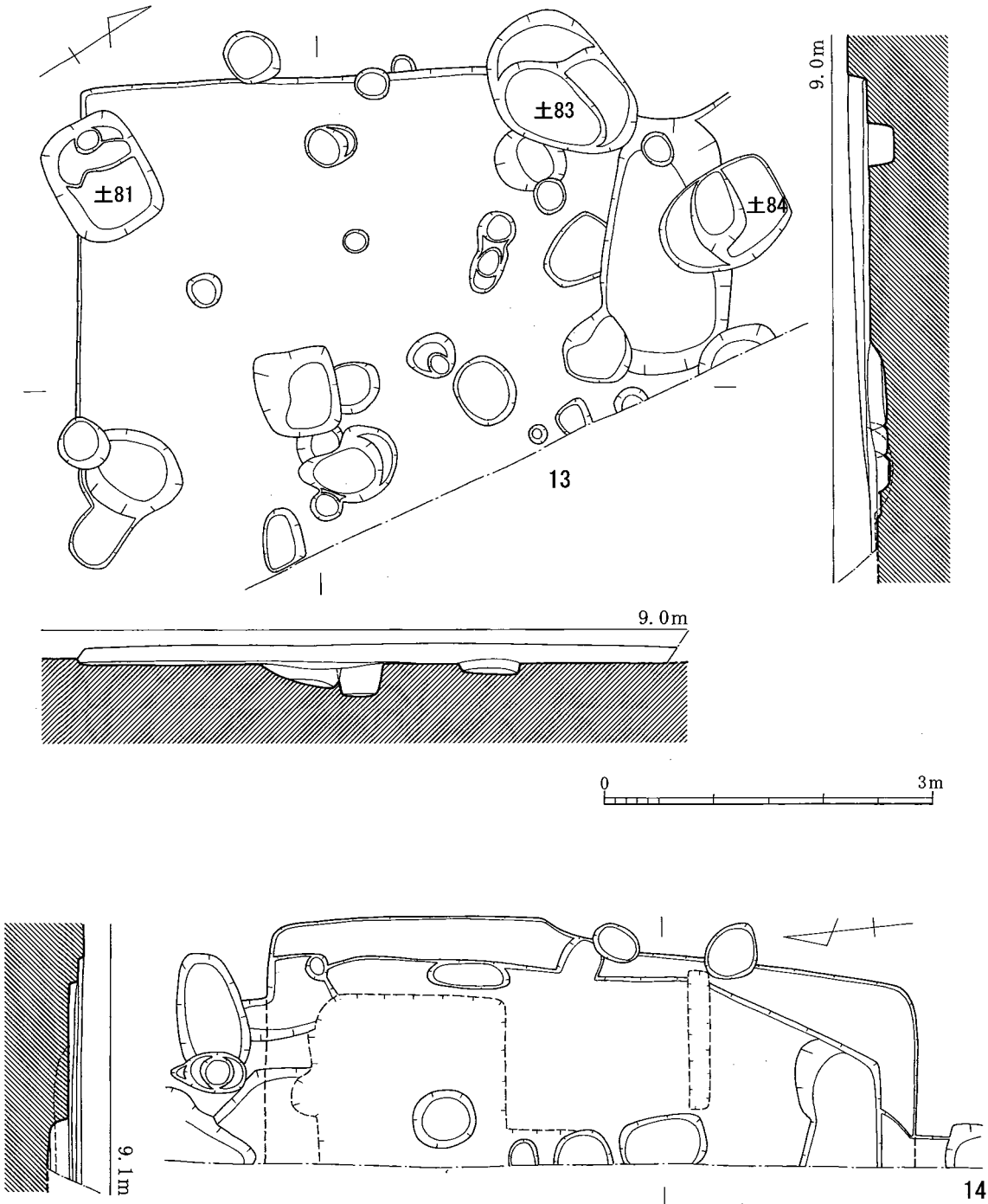
調査区中央、12号竪穴住居跡の南約8mに位置する。平面形態は方形で、東側は調査区外に延び、北側はピットや土坑によって切られるため正確な規模は不明である。南壁は81号、西壁では83号土坑によって切られる。支柱穴及び炉跡等は判然としない。

出土土器（図版56、第45図）

8・9は甕である。8は口縁部がやや長めの逆L字状を呈し、内面に鋭く突出する。9は薄い逆L字状を呈する。摩滅しているが外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整が確認できる。10は壺の底部で外面は横方向のミガキ、内面底はユビオサエを施す。11は甕の小さな底部で高い上げ底になる。12は甕の脚状の底部である。13はミニチュア土器で赤変が著しい。底部は高く窪み、外面はユビオサエを施す。

14号竪穴住居跡（図版25、第43図）

調査区中央、13号竪穴住居跡の西に位置する。平面形態は方形で、西側半分は調査区外に延びる。北壁はうまく検出できなかった箇所が多いが、南北軸は約600cm程である。東～南壁に沿ってテラスが見られるが、幅が40～50cm程と狭く、しかも5cm程と低いいためベッド状遺構等にはならない。住居



第43図 13・14号竖穴住居跡実測図 (1/60)

の建て直し等も考えられるが、南東隅の箇所が方形にならないため、実態は不明である。南東隅にはテラスの下に沿って土坑が存在し、屋内土坑の可能性が考えられる。主柱穴及び炉跡等は判然としない。

出土土器 (第45図)

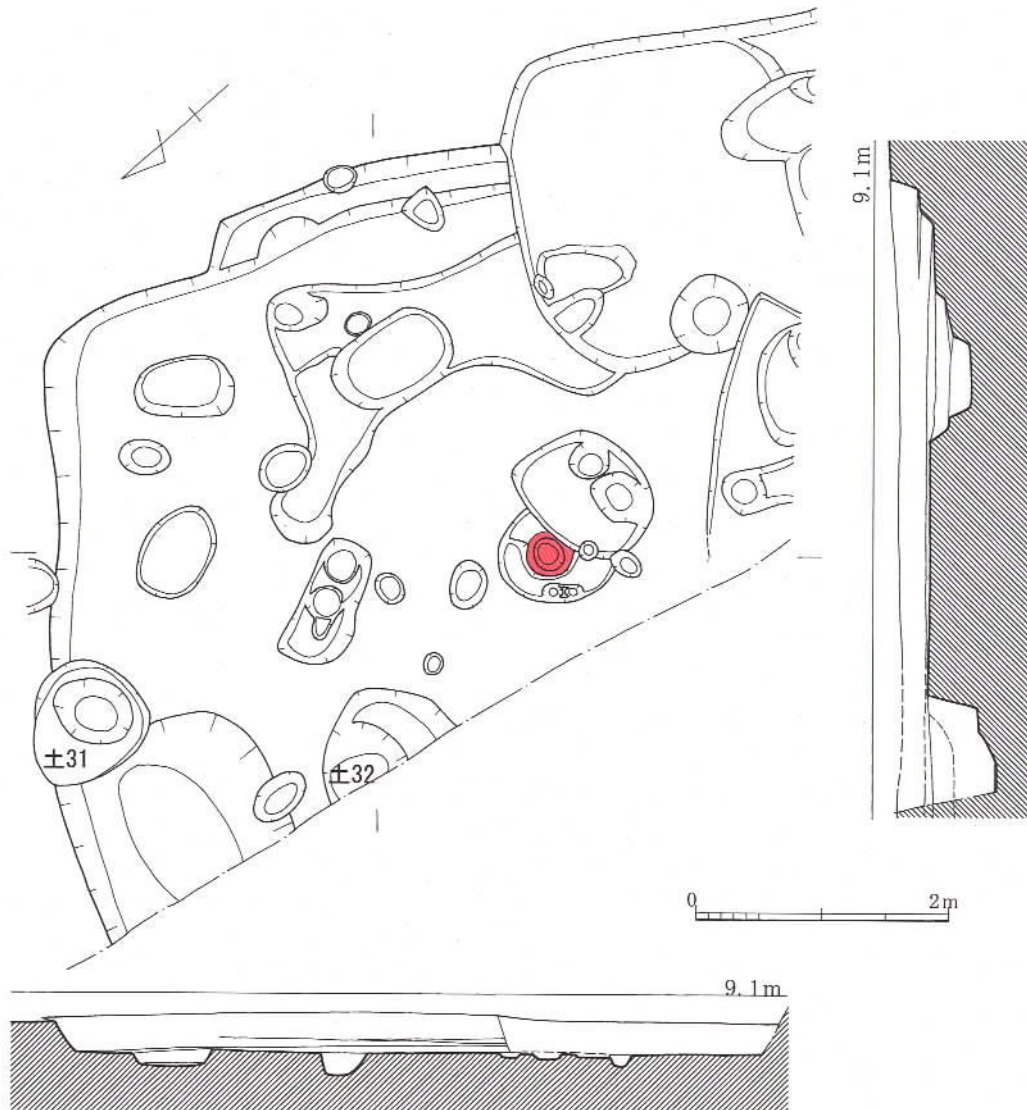
14は口縁部が内外面に突出する甕である。15は甕の底部で浅い上げ底になる。16は高杯の杯部と脚部の接合部分で摩滅が著しい。

15号竪穴住居跡（図版25、第44図）

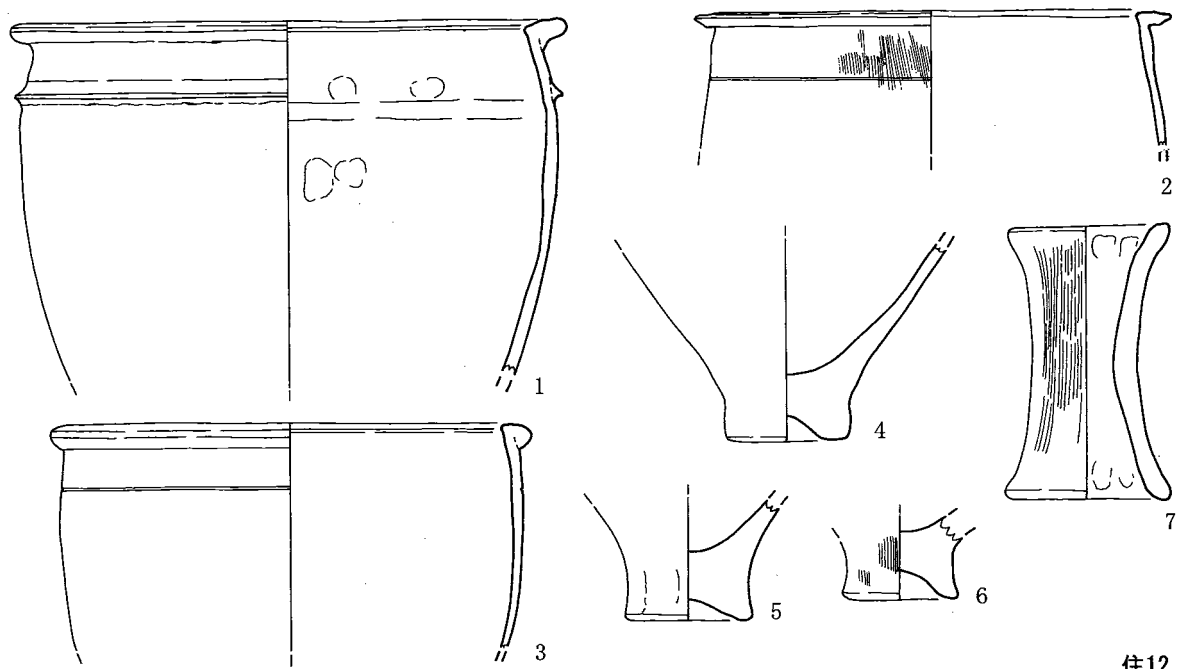
調査区中央、8号竪穴住居跡の西に位置する。平面形態は方形だが、西側は調査区外に延び、南側は大きな落ち込みが存在するため正確な規模は不明である。北側は31号土坑により切られる箇所があり、床面では32号土坑を確認した。東壁の外側には平行して地山の段差が確認でき、当住居跡よりも古い住居跡の可能性もある。支柱穴は判然としないが焼土が確認でき、ここが炉跡になると思われる。炉跡は小ピットを中心に焼けており、その周囲は一段低くなる。また北壁に沿って31号土坑に切られる格好で大きな土坑が存在し、これは屋内土坑になる可能性がある。

出土土器（図版56・57、第45・46図）

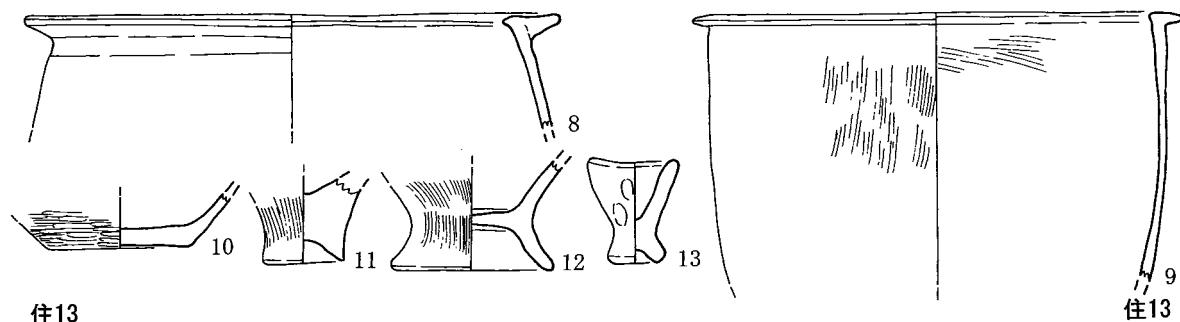
第45図17～19、第46図1は壺である。17は胴部が張り、底部は平底を呈する。器面は摩滅しているが内面にハケ調整が確認できる。18は胴部が張り、頸部が外に長く延びる。頸部は縦方向の暗文状のミガキを行う。19は胴部最大径の箇所に1条の三角突帯を貼り付ける。第46図1は頸部が外に長く延



第44図 15号竪穴住居跡実測図（1/60）

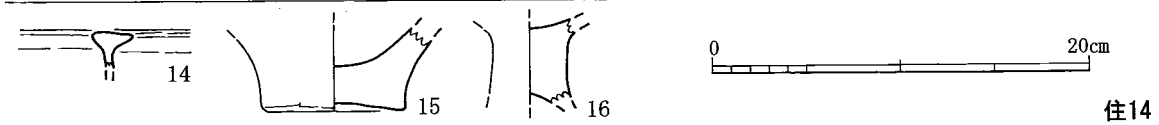


住12

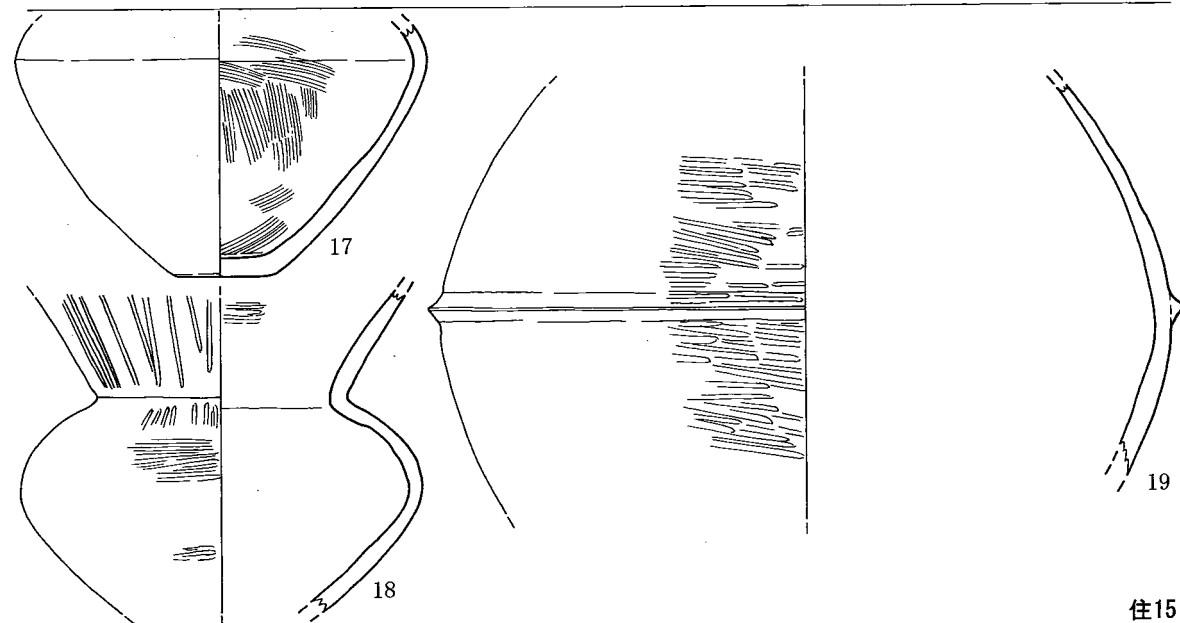


住13

住13

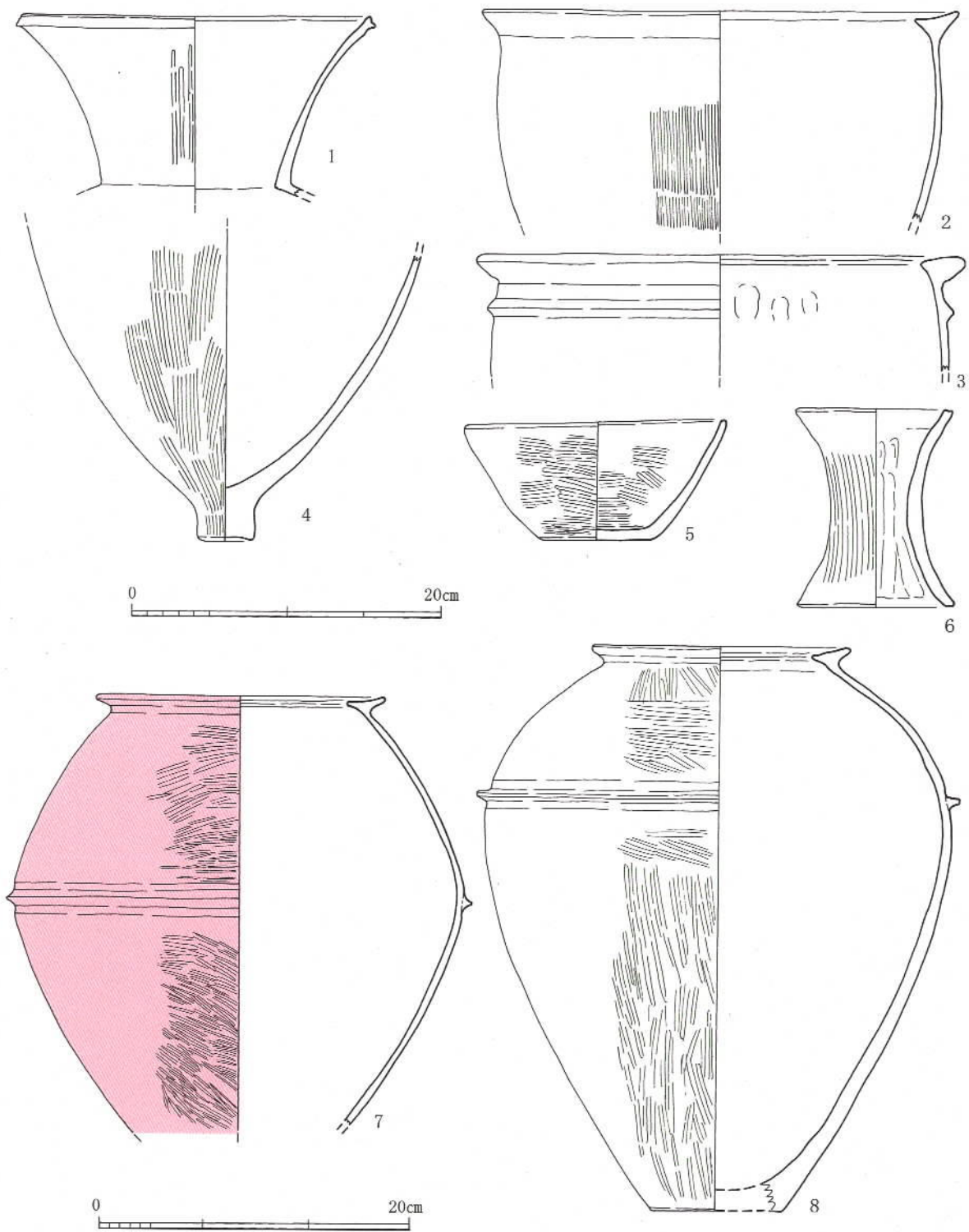


住14

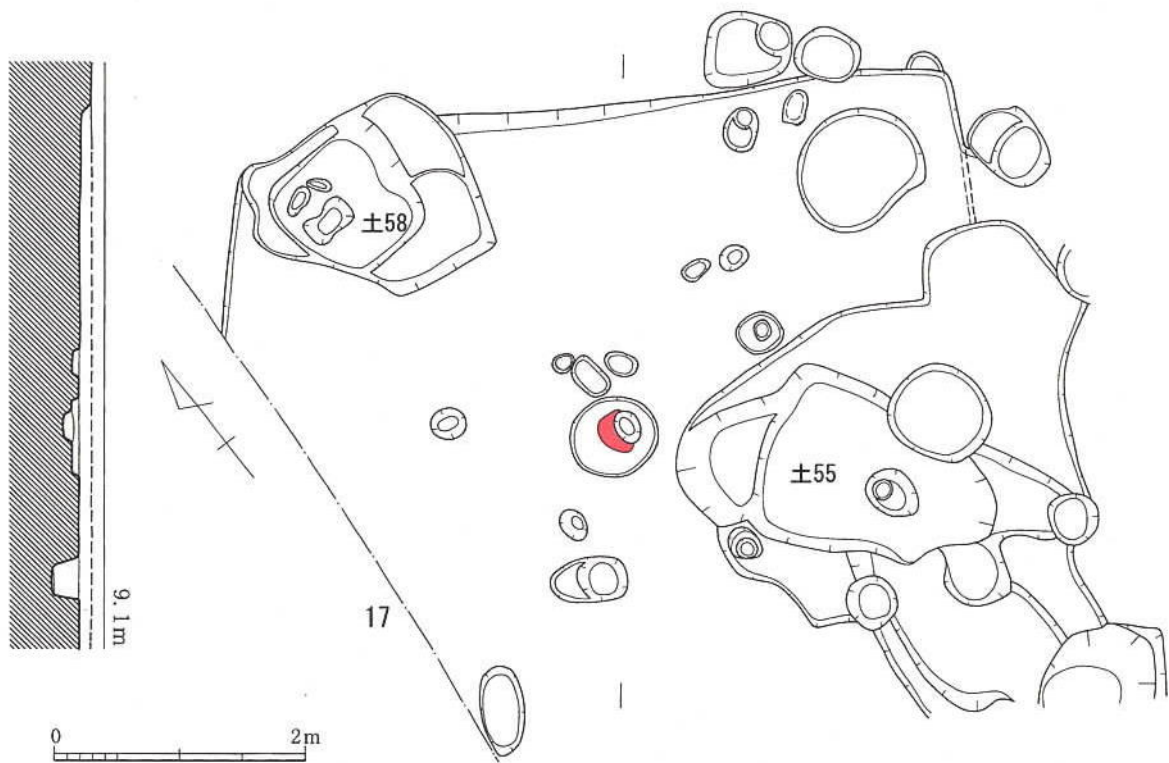
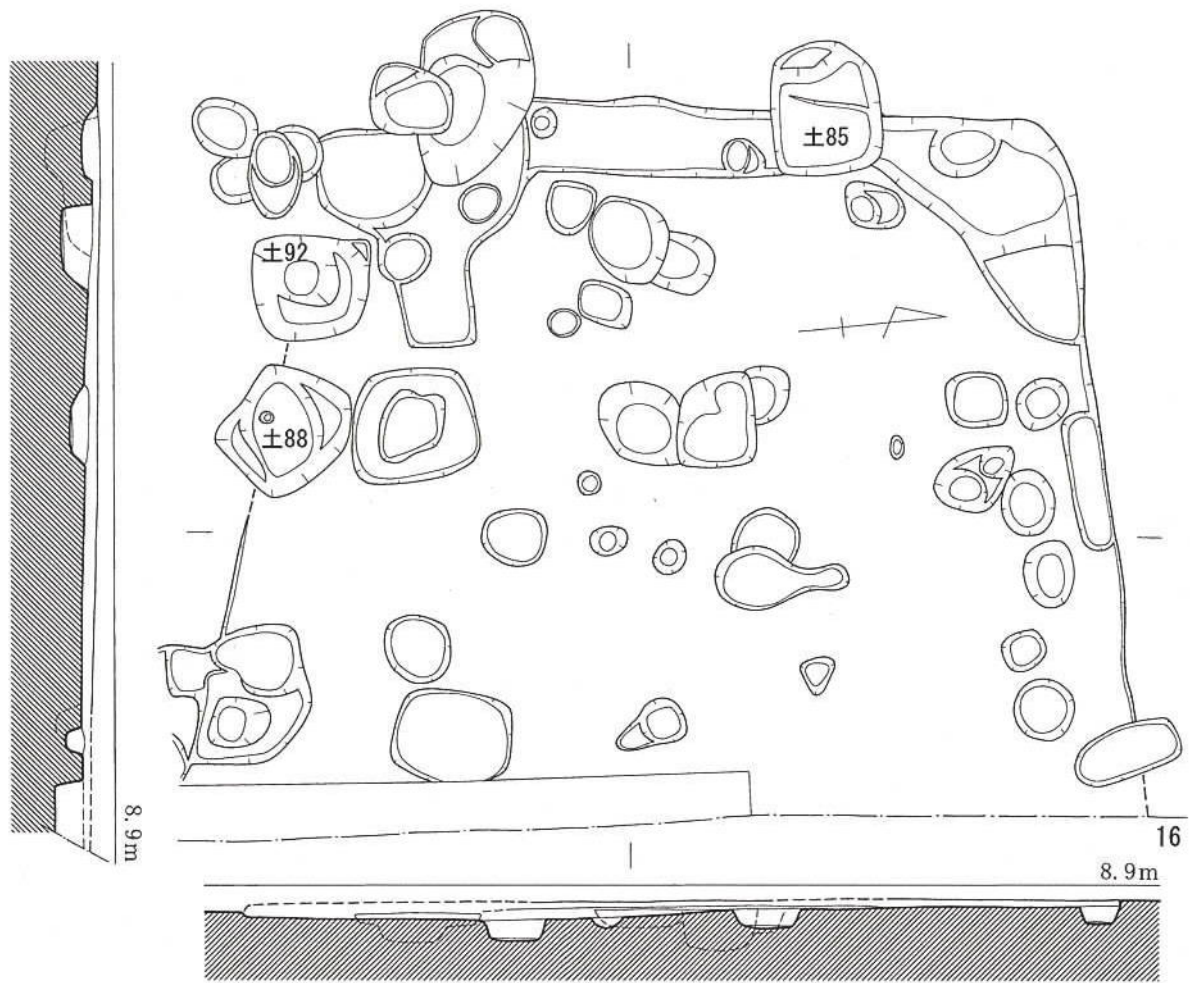


住15

第45图 12~15号竖穴住居迹出土土器实测图 (1/4)



第46图 15号竖穴住居迹出土土器实测图 (1/4)



第47图 16·17号竖穴住居跡実測图 (1/60)

びる。口縁端部は外側に突出する。頸部は縦方向のミガキ調整を行う。第46図2・3は甕である。2は鋤先口縁を呈し、外面は縦方向のハケ調整を行う。3の口縁部は太い逆L字状を呈し、内面に緩く張り出す。胴部上位に三角突帯を1条貼り付ける。4は甕の底部で、底面は浅い上げ底になる。5は鉢で内外面横方向のミガキ調整を行う。6は器台で、外面は粗いハケ調整、内面はユビによるナデが顕著に見られる。7・8は鋤先口縁の大型甕で胴部最大径の位置に1条突帯を貼り付ける。7は丹塗磨研に仕上げる。8は胴部の高い位置が張り出し、胴部上位は横方向、下位は縦方向のミガキ調整を行う。当住居跡は弥生時代中期中頃に比定できよう。

16号竪穴住居跡（図版25、第47図）

調査区中央、13号竪穴住居跡の南、15号竪穴住居跡の北東に位置する。平面形態は方形で、南北軸は692cmである。東側は調査区外に延びるため、東西軸の規模は不明である。南壁は88、92号土坑に切られ、西壁は85号土坑に切られる。南西隅は多くのピットによって切られている。付近は遺構の多い箇所であり、また当住居跡自体の残り具合自体も悪いため、プランを確定するには苦慮した。主柱穴や炉跡等は判然としない。北西隅と南壁沿い調査区東端には屋内土坑と思われる土坑が存在する。また西壁沿いには50cm程の幅で浅い溝状のものが走る。当住居跡からは図示できる土器は出土していない。

17号竪穴住居跡（図版26、第47図）

調査区北寄りに位置し、55、58号土坑と切り合う。全体に残りが悪く、壁の立ち上がりは数cmしかない。南側については正確なプランを確認できなかった。平面形態は方形であるが、規模は不明である。床面に焼土が確認された箇所があり、これが炉跡になるのか。炉跡の箇所に小さなピットが存在するが、これは焼土を切っており、当住居跡よりも新しいものである。なお当住居跡は残りが悪いこともあり、伴出遺物を特定できなかったため時期の詳細については不明である。当住居跡からは図示できる土器は出土していない。

(3) 土坑・ピット

4号土坑（図版26、第48図）

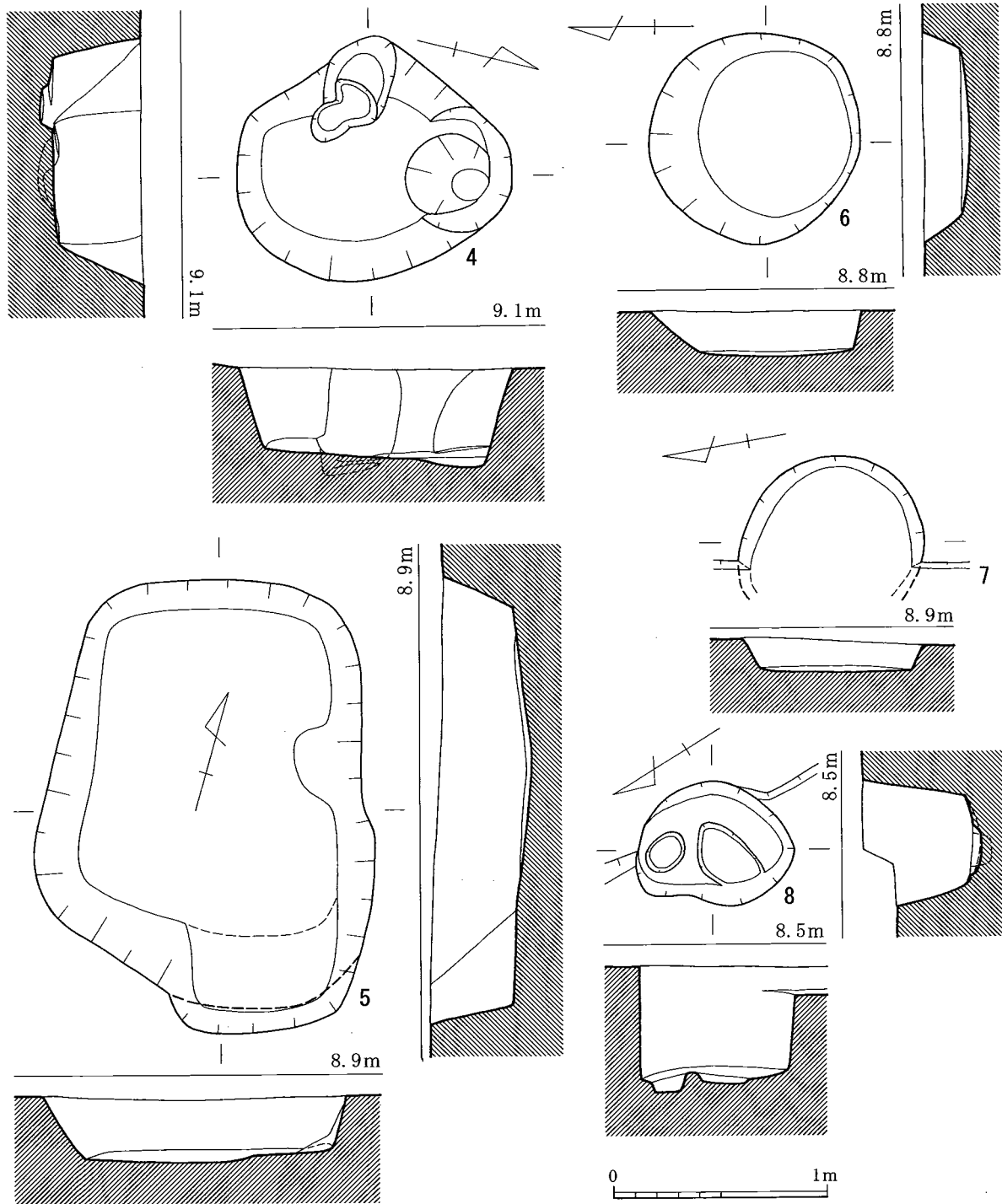
調査区中央東寄りに位置し、第3層中で確認することができた（上層遺構）。平面形態は楕円形を呈し、長径120cm、短径110cm程である。北側と西側に別のピットが切り合うが、検出時には気づかなかったため、一気に掘削してしまった。床はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がる。埋土はやや暗い褐色弱粘質土に、3～5cm程の地山ブロックを含む。

出土土器（第49図）

1は口縁部に丸みを帯びた大きな突帯を持つ甕である。口縁内面はやや突出する。摩滅しており調整は不明。2は鋤先口縁の甕。3は口縁部が短く、く字形に屈曲する小型の鉢になるのか。口縁内面にハケ調整を行う。4は砲弾形の器形で外面はハケ調整の痕跡が残る。

5号土坑（図版26、第48図）

調査区中央東寄り、4号土坑の北西に位置し、第3層中で確認することができた（上層遺構）。平

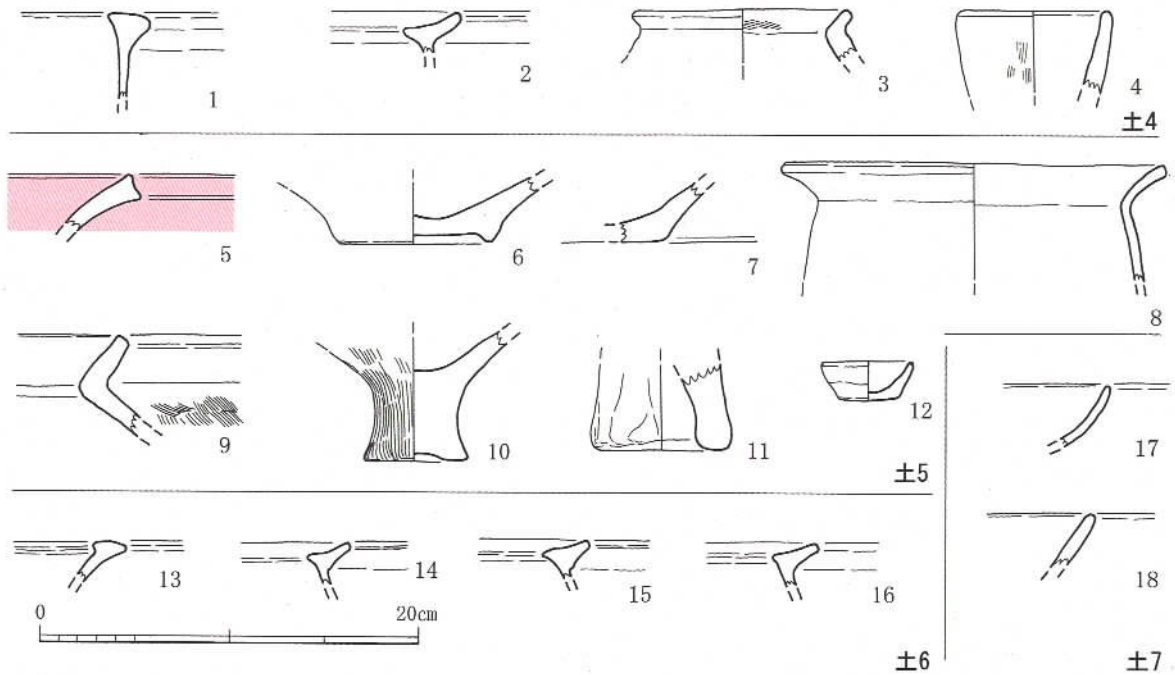


第48図 4～8号土坑実測図 (1/30)

面形態は隅丸方形で、長軸200cm、短軸155cmである。床面は中央がやや窪む。壁面はやや外傾する。東側の一部は下端が内側へ張り出す。南壁の一部は掘りすぎてしまった。埋土は暗褐色弱粘質土で、3～7cm程の地山ブロック、床面近くでは細かい炭を多く含む。

出土土器 (図版57、第49図)

5は丹塗の広口壺の口縁部で、端部は肥厚し強いナデによって窪む。6・7は壺の底部で、6は高台状になる。8は稜を持って屈曲し外に開く甕で、端部にかけて肥厚する。9は短く字形口縁の大



第49図 4～7号土坑出土土器実測図(1/4)

型甕で、胴部はハケ調整を行う。10は甕の底部で、底面中央のみ浅く窪む。外面はハケ調整。11は小破片のため器種はよく分からないが、甕の脚状の底部になろうか。外面は摩滅が著しい。12はミニチュア土器である。全面ナデ調整で仕上げ、粘土紐の痕跡が残る。

6号土坑(図版27、第48図)

5号土坑の北西に位置し、第3層中で確認することができた(上層遺構)。平面形態は円形で、径は100cmである。床面はほぼ平坦で、北壁が緩く立ち上がるが、その他はやや外傾して立ち上がる。埋土は暗褐色弱粘質土に3cm程の地山ブロックと炭を少量含む。

出土土器(第49図)

13は口縁内面が肥厚する壺。14～16は鋤先口縁の甕である。

7号土坑(図版27、第48図)

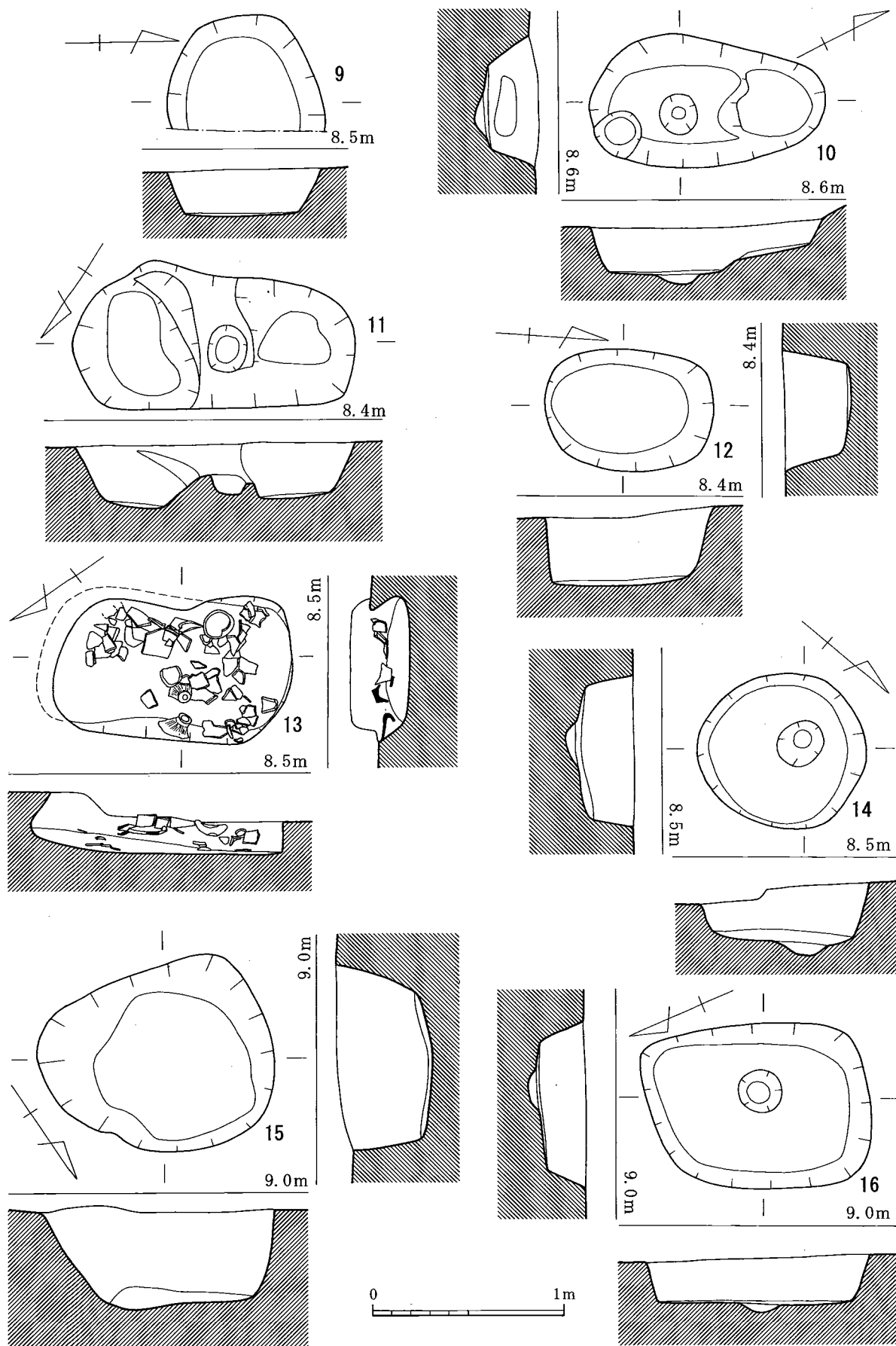
8号土坑の北に位置し、第3層中で確認することができた(上層遺構)。西半分は調査区外に延びると考えられる。平面形態は円形で、径は85cm程である。床面はほぼ平坦で、壁面はやや外傾して立ち上がる。

出土土器(第50図)

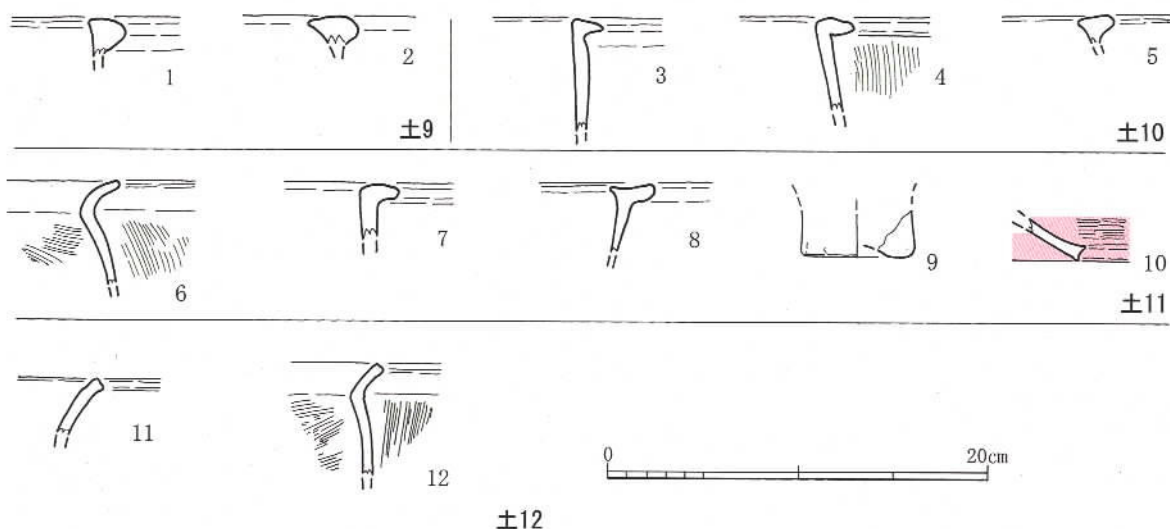
17・18はボール状の鉢と思われ、ナデ調整で仕上げる。

8号土坑(図版27、第48図)

6号土坑の北西、調査区西際に位置し、第3層中で確認することができた(上層遺構)。不整楕円形プランで、長径72cm、短径63cmであるが、南北で2つのピットが切り合っていた可能性もある。床面は北側は北方向へ落ち、南側は南方向へ若干落ちる。北側では床面にピットを持ち、南側でも浅く



第50图 9~16号土坑实测图 (1/30)



第51図 9～12号土坑出土土器実測図 (1/4)

窪む。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は褐色土に5cm程の地山ブロックを多く含む。

9号土坑 (図版28、第50図)

調査区南東隅に位置する。平面形態は東半分が調査区外に延びるものの楕円形プランと思われ、短径は62cmである。床面は平坦で壁面は外傾して立ち上がる。埋土は褐色弱粘質土に少量の地山ブロックと小礫、炭を含む。

出土土器 (第51図)

1・2は口縁部に丸みを帯びた大きな突帯を持つ甕である。2は内面に大きく突出する。当土坑は出土土器の量が少ないが弥生時代中期初頭～前半に比定できよう。

10号土坑 (図版28、第50図)

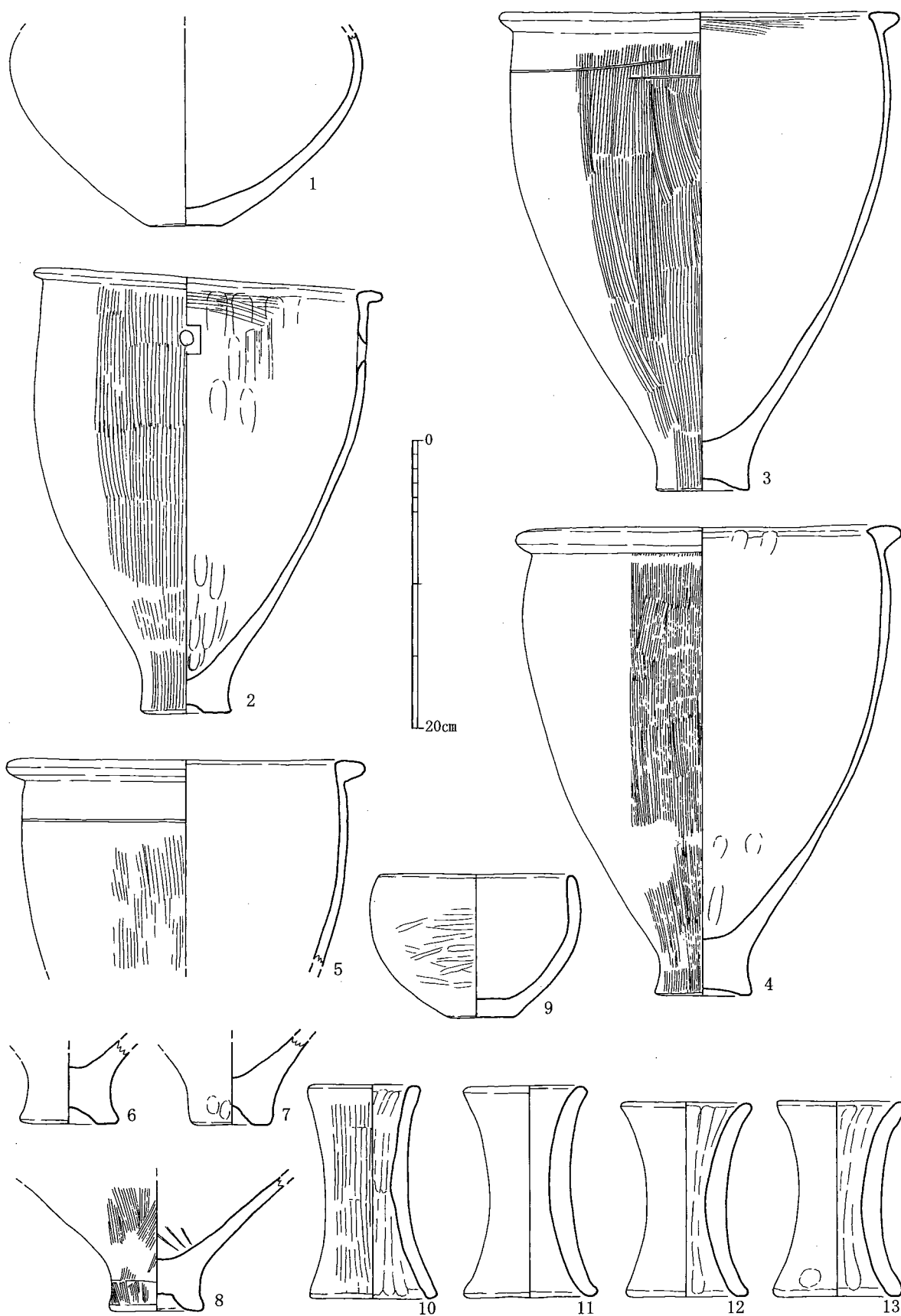
調査区南部、11号土坑の北西に並列するように位置する。平面形態は楕円形で、長軸124cm、短軸71cmである。床面は北側が一段高く、二段掘りの形態をなす。中央は浅く立ち上がりの緩い径20cmのピットが存在する。南壁にもピットが存在するが、これは当土坑を切る新しいものであろう。壁面は外傾して立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土に炭が少量混じるものである。

出土土器 (第51図)

3～5は逆L字状に小さな三角突帯を持つ甕である。3は突帯の下を強くナデる。内外面ともナデ調整である。4は外面ハケ調整で仕上げる。5は口縁端部内面が小さく突出する。当土坑は出土土器の量が少ないが、弥生時代中期初頭～前半に比定できよう。

11号土坑 (図版28、第50図)

調査区南部、10号土坑の南東に並列するように位置する。平面形態は楕円形で、長軸148cm、短軸70cmであるが、床面は南北両端で深くなるため、二つ以上の土坑が切り合っていた可能性がある。中央の浅い箇所径25cmのピットを有する。立ち上がりは緩く外傾する。埋土は暗褐色粘質土に小礫と炭を少量含む。



第52图 13号土坑出土土器实测图 (1/4)

出土土器（第51図）

6は屈曲し、やや外反しながら開く甕で、胴部外面は斜め方向、内面は横方向のハケ調整を行う。7は逆L字状に小さな突帯を持つ甕である。器面は摩滅している。8は鋤先口縁の甕と思われるが、小破片のため傾きはよく分からない。器面は摩滅している。9は甕の底部で、底面中央のみ窪むようである。10は丹塗磨研の高杯の脚部で、端部は強いナデにより窪む。

12号土坑（図版28、第50図）

調査区南部、11号土坑の北東に位置する。平面形態は楕円形で長軸89cm、短軸65cmである。床面はほぼ平坦で、立ち上がりはやや外傾して立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土に小礫と炭を少量含む。

出土土器（第51図）

11は広口壺の口縁部で、端部はナデにより窪む。器面は摩滅している。12は屈曲し、外に開く甕で、胴部は内外面ともハケ調整を行う。

13号土坑（図版29、第50図）

調査区南部、10号土坑の北西に位置する。平面形態は楕円形で、長軸125cm、短軸70cmである。床面はほぼ平坦で、壁面は北壁から東壁にかけてはオーバーハングして立ち上がる。本来は全周オーバーハングしていたものと思われ、貯蔵穴の用途が考えられる。埋土中からは多量の土器が廃棄された状態で出土した。

出土土器（図版58、第52図）

1は壺で全体が摩滅している。2は逆L字状に小さな突帯を持つ甕である。口縁内面の稜は弱い。外面は全体に縦方向のハケ調整、内面は口縁に近い箇所では横方向のハケ調整を行い、以下はナデとユビオサエによって仕上げる。胴部上方に径1cm程の孔が焼成後に穿たれている。底部は底面中央のみ小さく窪んでいる。3～5は丸みを帯びた大きな突帯を持つ甕である。3は口縁端部内面に小さな突出が見られ、胴部上位外面に1条沈線を持つ。外面は縦方向のハケ調整、内面は口縁付近は横方向のハケ調整が見られ、以下はナデで仕上げる。底部は浅い上げ底である。4は口縁端部内面に小さな突出が見られ、外面は縦方向の細かいハケ調整、内面はナデとユビオサエで仕上げる。底部は浅い上げ底である。5は胴部上位外面に1条の細い沈線を巡らせ、外面は縦方向のハケ調整、内面はナデにより仕上げる。6～8は甕の底部で、いずれも底面中央のみを窪ませる。8は内面に工具痕が残る。9は精製のやや内湾する鉢で、外面はミガキ調整を行う。10～13は器台で、10は外面を粗いハケ調整、内面はユビによるナデを行う。11～13は外面をナデで仕上げる。内面は11はナデ、12・13はユビによるナデが顕著に見られる。当土坑の資料は良好な一括資料で、弥生時代中期初頭に比定できよう。

14号土坑（図版29、第50図）

調査区南部、12号土坑の北東に位置する。平面形態は円形で径は82cm～90cmである。床面はほぼ平坦で、中央やや北寄りの位置に立ち上がりの緩い径25cm程のピットが存在する。壁面はやや外傾して立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土に小礫と炭を含む。

出土土器（第54図）

1・2は甕の底部で、1は浅い上げ底、2は底面中央のみが窪む。

15号土坑（図版30、第50図）

調査区南寄り、18号土坑の北に位置し17号土坑を切る。平面形態はややいびつな円形で、長軸122cm、短軸98cmである。床面は中央が僅かに窪む。壁面は東壁が緩く立ち上がるが、北、西、南壁は垂直に立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土に小礫と炭を少量含む。

出土土器（第54図）

3は広口壺の口縁部で、端部は肥厚し強いナデによって窪む。4は逆L字状のやや長い口縁を持つ甕。5は鋤先口縁の甕である。6は甕の底部で、底面中央のみが窪む。胴部は全体が摩滅している。当土坑は弥生時代中期前半に比定できよう。

16号土坑（図版30、第50図）

調査区南寄り、7号竪穴住居跡の東に位置する。平面形態は隅丸長方形で長軸114cm、短軸87cmである。床面は平坦で中央やや東寄りの位置に径23cmの浅いピットを有する。立ち上がりは外傾して立ち上がる。埋土はやや明るい褐色弱粘質土で地山ブロックと炭を少量含む。

出土土器（第54図）

7は壺で、頸胴部界に細い突帯を持つ。胴部外面は斜め方向のミガキ調整、内面はユビオサエが見られる。8は稜を持って屈曲し、外に大きく開く甕で、端部は肥厚しやや上方向に跳ね上げる傾向にある。屈曲部下には1条突帯を持つ。調整はナデである。9は丸みを帯びた大きな突帯を持つ甕で、器面は摩滅している。10は丹塗磨研の高杯脚部である。11は高杯脚部で内面にユビオサエが見られる。当土坑は9がやや古い様相を示すが、概ね弥生時代中期前半に比定できよう。

17号土坑（図版30、第53図）

調査区南寄り、5号竪穴住居跡の北に位置し、15号土坑に切られる。北側はピットにも切られるが、平面形態は長方形で、長軸196cm、短軸77cmである。床面はほぼ平坦であるが、北側約3分の1は壁面にむかって徐々に浅くなる。壁面は垂直に立ち上がる。埋土は明るい黄褐色弱粘質土である。

出土土器（第54図）

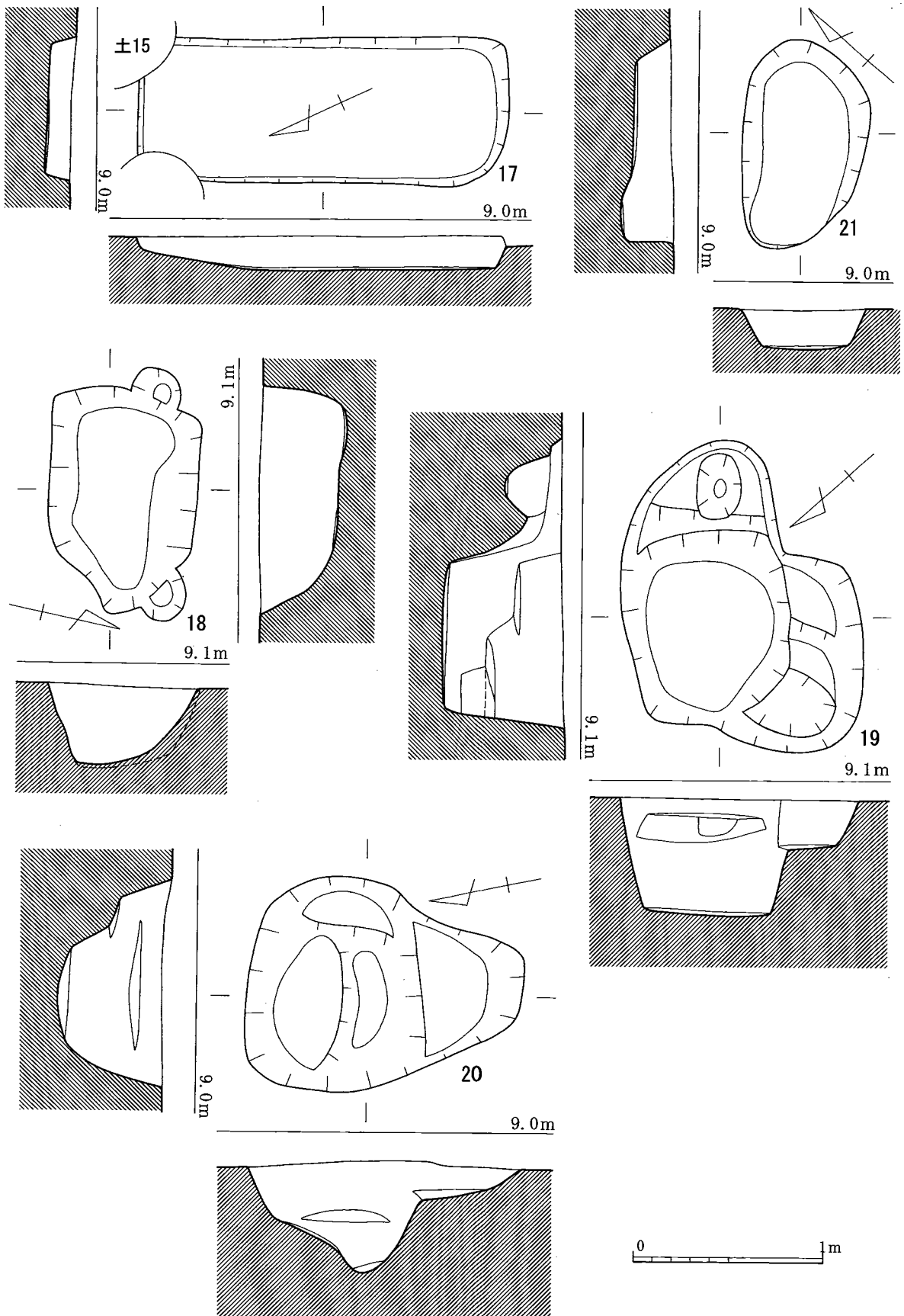
12は逆L字状に小さな三角突帯を持つ甕である。器面は摩滅が著しい。13は口縁内外に突出する甕である。当土坑は出土土器の量が少ないが、弥生時代中期初頭～前半に比定できよう。

18号土坑（図版31、第53図）

調査区南寄り、17号土坑の東に位置する。平面形態は不整楕円形で、長軸120cm、短軸79cmである。2ヶ所でピットと切り合うが、切り合い関係は2ヶ所ともピットが切っていた。床面は西寄りで若干窪む。北側と東側は床面と壁面との境が緩やかである。壁面は外傾して立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土である。

出土土器（第54図）

14・15は壺の底部で、15は底面にもハケ調整を行う。16は口縁内外に突出する甕である。当土坑は



第53图 17~21号土坑实测图 (1/30)

出土土器の量が少ないが、16から弥生時代中期前半に比定できよう。

19号土坑（図版31、第53図）

調査区南寄り、5号竪穴住居跡の北、18号土坑の南に位置する。検出時からいびつな形状であり、最低3つの土坑が切り合っていた可能性が高い。切り合い関係は確認できないまま全体を掘削してしまった。東側と西側に浅い土坑が切り合うものと思われる。東側土坑は楕円形を呈すると思われ、床面に楕円形のピットを有する。西側土坑も楕円形を呈すると思われ、一部掘りすぎてしまったが、床面は元々二段掘りの形態をなすと思われる。中央の深い土坑も楕円形を呈し、長軸102cm、短軸86cmである。床面は平坦であり、壁面はやや外傾して立ち上がるが、東側はやや傾斜が緩い。埋土は褐色弱粘質土で、小礫や炭を少量含む。

出土土器（第54図）

17は壺の底部。18は壺の胴部下半部で上向きの突帯を持つ。突帯の端部はナデにより窪んでいる。19は逆L字状のやや長い口縁を持つ甕で、端部にかけて薄くなる。口縁内面に小さく突出する。器面は摩滅している。20は外面にやや大きめの三角突帯を持つ甕で、口縁内面に弱く突出する。21・22は甕の底部で、21は底面が高く窪み、脚状となる。

20号土坑（図版31、第53図）

調査区南寄り、16号土坑の南に位置する。おそらく南北に2つの土坑が切り合っていたものと思われるが、切り合い関係を確認できないまま掘り下げてしまった。南側の浅い土坑は楕円形を呈すると思われ、床面は中央がやや窪む。南壁の立ち上がりは緩やかである。北側の大きく深い土坑は、やや丸みを帯びるが隅丸方形に近い形状をなし、長軸114cm、短軸90cmである。床面は東側に一段浅くなる箇所があるが、全体としては播鉢状を呈する。壁面は外傾して立ち上がる。埋土は褐色粘質土に小礫を少量含む。

出土土器（第54図）

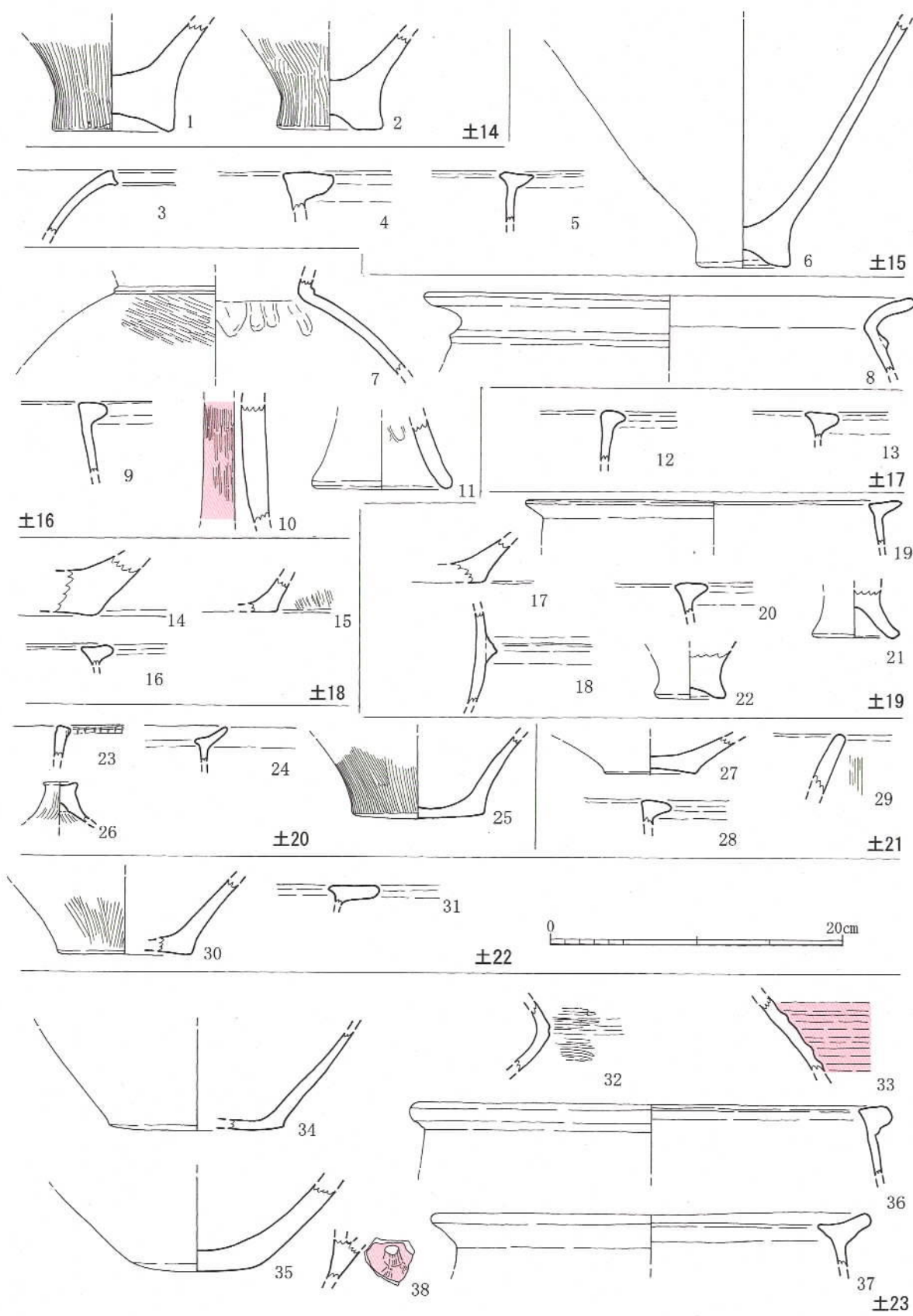
23は甕の口縁部かと思われるが小破片のため傾きもよく分からない。端部外面に上向きの薄い突帯を貼り付けて刻目を施す。24は鋤先口縁の甕である。25は薄い平底の甕の底部かと思われる。26は小さな蓋で、内外面ともハケ調整を行う。当土坑は出土土器の量が少ないが、24から弥生時代中期中頃に比定できよう。

21号土坑（図版32、第53図）

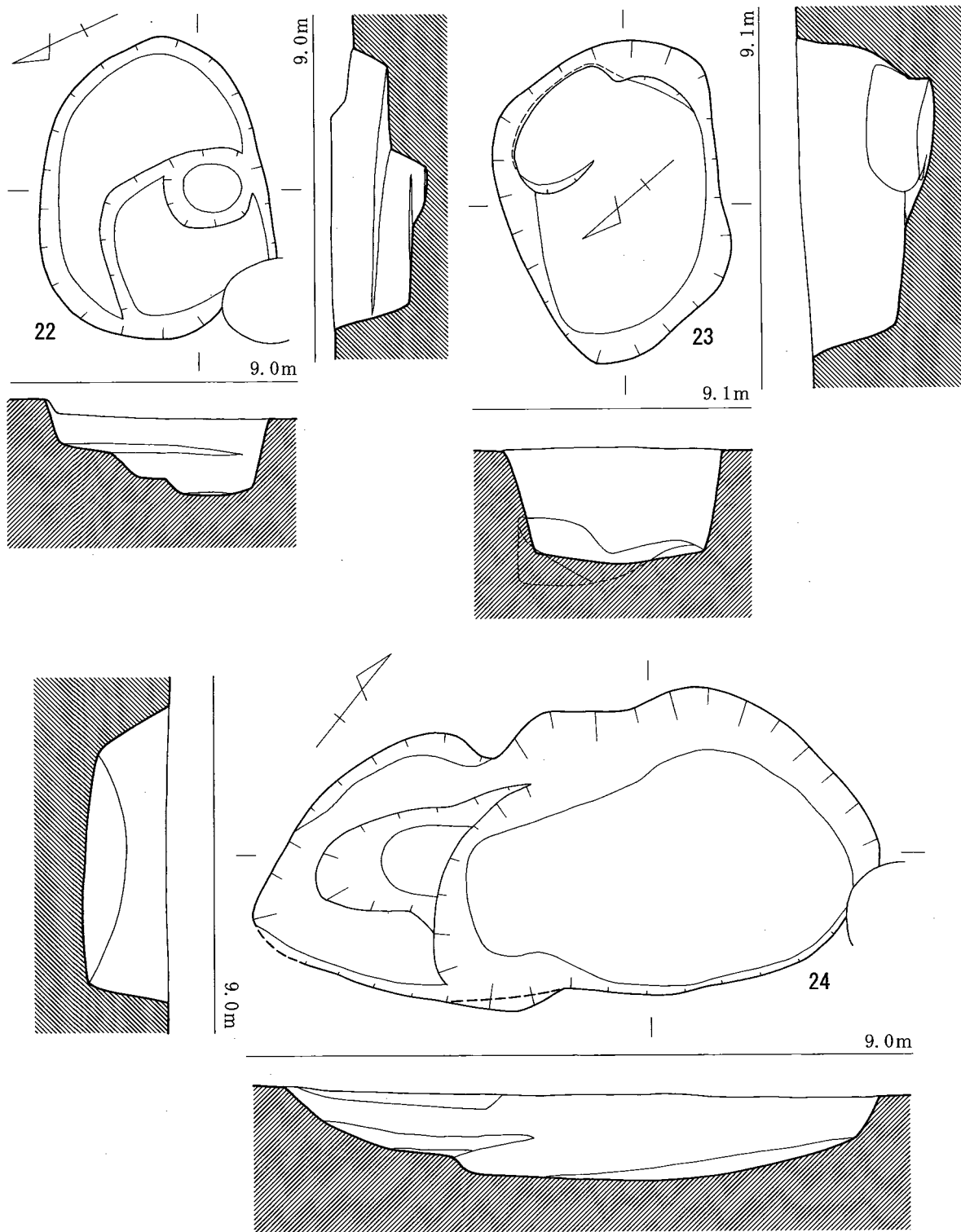
調査区南寄り、7号竪穴住居跡の南東に位置する。平面形態は楕円形で、長軸111cm、短軸67cmである。床面は中央付近では平坦であるが、西壁際で深くなる。壁面は西壁が垂直に立ち上がる他は外傾して立ち上がる。埋土は暗褐色弱粘質土に小礫を少量含む。

出土土器（第54図）

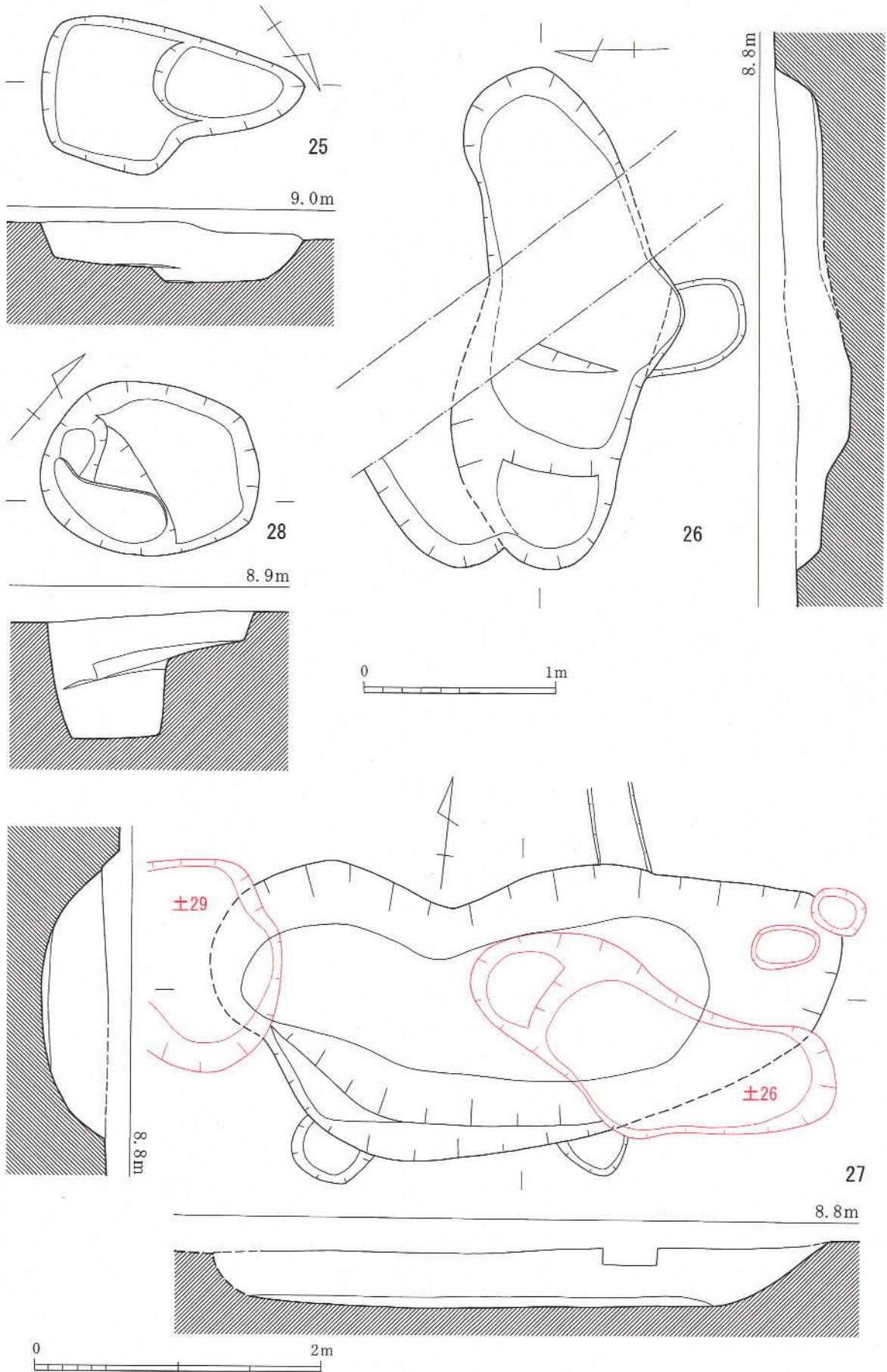
27は壺の底部。28はやや高い三角突帯を持つ甕で、口縁内面の突出は小さい。29は器台で外面にハケ調整を行う。当土坑は出土土器の量が少ないが、28から弥生時代中期前半の時期が考えられる。



第54图 14~23号土坑出土土器实测图 (1/4)



第55图 22~24号土坑实测图 (1/30)



第56図 25~28号土坑実測図 (25・26・28号は1/30、27号は1/40)

22号土坑（図版32、第55図）

調査区南寄り、7号竪穴住居跡の北東に位置する。平面形態は楕円形で、長軸148cm、短軸110cmである。南西隅はピットによって切られている。床面は南西側で一段下がり、二段掘りの形態をなす。南壁に近い箇所に径40cm程のピットを持つが、本土坑に伴うものかは不明である。壁面は外傾して立ち上がる。埋土は暗褐色弱粘質土に小礫を少量含む。

出土土器（第54図）

30は甕の底部で外面ハケ調整を行う。31は鋤先口縁の高杯で摩滅が著しい。当土坑は出土土器の量が少ないが、31から弥生時代中期中頃が考えられようか。

23号土坑（図版32、第55図）

調査区南寄り、7号竪穴住居跡の南に位置する。平面形態は丸みを帯びた不整隅丸長方形で、長軸148cm、短軸105cmである。床面は東側で一段下がり、この部分は壁面もオーバーハングすることから、東西で二つの土坑が切り合っていた可能性が高い。東側の土坑は貯蔵穴の用途に使用されたものだろうか。西側の床面は平坦で壁面は外傾して立ち上がる。埋土は暗褐色弱粘質土に小礫をやや多く含む。

出土土器（第54図）

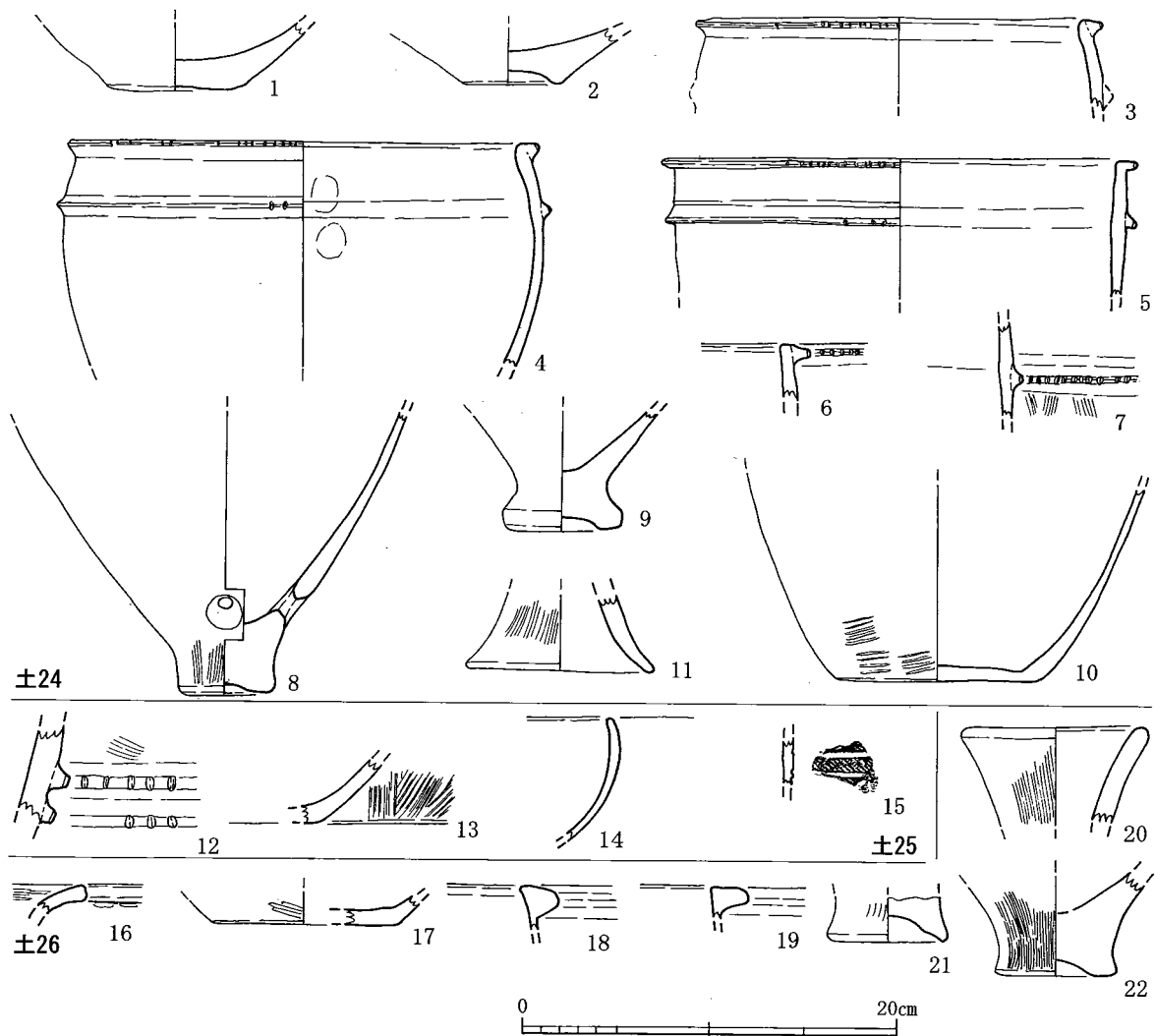
32は壺の胴部で最大径の位置に1条の幅広い沈線を巡らす。ミガキ調整を行い沈線内もよくミガキを施す。33は丹塗磨研の壺と思われ3条の三角突帯を巡らす。34・35は壺の底部で、35は底面がやや突出ぎみとなる。36は外面に丸みを帯びた大きな突帯を持つ甕で、口縁内面に弱く突出する。器面は摩滅している。37は口縁内面に大きく突出し上面が窪む甕である。内外面ともナデによって仕上げる。38は丹塗磨研の鉢かと思われる。把手のようなものが付いていたと思われるが破損しているため詳細は不明。

24号土坑（図版33、第55図）

調査区南寄り、22号土坑の北に位置する。平面形態は不整楕円形で、長軸306cm、短軸142cmであるが、平面形態でくびれる箇所があり、なおかつその部分より西側は一段浅くなるため、本来は二つの土坑が切り合っていた可能性が高い。検出当初は形態もいびつなことから、落ち込みとして認識しており、切り合い関係を確認できなかった。東側土坑の床面は東側に向かって徐々に浅くなり、壁面は北側では緩やかに外傾するのに対し、南側は垂直に立ち上がる。西側土坑の床面は掘削の際に段が生じてしまったが、本来は摺鉢状に窪むものと思われる。壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は褐色弱粘質土に小礫、地山ブロックを少量含む。

出土土器（図版58、第57図）

1・2は壺の底部で、2は底面が大きく窪む。3～6は口縁外面に小さな三角突帯を持つ甕で、いずれも突帯上に刻目を施す。3は胴部突帯が剥がれ擬口縁が確認できる。器面は摩滅している。4は突帯間の調整はナデ、胴部下半は摩滅が著しい。5は胴部突帯の上側を強くナデることによって下向きの突帯となる。突帯間はナデ調整、胴部下半は摩滅している。7は胴部破片で小さな三角突帯を持ち、突帯上に刻目を施す。口縁部はおそらく3～6と同様のものとなろう。突帯より上側はナデ、下側はハケ調整を行う。8～10は甕の底部で、8は底部直上に焼成後の穿孔が見られる。底面は上げ底となる。9は外側に大きく張り出す底部で底面は中央が窪む。10は平底で底部付近にタタキの痕跡が



第57図 24～26号土坑出土土器実測図 (1/4)

残る。11は高杯脚部で外面にハケ調整を行う。当土坑は最低二つの土坑が切り合っているが、うち一つは出土土器から弥生時代前期まで遡る可能性がある。

25号土坑 (図版33、第56図)

調査区南寄り、23号土坑の南東に位置する。平面形態はいびつであり、本来は東側の方形の土坑と西側の楕円形の土坑が切り合っていたものと思われる。床面も東西で段差が生じており、東側の方形土坑の方が深くなる。それぞれの床面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がる。

出土土器 (第57図)

12は壺の胴部で、太く高い台形状の突帯を2条持ち刻目を施す。外面に一部ハケ調整の痕跡が確認できる。13は壺の底部で外面はハケ調整を行う。14はやや内湾するボール状の鉢で、内外面ナデ調整で仕上げる。15は縄文土器で平行沈線間にLR縄文を充填する。沈線と縄文との先後関係は沈線が後である。時期は縄文時代後期の北久根山式が考えられる。

26号土坑（図版33、第56図）

調査区南寄り、7号竪穴住居跡の床面で検出した。平面形態は長楕円形で、長軸262cm、短軸は約95cmである。7号竪穴住居跡の床面を確認するために設定したサブトレンチによって中央を横断する格好で壊してしまった。床面は中央やや西寄りの箇所ですく深くなる他はほぼ平坦である。壁面は外傾して立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土である。

出土土器（第57図）

16は広口壺の口縁部で、端部は若干肥厚し、強いナデによって窪む。内面はミガキ調整が見られる。肥厚部分の外面にユビオサエを施す。17は壺の底部で内外面ともミガキ調整を行う。18は口縁部に丸みを帯びた大きな突帯を持つ甕で、内面に小さく突出する。19は逆L字状のやや長い口縁を持つ甕で、内面は小さく突出する。20は器台で外面はハケ調整を行う。21・22は甕の底部で、21は底面が全体的に高く窪む。外面はハケ調整を行う。22は底面中央のみ窪む。外面はハケ調整を行う。当土坑は弥生時代中期初頭～前半に比定できよう。

27号土坑（図版34、第56図）

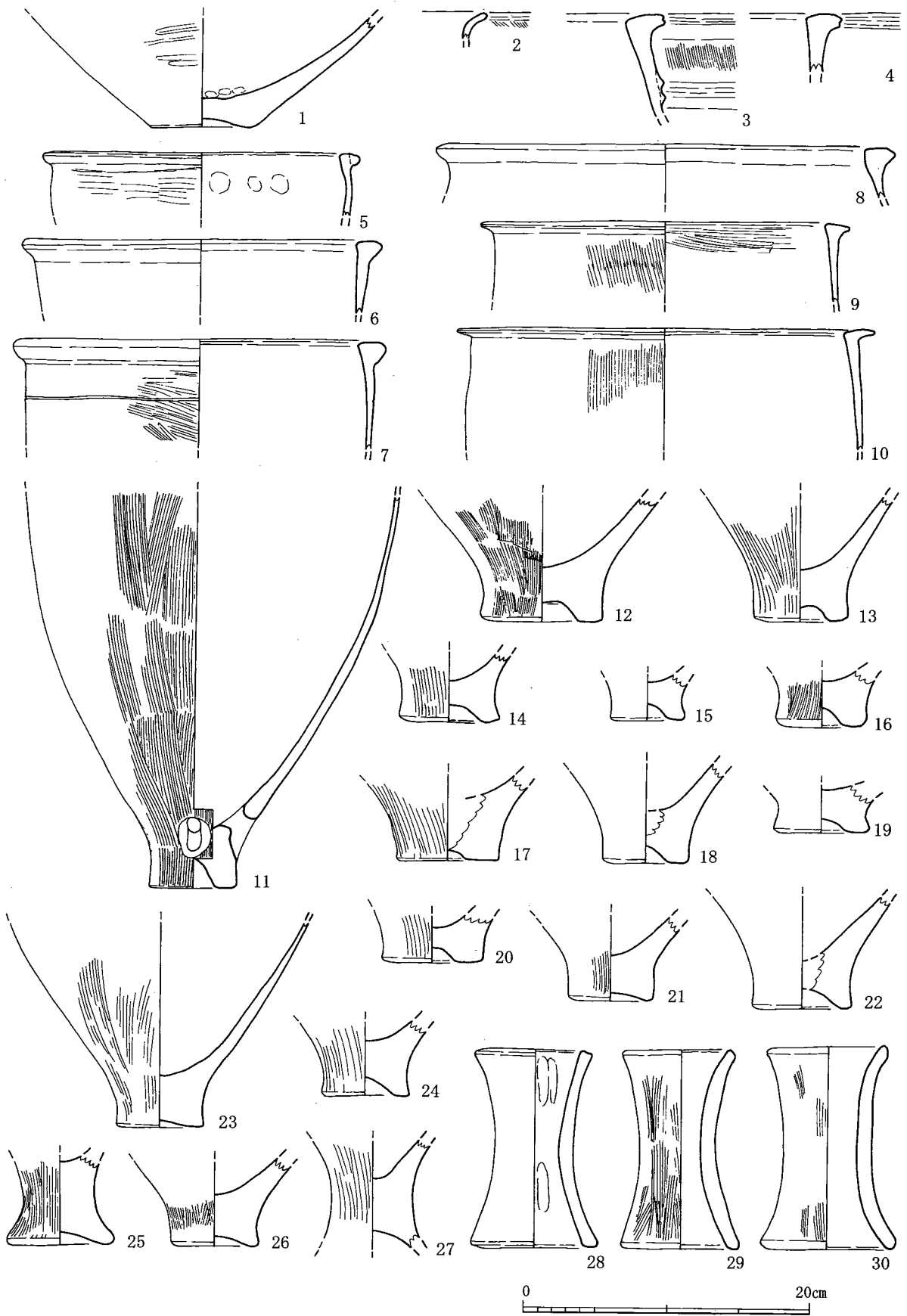
調査区南寄りに位置し、26号、29号土坑に切られる大型土坑である。平面形態は長楕円形で、長軸約440cm、短軸190cmである。平面形態で若干くびれる箇所があるが、切り合い関係は認められず、1つの土坑と考えられる。床面は平坦で、壁面との境界はなだらかになる。壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は黄褐色粘質土である。

出土土器（図版59、第58図）

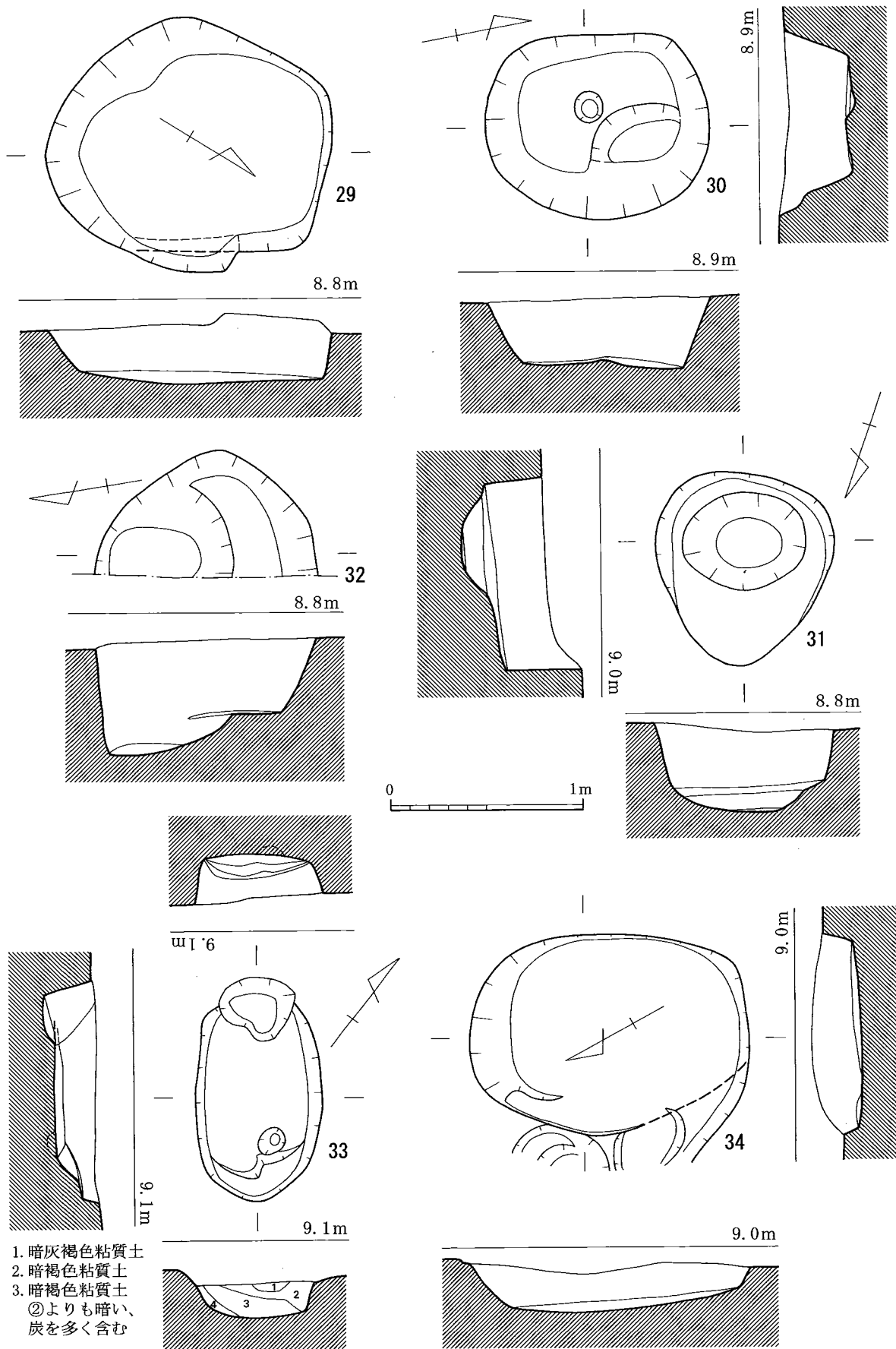
1は壺の底部で、外面は横方向の単位の大なミガキ調整を行う。底部内面はユビオサエが顕著に見られる。底面は上げ底である。2は壺の口縁部で、外面に一部ハケ調整の痕跡が見られる。3～10は甕の口縁部である。3・4は口縁外面に大きな三角突帯を貼り付け、突帯端部がナデによって窪む。3は胴部に2条の小さな三角突帯を貼り付ける。調整は外面ハケ調整。4は摩滅しており調整は不明。5は口縁部外面に小さな三角突帯を貼り付け、外面に横方向の粗いハケ調整、内面はユビオサエを施す。6は口縁外面にやや大きな上向きの三角突帯を貼り付け、口縁内面は小さく突出する。7は口縁部外面に丸みを帯びた大きな突帯を持ち、胴部上位に1条沈線を巡らす。外面はミガキ調整、内面はナデによって仕上げる。8は口縁部にやや大きな三角突帯を貼り付ける。摩滅が著しい。9は口縁部外面に薄い三角突帯を貼り付け、外面は縦方向のハケ調整、内面は口縁部付近が横方向のハケ調整、以下はナデによって仕上げる。10は薄い逆L字状の口縁部に仕上げ、外面は縦方向のハケ調整である。11～27は甕の底部で、11～20は底面の中央が窪み、21～27は底面全体が窪む。調整は15・18・19が摩滅して不明であるが、その他は全て縦方向のハケ調整を行い、特に13・17・24・27は粗い原体を使用する。11は底部と胴部の境界付近に焼成後穿孔を行う。12は窪み部分の中央が出べそ状に少し突出する。25は底部の中実部分が高く、端部のみが外に張り出す。28～30は器台である。28は外面の摩滅が著しいが、29・30は外面にハケ調整を行う。内面は28でユビオサエが顕著に見られる。当土坑は弥生時代中期初頭に比定できよう。

28号土坑（図版34、第56図）

調査区南寄り、9号竪穴住居跡の南に位置する。平面形態は楕円形で、長軸114cm、短軸90cmであ



第58图 27号土坑出土土器实测图 (1/4)



第59図 29~34号土坑実測図 (1/30)

る。南側で急激に落ちる箇所があり、この部分は壁面も垂直に立ち上がる。二つの土坑が切り合っていることも想定できるが、掘削中に確認することができなかった。埋土は褐色弱粘質土に小礫を含む。

出土土器（第60図）

1は壺の胴部で、2条の高い三角突帯を持ち小さな刻目を施す。突帯の上下にユビオサエを施す。2は口縁部外面に高い三角突帯を貼り付ける甕で、口縁直下にもう1条三角突帯を貼り付ける。突帯上は小さな刻目を施す。3は甕の胴部に小さな三角突帯を貼り付け刻目を施す。調整はナデで仕上げる。口縁部は外反口縁になる可能性がある。4は口縁部外面に丸みを帯びた大きな突帯を貼り付ける甕である。5は逆L字状に長い口縁部を持つ甕で、内面の稜直下はナデによって窪む。器面は摩滅している。当土坑は5から弥生時代中期前半に比定できよう。

29号土坑（図版34、第59図）

調査区南寄り、28号土坑の南に位置し、27号土坑を切る。平面形態は楕円形で、長軸148cm、短軸約125cmである。東壁は一部掘りすぎてしまった。床面はほぼ平坦で、南壁は緩やかに立ち上がるのに対し、北壁は垂直に立ち上がる。

出土土器（図版59、第60図）

6～8は壺の口縁部である。6は端部にかけて器壁が厚くなる。器面は摩滅している。7の端部は若干肥厚し、ナデによるスジがつく。8は内面に三角形の肥厚を持つ。9～11は甕の口縁部である。9・10は薄い逆L字状の口縁に仕上げるが、10は外側に小さく突出するに留まる。11は逆L字状に長い口縁を持ち、内端部は小さく突出する。12～15は甕の底部でいずれも底面中央が窪む。15は外側への張り出しが強い。16は器台で全面をナデにより仕上げる。当土坑は8や11から弥生時代中期前半に比定できよう。

30号土坑（図版35、第59図）

調査区中央やや南寄りに位置し、15号竪穴住居跡を切る。平面形態は楕円形で、長軸112cm、短軸98cmである。床面は北側で緩く落ちるがほぼ平坦である。中央に浅い径15cm程のピットを有する。壁面は外傾して立ち上がる。埋土は暗褐色弱粘質土に地山ブロックを含む。

出土土器（第60図）

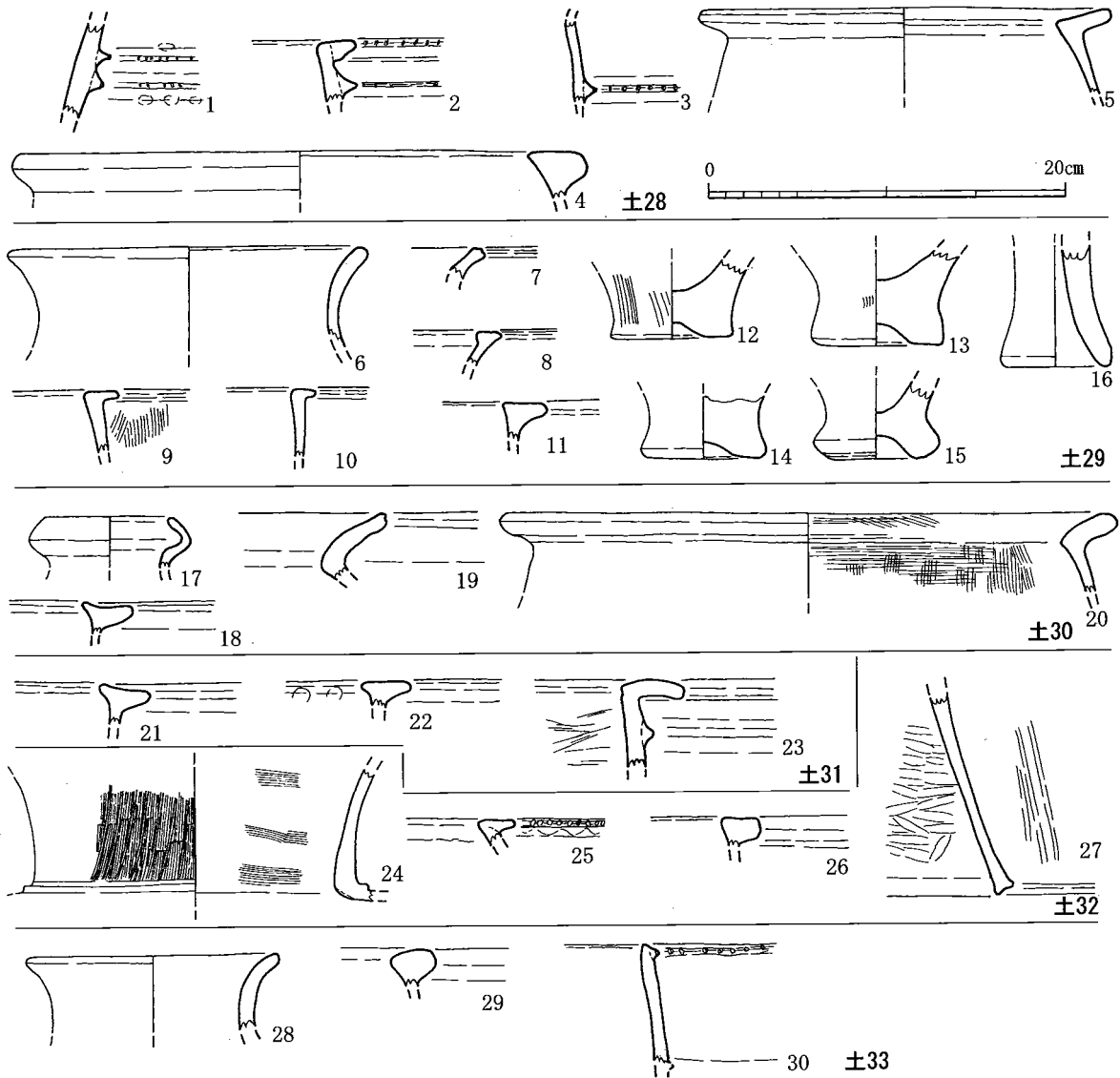
17は壺の口縁部で複合口縁と呼べる形態をとる。18～20は甕である。18は外面に逆L字状の長い口縁を持ち、内面は大きく突出する。19は屈曲し外側に大きく開く口縁で、端部はナデによって小さく窪む。20は屈曲が強く外側に大きく開く口縁で、端部にかけて肥厚し丸く収める。胴部内面は縦横両方向に粗いハケ調整を行う。当土坑は17から弥生時代後期初頭に比定できよう。

31号土坑（図版35、第59図）

調査区中央やや南寄り、30号土坑の北に位置し、15号竪穴住居跡を切る。平面形態は楕円形で、長軸100cm、短軸93cmである。床面は南寄りの位置で、楕円形プランの緩く一段下がる落ちがある。壁面は垂直に立ち上がる。

出土土器（第60図）

21・22は外面に逆L字状の長い口縁を持つ甕で内面は大きく突出する。23は逆L字状に口縁が長く



第60図 28～33号土坑出土土器実測図 (1/4)

延び、内面はナデによって窪む。口縁部直下に三角突帯を1条持つ。内面は板状工具によるナデを施す。

32号土坑 (図版35、第61図)

調査区中央やや南寄り、30号土坑の西に位置する。15号竪穴住居跡の床面で確認した。西半分は調査区外に延びる。平面形態は楕円形と思われ、長軸は116cmである。北壁際で一段落ち、二段掘りの形態をなす。壁面は垂直ぎみに立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土に地山ブロックを含む。

出土土器 (第60図)

24は壺で頸胴部界に細い突帯を貼り付ける。頸部は暗文風に縦ミガキを施すが、ハケ調整の痕跡も確認できる。内面は摩滅しているが横方向のハケ調整が確認できる。25・26は甕である。25は口縁部を逆し字状に薄く仕上げ、端部を爪によって雑に刻む。26は方形状の突帯を貼り付ける。27は高杯の脚部と思われ、端部は強いナデによって大きく窪む。外面は長い縦方向のミガキを施し、内面は横方

向のミガキ調整を行う。

33号土坑（図版36、第59図）

調査区北西隅に位置する。平面形態は楕円形で、長軸110cm、短軸66cmである。北西隅でピットと切り合うが、検出当初に確認できなかったため切り合い関係は不明である。床面はほぼ平坦であるが、小さな窪みがいくつか見られ、また東壁際では一段高くなる。壁面はやや外傾して立ち上がる。埋土は3層に分かれ、上層は暗褐色粘質土、中層は暗褐色粘質土に炭を多く含み、下層は暗褐色粘質土に地山ブロックを少量含む。

出土土器（図版59、第60図）

28は壺の口縁部である。29は甕の口縁部で方形ぎみの大きな突帯を貼り付ける。30は口縁部外面に小さな三角突帯を貼り付け小さな刻目を施す。胴部にも突帯を貼り付けるが、欠損しており詳細は不明。調整は内外面ともナデによって仕上げる。当土坑は出土土器が少ないが弥生時代中期初頭～前半に比定できよう。

34号土坑（図版36、第59図）

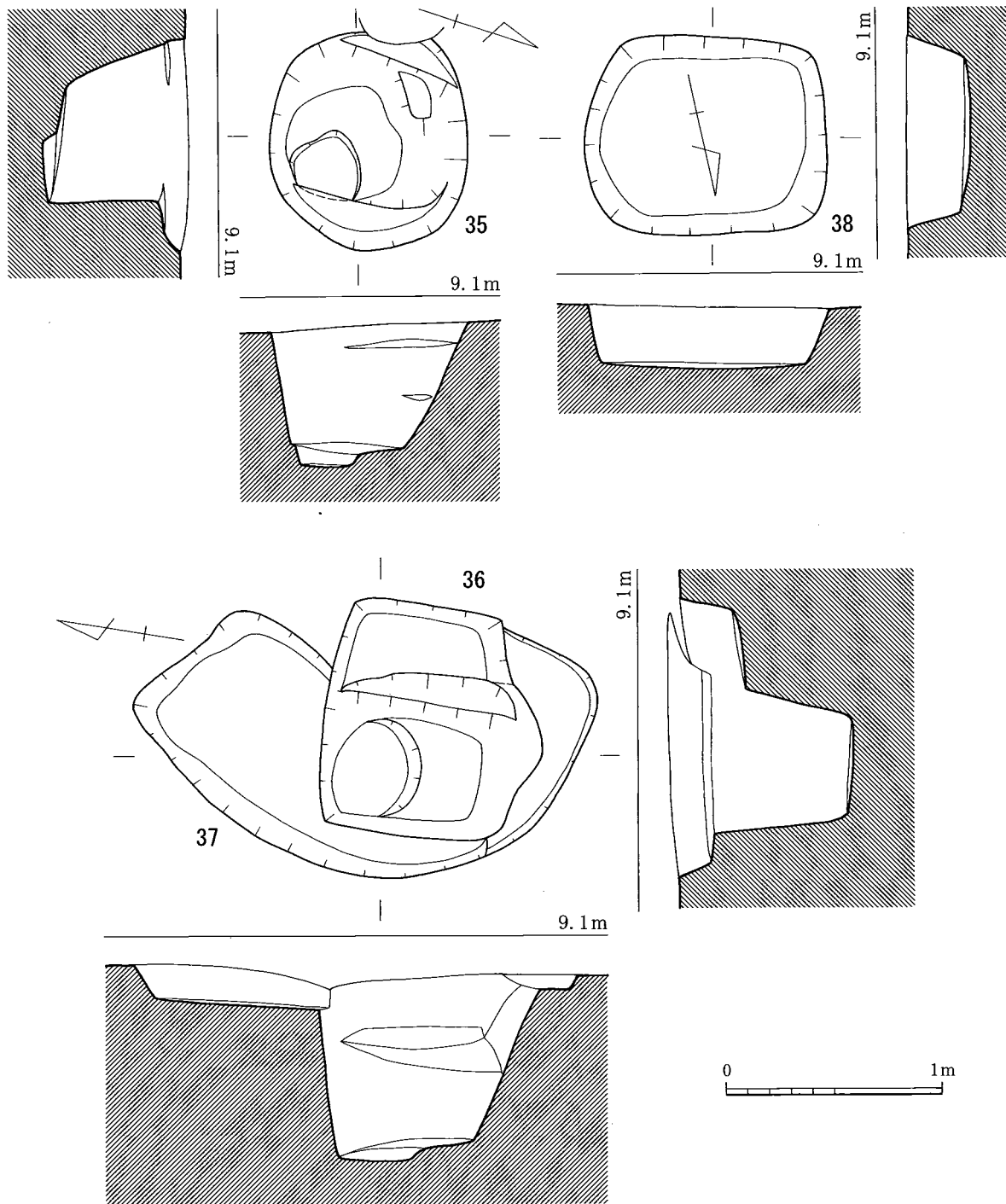
調査区北部、11号竪穴住居跡の西に位置する。平面形態は楕円形で、長軸145cm、短軸106cmである。床面は全体的に緩やかに窪み、壁面は外傾して立ち上がる。埋土は黒褐色の炭、炭化物を多く含んだもので、一部生焼け粘土、骨片も見られた。特に炭化したイチイガシが多量に出土し注目できる（IV章参照）。土坑の床面は赤変しておらず、性格は不明である。

出土土器（第62図）

1・2は壺である。1は口頸部破片と胴部破片が接合しないが、図のように復原できる。口縁部は短いが強く外反し、端部は若干肥厚ぎみになり丸く収める。口縁部直下と頸胴部界にそれぞれ1条沈線を巡らせる。調整は外面は摩滅が著しく、口縁部付近にユビオサエの痕跡が残るのみであるが、内面は口縁部付近にユビオサエ、以下にミガキ調整が確認できる。2は頸部が内側に傾き、口縁部が強く外反する。破損しているが口縁部に段が認められる。頸胴部界には2条沈線を巡らせる。調整は外面頸部は縦方向の、胴部は横方向のミガキ調整、内面は横方向のミガキ調整を行う。3は甕の底部か。摩滅が著しいがユビオサエが顕著に見られる。4～10は甕で、口縁部外面に小さな三角突帯を持ち小さな刻目を施す。胴部まで残る破片はすべて胴部にも小さな三角突帯を持つ。調整は外面はいずれもナデで、内面はユビオサエが見られるものが多い。6は胴部突帯が剥がれている。内面は一部ハケの痕跡が残る。8は胴部に2条1組の突帯を巡らす。口縁部突帯の下側はユビオサエを強く施す。10は口縁部突帯が細い。胴部突帯の端部は欠損している。11は甕の底部で底面中央が窪む。12は精製の鉢と思われ、口縁部外面に小さな突帯を持ち、ミガキ調整を施す。13は壺の胴部になるうか。やや上向きの無刻目突帯を持ち、外面はミガキ調整、内面は摩滅しているがユビオサエの痕跡が残る。当土坑は13が新しい時期のものの混入である可能性が高いが、他は時期的にまとまりを見せており弥生時代前期後半に比定できよう。

35号土坑（図版37、第61図）

調査区北東隅に位置する。平面形態は検出時は円形で、径は92cm～102cmであったが、掘削してい

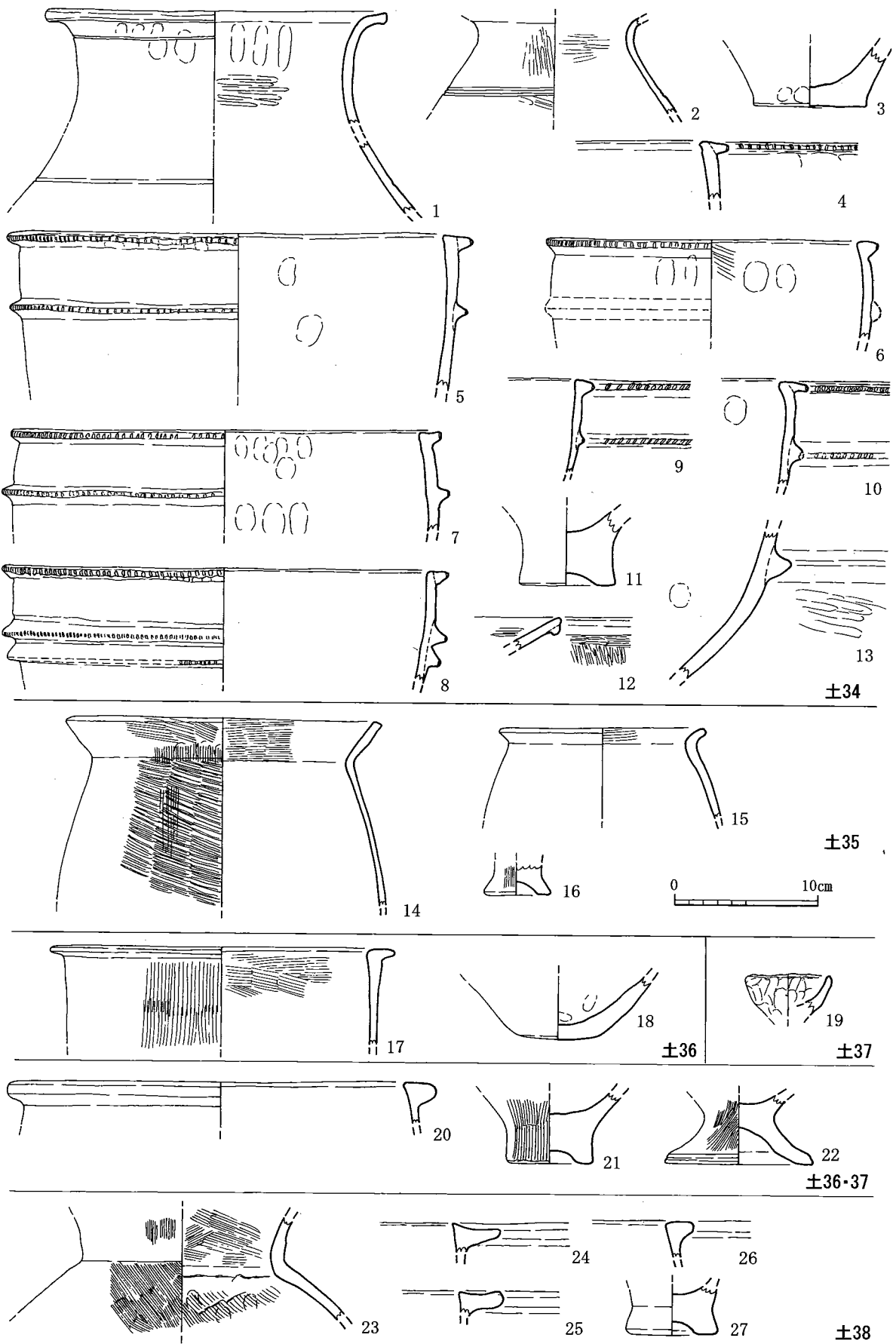


第61図 35～38号土坑実測図 (1/30)

くと長方形に近い形状となった。床面は播鉢状の円形であり、南東側は一段下がる。東壁ではややオーバーハングして立ち上がるが、その他の壁面はやや外傾して立ち上がる。埋土は灰褐色粘質土である。

出土土器 (第62図)

14・15は甕である。14は屈曲し外に開く甕で端部は面を持つ。口縁部は内外面ともハケ調整、胴部外面はハケ調整の痕跡もあるがタタキの痕跡が目立つ。内面は摩滅が著しい。15は胴部が張り口縁部



第62图 34~38号土坑出土土器实测图 (1/4)

は短く強く外反する。摩滅が著しいが口縁部内面に一部ハケ調整が見られる。16は甕の底部で、底面中央が高く窪む。当土坑は14のタタキが卓越する甕の特徴から弥生時代後期後半に比定できよう。

36号土坑（図版37、第61図）

調査区北側に位置し、37号土坑を切る。当初プランがはっきりしなかったため、周辺の切り合う遺構も一緒に掘り下げてしまった。東側及び南側に別の落ちが存在するが、本土坑とは関係がないものと考えている。平面形態は長方形で、長軸102cm、短軸77cmである。床面は北側で緩く落ち込む箇所がある他は平坦である。南壁はやや外傾して立ち上がるが、その他の壁面は垂直に立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土に大きい地山ブロックを多く含む。

出土土器（第62図）

17は甕で口縁部外面に細い突帯を貼り付け逆L字状に仕上げる。外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整を行う。18は甕の底部と思われ、底面はやや尖状ぎみに仕上げる。摩滅が著しいが内面はユビオサエが見られる。

37号土坑（図版37、第61図）

調査区北側に位置し、36号土坑に切られる。平面形態は長方形に近いが、南西側は丸くなる。長軸65cm、短軸は84cmである。床面は平坦で壁面はやや外傾する。埋土は36号土坑と似るが、やや明るい。

出土土器（第62図）

19はミニチュア土器でボール状の単純な器形を呈し、外面調整はケズリとユビオサエを行う。20～21は36号土坑と37号土坑の切り合い関係が分からない段階で出土した土器である。20は口縁部外面に丸みを帯びた大きな突帯を持つ甕で、口縁部内面にも大きく突出する。21・22は甕の底部である。21は底面中央が高く窪む。22は脚を有するもので、端部はナデにより少し窪む。外面はハケ調整が見られる。

38号土坑（図版37、第61図）

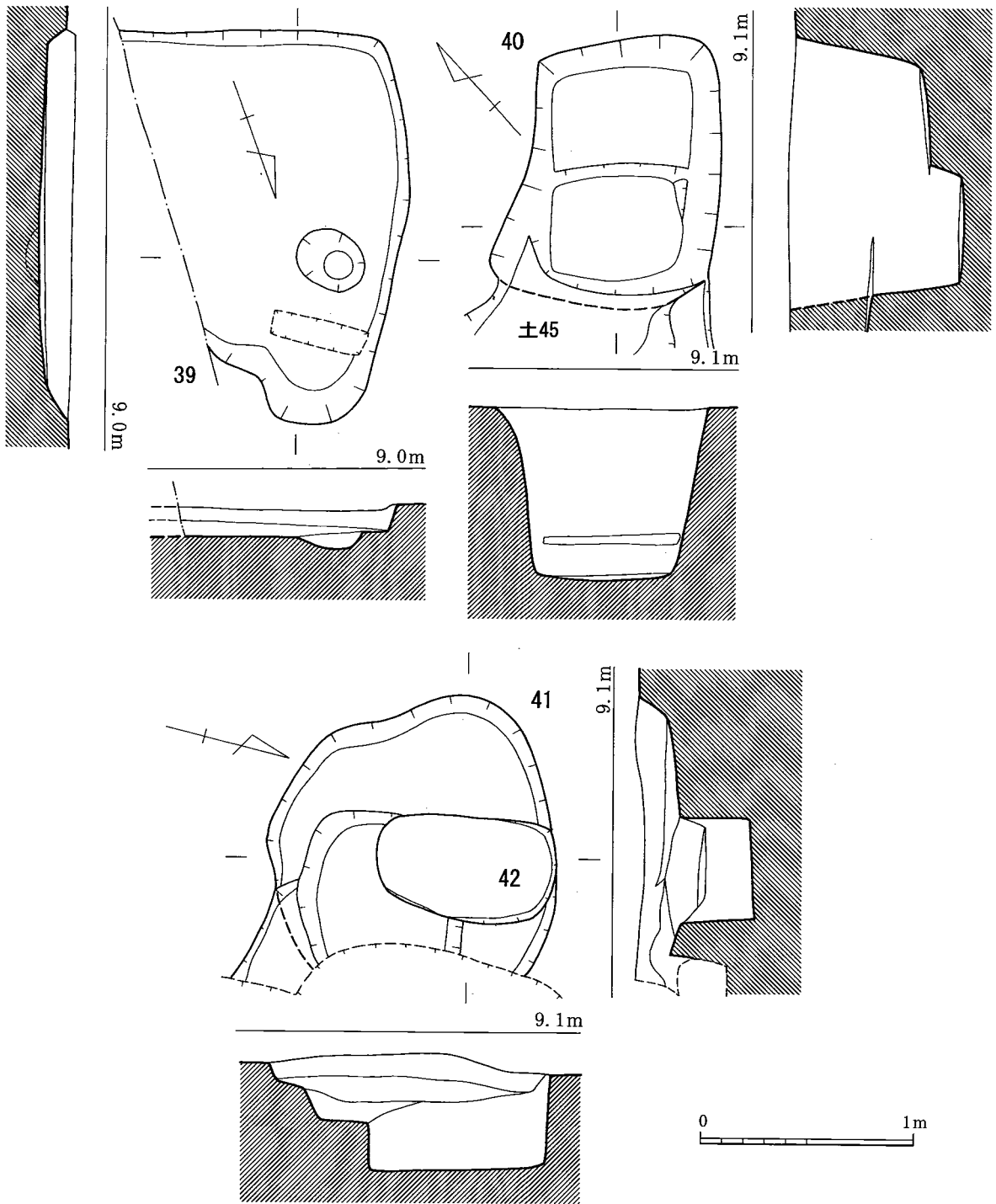
調査区北寄り、36号土坑の南東に位置する。平面形態は隅丸長方形で、長軸113cm、短軸92cmである。床面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土に地山ブロックを多く含む。

出土土器（第62図）

23は壺の頸胴部破片で、頸胴部界で強く屈曲し頸部は外に開く。内外面ともハケ調整を施す。24～26は甕である。24・25は逆L字状に長い口縁部を持つ甕で、上面は窪み内面は少し突出する。26は口縁部外面に丸みを帯びた突帯を貼り付けるものである。27は甕の底部で底面は中央が窪む。当土坑は出土土器の量が少ないが、24・25から弥生時代中期前半に比定できよう。

39号土坑（図版38、第63図）

調査区北寄り、11号竪穴住居跡の床面で確認した。平面形態は不整形で、東側は調査区外に延びる。南壁が11号竪穴住居跡の南壁の延長上にあることから、11号住居跡の屋内土坑の可能性も否定できないが、埋土に含まれる土器の量が、11号住居跡とは異なりかなり多く、様相を異にするため11号竪穴住居跡とは関係のない土坑と考えている。南北軸は187cmである。床面はほぼ平坦で、西寄りの



第63図 39～42号土坑実測図 (1/30)

箇所に浅く緩い立ち上がりのピットを有する。北壁は緩く立ち上がるが、その他の壁面はやや外傾して立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土に地山ブロックと炭を少量含む。

出土土器 (第64図)

1～4は甕である。1・2は胴部が張り、口縁部は稜を持って強く屈曲し外に開く。端部は丸く収める。調整は1は内外面ハケ調整、内面にはユビオサエも見られる。2は全面摩滅している。3は胴部が張らず、口縁部は屈曲し外に開く。口縁部は長く延び、端部は外端が若干肥厚する。器面は摩滅

が著しい。4は丸みを帯びた大きな突帯を持ち、内面は大きく突出する。口縁部直下には小さな三角突帯を持つ。5は甕の底部で底面中央が窪む。6は内湾する器形の鉢で口縁端部は面を持つ。内外面横方向のハケ調整を行う。7は丹塗磨研の鋤先口縁の高杯で端部は欠損する。摩滅が著しいが外面にハケ調整の痕跡が残る。8は丹塗磨研の高杯脚部で、杯部の底は粘土を充填している。脚部内面には絞り目が見られ、脚柱部はミガキ、脚裾部はハケ調整を行う。当土坑は3がやや新しい様相を示すが後期初頭頃に比定できるのではないだろうか。

40号土坑（図版38、第63図）

調査区北端に位置し、45号土坑を切る。検出当初は切り合い関係がよく分からず、45号土坑と同時に掘削してしまったため、南壁は上半分を壊してしまった。平面形態は長方形で、長軸125cm程、短軸90cmである。床面は南側で一段下がり、二段掘りの形態をなす。それぞれの段は平坦である。壁面は垂直ぎみに立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土に地山ブロックを多く含む。

出土土器（第64図）

9は小型精製壺で器面は全面摩滅している。10は鉢か高杯と思われる。胴部は中程でやや屈曲して立ち上がり、口縁部は外反して開き端部にかけて細くなる。端部は強いナデのため窪む。調整は外面はハケ調整、内面は口縁部はハケ調整、胴部はナデである。

41号土坑（図版38、第63図）

調査区北端、40号土坑の東に位置する。42号土坑と切り合うが、おそらく当土坑が新しいと思われる。東側は攪乱、南東側は別の落ち込みによって壊されている。平面形態は楕円形で、短軸は134cmである。床面は平坦で、南東寄りに一段浅く落ちる箇所があるが、これは当土坑とは直接関係のない落ち込みであろう。壁面は外傾して立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土に少量の炭を含むものである。

出土土器（第64図）

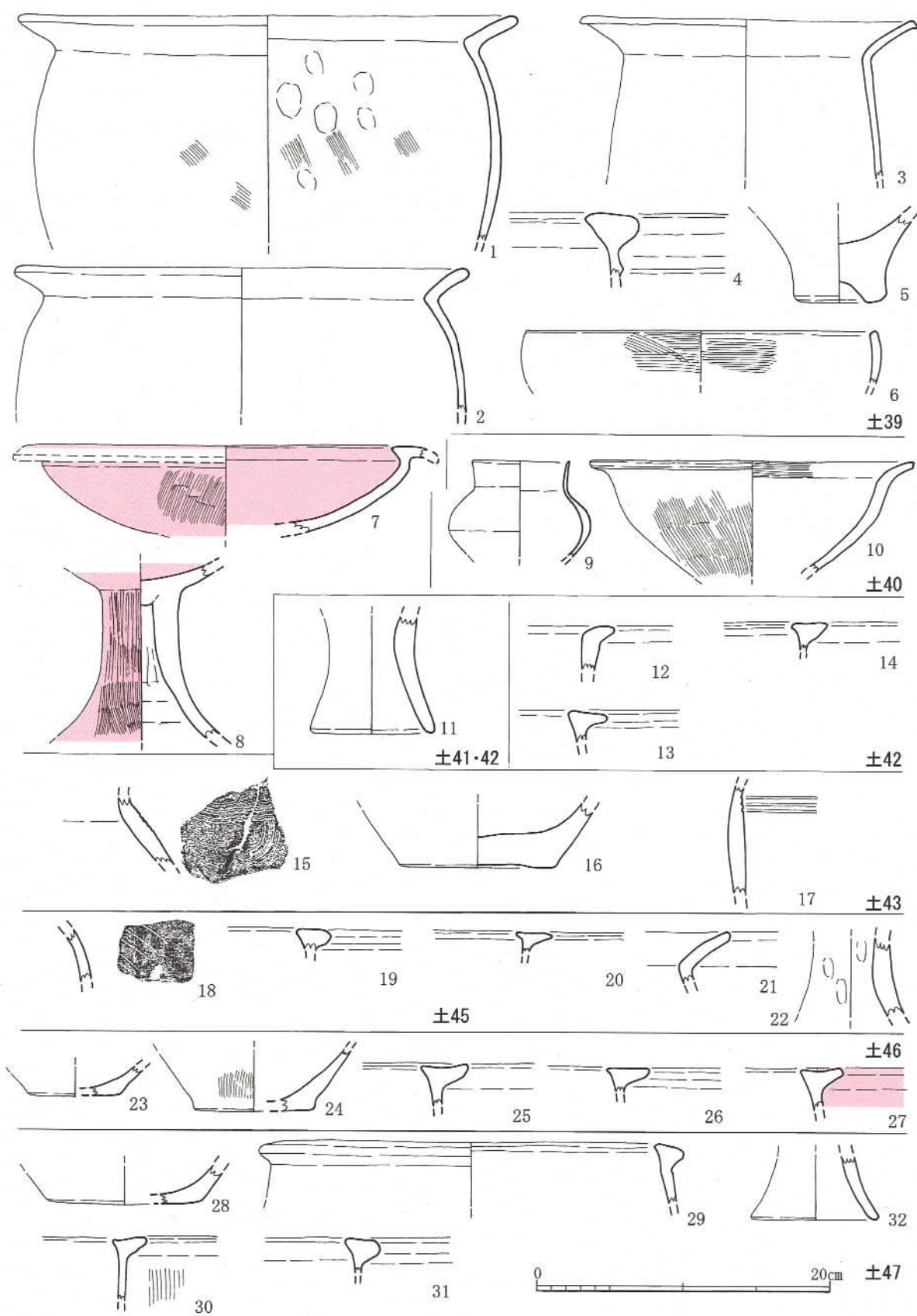
10は42号土坑との切り合い部分から出土した器台で、器面は摩滅している。41・42号どちらに帰属するものかは不明である。

42号土坑（図版38、第63図）

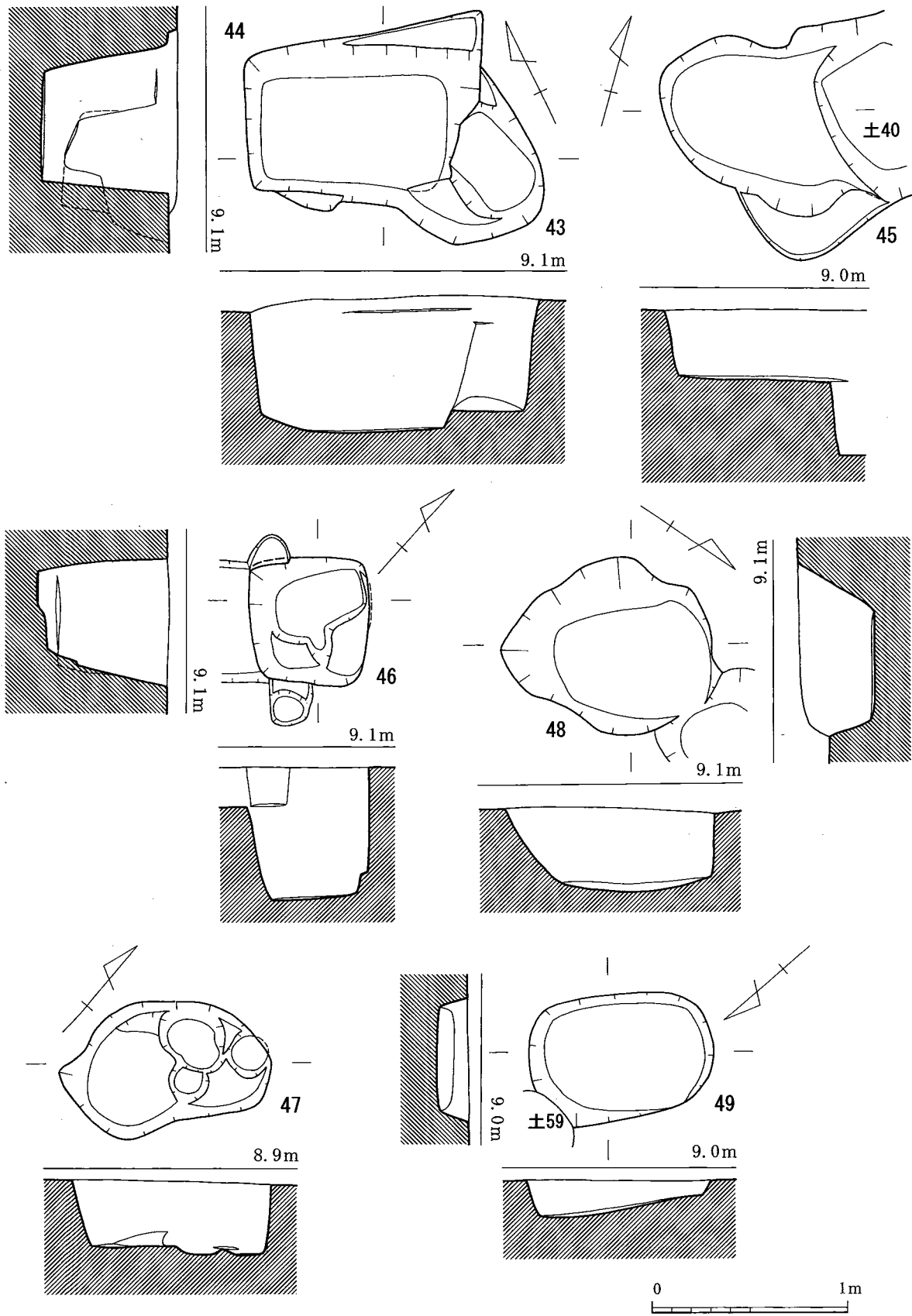
調査区北端、40号土坑の東に位置する。41号土坑の床面で確認できたことから、当土坑が古いと思われる。平面形態は楕円形で、長軸82cm、短軸50cmである。床面は平坦で、壁面は垂直に立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土に地山ブロックを含む。

出土土器（第64図）

12～14は甕である。12は口縁部が内面に稜を持って短く外反し、先細りぎみに収める。器面は摩滅している。13はやや長めの逆L字状の口縁を形成する。14は鋤先口縁の甕である。当土坑は土器の出土量が少ないが、弥生時代中期前半に比定できる可能性が高い。



第64图 39~43号·45~47号土坑出土土器实测图 (1/4)



第65图 43~49号土坑实测图 (1/30)

43号土坑（図版39、第65図）

調査区北部、33号土坑の東に位置し、44号土坑と切り合う。切り合い関係は両土坑の埋土が非常に似通っていたため、確認できずに完掘してしまった。平面形態は楕円形で、短軸78cmである。東西両側は段を持って立ち上がる。床面は東側が若干上がる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土に地山ブロックと多く含む。

出土土器（第64図）

15は壺の胴部に波状文と重弧文を描く。16は壺の底部で器面は摩滅している。17は甕で口縁部下に3条の沈線を巡らす。調整はナデで仕上げる。

44号土坑（図版39、第65図）

調査区北部、33号土坑の東に位置し、43号土坑と切り合う。平面形態は長方形で、長軸120cm、短軸82cmである。床面はほぼ平坦であるが、西側は少し緩やかに上がる。壁面はやや外傾して立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土に地山ブロックと多く含む。当土坑からは図示できる土器は出土していない。

45号土坑（図版39、第65図）

調査区北端に位置する。40号土坑に切られるため東側は大きく壊されている。平面形態は楕円形で、短軸は75cmである。床面は平坦で、壁面はやや外傾して立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土に大きな地山ブロックを含む。

出土土器（第64図）

18は壺の胴部で浅いヘラ描き沈線文が描かれるが全体の構図は不明。19～21は甕で、20は鋤先口縁、21は屈曲し外に開く口縁である。22は器台と思われユビオサエが確認できる。

46号土坑（図版39、第65図）

調査区北部、17号竪穴住居跡の北に位置する。平面形態は隅丸正方形で、規模は60cm×66cmである。西側ではピットと切り合うが、当土坑が切るようである。床面は西側で一段下がり、また南側では一部一段高くなる箇所がある。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

出土土器（第64図）

23・24は壺の底部である。23は精製品で胎土が細かい。24は外面にハケ調整を施す。25～27は鋤先口縁に近い形態をした甕である。25は上面が大きく窪み内面の突出も大きい。26は内面の突出は小さい。27は丹塗の甕である。当土坑は土器の出土量が少ないが、弥生時代中期前半の資料で占められる。

47号土坑（図版40、第65図）

調査区北部、46号土坑の東に位置する。平面形態はややいびつな楕円形で、長軸107cm、短軸64cmである。東側と西側で主軸の方向が若干異なり、平面形態もくびれる。床面もその箇所から西側はほぼ平坦なのに対し、東側はピットが穿たれ、本来は二つ以上の遺構が切り合っていた可能性は高い。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

出土土器（第64図）

28は壺の底部である。29～31は甕である。29は丸みを帯びた大きな突帯を持つもので、内面は小さく突出する。30はやや長めの逆L字状の口縁で、内面への突出も見られる。外面はハケ調整を行う。31は丸みを帯びた大きな突帯を持つもので、内面への突出は大きい。32は器台で器面は摩滅している。当土坑は土器の出土量が少ないが、弥生時代中期前半の資料で占められる。

48号土坑（図版40、第65図）

調査区北部、46号土坑の北西に位置する。北側ではピットに切られる。平面形態はいびつな楕円形で、長軸107cm、短軸90cmであるが、床面では特に北西側隅において90度に近い角を有しており、本来は長方形プランであったものが、崩落などによっていびつな形態に変わってしまったものと思われる。床面はほぼ平坦であり、壁面は北側では垂直に立ち上がる。他の箇所の上り上がりは緩いが、これは崩落によるものであり、本来壁面は垂直に立ち上がっていたものと思われる。当土坑からは図示できる土器は出土していない。

49号土坑（図版43、第65図）

調査区北部、45号土坑の南西に位置する。平面形態は楕円形で、長軸94cm、短軸65cmである。床面は南側にかけて浅くなる。壁面はやや外傾して立ち上がる。

出土土器（第67図）

1・2は甕である。1はやや長い逆L字状の口縁で、上面は若干窪み内面への突出はわずかである。2は丸みを帯びた大きな突帯を持つもので、内面にも大きく突出する。

50号土坑（図版40、第66図）

調査区北部、11号竪穴住居跡の南西に位置する。平面形態は長方形で、長軸97cm、短軸74cmである。床面は平坦で、北寄りに浅いピットが存在する。壁面は外傾して立ち上がる。

出土土器（第67図）

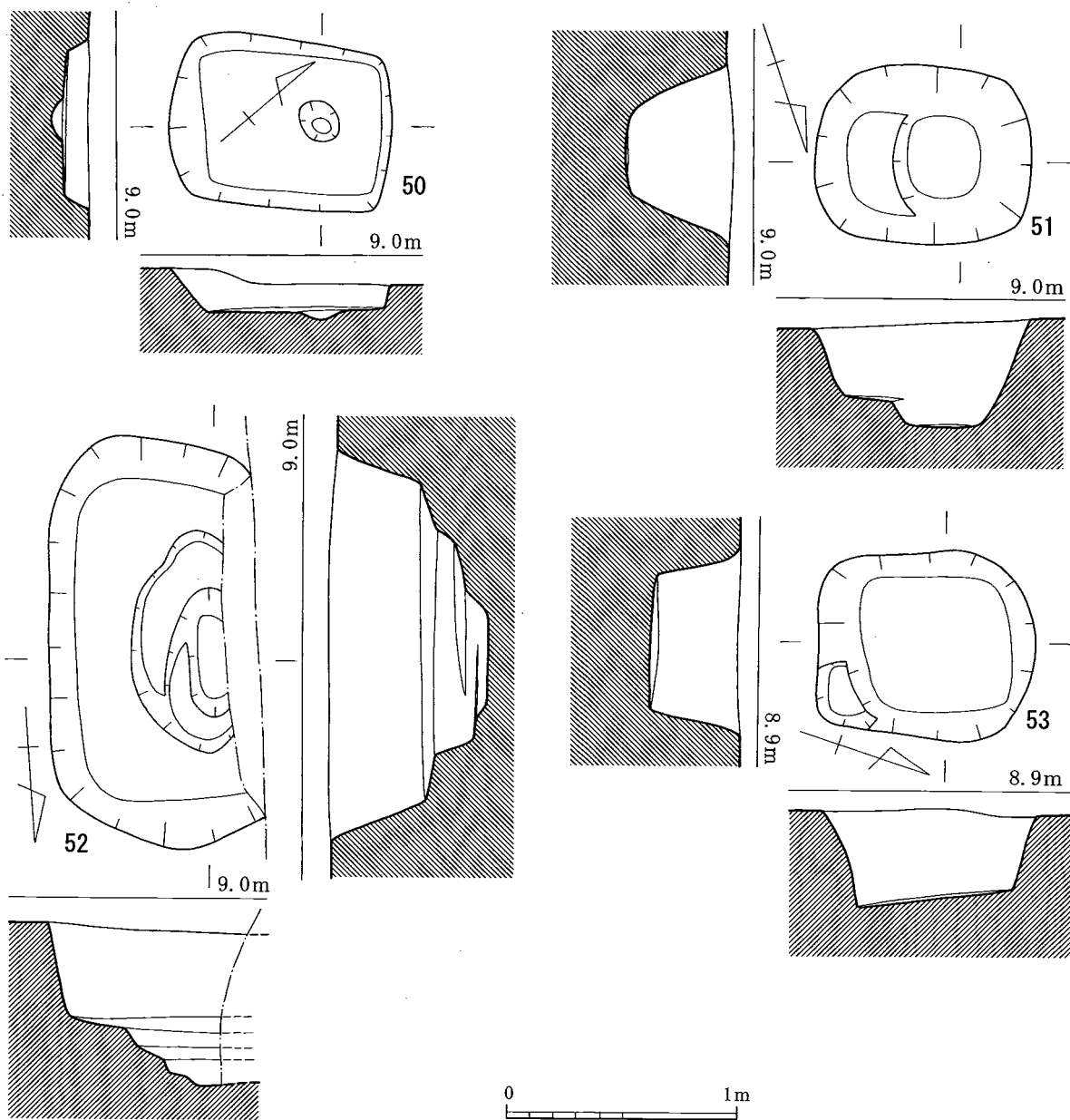
3～6は甕である。3はT字状を呈し内面への突出が大きい。4は口縁部外面に小さな三角突帯を貼り付ける。5はやや大きな丸みを帯びた突帯を貼り付け、内面への突出は大きくT字状を呈する。6は稜を持って強く屈曲し口縁が外に大きく開くもので、端部にかけて肥厚する。7・8は高杯である。7は稜を持って屈曲し、口頸部は緩く外反しながら立ち上がる。8も同様の器形であるが、屈曲部外面に刻目を施す。7・8とも器面は摩滅が著しい。当土坑は7・8等から弥生時代後期中頃に比定できようか。

51号土坑（図版41、第66図）

調査区北部、17号竪穴住居跡の西壁寄りの床面で確認した。平面形態は楕円形で、長軸95cm、短軸79cmである。東側が一段浅くなり、壁面は緩やかに立ち上がる。全体としては播鉢状を呈する。埋土は暗褐色粘質土に少量大きめの地山ブロックと炭を含む。

出土土器（第67図）

9～11は甕である。9は口縁部外面に丸みを帯びた大きな突帯を貼り付ける。内面の突出はわずか

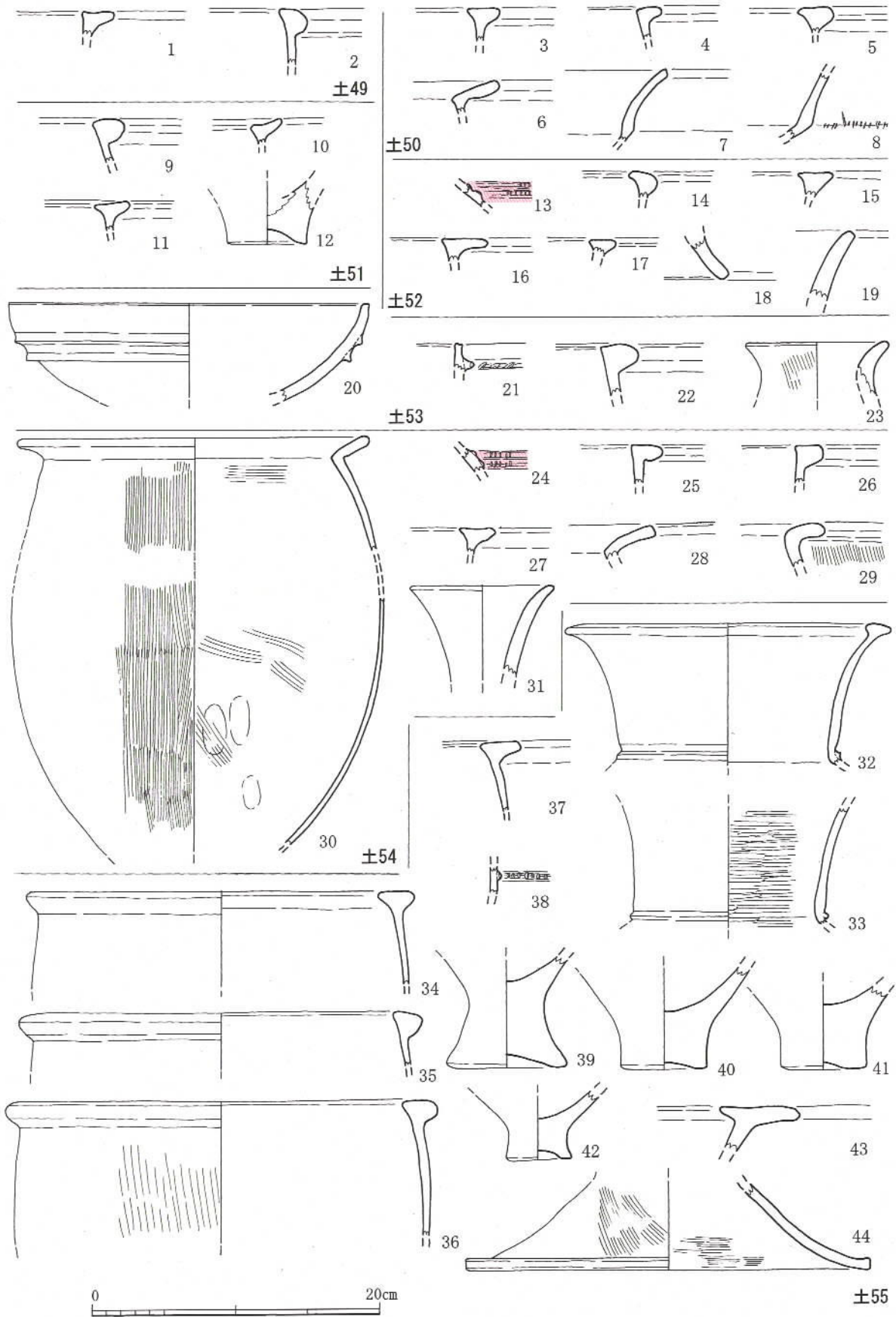


第66図 50～53号土坑実測図 (1/30)

である。10は口縁がやや長く逆L字状を呈し、上面は窪む。11は口縁内面の突出が大きくT字状を呈する。12は甕の底部で底面は全体的に上げ底となる。当土坑は土器の出土量が少ないが、弥生時代中期前半の資料で占められる。

52号土坑 (図版41、第66図)

調査区北部、51号土坑の南に位置する。西側半分は調査区外に延びる。平面形態は隅丸長方形と思われ、長軸は177cmである。中央に長軸97cmの楕円形プランと思われる深い落ちが存在する。壁面はやや外傾して立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土に大きな地山ブロックを多く含む。



第67图 49~55号土坑出土土器实测图 (1/4)

出土土器（第67図）

13は丹塗の壺の胴部で、2条以上の低い突帯に小さな刻目を施す。14～17は甕である。14は口縁部外面に丸みを帯びた大きな突帯を貼り付ける。内面に小さいながらも突出が見られる。15は内面への突出が鋭い。16は長い口縁部が逆L字状を呈し、上面はわずかに窪む。内面の突出も大きいが鋭さはない。18・19は器台であるが摩滅が著しい。

53号土坑（図版41、第66図）

調査区北部、52号土坑の南約2mに位置する。南東隅はピットと切り合っており、おそらくピットの方が新しいと思われる。平面形態は隅丸正方形で、規模は83cm×95cmである。床面はほぼ平坦だが、北側に若干上がる。壁面はやや外傾して立ち上がるが、上部は若干緩くなる。これは上部が崩落したものと思われ、本来はもっと傾斜がきつかったであろう。埋土は暗褐色粘質土に地山ブロックと炭を含む。

出土土器（第67図）

20は高杯で、ボール状の器形の中程に2条1組の無刻目突帯を貼り付ける。口縁端部は面を持つ。器面は摩滅している。21・22は甕である。21は口縁端部より下がった箇所が高く細い突帯を貼り付け刻目を施す。口縁端部は強いナデのために窪む。22は口縁部外面に丸みを帯びた太い突帯を貼り付ける。23は器台と思われ、外面にハケ調整を施す。

54号土坑（図版42、第68図）

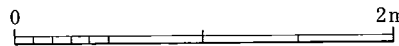
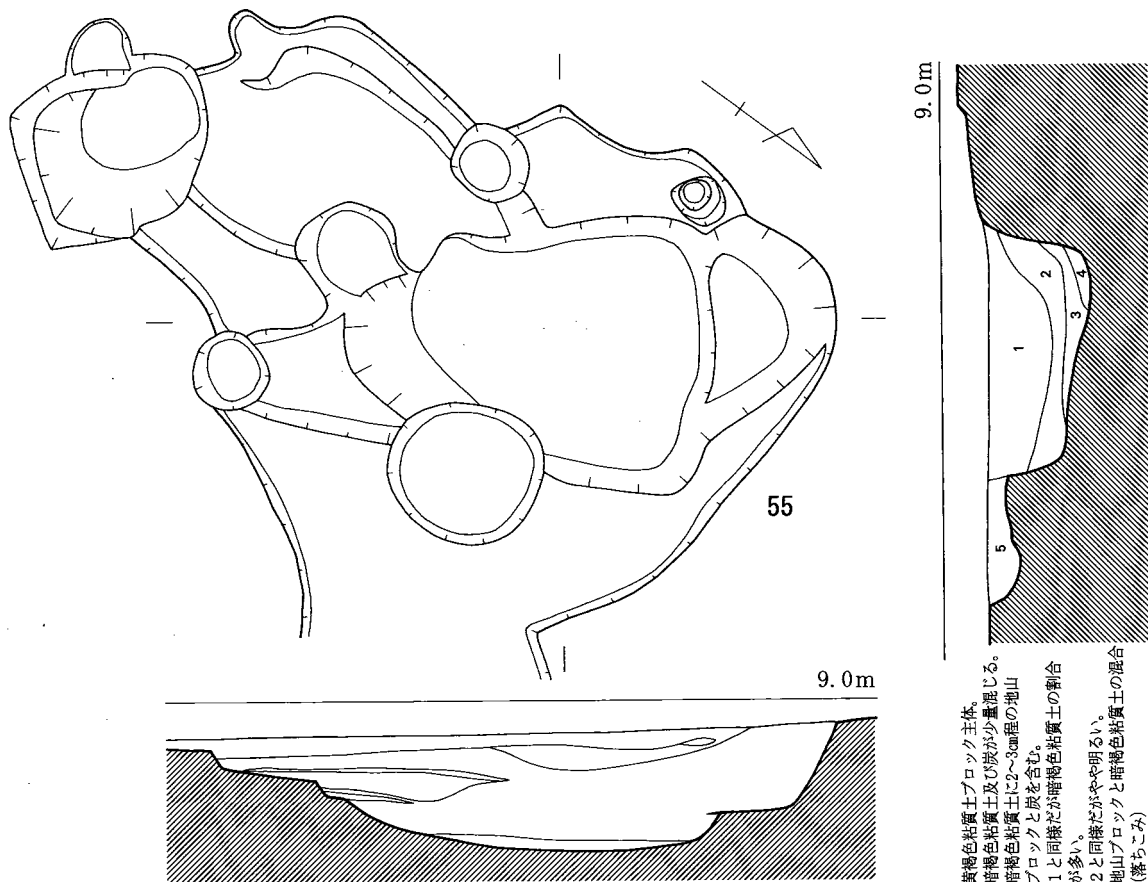
調査区北部、53号土坑の北に位置する。北側はピットと切り合う。平面形態は南西隅がかなり丸みを帯びるものの隅丸正方形に近く、規模は86cm×89cmである。床面はほぼ平坦であり、東寄りに長軸52cm、短軸87cmの楕円形プランの浅い落ちが存在する。壁面は垂直ぎみに立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土に地山ブロックと炭を少量含む。

出土土器（第67図）

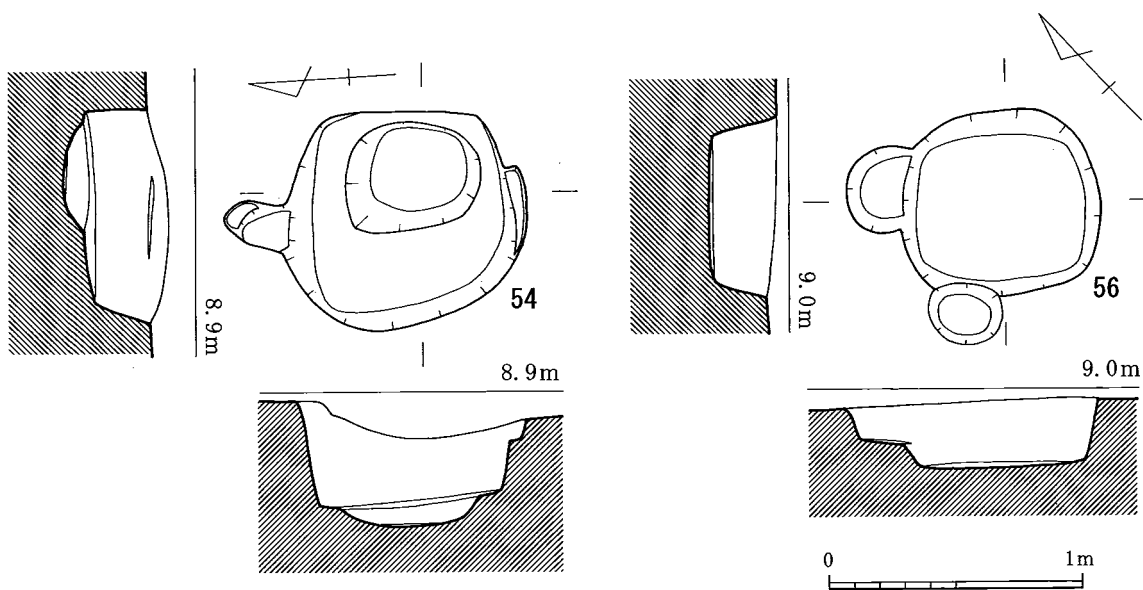
24は丹塗の壺の胴部で、2条以上の低い突帯を貼り付け刻目を施す。25～30は甕である。25は口縁部外面に細めの突帯を貼り付ける。26はやや太く丸みを帯びた突帯を貼り付け、内面にわずかに突出させる。27は鋤先口縁で内面への突出が大きく、口縁部上面もわずかに窪む。28は稜を持って屈曲し、外に大きく開く。29は口縁部を短く折り曲げ、外面にハケ調整を行う。30は胴部が張り、口縁部は屈曲し外に開く。外面は縦方向のハケ調整、内面は一部ハケ調整を確認できユビオサエも施す。31は器台で器面は摩滅している。当土坑からの土器の出土量は少ないが、28・30から弥生時代中期末～後期初頭頃に比定できるのではないだろうか。

55号土坑（図版42、第68図）

調査区北部、54号土坑の東に位置する。検出当時、付近は大きな落ち込みと考えていたが、掘削を進めていくと北西－南東方向を軸にした楕円形プランの大型土坑を確認することができた。西側及び東側には浅い落ち込みが存在するが、土層断面の観察から土坑の方が新しいと判断できる。土坑の長軸は320cm、短軸144cmである。床面は緩やかに窪み、西寄りで深くなる。北側は一段浅くなる。壁面はやや外傾するが、南側は緩やかに立ち上がる。埋土は黄褐色粘質土の地山ブロックが主体となるも



1. 黄褐色粘質土ブロック主体。
2. 暗褐色粘質土及び灰が少量混じる。
3. 1と同様だが暗褐色粘質土の割合が多い。
4. 2と同様だがやや明るい。
5. 地山ブロックと暗褐色粘質土の混合(落ちこみ)



第68図 54～56号土坑実測図 (54・56号は1/30、55号は1/40)

のである。

出土土器 (第67図)

32・33は口頸部が外に開きながら外反する壺である。32は口縁部内面に三角形状の大きな肥厚を形成し、頸胴部界に細い1条突帯を貼り付ける。器面は摩滅が著しい。33も頸胴部界に細い1条突帯を貼り付ける。外面は摩滅しているが内面は横方向のミガキ調整が確認できる。34～38は甕である。34～36は口縁部外面に丸みを帯びた大きな突帯を貼り付けるが、34は内面への突出が大きく、T字状を呈する。35・36は内面への突出はそれほど大きくない。調整は34・35は摩滅していて不明であるが、36は外面に縦方向のハケ調整後ナデ調整を行う。37は口縁部外面に長く突出し、内面にも大きめに突出する。器面は摩滅している。38は細い突帯上に刻目を施す。おそらく口縁部直下の部位にあたるものと思われる。39～42は甕の底部である。39・40は底面が全体的に上げ底となるのに対し、41・42は底面中央のみが窪む。43は鋤先口縁の高杯で、器面は摩滅している。44は高杯の脚部で端部は強いナデにより窪む。内外面わずかにハケ調整の痕跡が残る。当土坑は38が古い様相を示すものの概ね弥生時代中期前半に比定できよう。

56号土坑 (図版42、第68図)

調査区北部、10号竪穴住居跡の南に位置する。平面形態は上面では円形に近い形状であるが、本来は隅丸方形であろう。規模は73cm×79cmである。西側で2つのピットと切り合う。床面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がる。

出土土器 (第70図)

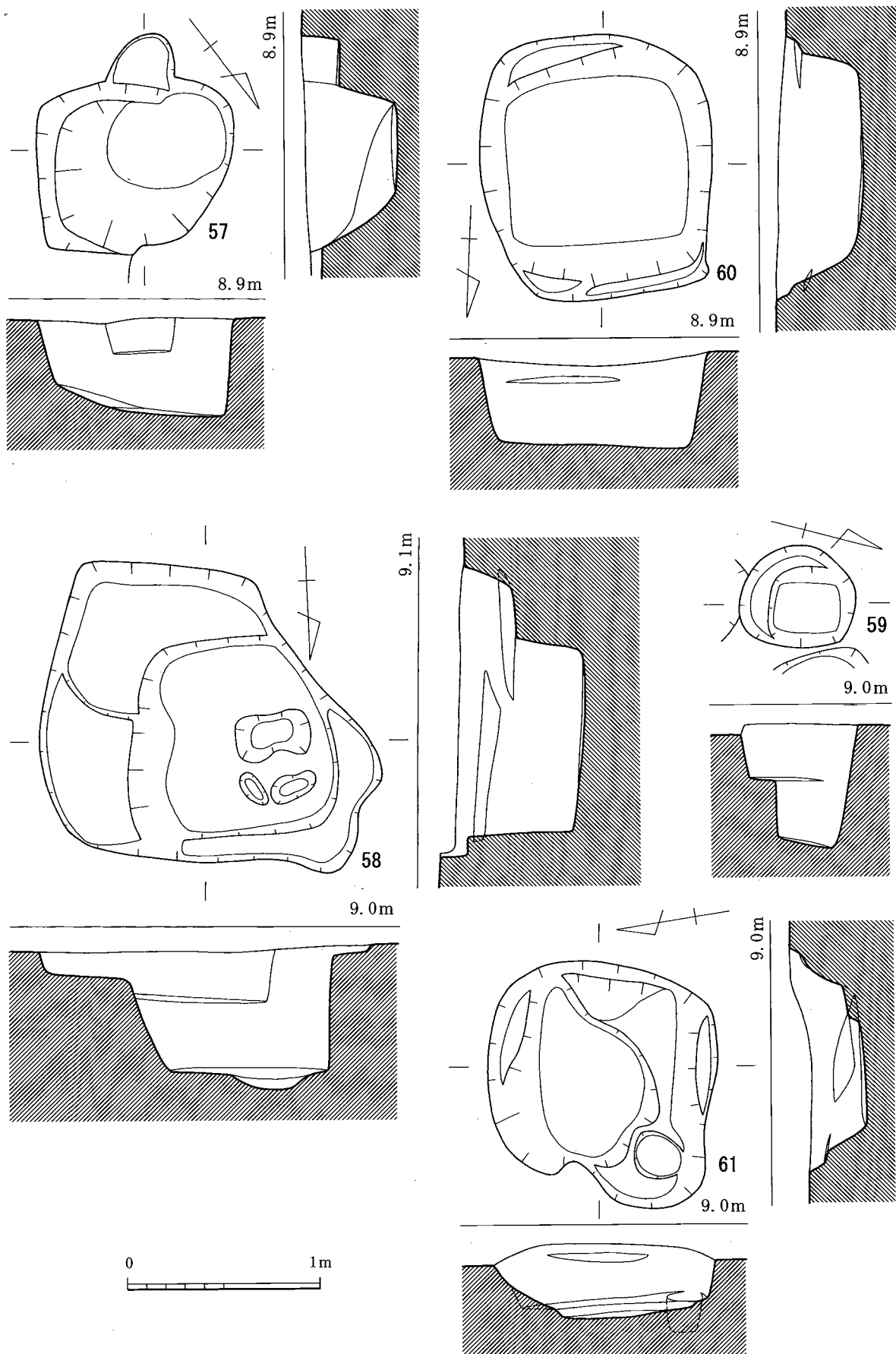
1は大型壺で、頸胴部界の屈曲部に擬口縁が認められる。屈曲部内面は横方向のハケ調整を行うが外面は摩滅している。2～6は甕である。2は口縁部外面に小さな三角突帯を貼り付ける。3はやや細長い突帯を貼り付ける。4は丸みを帯びた大きな突帯を貼り付ける。5はやや上向きの大きめの突帯を貼り付ける。6は口縁部内外面に大きく突出しT字状を呈する。口縁部上面は窪む。当土坑は2がやや古い様相を持つが、6から弥生時代中期前半に比定できよう。

57号土坑 (図版43、第69図)

調査区北部、55号土坑の南に位置する。平面形態は北西隅が丸みを帯びる他は隅丸方形に近く、規模は102cm×90cmである。南壁には当土坑よりも新しいピットが切り合う。南西隅は形状がややいびつになる箇所があり、しかもこの部分はやや深くなるため、別のピットが切り合っている可能性がある。床面は全体的に北西側に向かって下がり、壁面は北側がやや緩くなる以外は、垂直に近く立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土に大きな地山ブロックを多く含む。

出土土器 (第70図)

7・8は壺である。7は外面にハケ調整を行う。8は大型のものになろう。9～11は甕である。9・10は口縁部内面への突出が大きくT字状を呈する。11は稜を持って鋭く屈曲し口縁部が外に大きく開く。12は高杯脚部と思われ、外面はハケ調整を、内面はナデとユビオサエを行う。13は丹塗磨研の鋤先口縁の高杯である。摩滅が著しいが内面も丹塗を施していると思われる。14は口縁端部にほぼ接するように小さな低い突帯を貼り付け、刻目を施す。器面は摩滅している。



第69图 57~61号土坑实测图 (1/30)

58号土坑（図版43、第69図）

調査区北部、51号土坑の北東に位置し、17号竪穴住居跡を切る。検出当初は大きくいびつな土坑と理解していたが、15～30cm程掘削すると、隅丸方形のプランが明らかとなり、この部分のみ深くなることが判明した。この隅丸方形の土坑の規模は107cm×104cmである。床面は平坦であるが、部分的にいびつな落ちが存在する。壁面は東側でやや緩くなる他は垂直に立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土に大きな地山ブロックを含む。

出土土器（図版43、第70図）

15は壺の底部で、薄い平底である。器面は摩滅している。16は大型壺で端部は強いナデによって窪む。丹塗の痕跡が残っており、本来は全面丹塗されていたものと思われる。17～26は甕である。17は大きめの三角突帯を貼り付け、内面はナデによってわずかに窪んでいる。18・19は大きめの突帯を貼り付け、内面に少し突出する。20・21は小さい三角突帯を貼り付ける。22・24は内面の突出が大きくT字状を呈する。23は内外面の突出が大きく上面は窪む。25は逆L字状に長く口縁部が延び、内面にわずかに突出する。器面は摩滅が著しい。26は口縁部が稜を持って強く外に屈曲し、端部は丸く収める。口縁部内面にハケ調整の痕跡が残る。外面は摩滅が著しい。27は甕の底部で底面中央が窪む。外面にハケ調整の痕跡が残る。28は丹塗磨研の高杯で端部を欠損する。口縁部は鋤先状を呈し、上面は暗文状にミガキの痕跡が残る。

59号土坑（図版43、第69図）

調査区北端、45号土坑の西に位置し、南側で49号土坑を切る。平面形態は上面は楕円形であるが、底面は長方形を呈する。上面は長軸59cm、短軸55cm、底面は長軸35cm、短軸27cmである。南～西側にかけては段があり、二段掘りの形状をなす。床面は平坦で壁面はやや外傾して立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土に2～3cm程の地山ブロックを多く含む。当土坑からは図示できる土器は出土していない。

60号土坑（図版44、第69図）

調査区北部、53号土坑の南西に位置する。平面形態は上面は隅丸方形で121cm×138cm、床面は正方形を呈し95cm×87cmである。上部は崩落などによって多少いびつになったものと思われる。床面は平坦で、壁面はやや外傾して立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土に大きな地山ブロックを多く含む。

出土土器（第70図）

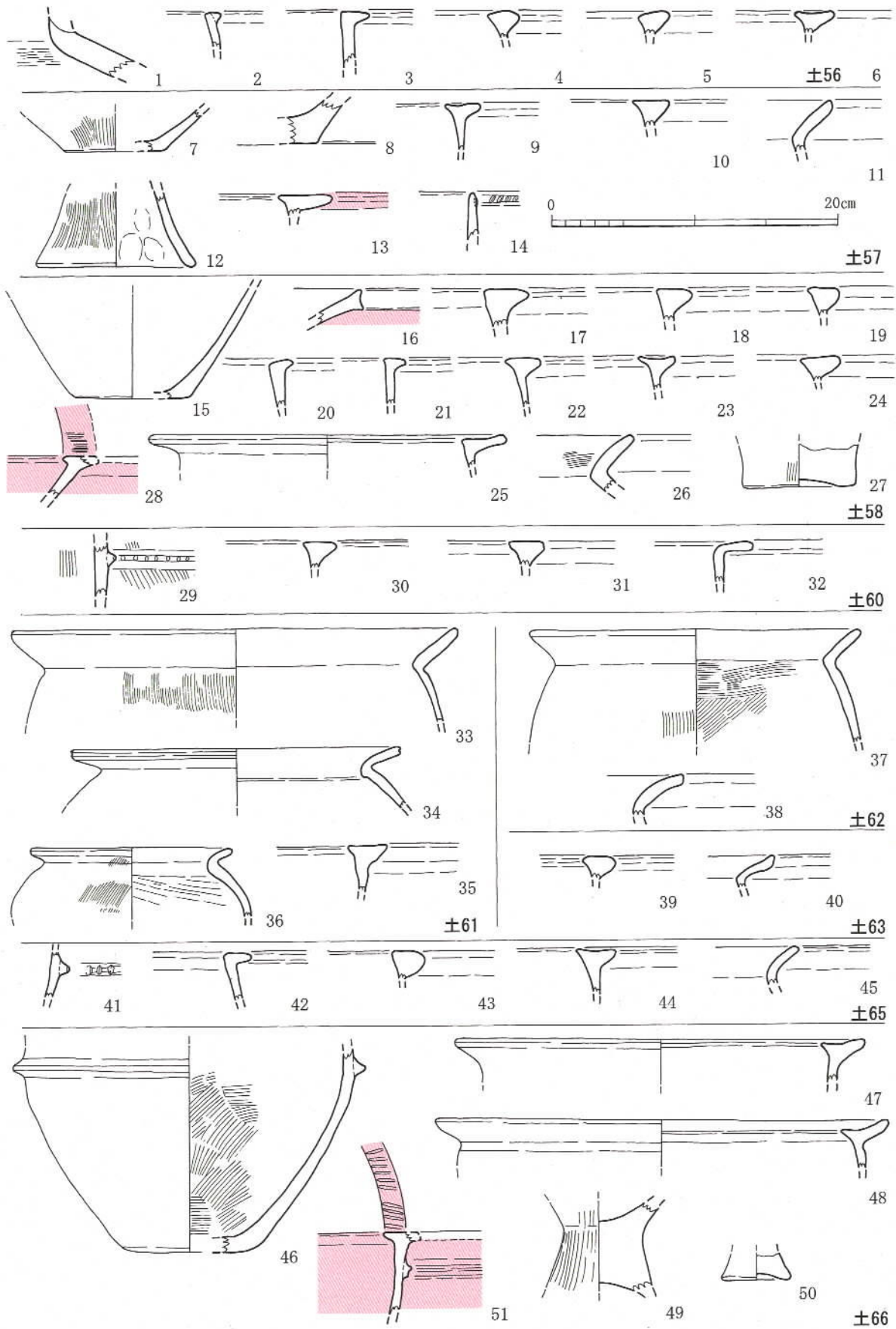
29は壺の胴部と思われ、三角突帯を貼り付け刻目を施す。内外面ともハケ調整を行う。30～32は甕である。30・31は内外面に三角形に突出する。32は口縁部が強く屈曲し外に開く。端部にかけて若干肥厚する。調整は内外面ともナデ調整である。

61号土坑（図版44、第69図）

調査区北部、60号土坑の南約2.5mに位置する。平面形態は隅丸方形に近く、規模は120cm×125cmである。床面は平坦で、南西隅に径25cm程のピットを有する。壁面はいびつで、南北壁では上部で軽い段を持ち、東壁は緩く立ち上がる。西壁は垂直に近い。埋土は暗褐色粘質土である。

出土土器（第70図）

33・34は胴部が張り口縁部が強く屈曲して外に開く甕である。33はしっかりとした稜を形成し、端



第70图 56~58·60~63·65·66号土坑出土土器实测图 (1/4)

部は丸く収める。外面は縦方向のハケ調整、内面はナデ調整である。34は屈曲部内面に粘土が下に被る。端部は強いナデによって窪む。器面は摩滅している。35は口縁部外面に三角突帯を貼り付け、付け根をナデによって窪ませる。内面は小さいが鋭く突出する。36は胴部が大きく張り出し、口縁部は短く外側に屈曲し端部は丸く収める。胎土は粗く甕と似るが、器形から壺とした方が良いかもしれない。外面は細かいハケ調整、内面は粗いハケ調整を行う。当土坑は土器の出土量が少ないが弥生時代中期末～後期初頭頃に比定できようか。35は混入と判断できる。

62号土坑（図版44、第71図）

調査区北部、61号土坑の北東に位置する。平面形態は長方形で、長軸85cm、短軸64cmである。南壁に小さく外側に張り出す箇所があるが、これは本土坑と切り合うピットであろう。床面は平坦で、壁面は垂直に近く立ち上がる。埋土はやや淡い暗褐色粘質土に少量の地山ブロックを含む。

出土土器（第70図）

37・38は口縁部が強く屈曲し外に開く甕である。37は口縁部は内外面ナデ調整、胴部は外面が縦方向、内面は横方向のハケ調整を行う。38は口縁部内外面ともナデ調整である。

63号土坑（図版45、第71図）

調査区北部、61号土坑の南西約5mに位置する。平面形態は長方形に近いが、北側は丸くなる。規模は長軸82cm、短軸54cmであるが、床面も北側では丸くなり、この部分のみ段を持って深くなることから、長方形プランの遺構と円形プランの遺構が切り合っていた可能性は高い。埋土は暗褐色粘質土に小さな地山ブロックを含むものであるが、検出時や掘削途中にも切り合い関係を確認することはできなかった。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

出土土器（第70図）

39は口縁部内外面に突出する甕である。40は口縁部が稜を持って屈曲し外に開く甕で、端部はやや肥厚し上方へ跳ね上げぎみに収める。

64号土坑（図版45、第71図）

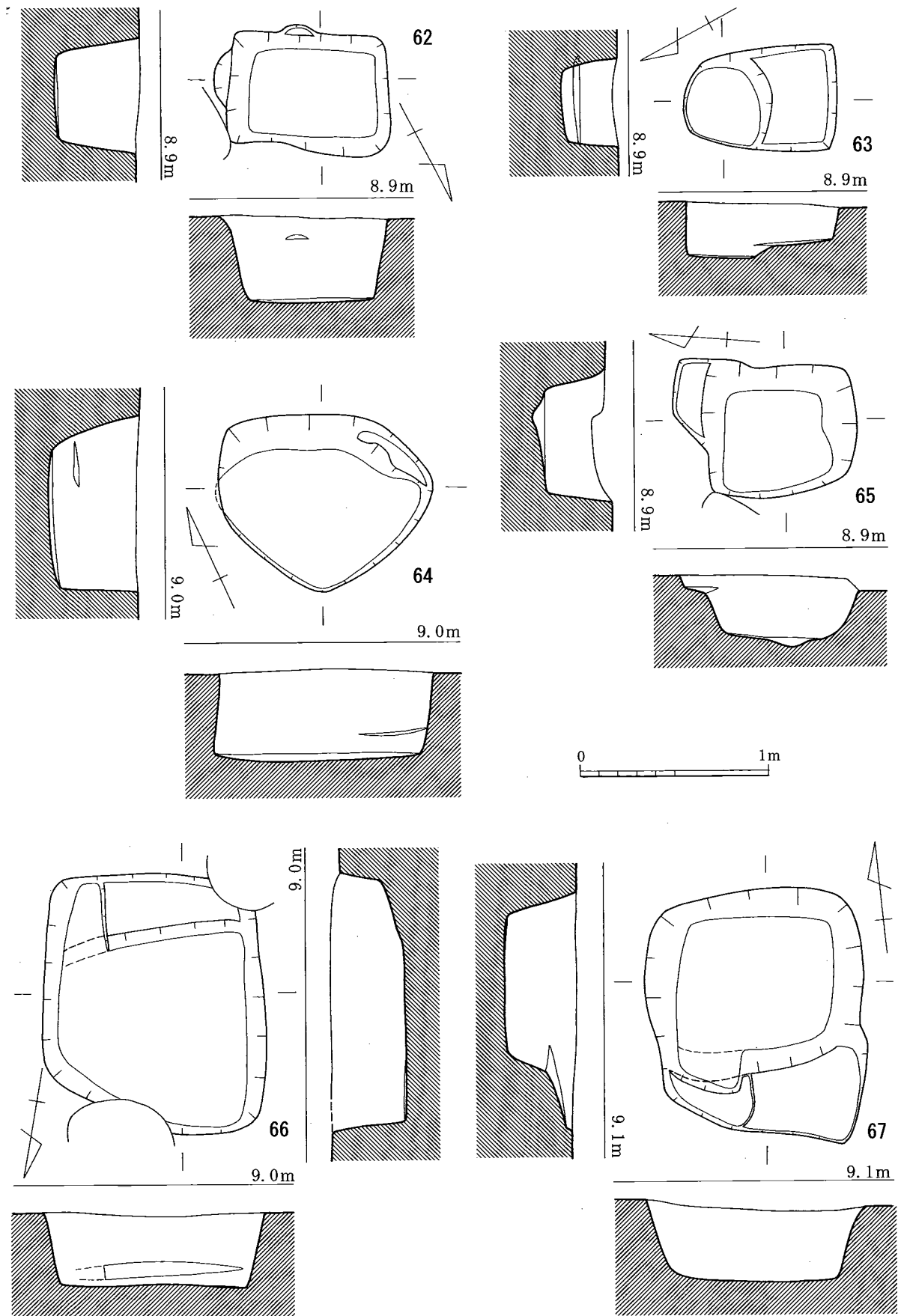
調査区北部、61号土坑の南に位置する。平面形態は不整円形で、規模は95cm×108cmである。床面は平坦で、壁面は北側では緩く外傾して立ち上がるが、その他は垂直に立ち上がる。北東隅では少し段が生じているが、掘りすぎたきらいもある。埋土は暗褐色粘質土に地山ブロックを含む。当土坑からは図示できる土器は出土していない。

65号土坑（図版45、第71図）

調査区北部、62号土坑の東に隣接する。平面形態は隅丸方形で、規模は70cm×93cmである。北側に張り出す浅い部分は、本土坑と直接は関係ないと思われる。床面は東寄りの位置で少し窪むが、これは若干掘りすぎた可能性もある。この部分を除いては平坦である。壁面はやや外傾して立ち上がる。埋土は淡い暗褐色粘質土である。

出土土器（第70図）

41は壺の胴部と思われ、1条の突帯を貼り付け刻目を施す。調整はナデ調整である。42～45は甕で



第71图 62~67号土坑实测图 (1/30)

ある。42は口縁部外面に小さな細い突帯を貼り付ける。43は丸みを帯びた大きな突帯を貼り付ける。44は口縁部外面は突帯状に突出するのに対し、内面はなだらかに張り出す。上面は強く窪む。調整はナデ。45は口縁部が屈曲し外に開き、端部は丸く収める。調整はナデである。

66号土坑（図版46、第71図）

調査区北部、65号土坑の南東約3mに位置する。北側と南西側はピットに切られる。平面形態は隅丸長方形で、長軸140cm、短軸117cmである。床面は平坦で、南側では一段浅くテラス状になる箇所がある。南東隅は掘りすぎてしまった。壁面は垂直に近く立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土に地山ブロックを多く含む。

出土土器（第70図）

46は壺で、胴部は張らず長胴ぎみである。胴部下位に無刻目の三角突帯を貼り付ける。底部と胴部の境界は丸みを帯びる。調整は外面は摩滅が著しいが、内面はハケ調整が確認できる。47・48は鋤先口縁の甕で、口縁部上面が窪む。49・50は甕の底部で、49は分厚く底面は上げ底である。調整はハケ調整。44は小型で底面は上げ底となる。器面は摩滅している。51は丹塗磨研の鋤先口縁甕である。先端部は欠損している。口縁部下に低いM字形突帯を貼り付ける。口縁部上面は暗文状のミガキを施す。

67号土坑（図版46、第71図）

調査区北部、61号土坑の南東に位置する。検出時は南北方向に長い隅丸長方形土坑と認識していたが、掘削を進めていくと東西方向に長い長方形土坑となった。南側は緩やかに傾斜する浅い落ち込みで、おそらく本土坑とは直接の関係がないと思われる。土坑の長軸は126cm、短軸は98cmで、床面は平坦である。南西隅は掘りすぎてしまった。壁面は外傾して立ち上がる。埋土は淡い暗褐色粘質土に大きな地山ブロックを多く含む。

出土土器（第73図）

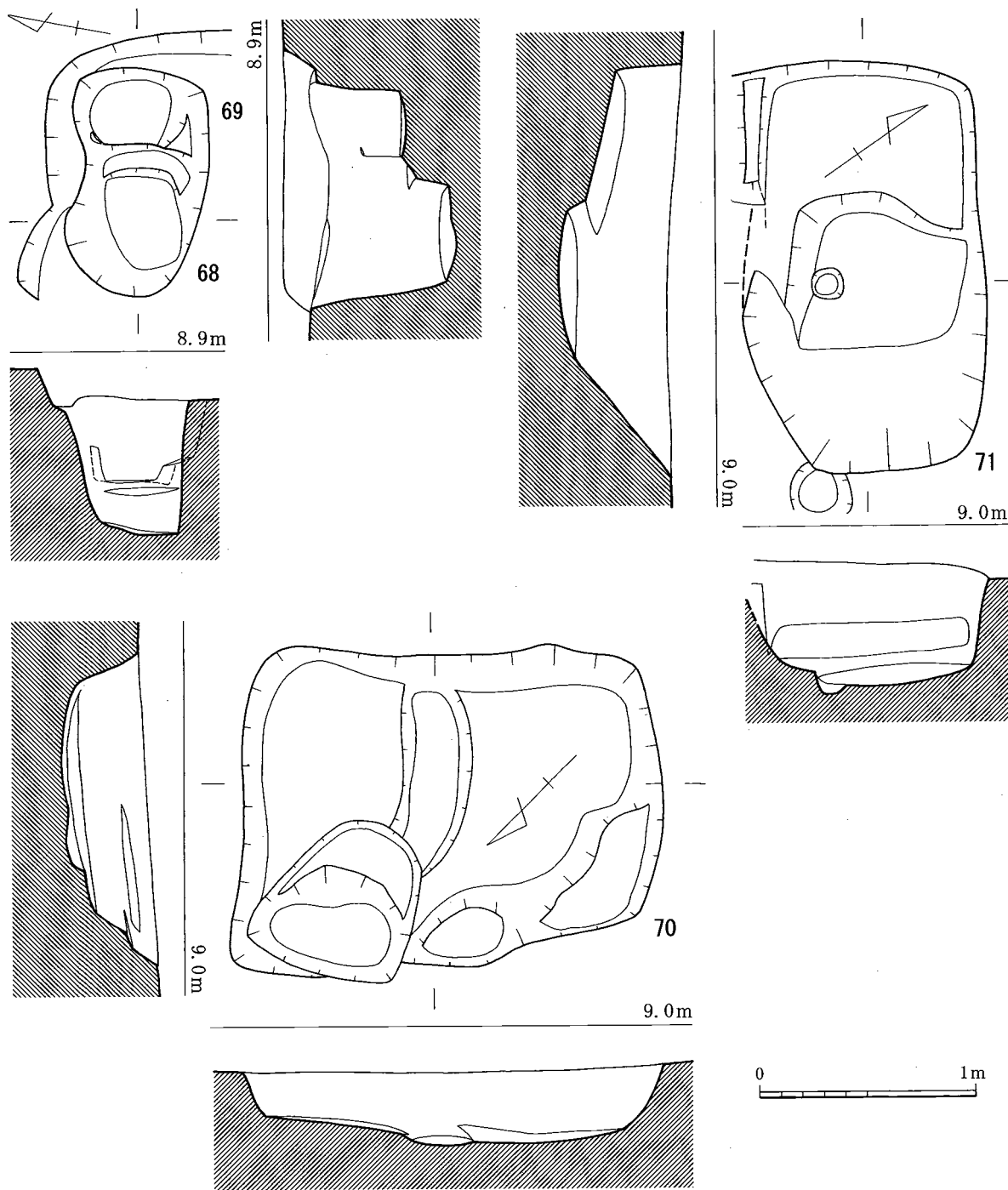
1・2は甕である。1は上向きの丸みを帯びた大きな突帯を貼り付ける。2は鋤先状の口縁。3は器台の脚部である。

68・69号土坑（図版46、第72図）

調査区北寄り、64号土坑の南約2mに位置する。検出時は付近一帯が大きな落ち込みではないかと思われ、15cm程下げると長軸106cm、短軸60cmの楕円形の土坑が確認できた。しかし掘削を進めていくと北側と南側で床面の深さが異なり、二つの土坑が切り合っていることが判明した。埋土が非常に似通ったものであったため、切り合い関係は確認できなかった。西側を68号、東側を69号土坑とする。68号土坑は径約60cmの円形プランで、床面は窪み壁面は垂直ぎみに立ち上がる。69号土坑も径約60cmの円形プランと思われ、床面は中央がやや窪み壁面は垂直ぎみに立ち上がる。

出土土器（第73図）

4～9は68号土坑出土。4は丹塗磨研壺の口縁部で端部は強いナデのため窪む。5は壺で口縁部内面に大きな肥厚を持つ。6は鋤先口縁の甕と思われる。7は胴部が張り、口縁部が屈曲し外に開く甕で、口縁部直下に高い1条の三角突帯を貼り付ける。胴部内外面は縦方向のハケ調整を行う。8は甕の底部で、底面は上げ底となり外面にハケ調整を行う。9は胴部が強く張り出し、口縁部は緩やかに



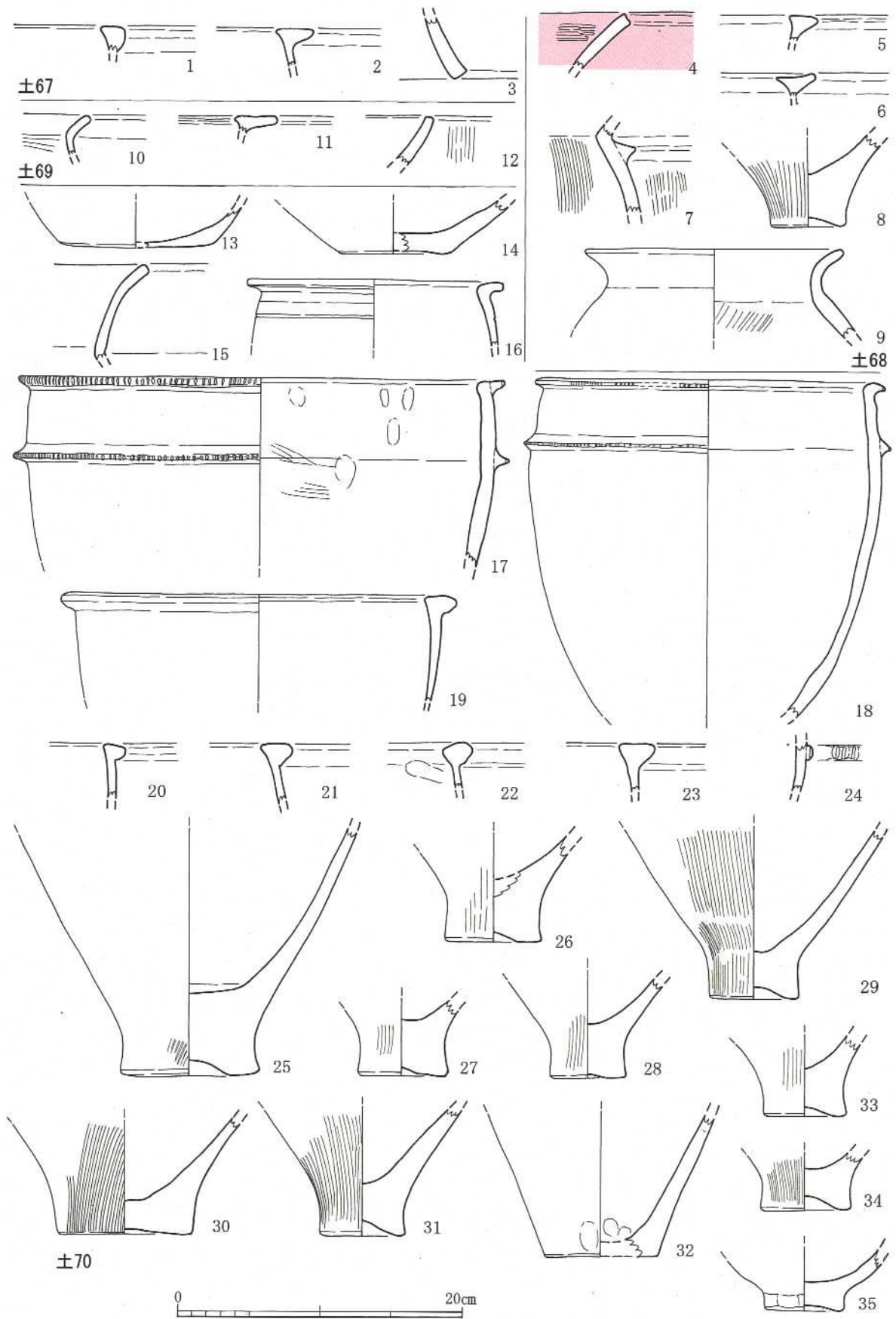
第72図 68～71号土坑実測図 (1/30)

外反する甕である。摩滅が著しいが内面はハケ調整が確認できる。

10～12は69号土坑出土。10は口縁部が屈曲し外に開く甕で、胴部内面はハケ調整を行う。11は鋤先口縁の高杯。12は鉢と思われる。外面に縦方向のハケ調整を行う。

70号土坑 (図版47、第72図)

調査区北部、67号土坑の東に位置する。北側は新しいピットに切られる。平面形態は長方形で長軸



第73图 67~70号土坑出土土器实测图 (1/4)

195cm、短軸145cmである。床面の形状はいびつで西壁側は一段浅くなり、中央では東西方向に浅く溝状に落ちる。壁面は外傾して立ち上がる。埋土は暗黄褐色粘質土に大きな地山ブロックを多く含む。

出土土器（図版59、第73図）

13・14は壺の底部である。15は口頸部が外反しながら長く延びる壺で、胴部との境の屈曲部外面に細い突帯を貼り付ける。口縁端部は面を持つ。外面はナデ調整、内面は摩滅している。16～24は甕である。16は口縁部を短く折り曲げ、胴部上位に1条沈線を施す。器面は摩滅している。17は口縁部と胴部の外面に小さな三角突帯を貼り付け刻目を施す。外面はナデ調整。内面もナデが主体であるが、一部ユビオサエと横方向のハケ調整が確認できる。18は胴部に1条の小さな三角突帯を貼り付け刻目を施すが、口縁部は内面が丸みを帯びており、短く折り曲げているのか突帯を貼り付けているのかは不明。端部に小さい刻目を施す。調整は全面ナデ調整である。19～23は口縁部外面に丸みを帯びた大きな突帯を貼り付け、内面に緩やかに張り出す。調整はすべてナデ調整である。24は口縁部が欠損しているが、胴部に1条の小さな半円形の突帯を貼り付け大きな刻目を施す。調整はナデである。25～34は甕の底部である。25～28は底面の中央のみが窪む。31は底面全体で高い上げ底を形成する。29・33・34は両者の中間的様相をしており、中央付近が主に窪む。32は平底と思われる。内面にユビオサエを施す。35は器形はよく分からないが雑なつくりで、底部外面はユビオサエを顕著に施す。底面は全体で上げ底を形成する。

71号土坑（図版47、第72図）

調査区北寄り、63号土坑の南西約3mに位置する。検出当初は南側に隣接する77号土坑とのプランの峻別がつかず、切り合い関係も確認することができなかった。このため南壁については破壊してしまっている。平面形態は長方形で、長軸191cm、短軸65cm程である。床面は中央に向かって落ちていき、中央に約80cm四方の落ち込みが存在する。南寄りには径15cm程のピットを穿つ。壁面は東壁を除いては垂直ぎみに立ち上がる。

出土土器（第75図）

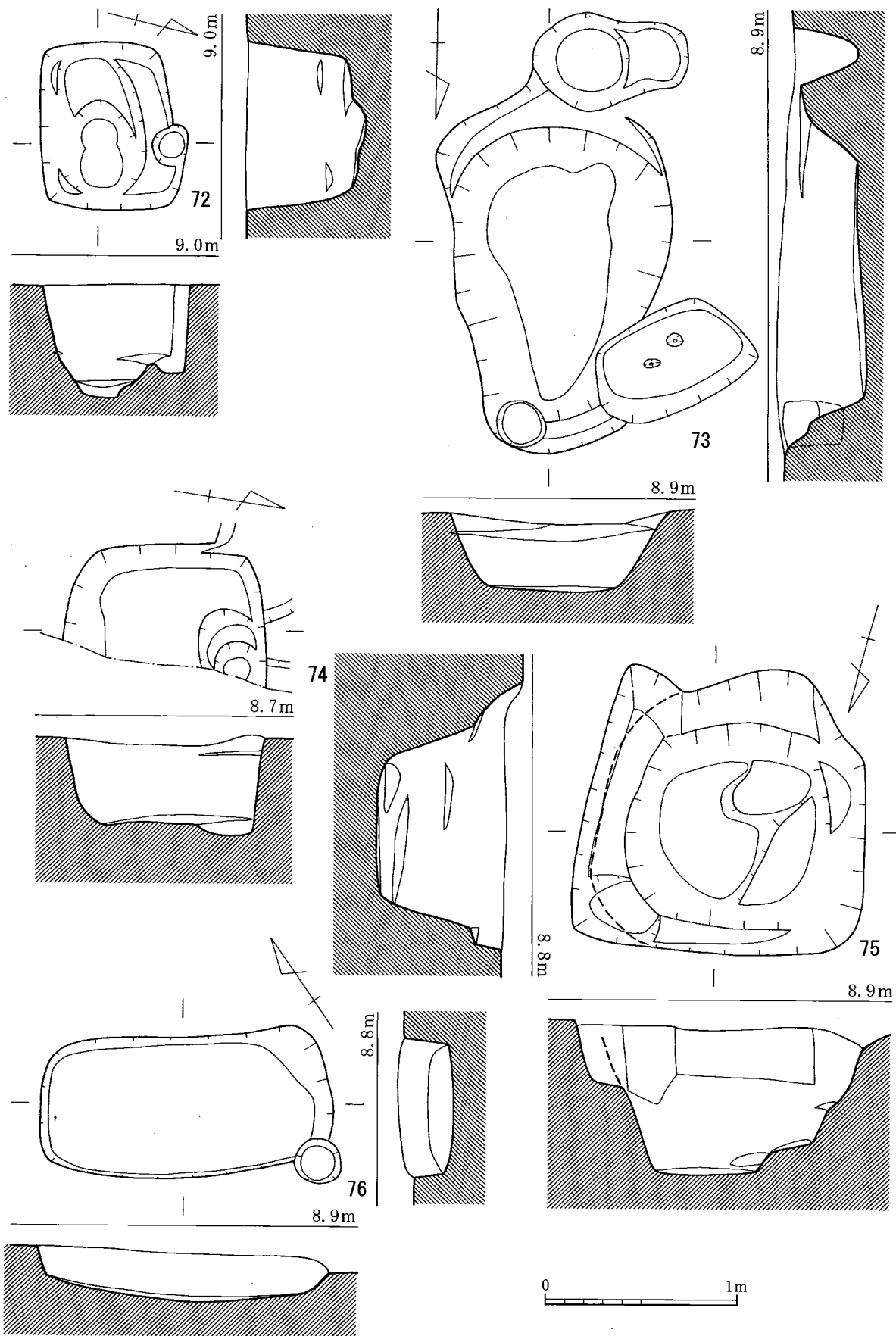
1は壺の底部で外面はミガキ調整を行う。2～5は甕である。2は口縁端部よりわずかに下がった箇所小さな突帯を貼り付け、刻目を施す。3は口縁部外面に小さな突帯を貼り付け刻目を施す。外面はナデ調整、内面にユビオサエを施す。4は口縁端部を小さく折り曲げており、内面に横方向のハケ調整とユビオサエを施す。外面は摩滅している。5は口縁部外面に丸みを帯びた大きな突帯を貼り付ける。6～8は甕の底部である。いずれも平底であり、ナデ調整で仕上げる。

72号土坑（図版47、第74図）

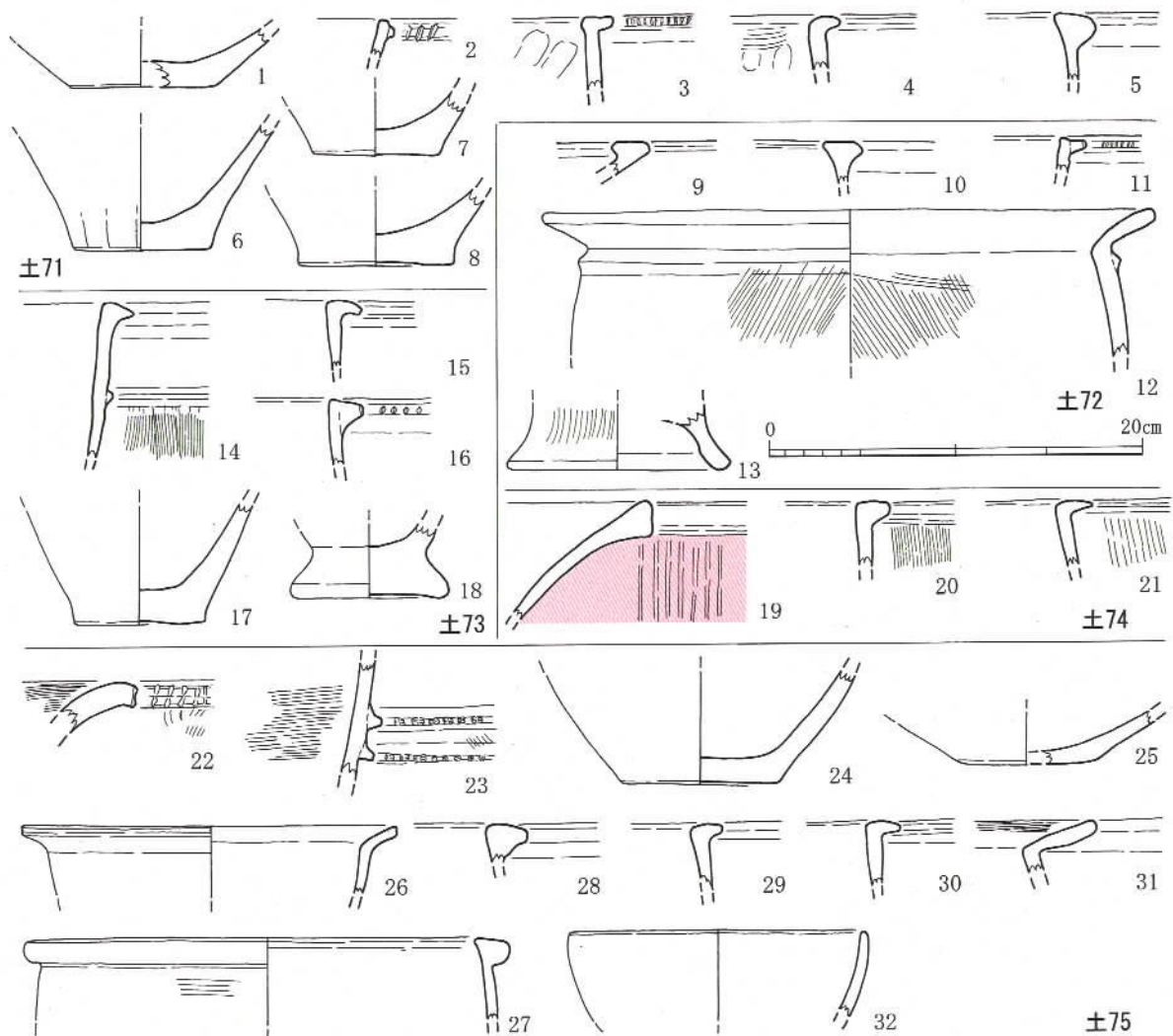
調査区北寄り、71号土坑の西に位置する。平面形態は長方形で、長軸88cm、短軸70cmである。北壁際にピットが存在するが、これは本土坑と切り合い関係にあると思われる。土坑の床面は北側で一段浅くなり、大きく二段掘りの形態をなす。また中央やや東寄りではピット状に落ちるが、形態が瓢箪形をしており、時期の違うピット同士が切り合っていた可能性が考えられる。

出土土器（第75図）

9は壺で、口縁部内面に大きな肥厚を有する。10～12は甕である。10は口縁部内面にも大きく張り出しT字状を呈する。11は口縁部外面に小さな突帯を貼り付け、端部上面を強くナデる。突帯の下側



第74图 72~76号土坑实测图 (1/30)



第75図 71~75号土坑出土土器実測図 (1/4)

もナデによって窪む。突帯上は小さな刻目を密に施す。12は稜を持って屈曲し外に開くもので、屈曲部直下外面に1条の三角突帯を貼り付ける。口縁端部は丸みを持って収める。胴部は内外面ともハケ調整を行う。13は大きな脚状の甕の底部で、端部は若干肥厚する。外面はハケ調整を行う。

73号土坑 (図版48、第74図)

調査区北寄り、71号土坑の南約2mに位置する。土坑の南北端と北西部ではそれぞれピットに切られる。平面形態は楕円形で、長軸174cm、短軸115cmである。図面では南側で一段浅くなる箇所が認められるが、これは平面プランが明確でなかった部分であり、本来の土坑の形状ではない。床面は平坦で北側では狭くなる。壁面は外傾し、特に北東側では緩やかに立ち上がる。南西隅で半円状に傾斜がきつくなる箇所があるが、これは時期の違うピットの可能性が高い。

出土土器（第75図）

14～16は甕である。14は口縁部外面にやや大きな三角突帯を、胴部には小さな三角突帯を貼り付ける。器面は摩滅しているが、胴部突帯よりも下では縦方向のハケ調整が確認できる。15は口縁部がやや下を向く逆L字状を呈する。口縁部直下は強いナデによって窪む。16は口縁部外面にやや大きな三角突帯を貼り付け刻目を施す。17・18は甕の底部である。17は平底でナデ調整で仕上げる。18は外に大きく張り出し底面はほぼ平らである。調整はナデで仕上げる。当土坑は土器の出土量が少ないが、弥生時代中期初頭頃に比定できようか。

74号土坑（図版48、第74図）

調査区中央、12号竪穴住居跡の南東に位置する。東側は調査区外に延びるため詳細は不明であるが、平面形態は長方形と思われ、南北軸は106cmの規模である。床面はほぼ平坦であるが、北壁際に径30cm程の浅いピットが存在する。壁面は垂直ぎみに立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土に地山ブロックを含む。

出土土器（第75図）

19は丹塗磨研壺である。摩滅が著しいが本来は全面に丹塗を施していたものと思われる。口縁端部は肥厚し面を持つ。外面は縦方向に暗文状のミガキを施す。20・21は甕である。20は口縁部外面に小さなやや上向きの突帯を貼り付ける。外面は縦方向のハケ調整を行う。21は口縁部が短い逆L字状を呈し、外面は縦方向のハケ調整を行う。

75号土坑（図版48、第74図）

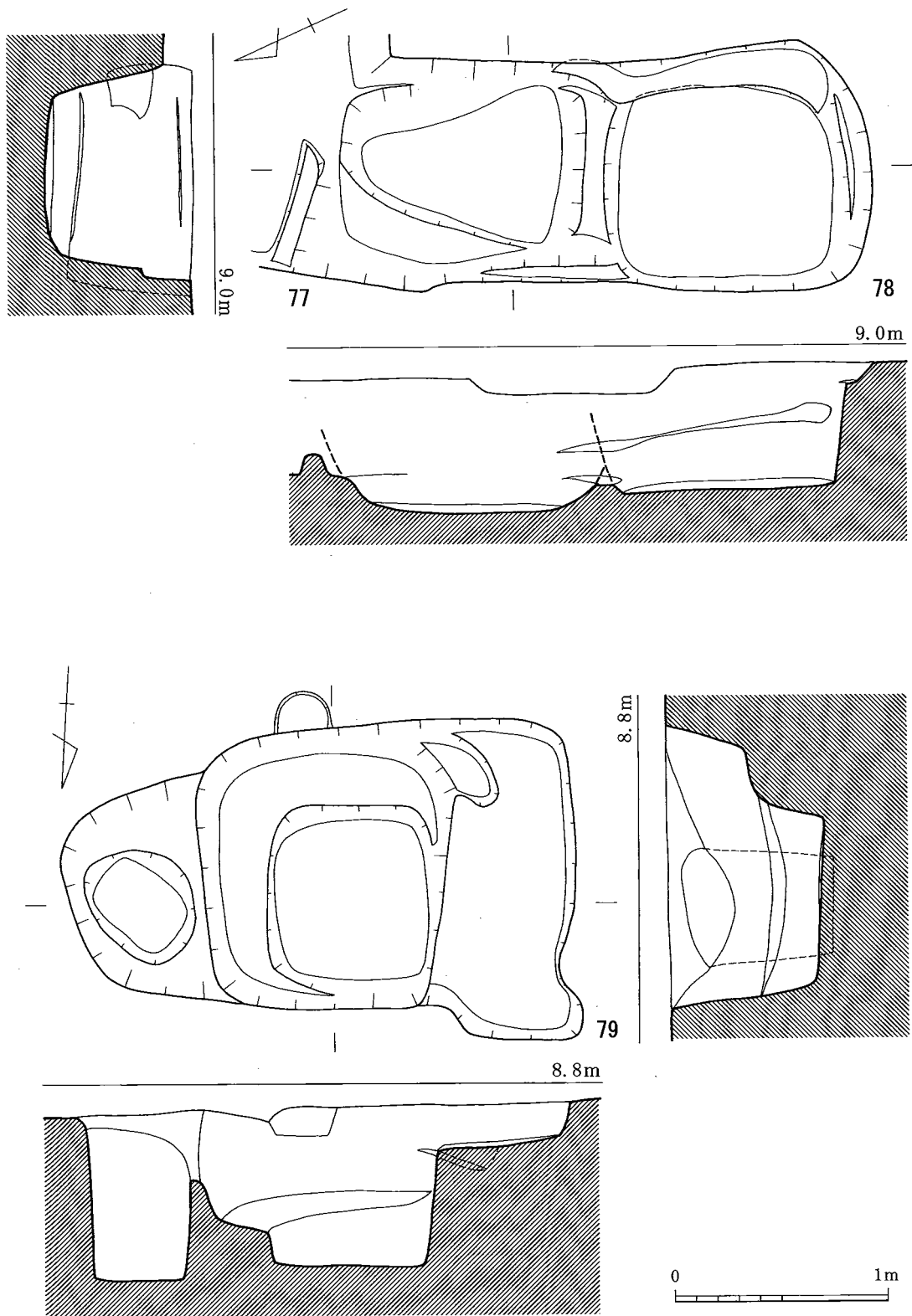
調査区中央、74号土坑の南西約4mに位置する。平面形態は隅丸方形で、規模は140cm×150cm程である。東側は壁の立ち上がりの認識を誤ってしまい、掘りすぎてしまった。図面では段を有する格好になるが、本来は外傾して立ち上がる。床面は全体的には西側で一段上がり、下端は円形プランになる。壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は床面に近い下層では暗褐色粘質土、中層では暗褐色粘質土に大きめの地山ブロックを多く含み、上層では暗褐色粘質土である。

出土土器（第75図）

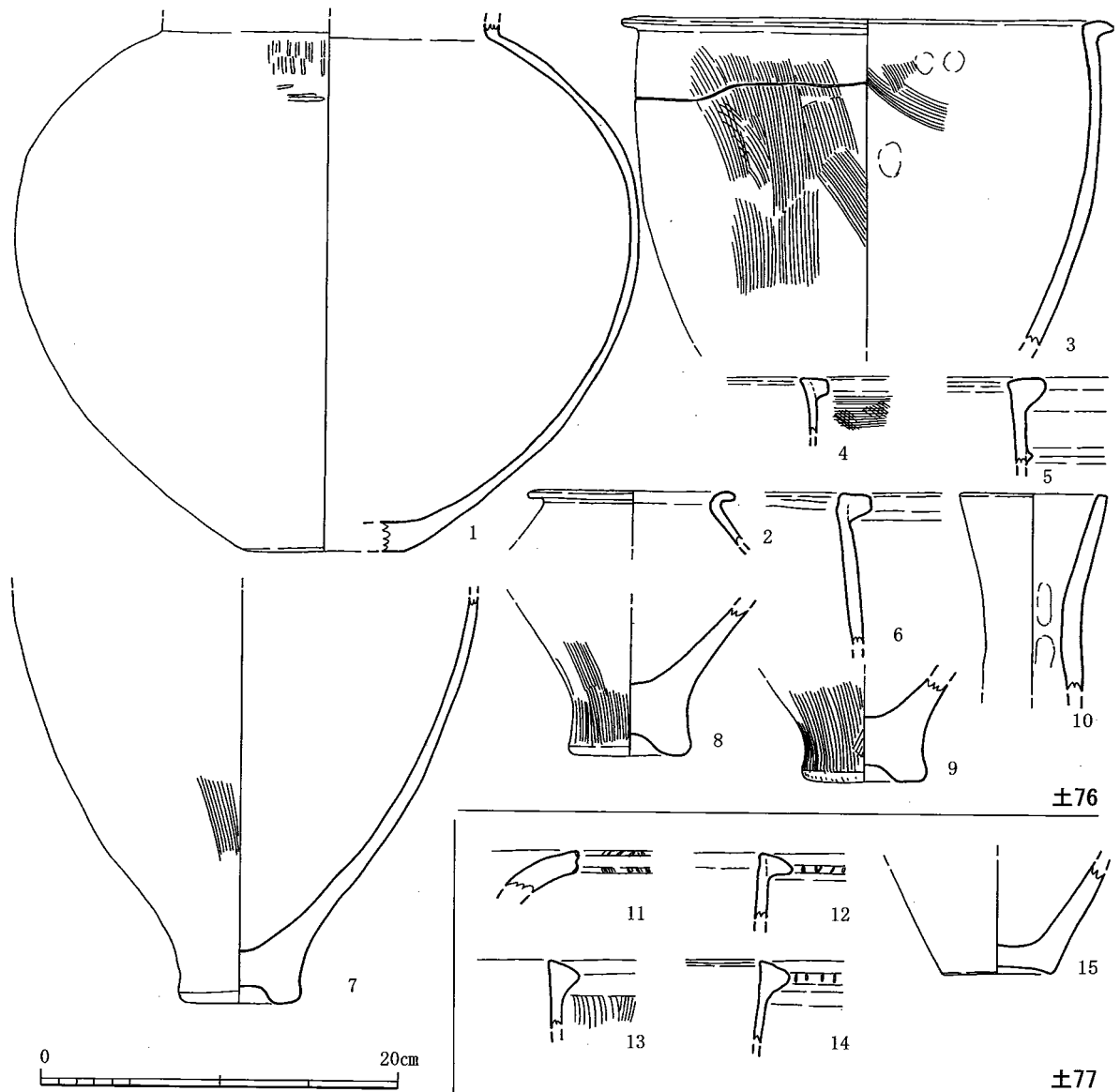
22は壺の口縁部で、端部は強いナデにより窪み、刻目を施す。内面は横方向のハケ調整を行う。23は壺の胴部で、やや下位に2条の突帯を貼り付け、板状工具により刻目を施す。内面は粗い横方向のハケ調整を行う。24・25は壺の底部である。両者とも器面は摩滅が著しい。26～31は甕である。26は口縁部が如意状に外反し、端部はナデによって窪む。調整はナデで仕上げる。27・28は口縁部外面に丸みを帯びた大きな突帯を貼り付ける。27は口縁部内面がやや突出し、外面は横方向のハケ調整の痕跡が確認できる。29・30は口縁部外面に小さな細い突帯を貼り付けていると思われ、小さな逆L字状を呈する。調整は内外面ともナデ調整である。31は稜を持って屈曲し、口縁部が外に大きく開く。端部は丸く収め、内面は横方向のハケ調整を行う。32は鉢で胎土は細かく、調整は丁寧なナデである。

76号土坑（図版49、第74図）

調査区北寄り、73号土坑の南東に位置する。平面形態は隅丸長方形で長軸152cm、短軸54cmである。床面は南東側に向かって緩やかに落ち、壁面は南東壁では緩やかに立ち上がるが、その他は垂直ぎみ



第76図 77~79号土坑実測図 (1/30)



第77図 76・77号土坑出土土器実測図 (1/4)

に立ち上がる。

出土土器 (図版59、第77図)

1は壺で胴部が球形状に張り、頸部との境は稜を持って屈曲する。摩滅が著しいが一部ミガキ調整が確認できる。2は小型無頸壺である。摩滅が著しいが本来は全面に丹塗が施されていたと思われる。口縁部は短く強く外反する。3～6は甕である。3は口縁部を折り曲げているのか、外面に突帯を貼り付けているのかはよく分からないが小さな逆L字状を呈し、端部は先細りぎみになる。胴部上位には1条の細い沈線を巡らせ、外面はハケ調整、内面はナデ主体で一部ハケ調整とユビオサエが確認できる。4は口縁部外面に大きな台形の突帯を貼り付け、内面にわずかに突出させる。外面は横方向のハケ調整を行う。5は口縁部外面に丸みを帯びた大きな突帯をやや上向きに、胴部に小さな三角突帯を貼り付ける。口縁部内面は小さく突出する。全面ナデ調整である。6は口縁部外面に台形の大きな突帯を貼り付ける。外面は摩滅しており、内面はナデ調整で仕上げる。7～9は甕の底部で底面は中央が窪む。いずれも外面に縦方向のハケ調整を行う。10は器台で内面にユビオサエを施す。外面は摩

滅している。

77号土坑（図版49、第76図）

調査区北寄り、71号土坑の南で切り合う。南側は78号土坑に切られる。検出当初は78号土坑との切り合いに気づかなかつたため、南壁、北壁については切り合い関係を確認できない段階に掘削してしまい掘りすぎてしまった。調査時の所見からは78号土坑が切っていたと考えられる。平面形態は長方形で、長軸は約130cm、短軸105cmである。床面はほぼ平坦で、壁面は垂直ぎみに立ち上がる。床面と壁面との境界付近はなだらかなる箇所が多い。

出土土器（第77図）

11は壺の口縁部で、端部はナデによって窪み、突出した内外両端部に小さな刻目を密に施す。12～14は甕である。12は口縁部外面にやや下向きの大さめの三角突帯を貼り付け、刻目を施す。内面はナデによって窪む。13は大きな三角突帯を貼り付け、外面はハケ調整を行う。14は丸みを帯びた大きな突帯を貼り付け、刻目を施す。口縁部内面に口縁上面のナデの際の粘土がわずかにはみ出る。

78号土坑（図版49、第76図）

調査区北寄り、71号土坑の南に位置し77号土坑を切る。北壁は77号土坑との切り合い関係を確認できない段階に掘削してしまい掘りすぎてしまった。平面形態は隅丸長方形で、長軸約130cm、短軸115cmである。床面はほぼ平坦で、東壁では一段テラス状となる箇所がある。壁面は垂直に立ち上がる。

出土土器（第80図）

1～8は甕である。1は口縁端部に被さる格好で小さな突帯を貼り付け、板状工具によって大きな刻目を施す。2は小さめの三角突帯を貼り付け刻目を施す。口縁端部内面はわずかに突出する。3は口縁端部と端部より3cm程下がった箇所に小さな突帯を貼り付ける。摩滅しているが突帯上に小さな刻目が確認できる。4・5は口縁部外面にやや大きな三角突帯を貼り付けるもので、5は胴部にも小さな三角突帯を貼り付ける。調整はナデである。6は口縁端部と端部より3cm程下がった箇所に小さな三角突帯を貼り付け刻目を施す。突帯間に焼成後の穿孔が確認でき、補修孔かと思われる。調整はナデである。7は内傾する器形で、口縁部外面に大きな三角突帯を貼り付ける。胴部上位には2条沈線を巡らす。器面は摩滅している。8は三角突帯を貼り付け外面は縦方向のハケ調整を行う。9～12は甕の底部である。9・10の底面はわずかに窪む程度である。11・12は底面中央が窪むもので、12は粘土が剥がれ擬口縁が確認できる。13は甕の蓋で、頂部中央が窪む。外面はハケ調整を行う。当土坑は弥生時代中期初頭頃に比定できよう。

79号土坑（図版50、第76図）

調査区中央、74号土坑の西約3mに位置する。当初プランがはっきりせず、広い範囲で一段下げたところ、長軸135cm、短軸117cmの隅丸方形プランの土坑を確認することができた。土坑の東側には浅い落ち込みと径50cm程のピットが、西側には浅い落ち込みが存在する。土坑は東壁側を除いて段が巡り、二段掘りの形態をなす。床面は平坦で、壁面は垂直に立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土に大きな地山ブロックを含む。

出土土器（図版60、第80図）

14・15は壺である。14は口縁部内面に突出する。外端部はナデによって沈線状に窪む。15は頸部が短く、口縁部も短く外傾する。端部が上下に肥厚し3条の沈線を施す。摩滅しているが、頸部外面はハケ調整の痕跡が残る。頸部内面は横方向のハケ調整を行う。16～18は甕である。16は稜を持って屈曲し外に開くもので、外面は縦方向、内面は斜めのハケ調整を行う。17は屈曲し外に開く器形で、屈曲部外面に1条の三角突帯を貼り付ける。口縁端部は尖りぎみに収める。18は高い三角突帯に刻目を施す。外面はハケ調整を行う。19は甕の底部で、底面は高い上げ底となる。20は鉢で内外面ともハケ調整を行う。底部は平底である。21は小型精製鉢で摩滅している。22は注口部分の破片で端部にかけてすぼまる。外面は縦方向のミガキ調整を行う。

80号土坑（図版50、第78図）

調査区中央、75号土坑の西約2mに位置する。平面形態は隅丸方形で、規模は150cm×153cmである。南側は段を持って浅くなり、この部分は緩やかに傾斜する。南壁際中央付近はこの段の部分が分かりにくく、掘りすぎてしまった可能性がある。床面は平坦で、壁面はやや外傾して立ち上がる。

出土土器（第80図）

23は鋤先口縁の壺である。24は壺の胴部と思われ、三角突帯を貼り付ける。外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整を行う。25は広口壺で端部は面を持ち刻目を施す。26・27は壺の底部である。26は赤変している。28・29は甕である。28は大きな三角突帯を貼り付け、外面は縦方向のハケ調整を行う。29は口縁部外側にやや長く張り出し、内面の突出も大きい。30は高杯脚部で端部はナデにより窪み、上方へ突出する。外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整を行う。31は鉢で外面は丁寧なナデ、内面はハケ調整の後ナデを行う。32は器台もしくは支脚であろうか。外面はタタキ調整、内面はユビによるナデを行う。

81号土坑（図版50、第78図）

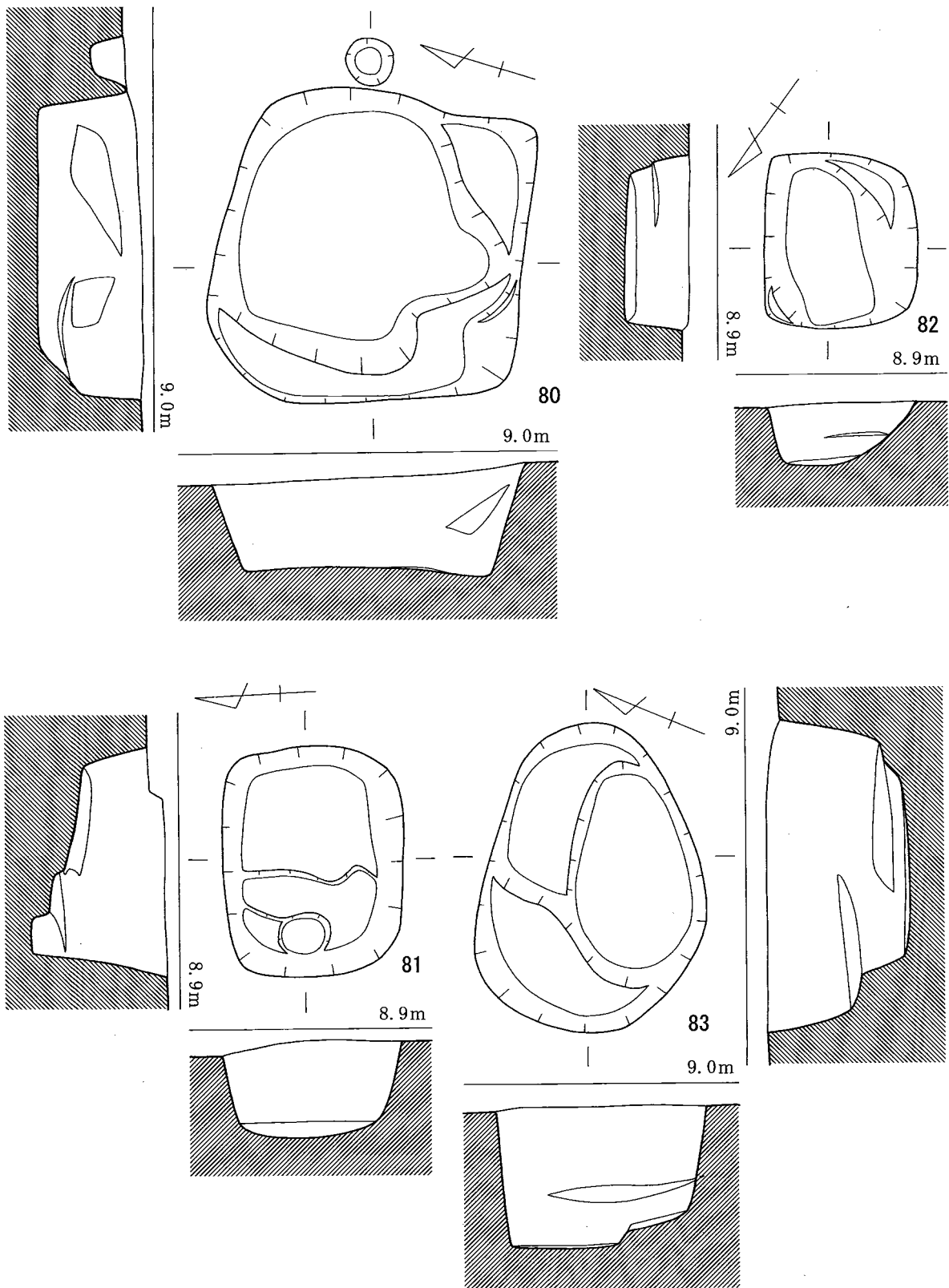
調査区中央に位置し、13号竪穴住居跡を切る。平面形態は隅丸長方形で、長軸114cm、短軸89cmである。床面は北側に向かって下がり、北半は段を持って落ちる。北壁際に径25cm程のピット状に落ちる箇所がある。壁面は外傾して立ち上がる。

出土土器（第80図）

33は壺の底部である。34～36は甕である。34は口縁部が外側に長く延び、上面は強く窪む。35は大きな突帯を貼り付け、付け根付近に軽い段が生じる。口縁部内面にわずかに突出する。36は屈曲し口縁部が外に開くもので、端部が跳ね上げぎみになる。37は甕の底部で、底面は高い上げ底になる。外面はハケ調整を行う。38はボール状の鉢で内外面ともハケ調整を行う。39は鋤先口縁の高杯である。当土坑は出土土器の量が少ないが、弥生時代中期中頃から後半のものと思われる。

82号土坑（図版51、第78図）

調査区中央、79号土坑の南に位置する。平面形態は隅丸長方形で長軸86cm、短軸75cmである。床面は南西側にやや上がり、南隅では段を持って高くなる。壁面は南西側では緩く立ち上がり、北東側はやや外傾して立ち上がる。北西、南東側は垂直ぎみに立ち上がる。



第78图 80~83号土坑实测图 (1/30)

出土土器 (第80図)

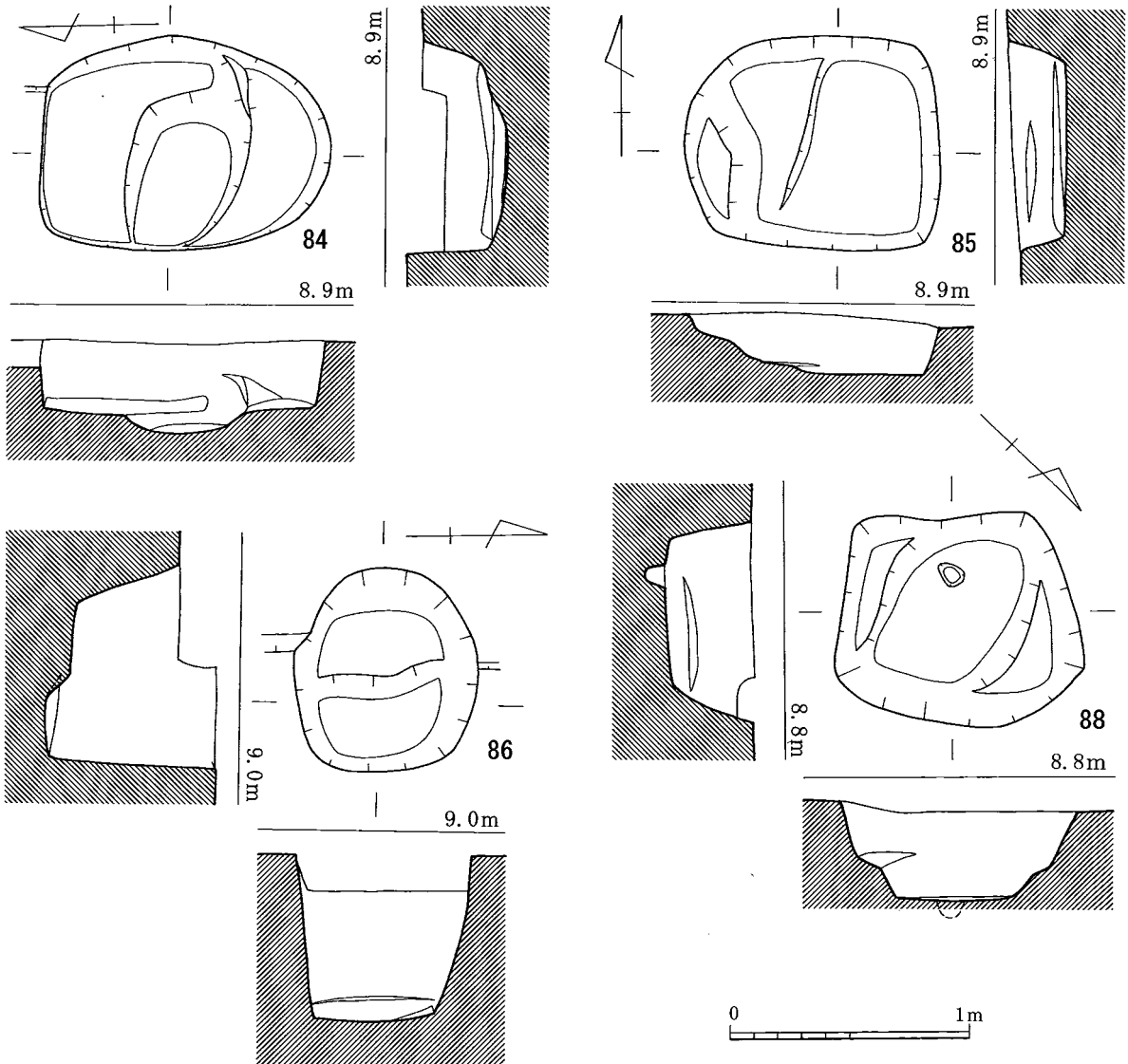
40は壺で、内傾する胴部に口頸部は稜を持って屈曲し外に開く。41は壺の頸胴部界に1条の突帯を貼り付け、上面は強いナデによって窪む。42は壺の胴部で、2条の小さな三角突帯を貼り付け刻目を施す。外面は一部、板状工具による押圧が連続して施される。43は口縁部が内外面に大きく肥厚する。44は高杯の脚部で、端部はナデによって窪む。

83号土坑 (図版51、第78図)

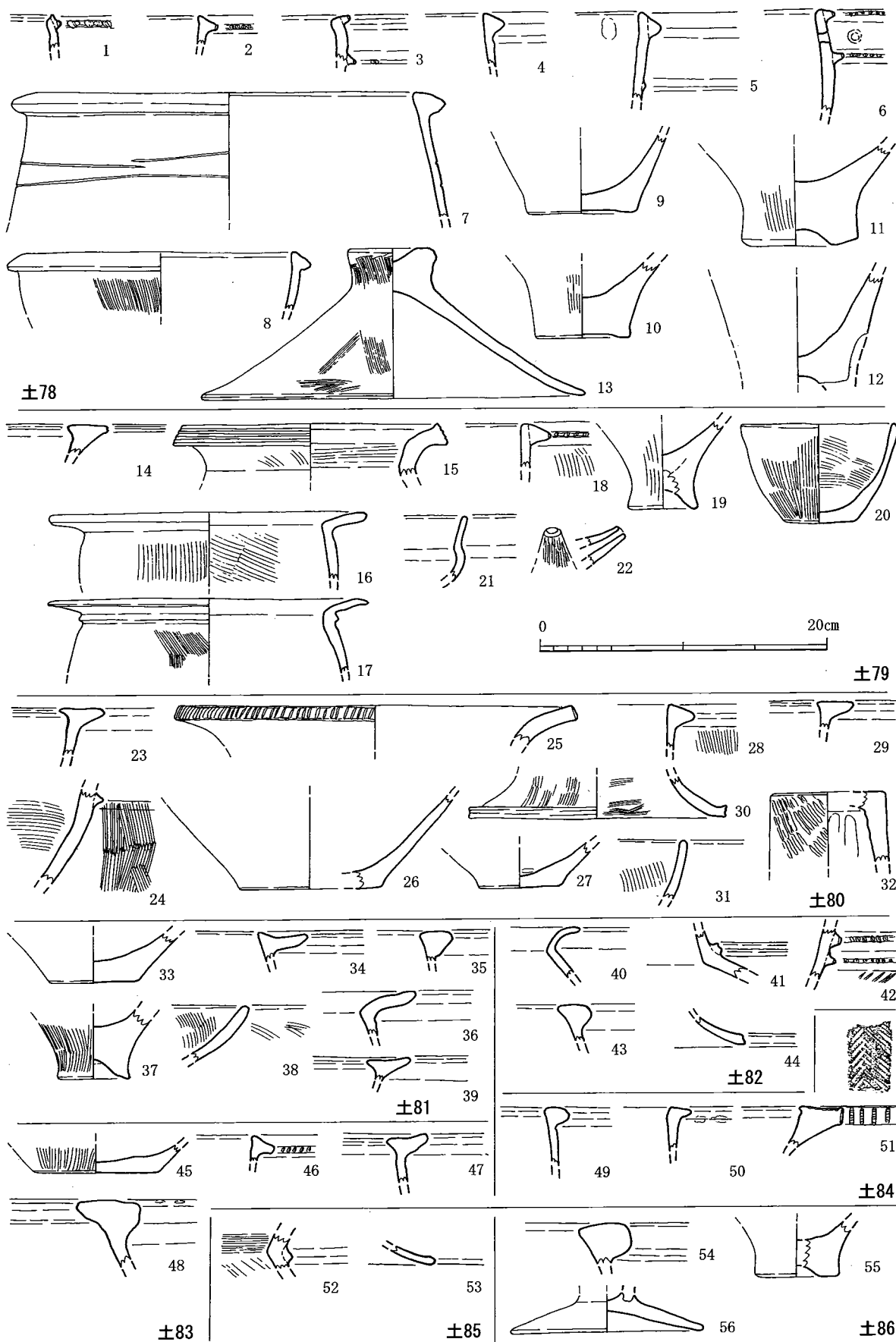
調査区中央、75号土坑の南に位置し、13号竪穴住居跡を切る。平面形態は楕円形で、長軸153cm、短軸113cmである。床面は東側で深くなり、北側及び西側には緩く傾斜したテラスが存在する。壁面は垂直ぎみに立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土に地山ブロックを多く含む。

出土土器 (第80図)

45は壺の底部で、外面はハケ調整を行う。46~48は甕である。46は口縁部外面にやや下向きの突帯を貼り付け刻目を施す。口縁部内面は小さく突出する。47は鋤先口縁を呈する。48は大型のもので、



第79図 84~86・88号土坑実測図 (1/30)



第80图 78~86号土坑出土土器实测图 (1/4)

口縁部内面は大きく突出するのに対し、口縁部外面はコ字状に収める。上面にユビオサエが確認できる。

84号土坑（図版51、第79図）

調査区中央、83号土坑の北東に位置する。平面形態は楕円形で、長軸120cm、短軸90cmである。南側では落ち込みと重なっており、埋土の識別に苦慮したため、南側は大幅に掘りすぎてしまった。南側壁面の立ち上がりは、本来緩やかだったものと思われる。床面は中央で一段下がる。壁面は南壁は詳細不明なもの、その他は垂直ぎみに立ち上がる。

出土土器（図版60、第80図）

49は口縁部外面に丸みを帯びた突帯を貼り付け、内面は小さく突出する。50は小さな突帯を貼り付け逆L字状をなす。突帯の下側はユビオサエを施す。51は高杯と思われ、端部に板状工具による刻目を、上面にも板状工具による綾杉状の文様を押圧する。

85号土坑（図版52、第79図）

調査区中央に位置し、16号竪穴住居跡を切る。平面形態は楕円形で、東側では隅丸方形ぎみになる。規模は長軸107cm、短軸は89cmである。床面は東側で一段下がるが、それぞれの段はほぼ平坦である。壁面は西側は緩やか段を持ちながら立ち上がるが、その他はやや外傾して立ち上がる。

出土土器（第80図）

52は稜を持って屈曲し外に開く甕で、屈曲部に1条の小さな三角突帯を貼り付ける。内面はハケ調整を行う。53は高杯の脚部で端部は丸く収める。

86号土坑（図版52、第79図）

調査区中央、85号土坑の西に位置し、18号竪穴住居跡を切る。平面形態は楕円形で、長軸86cm、短軸78cmである。床面は東側で一段緩やかに下がり、二段掘りの形態をなす。壁面は西側はやや緩やかに立ち上がり、その他は垂直ぎみに立ち上がる。

出土土器（第80図）

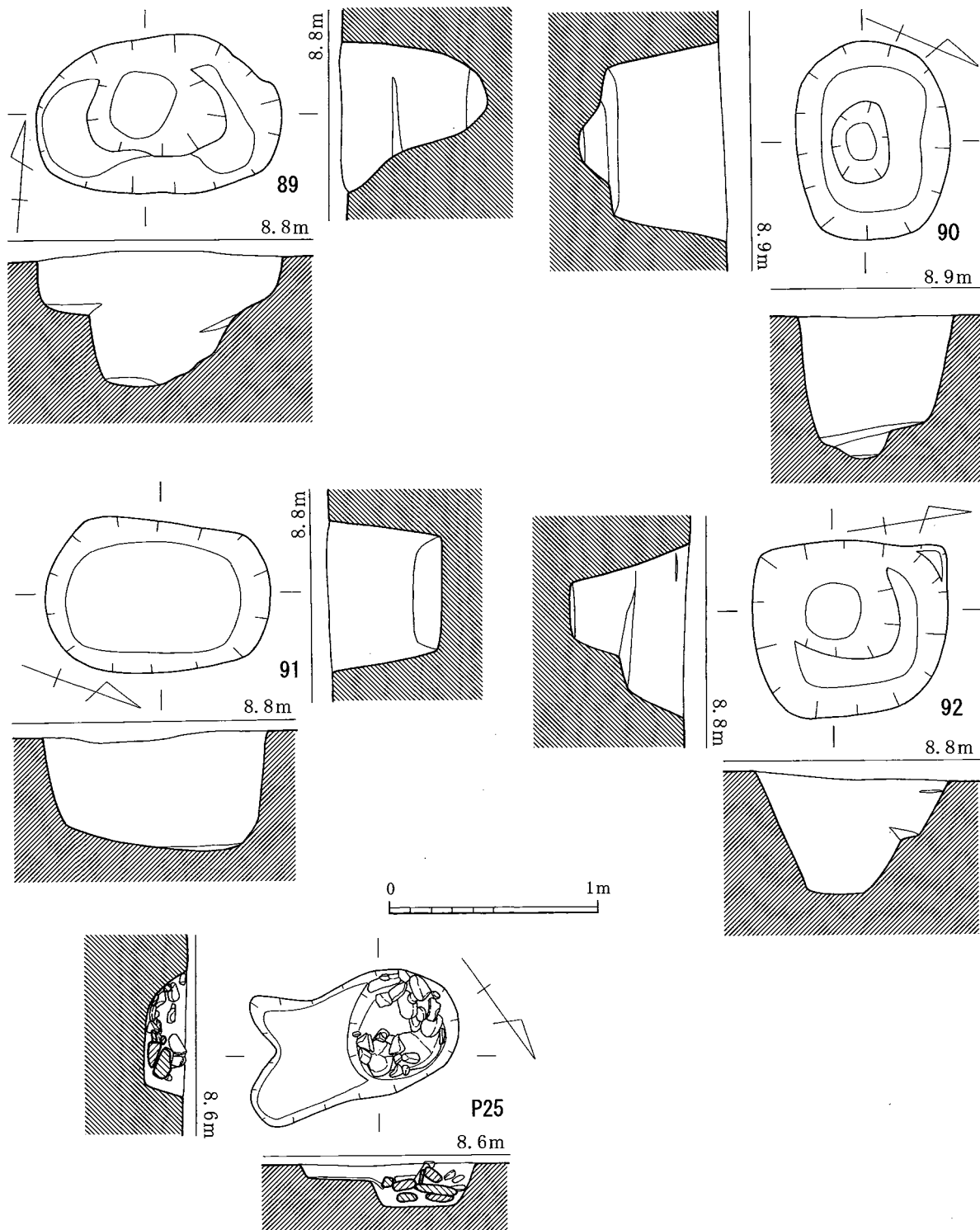
54は大型甕で、口縁部外面は丸みを帯びながらも方形の大きな突帯を貼り付ける。55は甕の底部で底面は中央が窪む。56は精製の低脚高杯と思われ、脚部の接合部に擬口縁が確認できる。

88号土坑（図版52、第79図）

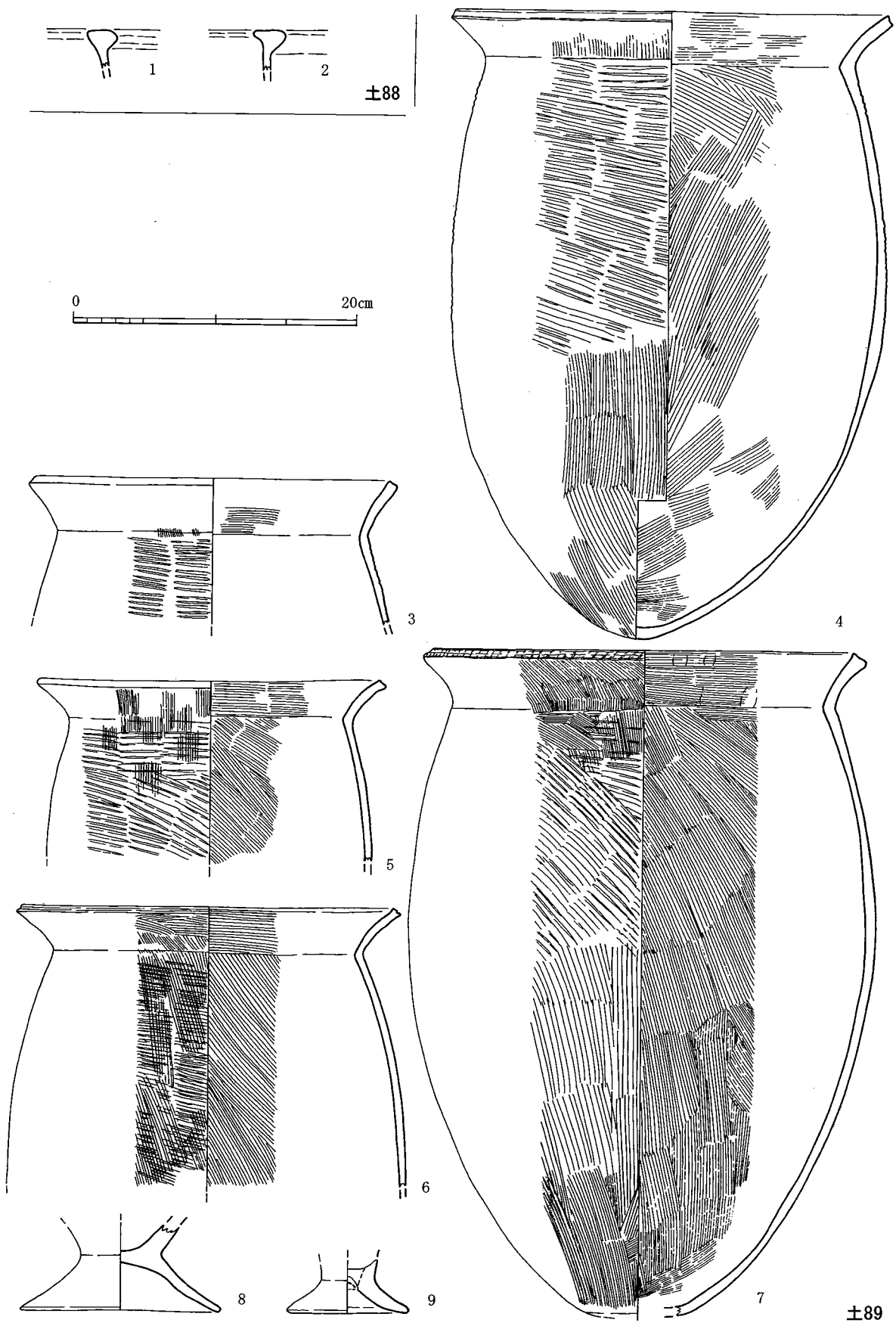
調査区中央やや南寄りに位置し、16号竪穴住居跡を切る。平面形態は隅丸長方形で、長軸105cm、短軸85cmである。北側と南側にテラスを持ち、中央は一段下がる。床面は東西方向に軸をとる楕円形プランとなる。ただ南側のテラス部分については、上端プランでいびつになる箇所と丁度合致するため、別の遺構である可能性が高い。床面は平坦で、南西寄りに小さなピットを有する。壁面は外傾して立ち上がる。

出土土器（第82図）

1・2は甕である。1は口縁部外面に丸みを帯びた大きな突帯を貼り付ける。2は口縁部内面の突出が大きい。



第81図 89~92号土坑、ピット25実測図 (1/30)



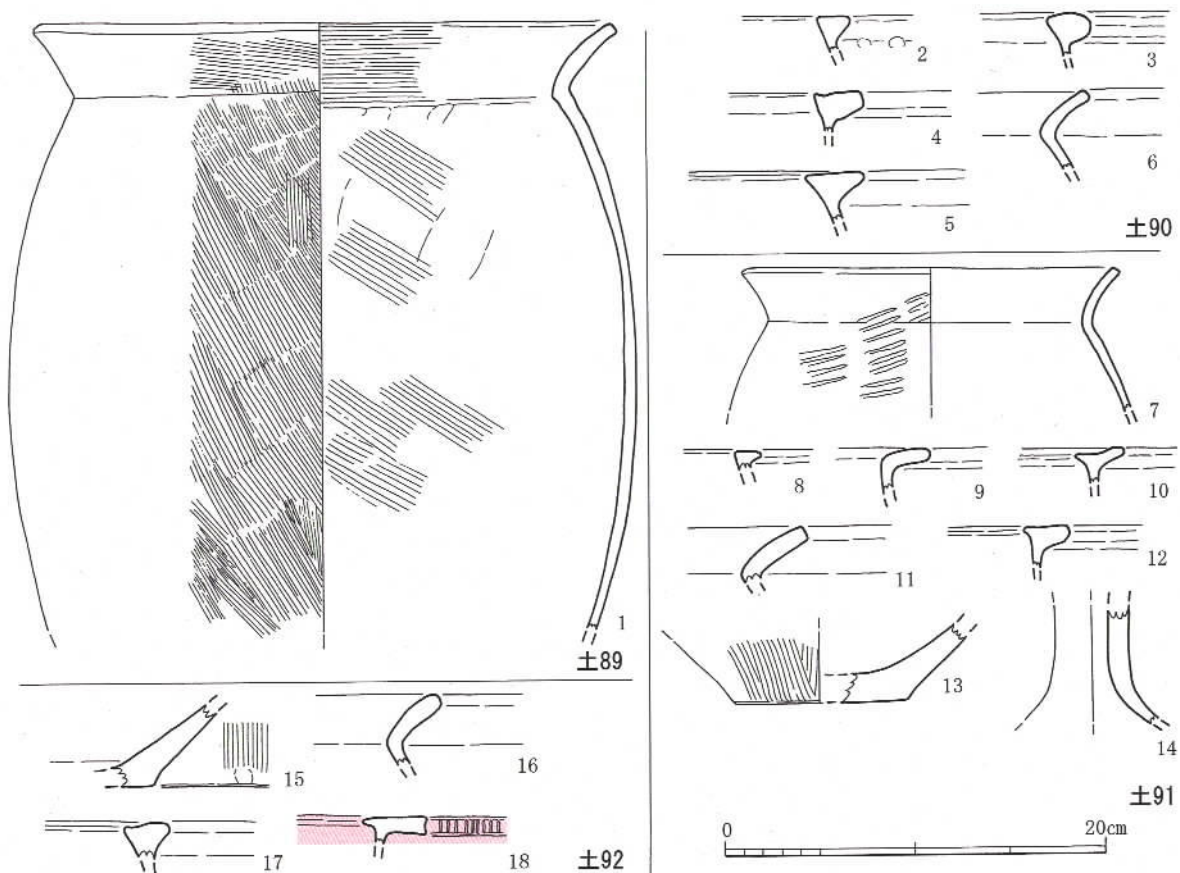
第82图 88·89号土坑出土土器实测图 (1/4)

89号土坑（図版53、第81図）

調査区中央、85号土坑の東に位置し、16号竪穴住居跡の床面で確認した。平面形態は楕円形で、長軸116cm、短軸74cmである。中央に一段急激に深くなる箇所があるが、これは当土坑よりも古いピットになると思われる。当土坑の床面は確認面から30cm程下のレベルであろう。推定床面近くで、土器が一括投棄されたような状態で出土している。壁面はやや外傾して立ち上がる。

出土土器（図版60、第82・83図）

第82図3～7、第83図1は稜を持って屈曲し外に開く甕である。第82図3は端部にかけて若干肥厚し、端部は面を持つ。胴部外面はタタキ、内面はナデ調整を行う。4は口縁端部がナデによって窪む。胴部外面は上位がタタキ、下位はハケ調整を行う。内面は全面ハケ調整。底部は尖りぎみに丸く収める。5は胴部外面をタタキの後にハケ調整、内面は全面ハケ調整を行う。6は口縁端部がナデにより窪む。胴部外面はタタキの後ハケ調整、内面は全面ハケ調整を行う。7は口縁端部に刻目を施し、ナデによって窪む。胴部外面は上位はタタキの後ハケ調整、下位は粗いハケ調整を行い、底部付近は細かいハケ調整を行う。内面は全面細かいハケ調整である。底部は欠損しているが、丸く収めるようである。第83図1は屈曲部内面に口縁部から粘土が少しはみ出る。調整は全面ハケ調整である。第82図8・9は甕の底部である。8は脚部が直線的にかなり開く。9は脚部内面に擬口縁が確認できる。下方向から2回程に分けて粘土を充填するようである。当土坑は出土した甕の胴部の張り出しが弱いことや、タタキ調整を残すこと、底部が丸みを帯びることなどから弥生時代後期末に比定できよう。



第83図 89～92号土坑出土土器実測図（1/4）

90号土坑（図版53、第81図）

調査区中央、81号土坑の南約2mに位置する。平面形態は楕円形で、長軸95cm、短軸74cmである。床面では隅丸方形ぎみのプランになり、南側が低くなる。中央やや南寄りの箇所に40cm×25cmの楕円形プランの浅いピットを有する。壁面はやや外傾して立ち上がる。

出土土器（第83図）

2～6は甕である。2は口縁部外面に三角突帯を貼り付け、下端にユビオサエを施す。3は丸みを帯びた大きな突帯を貼り付け、内面にも大きく突出する。4は外面に方形の大きな突帯を貼り付け、上面は強いナデによって窪む。5は口縁部がT字状を呈する。6は屈曲し口縁部が外に開く。胴部内面にハケ調整の痕跡が残る。

91号土坑（図版54、第81図）

調査区中央、89号土坑の北東に位置し、16号竪穴住居跡の床面で確認した。平面形態は楕円形で、長軸106cm、短軸73cmである。床面は北側に向かって深くなり、壁面はやや外傾して立ち上がる。

出土土器（第83図）

7～12は甕である。7は屈曲し口縁部が外に開く。摩滅が著しいが、胴部から一部口縁部にかけてタタキの痕跡が残る。8は口縁部外面に小さな突帯を貼り付ける。9は屈曲し口縁部が外に大きく開き、端部にかけて肥厚する。10は鋤先口縁で上面は窪む。11は屈曲し口縁部が外に開く。端部は面を持つ。12は鋤先口縁で厚く仕上げる。13は壺の底部で外面はハケ調整を行う。14は高杯の脚部で摩滅が著しい。

92号土坑（図版54、第81図）

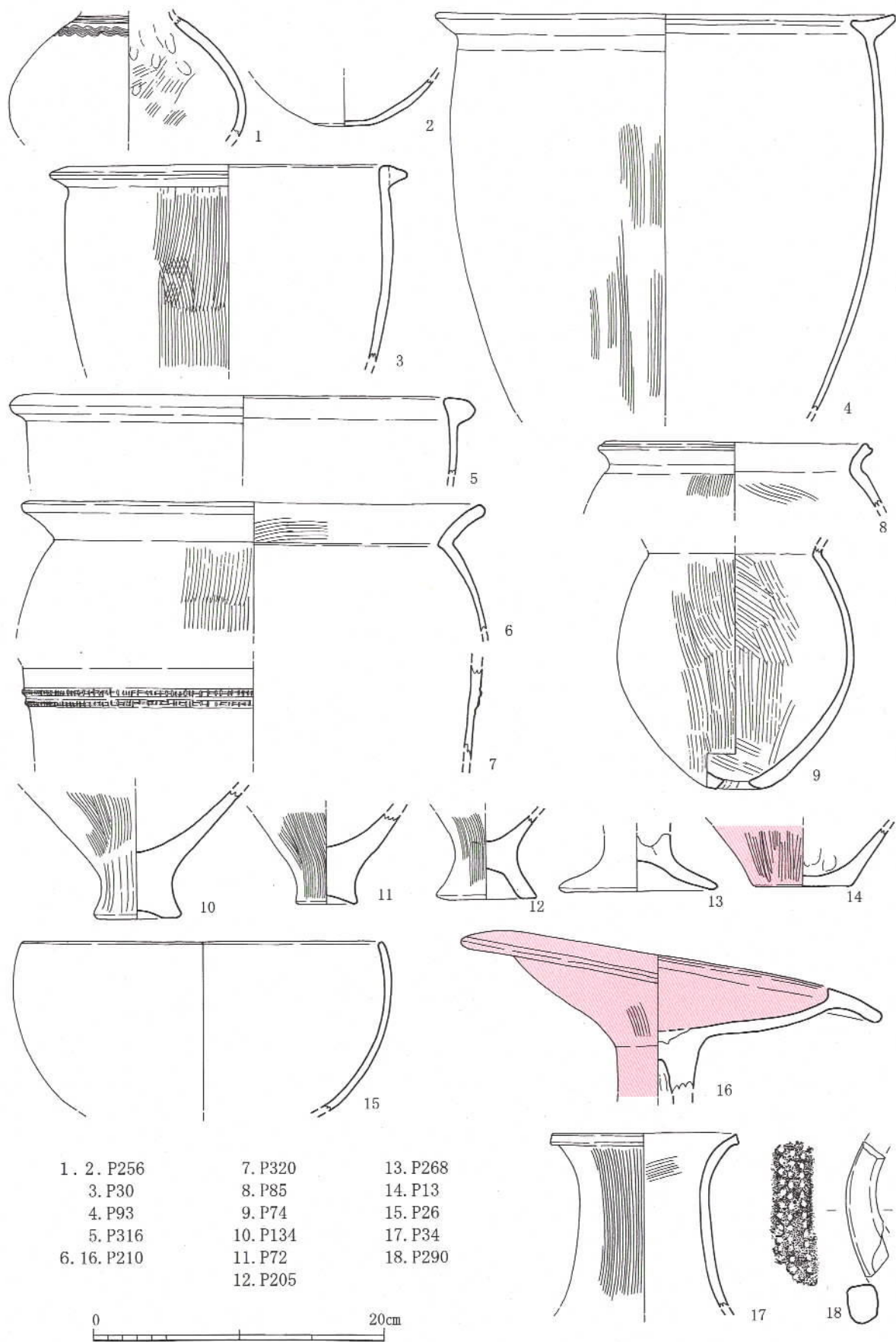
調査区中央やや南寄り、88号土坑の西に位置する。平面形態は隅丸方形ぎみであり、規模は94cm×84cmである。北側から東側にかけてはテラス状になり、南西隅で深く落ち込む。この落ち込む箇所は円形プランを呈する。壁面は全体的にやや緩く外傾して立ち上がる。

出土土器（第83図）

15は壺の底部で外面ハケ調整、一部ユビオサエを施す。16は稜を持って屈曲し口縁部が外に開く。端部にかけて肥厚する。17は口縁部内外に小さく肥厚しT字状に近い形状をなす。18は丹塗磨研の鋤先口縁甕で、口縁端部に刻目を施す。

ピット25（図版54、第81図）

調査区北部、4号竪穴住居跡の北に位置する。検出時は不整形の平面形態であったが、掘削を進めていくうちにプランの東寄り単なる落ち込みであることが分かり、実際には長径58cm、短径52cmのピットになった。ピットからは軽石が多量に出土し、特に床面直上に集中していた。埋土は暗灰色粘質土で、粘性がかなり高い。軽石を集積したピットと思われる。軽石は径5～15cm程の大きさで、計3200g程が出土した（図版63）。



第84図 ピット出土土器実測図 (1/4)

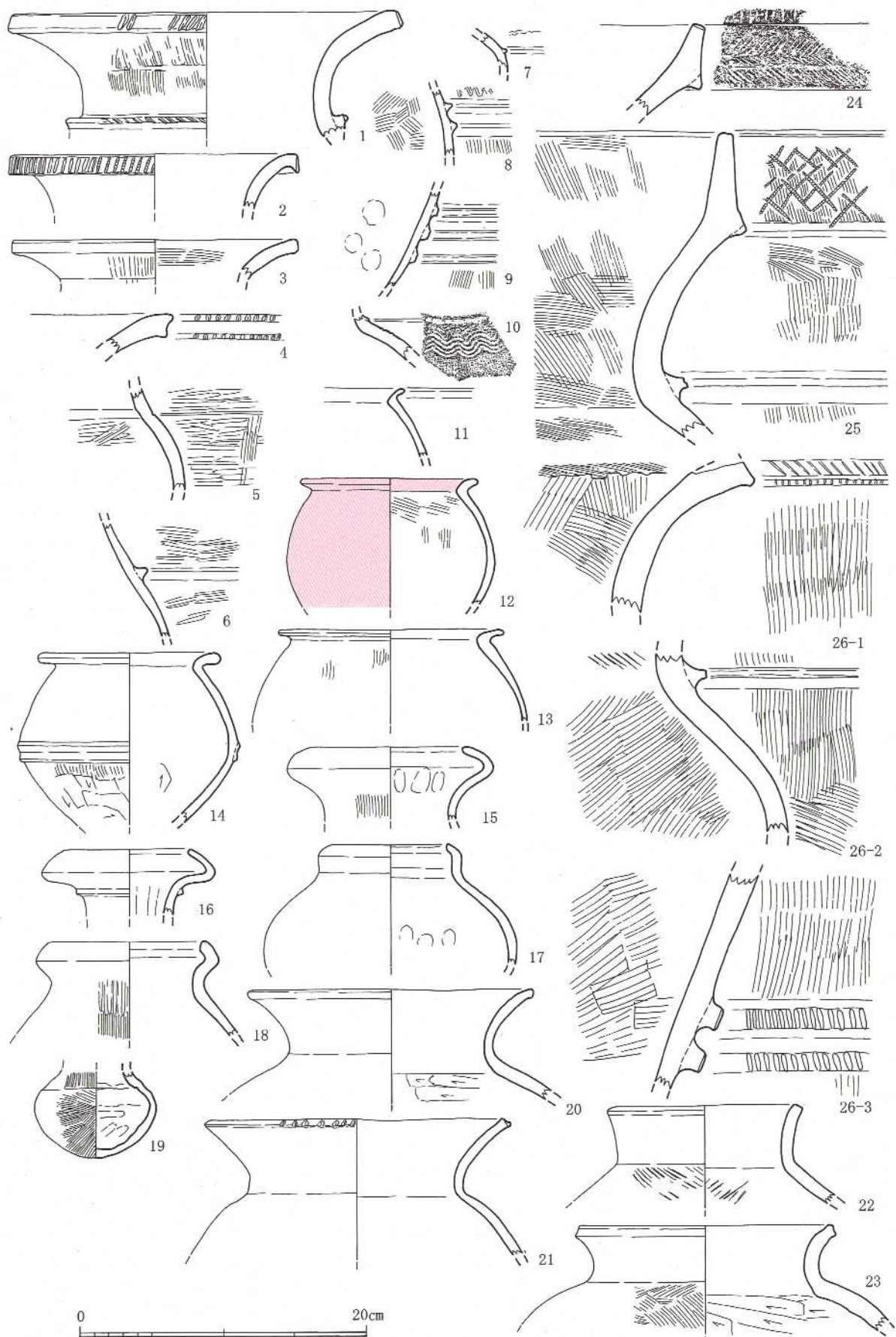
(4) ピット出土土器 (図版60、第84図)

1は壺で胴部が下膨れぎみに張り、胴部上位に櫛描きの平行沈線文と波状文を巡らす。器面は摩滅しているが、外面は一部ハケ調整が見られ、内面はハケ調整とユビオサエを行う。2は壺の底部で、器面は摩滅している。3～9は甕である。3は口縁部外面に大きな三角突帯を貼り付ける。外面は縦方向のハケ調整を行う。4は鋤先口縁の甕で、外面はハケ調整を行う。5は口縁部外面に大きな丸みを帯びた突帯を貼り付け、口縁部内面にやや張り出す。6は稜を持って屈曲し口縁部が外に開く。口縁部内面は横方向のハケ調整を行う。屈曲部内面はわずかだが突出する。胴部はよく張り、外面は縦方向のハケ調整を行うが、内面は摩滅している。7は口縁部が欠損している。胴部上位に2条の細い突帯を接近して貼り付け、小さな刻目を2条同時に施す。突帯から上は器壁が厚くなる。調整はナデで仕上げる。8は口縁部が短く外反し、端部がナデによって窪む。胴部は外面が縦方向、内面がやや横方向ぎみのハケ調整を行う。9は稜を持って屈曲し口縁部が外に開く。底部は打ち欠きによって穿孔を行う。内外面とも粗いハケ調整を行う。10～14は甕の底部である。10は底面中央が窪む。底部の外面は縦方向の丁寧なナデ調整を行う。11は底径が小さく、上げ底になる。12は脚状になる。13は脚状で大きく開く。接合部で剥がれており擬口縁が確認できる。14は丹塗磨研で平底である。外面は縦方向のミガキ、内面はユビオサエを施す。15はやや内湾する鉢で、器面は摩滅している。16は丹塗磨研の高杯で、口縁部は下向きの鋤先口縁となる。杯部底は充填粘土が剥がれ、脚部内面は絞り目が確認できる。器面は摩滅しているが一部ハケ調整の痕跡が確認できる。17は器台で端部はナデによりやや窪み、外に肥厚する。外面は縦方向のハケ調整、内面は一部横方向のハケ調整が確認できる。18は把手になろうか。側面に密に刺突を施す。

(5) 包含層出土土器 (図版60～63、第85～93図)

1～4は広口壺である。1は頸胴部界に突帯を持ち、突帯上と口縁端部に刻目を施す。頸部外面はハケ調整を行う。2は口縁端部が下方向に拡張し、板状工具を押し付けて刻目を施す。3は口縁端部がナデのため少し窪む。4は口縁端部がナデによって窪み、内外端に刻目を施す。

5・6は壺の頸胴部で、5は頸胴部界外面に段を持ち、内面はナデによって窪む。内外面ともミガキ調整を行う。6は頸胴部界が緩やかであるが、1条の三角突帯を貼り付ける。7は胴部が大きく張る壺になろうか。小さな三角突帯を貼り付け、胴部上位に細い波状文を描く。8は壺の胴部で、2条の三角突帯を貼り付け、外面に一部細い波状文を描く。内外面ともハケ調整を行う。9は胴部下位に3条の突帯を貼り付け、突帯上はナデによって窪む。10は壺で、頸胴部界に低い突帯を貼り付け、胴部に櫛描き波状文を描く。外面はハケ調整を行う。11～14は無頸壺である。11は精製で口縁端部は尖る。12は丹塗磨研で、内面はハケ調整の痕跡が確認できる。13は摩滅しているが外面にハケ調整の痕跡が残る。おそらくハケ調整の後ミガキを行っていると思われる。14は胴部最大径の箇所にM字形突帯を貼り付ける。口縁部は強く外反し、端部は肥厚ぎみに収める。外面胴部上位はナデ、下位はハケ調整、底部に近い箇所はケズリ調整を行う。内面も底部に近い箇所にケズリ調整が見られる。15～18は袋状口縁壺の類である。16は頸部上位に1条の三角突帯を貼り付ける。17・18は口縁部が短い。18は外面に縦方向のミガキ調整が確認できる。19は小型壺である。外面は胴部が横方向、頸部が縦方向のハケ調整を行い、内面は雑にユビによるナデで仕上げる。頸胴部界は粘土紐の痕跡が明瞭に残る。20・21は口頸部が直線的に外に開く壺である。20は口縁端部が外側に若干突出する。胴部内面はケズ



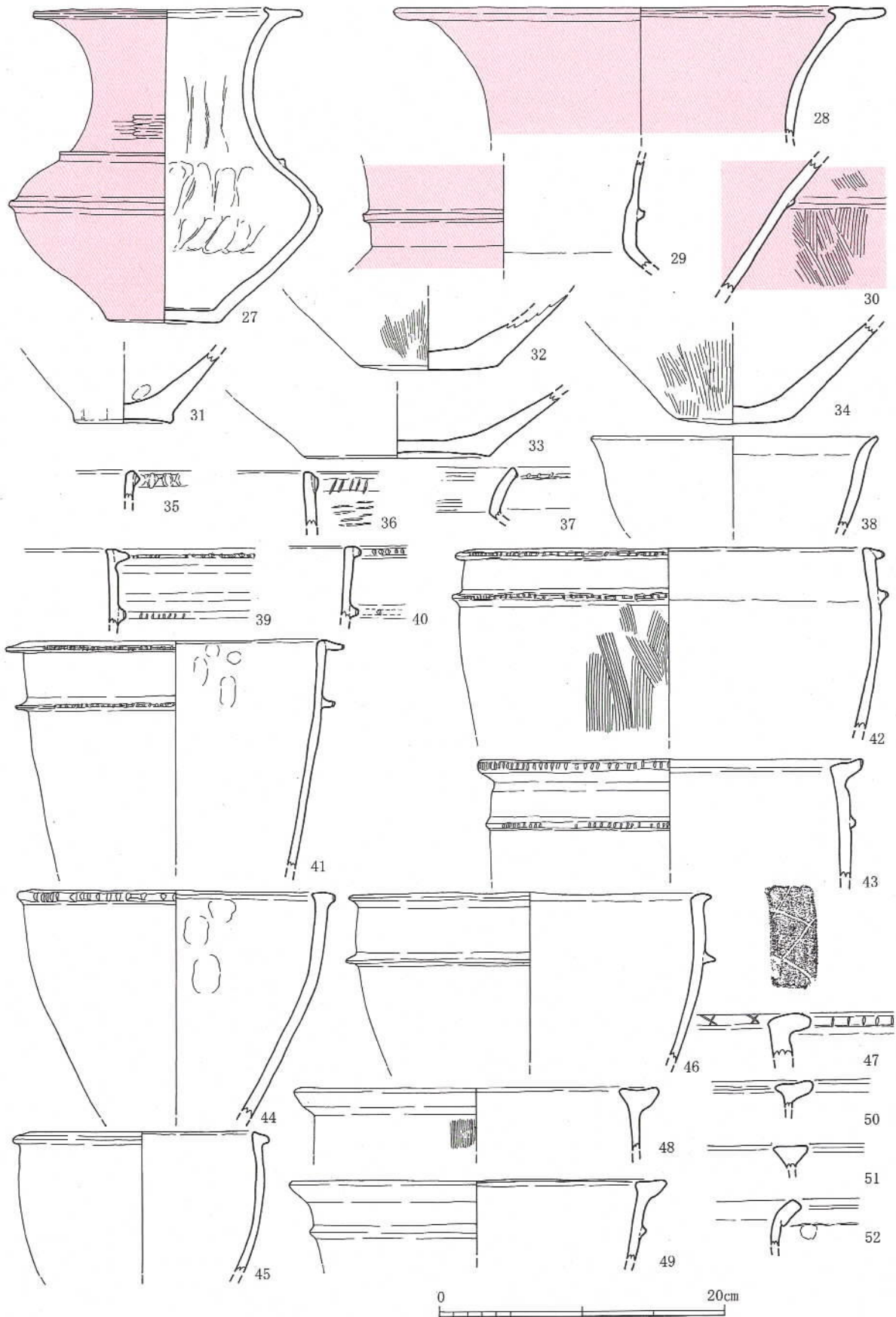
第85图 包含層出土土器実測図① (1/4)

り調整を行う。21は口縁外端部に刻目を施す。22・23は口頸部が短く直立ぎみに立ち上がる壺である。22は胴部内外面に粗いハケ調整を行う。23はやや外反し、端部は少し窪む。胴部外面はハケ調整、内面はケズリ調整を行う。24～26は二重口縁壺である。24は口縁屈曲部外面に突帯を貼り付け、綾杉状の沈線文を展開する。端部は刻目を施す。25は口縁屈曲部外面に突帯を貼り付け、外面は格子状に板状工具を押し付けて施文する。頸胴部界は1条の突帯を貼り付ける。内外面ハケ調整を行う。26は口縁部から胴部まで破片で出土。接合できないが同一個体と思われる。口縁部は屈曲部で剥がれ、擬口縁が確認できる。擬口縁の部分にもハケ調整が確認できることから、ハケ調整の後に粘土を貼り付け、再度仕上げの粗いハケ調整を行うことが分かる。口縁部外面は文様を施し、下端部に刻目を施す。頸胴部界には1条の突帯を貼り付け、胴部は大きく張り出す。胴部下半に2条のコ字状の突帯を貼り付け、棒状工具によって刻目を施す。全体に内外面とも粗いハケ調整を行う。

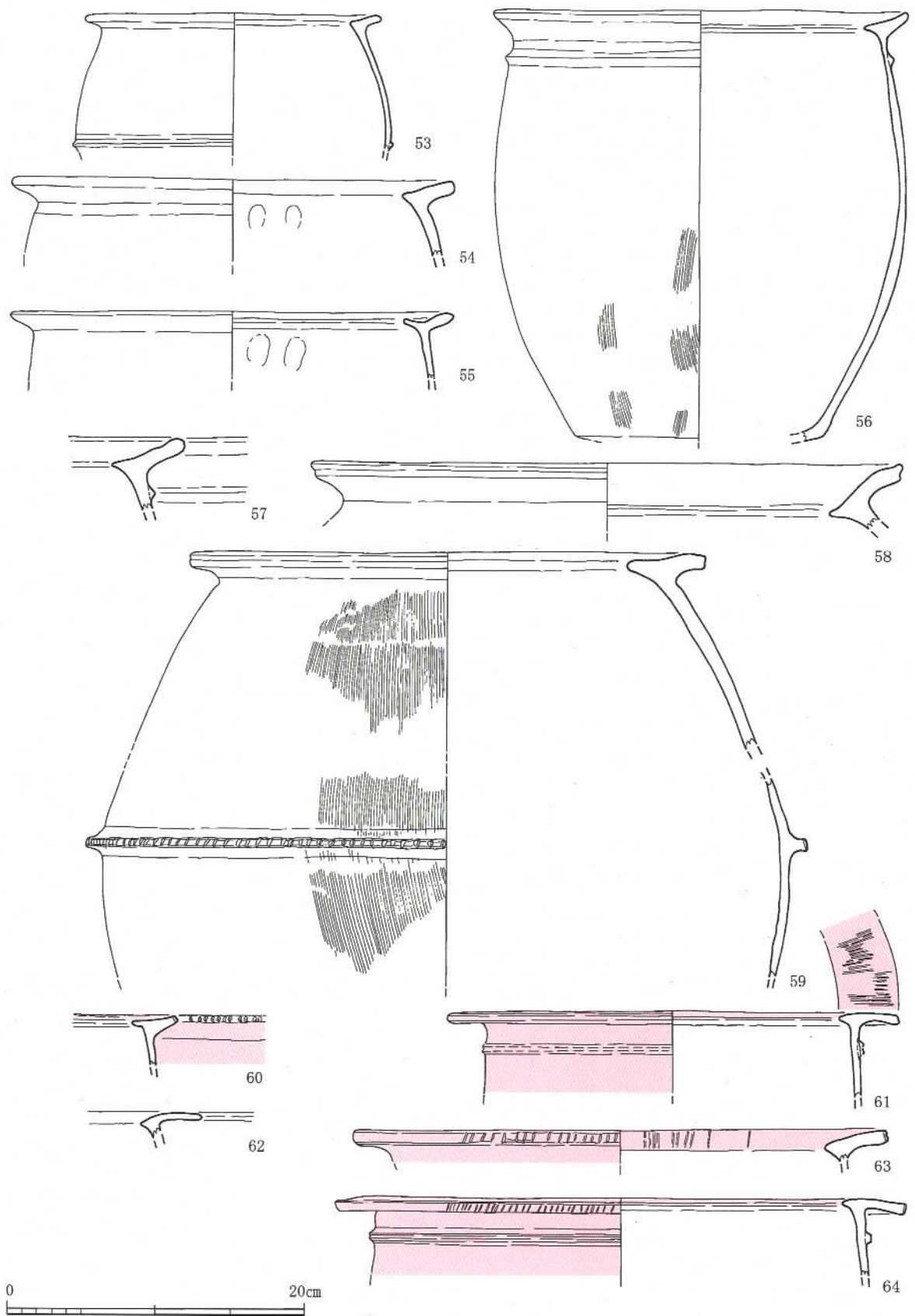
27～30は丹塗磨研壺である。27は口縁部は鋤先口縁で、頸胴部界と胴部最大径の箇所には三角突帯を貼り付ける。内面はユビオサエが顕著に見られる。28は鋤先口縁で、器面は摩滅している。29は頸胴部界が稜を持って屈曲し、屈曲部からやや上がった箇所に1条の突帯を貼り付ける。30は壺の頸部か。外面に1条の低い三角突帯を貼り付ける。外面はハケ調整を行う。31～34は壺の底部である。底面は31・33はわずかに上げ底となり、32・34はわずかに突状となる。34はやや丸みを帯びている。

35・36は小さく薄い突帯を貼り付ける甕である。35は突帯上に大きな刻目を施す。36は突帯上に鋭い工具による刺突を施し、外面は摩滅していて詳細は不明であるが、タタキ目のようなものが確認できる。37は屈曲し口縁部が外に開く器形の甕で、端部は外側に突出する。小さな突帯を貼り付けている可能性もあるが判断がつかない。口縁内面は横方向のハケ調整を行う。38は緩く如意状に外反する甕で、端部は尖りぎみに収める。器面は摩滅が著しい。39～43は口縁端部と胴部に突帯を貼り付け、刻目を施す甕である。39は口縁内面にわずかに突出する。40は小さめの丸みを帯びた突帯を貼り付ける。41は細く高い突帯を貼り付け、外面はナデ、内面はナデとユビオサエを施す。42は胴部外面にハケ調整を行う。43は口縁部突帯が上向きになり、突帯の付け根はナデによって窪む。内面はわずかに突出する。44は口縁部外面のみに突帯を持つ甕である。突帯上は刻目を施し、内面への突出も大きい。全体をナデによって仕上げるが、内面は一部ユビオサエが見られる。45は口縁部外面に無刻目突帯を持つ。器面は摩滅している。46は口縁部外面と胴部に無刻目突帯を持ち、ナデによって仕上げる。47は口縁部外面に突帯を貼り付け刻目を施す甕であるが、上面はやや丸みを帯び、そこにヘラ状工具によって×状の文様を展開させる。48～51は口縁端部が内外面に大きく張り出し、鋤先状あるいはT字状になる口縁の甕である。48は外面に縦方向のハケ調整の痕跡が確認できる。49は胴部にも小さな三角突帯を貼り付ける。52は緩く外反し、口縁部外面に粘土帯を貼り付ける甕である。貼り付け部の直下にユビオサエを施す。半島系の粘土帯土器に類似する。

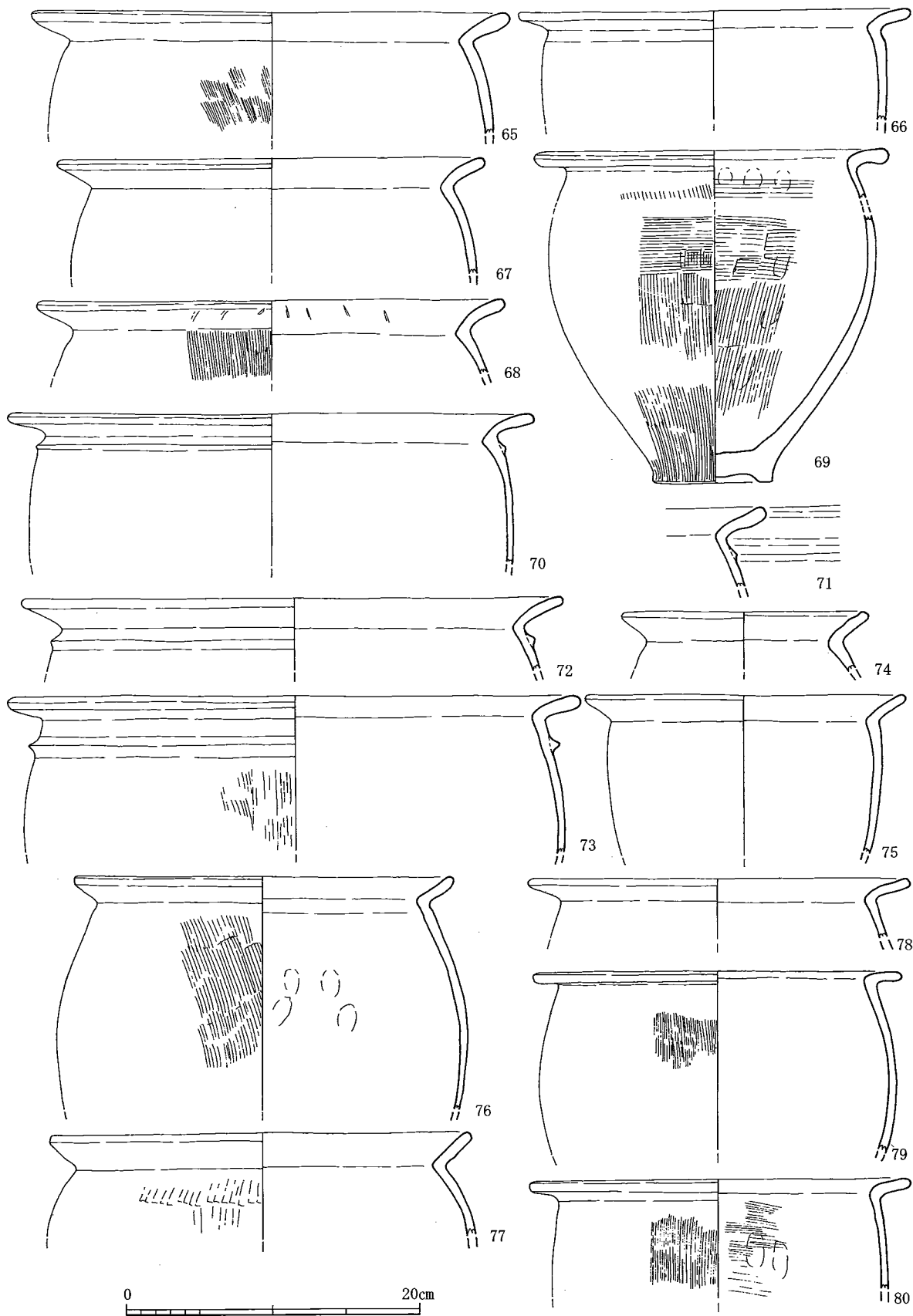
53・54は口縁部が長く逆L字状を呈する甕である。53は胴部に三角突帯を貼り付ける。口縁部内面はわずかに突出する。器面は摩滅している。54はナデ調整であるが、内面で一部ユビオサエが確認できる。55・56は口縁部が外に長く発達した鋤先口縁甕である。55の器面は摩滅しているが、内面にユビオサエが確認できる。56は口縁部下に1条の三角突帯を貼り付ける。外面はハケ調整を行う。底部付近は稜を持って屈曲しているが、詳細は不明。57～59は大型の鋤先口縁甕である。57は口縁部直下に1条の三角突帯を貼り付ける。口縁端部は丸くやや跳ね上げぎみに収める。58は口縁がやや外反ぎみになり端部が窪む。59は接合できないが、同一個体の破片から復原して図示している。胴部最大径



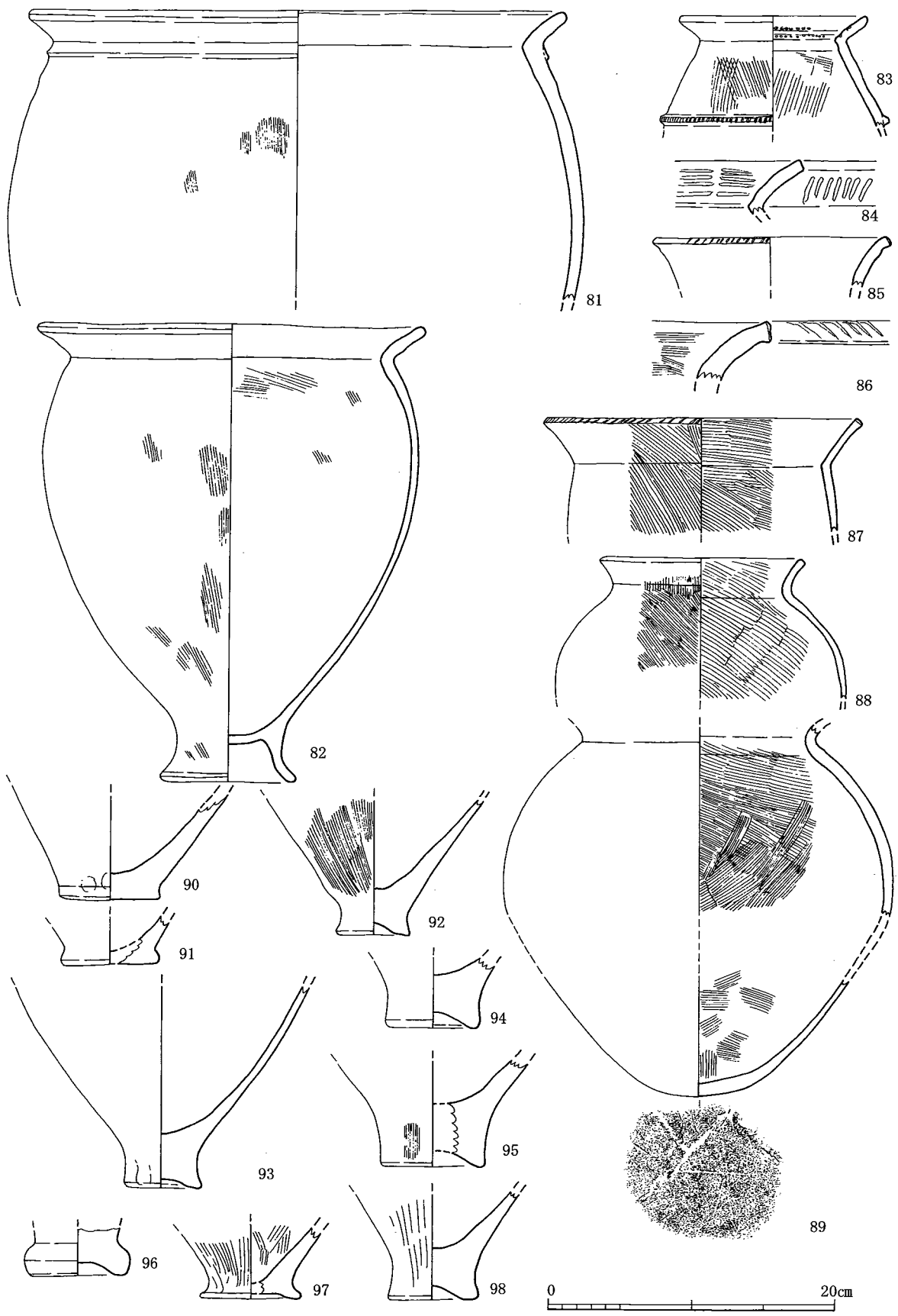
第86图 包含層出土土器実測图② (1/4)



第87图 包含層出土土器实测图③ (1/4)



第88图 包含層出土土器实测图④ (1/4)



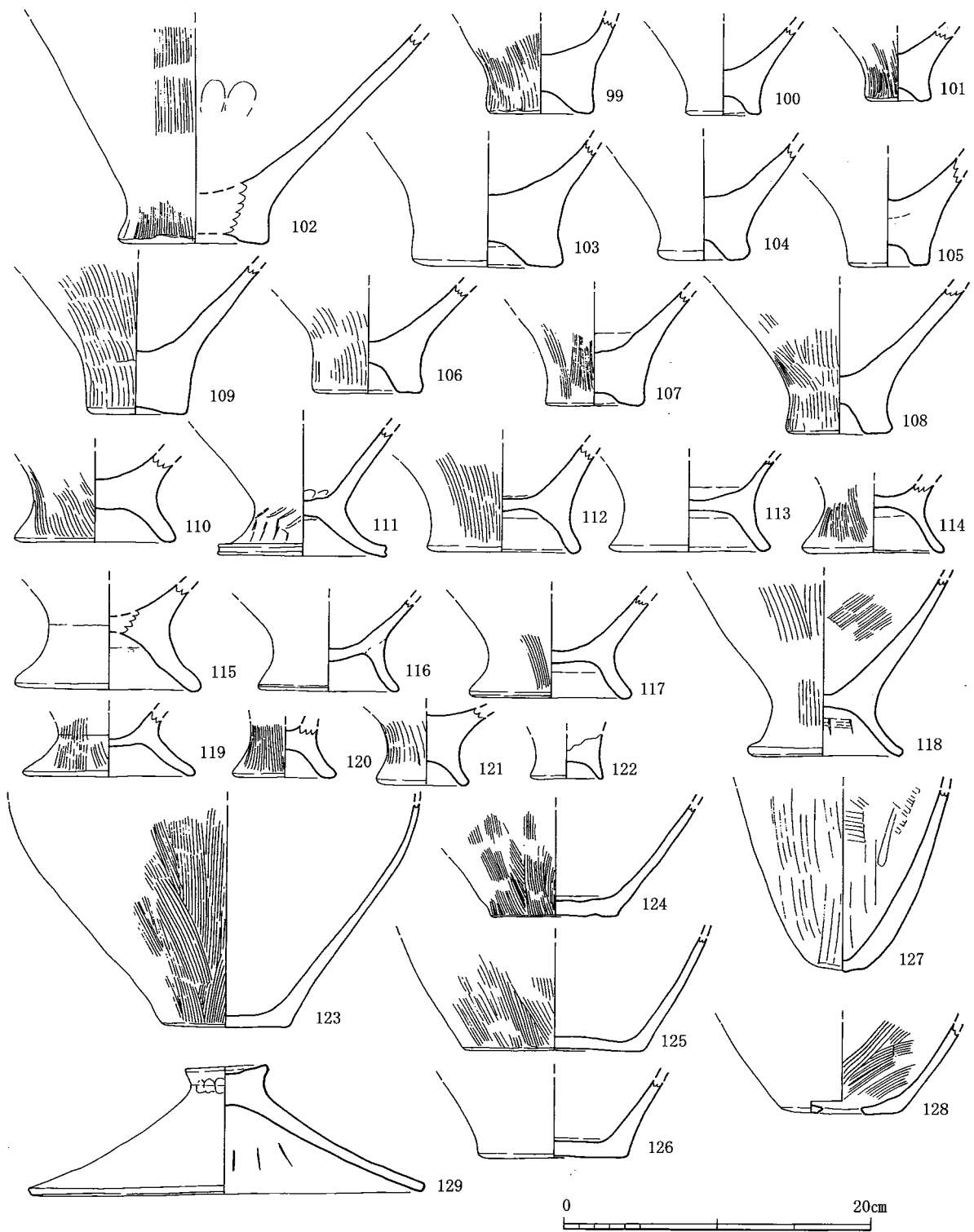
第89图 包含層出土土器実測図⑤ (1/4)

の箇所には1条の高い突帯を貼り付け刻目を施す。口縁部は上面は浅く幅広く窪み、端部は強いナデによって窪む。外面は縦方向のハケ調整、内面はナデ調整を行い、胴部下半は器面が剥離している。60～64は鋤先口縁の丹塗磨研の甕である。62の器面は摩滅が著しいが、本来は丹塗を施していたものと思われる。60は口縁端部に刻目を施す。61は突帯が剥離している。口縁部上面は暗文状のミガキを密に施す。63は口縁端部に刻目を施し、上面に暗文状のミガキを施す。64は口縁部が下を向き、面を持った端部に細い刻目を施す。胴部上位にM字状突帯を貼り付ける。

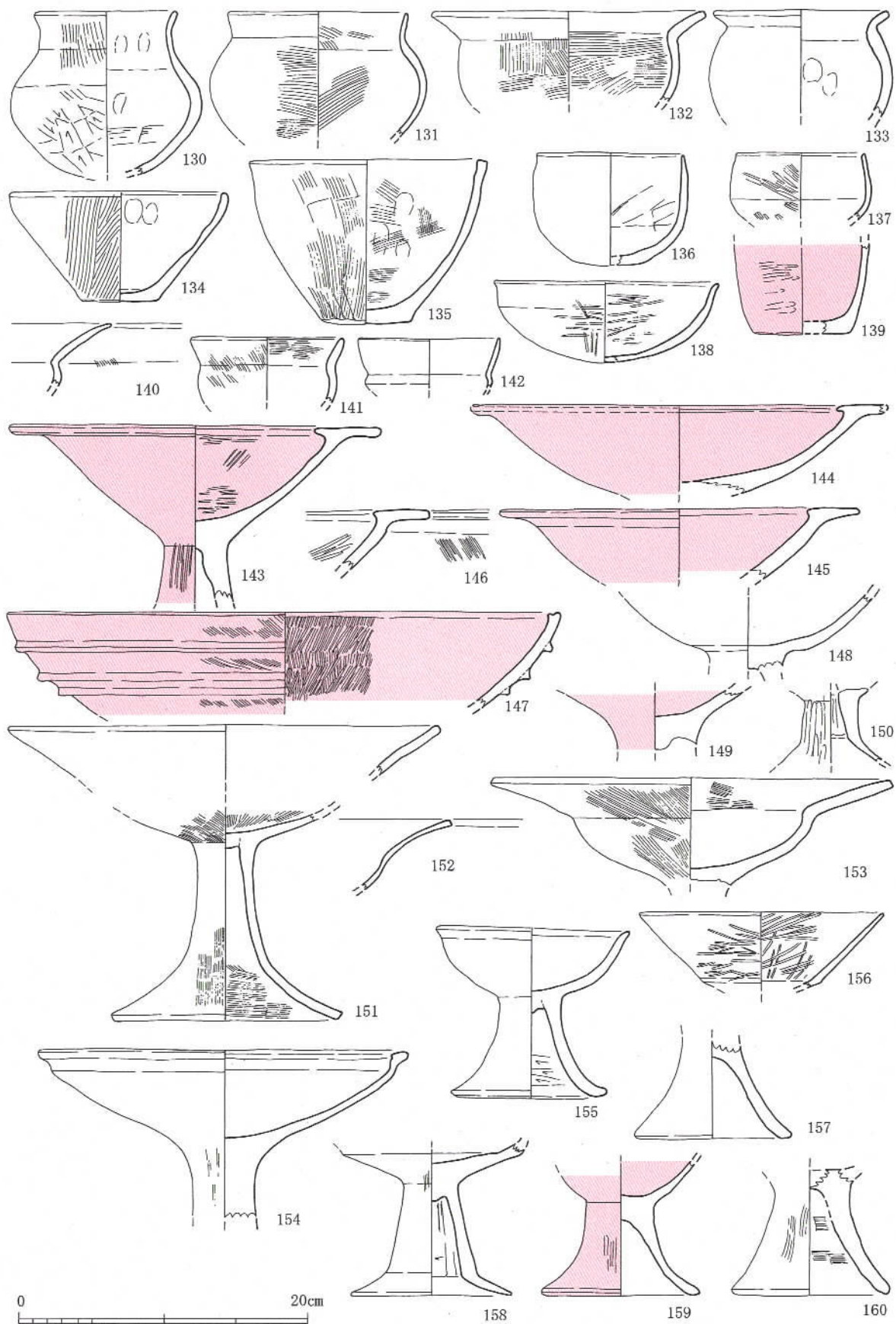
65～84は屈曲し、口縁部が外に開く甕である。65は口縁端部にかけて肥厚し、胴部外面は細かいハケ調整を行う。66は全面ナデ調整を行う。67は器面が摩滅している。68は屈曲部が厚くなり内側に突出ぎみになる。口縁端部にかけて肥厚する。口縁部内外面は工具の圧痕が残る。胴部外面はハケ調整を行う。69は口縁端部にかけて肥厚し、丸く収める。胴部内外面とも上位に横方向の、中位から下位は縦方向のハケ調整を行う。底部は高台状になる。70は屈曲部が厚くなり内側に突出ぎみになる。外面に1条の三角突帯を貼り付ける。口縁端部にかけて肥厚する。器面は摩滅している。71・72は口縁端部にかけて肥厚する。屈曲部直下に1条の三角突帯を貼り付ける。73は口縁端部にかけて肥厚し、屈曲部より下がった箇所に1条の三角突帯を貼り付ける。胴部外面は縦方向のハケ調整の後にナデを行う。74・75は器面の摩滅が著しい。76は内面の屈曲部下がナデによって窪む。外面はハケ調整を行い、内面は摩滅しているがユビオサエが確認できる。77は胴部外面に板状工具の圧痕残り、後でナデ消している。78はナデで仕上げる。79は口縁部が短く、外面はハケ調整を行う。80は外面縦方向、内面は横方向のハケ調整を行う。81は口縁部が短く、屈曲部外面に1条の低い三角突帯を貼り付ける。摩滅しているが外面はハケ調整が確認できる。82の底部は高い脚台状を呈する。83は胴部が強く張り出す。胴部に突帯を貼り付け刻目を施す。口縁部内面屈曲部に近い箇所で上列に竹管文、下列に刺突文を巡らす。刺突文を巡らす箇所と、内面の屈曲部下はナデによって窪む。胴部は内外面ともハケ調整が確認できる。84は内外面にタタキの圧痕が確認できる。85～87は口縁部が外に開く甕で、口縁端部に刻目を施す。86は口縁端部外面を若干下に拡張させる。87は口縁端部がナデによって若干窪む。内外面ともハケ調整を行う。88・89は口縁部が緩やかに外反し、胴部が丸く大きく張り出す甕である。88は胴部外面が細かいハケ、内面は粗いハケ調整である。89は底部が丸底で、底面にヘラ記号が確認できる。器面は摩滅しているが、内外面ともハケ調整を行う。

90～128は甕の底部である。90・91は平底で、92～98は上げ底で底面全体で大きく窪む。97は底部が薄く、甕ではない可能性もある。99～101は高く窪む。102～109は底面中央のみが窪むものである。110～122は脚台状のものである。111は端部がナデによって窪む。外面は工具の圧痕が残る。胴部内面はユビオサエを施す。118は脚部内面にハケ調整を行う。123～126は外に張り出さない薄い平底である。127は丸底で長胴の器形になるようである。外面は板状工具によるナデである。128は底面に焼成後の穿孔を行う。外面は摩滅しており、内面はハケ調整を行う。129は甕の蓋である。外面は丁寧なナデ調整、内面は一部工具痕が確認できる。つまみ部はユビオサエを施す。上面は浅く窪む。

130～133は球形の胴部を持ち、頸部がすぼまる鉢である。130は胴部下半外面はケズリ調整、頸部外面は粗いハケ調整を行う。131は精製で、胴部はハケ調整、口頸部は丁寧なナデ調整を行う。132は屈曲し口縁部が外に開く。胴部は内外面ハケ調整である。133は器面が摩滅している。内面にユビオサエの痕跡が残る。134・135は平底で直線的に開く鉢である。134は口縁端部をやや内湾ぎみに収める。外面ハケ調整、内面はナデで、一部ユビオサエが確認できる。135は口縁端部が面を持つ。外面



第90图 包含层出土土器实测图⑥ (1/4)



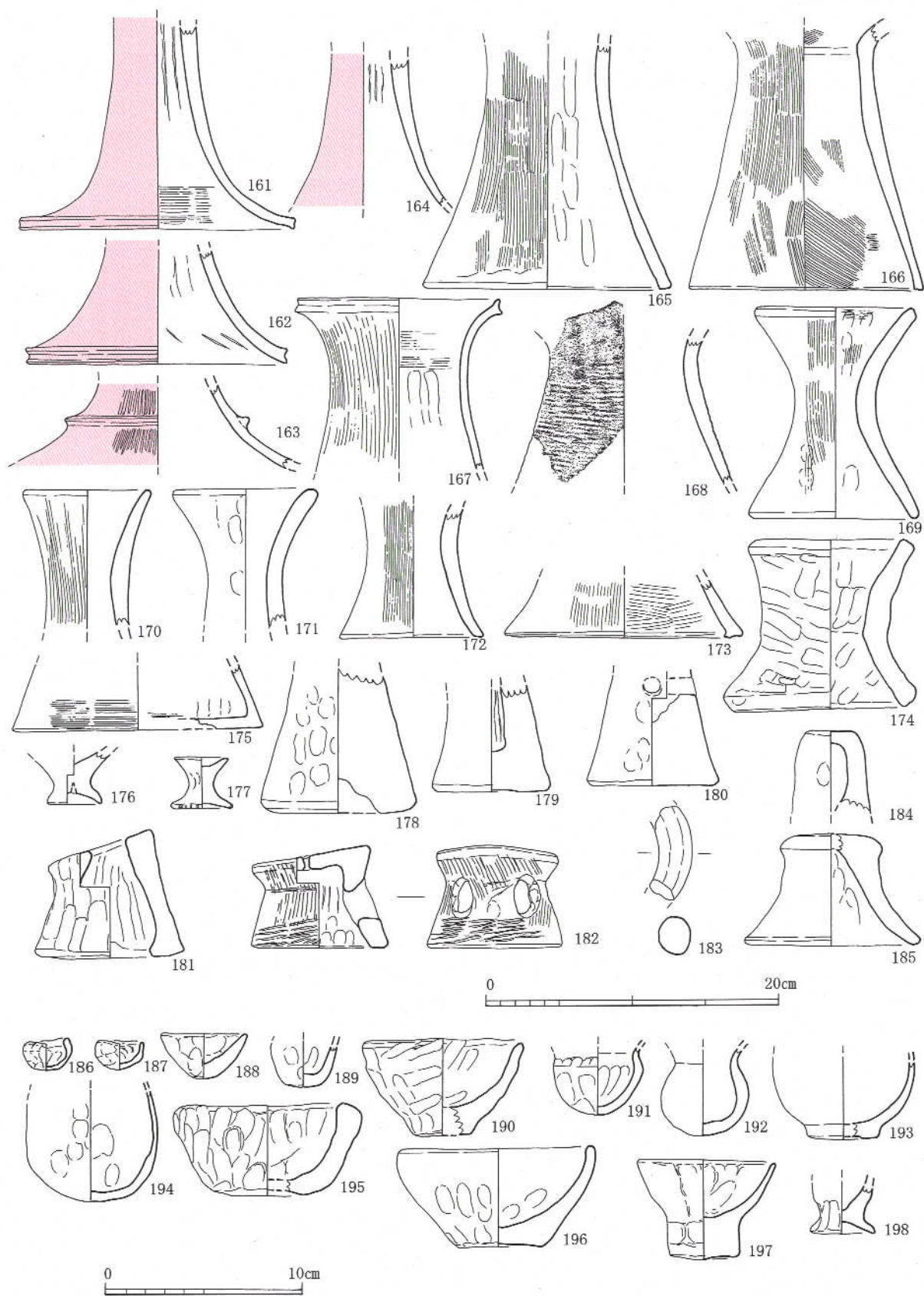
第91图 包含層出土土器実測图⑦ (1/4)

ハケ調整、内面もハケ調整でユビオサエが確認できる。136～138は丸底で胴部が丸みを帯びて立ち上がる鉢である。136は外面はナデ調整、内面に工具の圧痕が残る。底部内面に鋭いオサエを施す。137は口縁端部がわずかに外反し、胴部はミガキ調整を行う。138は浅い器形で、口縁端部は外反し、全面ミガキ調整を行う。139は丹塗磨研の鉢で平底になると思われる。140～142は小型丸底鉢である。140は口縁部が長く外に延びる。摩滅しているが、外面屈曲部に一部ハケ調整が確認できる。141は屈曲がやや弱い。摩滅しているがハケ調整が一部確認できる。142は胴部外面と頸胴部界が稜を持って鋭く屈曲する。器面は摩滅している。

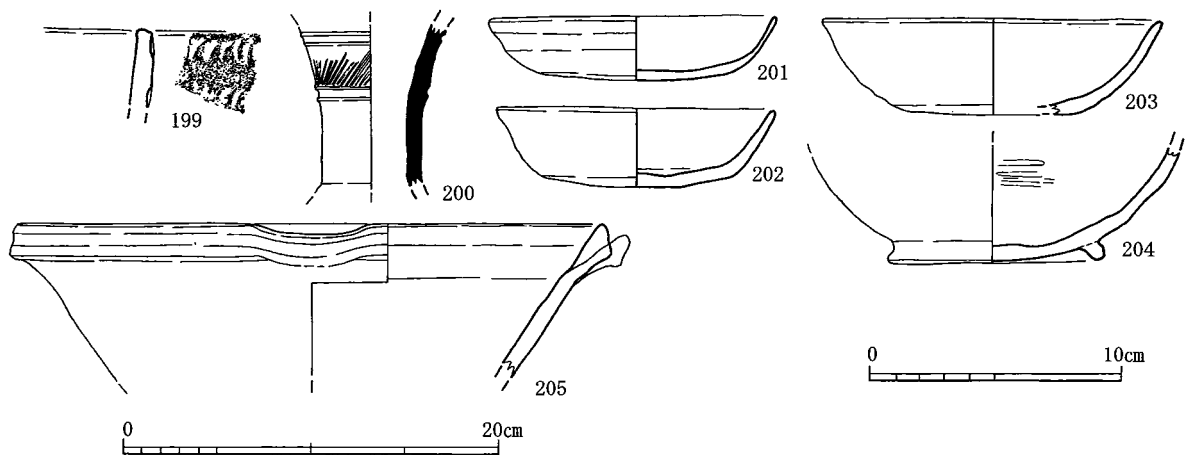
143～164は高杯である。143～145は鋤先口縁の丹塗磨研高杯である。143は端部がナデによって少し窪む。144は端部が欠損している。145は内面の突出が小さい。146は鋤先口縁の高杯で、端部はナデによって窪む。全体に摩滅しているが、外面にハケ調整が確認できる。147は丹塗磨研の皿状を呈する杯部で、外面に3条の突帯を貼り付ける。口縁端部がナデによって窪む。外面突帯間はハケ調整、内面は密なミガキ調整を行う。148～150は杯部と脚部の接合部である。149は丹塗磨研で、半円状の突出した擬口縁が確認できる。粘土を充填したのものであろう。150は擬口縁が確認でき、充填粘土が取れている。脚部内面は絞り目が確認できる。外面は縦方向のミガキ調整を行う。151は接合できないが、口縁部と脚部は同一個体と思われる。摩滅しているが、ハケ調整の痕跡は確認できる。152は屈曲が弱く器面が摩滅している。153は杯部が丸みを帯び、屈曲して口縁部が外に開く。摩滅しているがハケ調整の痕跡が確認できる。154は口縁部が短く立ち上がり、若干外反する。内面は玉縁状の肥厚を持つ。155はボール状の杯部で口縁端部が短く外反する。脚部は裾部が強く外反する。全体的に摩滅しているが、脚部内面はケズリ調整が確認できる。156は口縁部が直線的に外に開く。内外面ミガキ調整を行う。157は短い脚部で器面が摩滅している。158は杯部の屈曲部で欠損している。脚部は稜を持って屈曲し、裾部は外に開く。脚部外面はミガキ、内面はケズリ調整を行う。159は丹塗磨研で、ボール状の杯部に短い脚部が取り付け。脚部は縦方向のミガキ調整を行う。160は脚部が直線的に開く。摩滅しているがハケ調整の痕跡が残る。

161～164は脚が長い丹塗磨研の高杯脚部である。161は裾端部がナデによって窪む。内面は絞り目が確認でき、裾部は横方向のハケ調整を行う。162は裾端部が強いナデによって窪み、外端部が突出する。内面に絞り目が確認でき、裾部は工具の圧痕が残る。163は外面に1条の三角突帯を貼り付ける。外面は縦方向のミガキ調整を行う。164は内面に絞り目が見られる。

165～174は器台である。165は外面縦方向のハケ、内面はユビによるオサエやナデを行う。166は内外面ハケ調整を行う。167は口縁端部が強いナデによって大きく窪む。外面は粗いハケ、内面はハケ調整とユビオサエを施す。168は裾部はタタキ調整、以外はナデで仕上げる。169はハケ調整とユビオサエを施す。173は裾端部はナデによって窪み、外面は縦方向のハケ、内面は横方向の粗いハケ調整を行う。174は全体的にユビによって粗いナデを行い雑なつくりである。175は香炉形土器になろうか。平底で外面は横方向のハケ調整の後ナデ、内面はナデでユビオサエも施す。176は小さな上げ底の脚部で、底面中央に深い刺突を加える。177は小さな盃状の器形で、どちらが天地かはよく分からない。ナデによって仕上げ、裾端部に刻目を施す。178～180は中実部分の多い支脚になろうか。178はユビオサエを施す。179は内面に絞り目が見られる。180は摩滅しているがユビオサエが確認できる。一部に孔を穿つ。181は器台である。裾端部は内側に張り出し接地面を広く持つ。内外面ユビによるオサエやナデによって雑に仕上げる。182は上面が閉じているが器台の一種であろうか。上面の中央に



第92図 包含層出土土器実測図⑧ (161~185は1/4、186~198は1/3)



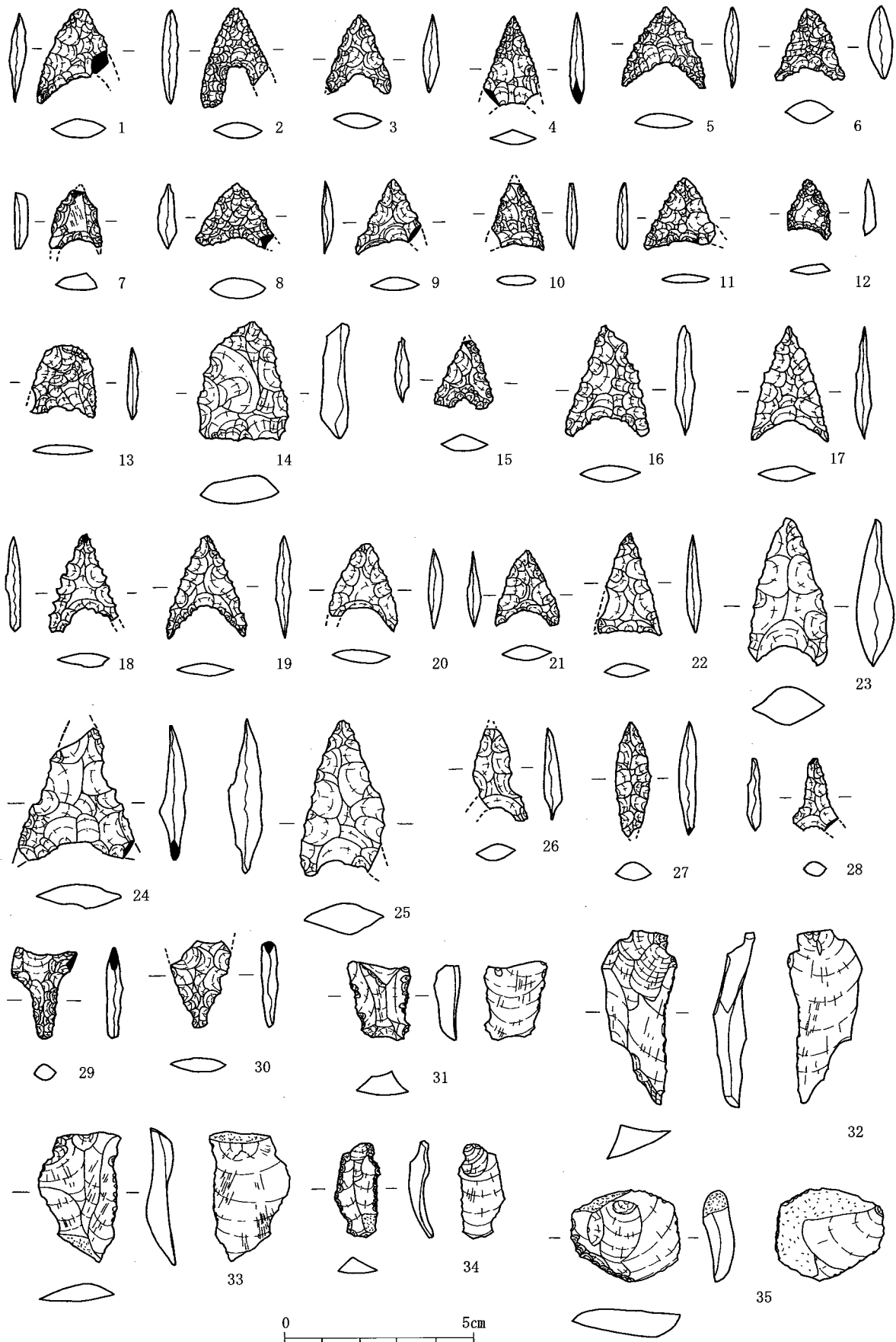
第93図 包含層出土土器実測図⑨ (207は1/4、他は1/3)

小さな焼成前穿孔を行う。側面は2ヶ所に大きな楕円形の透かしを入れ、外面はハケ調整、裾部はタタキ調整を行う。内面はユビオサエや工具痕が確認できる。183は把手であろうか。全体をナデによって仕上げる。184は器種不明。釣鐘形のものになると思われる。185は裾が広がる支脚か。外面は摩滅しているが内面はユビによるオサエやナデを行う。186~198は手づくねのミニチュア土器である。ユビオサエ等で雑につくるものが多い。191・192は頸部でくびれる器形で、丸底である。192はナデによって仕上げる。193もナデによるが平底を持つ。197は底部が分厚く高い。198は脚部がくびれ上げ底になる。

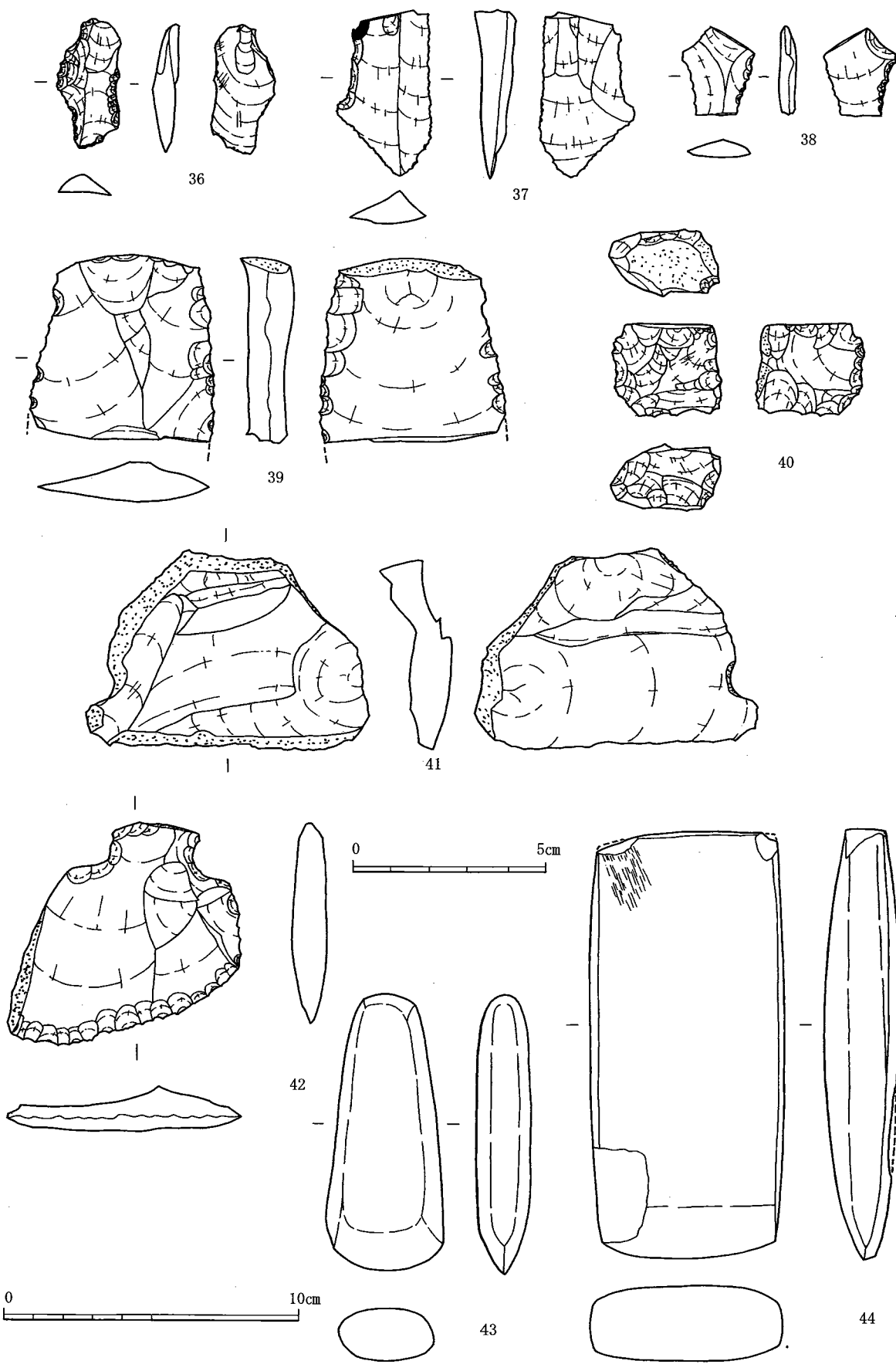
199は口縁部外面に数列の半截竹管状工具による爪形文を展開させる。200は須恵器の甗であろう。太い沈線間に斜めの細かい刺突を施す。201~203は土師器杯である。201は底部ヘラ切りを行う。203は内面に炭素吸着を行う。204は瓦器碗でしっかりした高台が取り付く。内面にミガキ調整が確認できる。205は瓦質の片口鉢である。口縁端部はナデによって窪む。全面ナデによって仕上げる。

(6) 石器 (図版64~67、第94~98図)

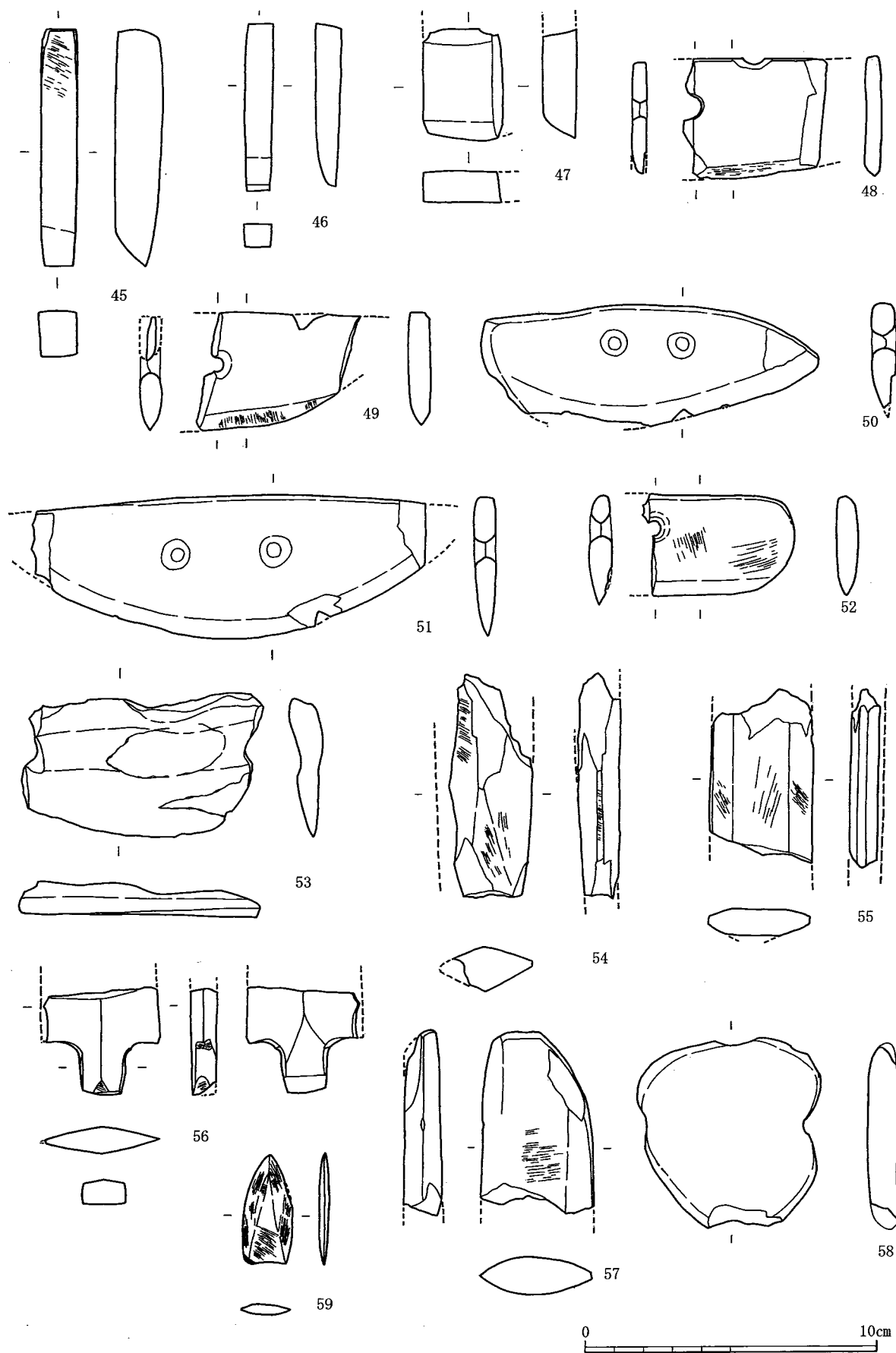
1~12は黒曜石製の石鏃である。1は側面の剥離が大きく、基部は最後に細かい剥離を行う。2は脚部が長く、最後に細かい調整剥離を行う。4は基部付近は粗い剥離、先端部に近い箇所は細かい剥離を行う。5は大きく脚部が開く。6は厚みがあり、側面の細長い剥離が特徴的である。7は先端部と脚部を一部欠損する。主要剥離面を大きく残し、縁辺部のみ調整剥離を行う。8は厚みがあり、ずんぐりした形態で特徴的である。9は粗い剥離で仕上げる。12は縁辺部のみ剥離を施す。13は先端が丸みを持つが、黒曜石製の石鏃の未製品であろうか。14も黒曜石の石鏃の未製品と思われる。15はチャート製の石鏃である。16~28は安山岩製の石鏃である。18の縁辺部は鋸歯状を呈する。19は基部に細かい調整剥離を行う。20は中央に主要剥離面を残し、縁辺部は粗い剥離を行う。23~25は大型品で粗い剥離で仕上げる。26は基部に近い箇所で両側が大きく抉れる。27は厚さがあり細長い柳葉形に仕上げる。28は基部付近のみ張り出す。29は黒曜石製の石鏃かと思われる。30は器種不明であるが、石



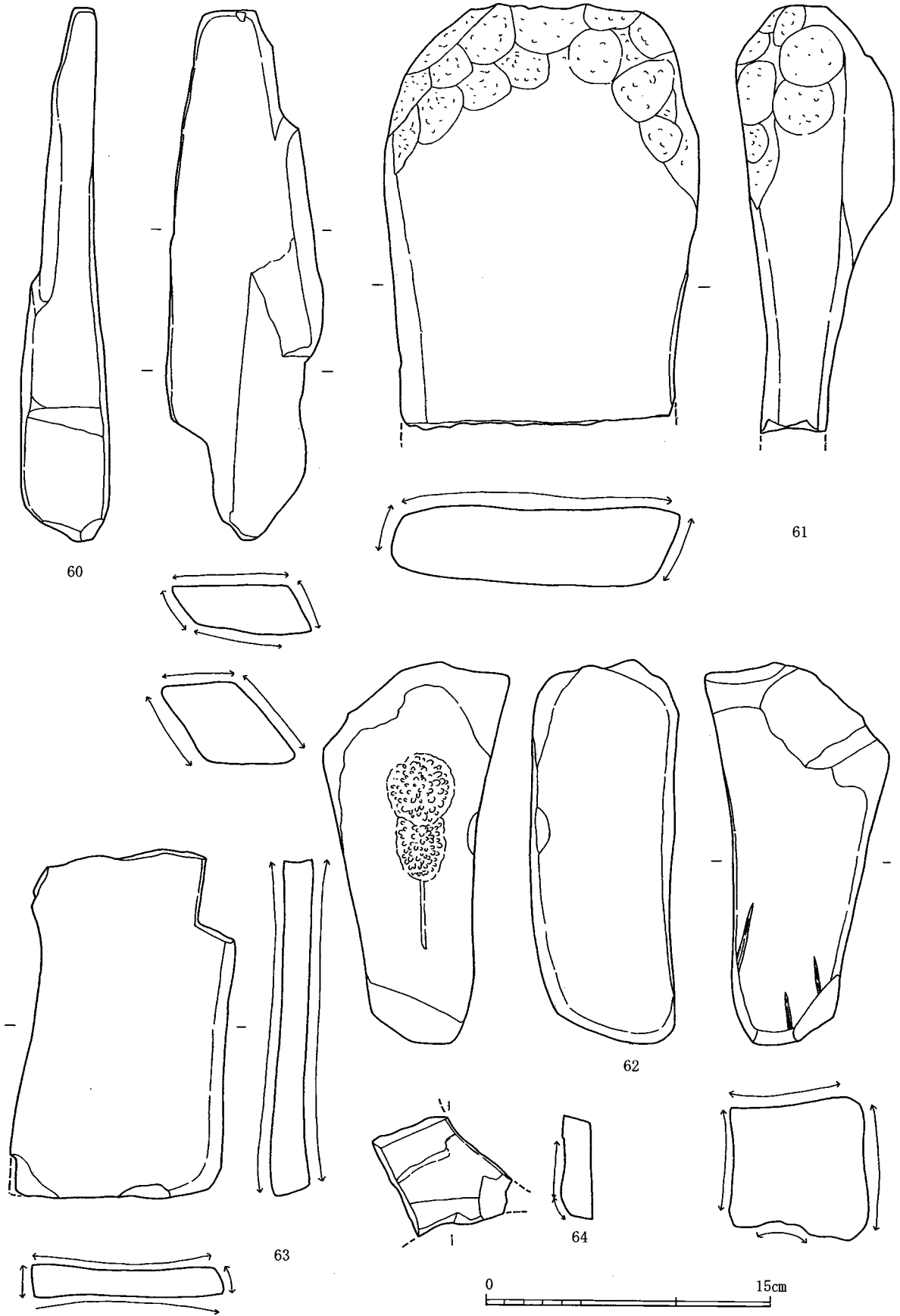
第94图 出土石器实测图① (2/3)



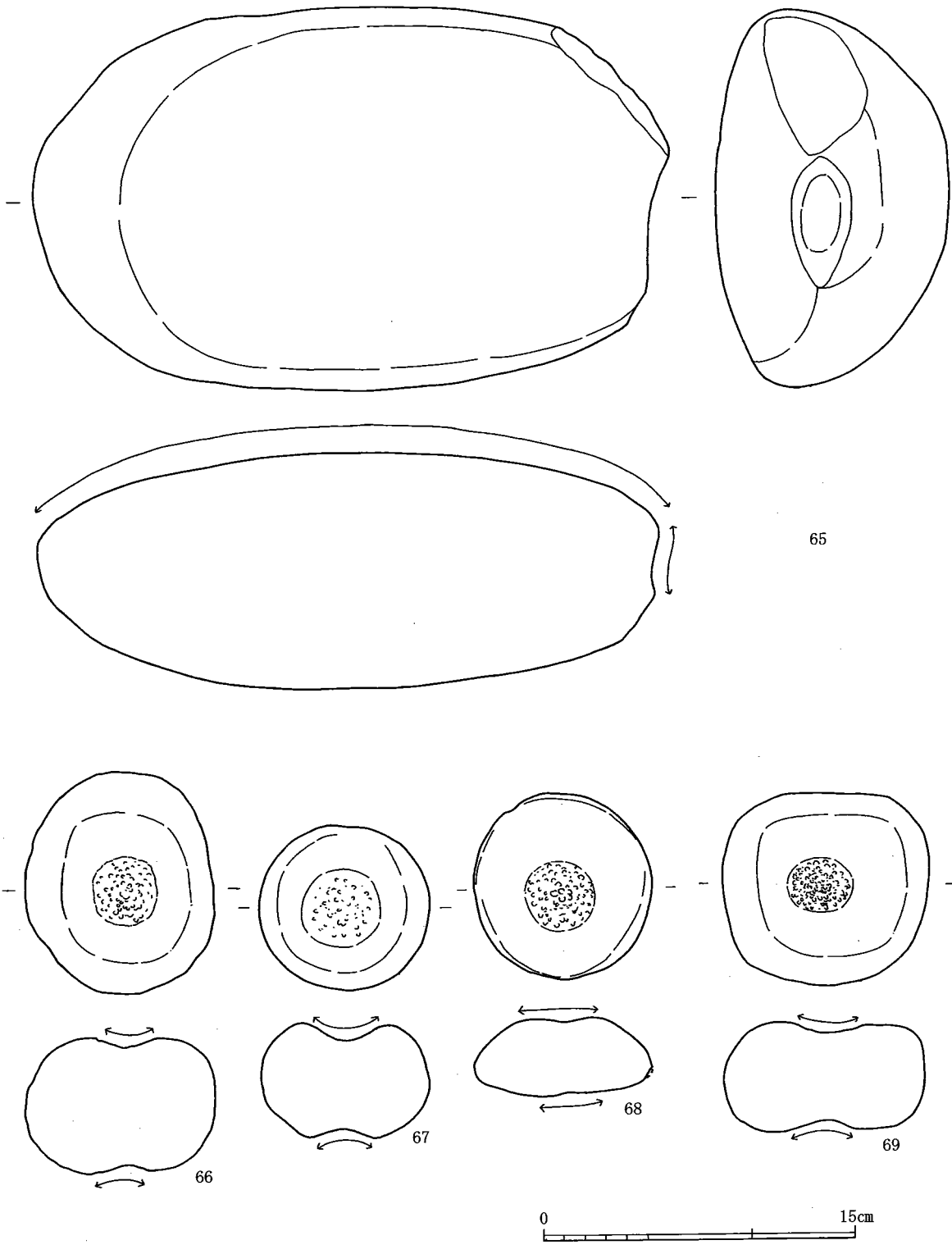
第95図 出土石器実測図② (36~42は2/3、43・44は1/2)



第96图 出土石器实测图③ (1/2)



第97图 出土石器实测图④ (1/3)



第98图 出土石器实测图⑤ (1/3)

第5表 第2次調査出土石器観察表

| 番号 | 種類 | 出土位置 | 石材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | 備考 |
|----|----------|----------------|------|--------|-------|--------|--------|------------|
| 1 | 石鏃 | 71号土坑 | 黒曜石 | 2.5 | (1.8) | 0.4 | 1.2 | 脚部一部欠損 |
| 2 | 石鏃 | 包含層 | 黒曜石 | 2.6 | (1.7) | 0.3 | 1.1 | 脚部一部欠損 |
| 3 | 石鏃 | 包含層 | 黒曜石 | 2.1 | 1.7 | 0.4 | 0.9 | |
| 4 | 石鏃 | 包含層 | 黒曜石 | (2.3) | (1.5) | 0.35 | 0.8 | 脚部欠損 |
| 5 | 石鏃 | 包含層 | 黒曜石 | 2.2 | 2.3 | 0.35 | 1 | |
| 6 | 石鏃 | 包含層 | 黒曜石 | 1.9 | 1.8 | 0.6 | 1.3 | |
| 7 | 石鏃 | 14号竪穴住居跡 | 黒曜石 | (1.5) | 1.3 | 0.35 | 0.8 | 先端部、脚部一部欠損 |
| 8 | 石鏃 | 包含層 | 黒曜石 | 1.7 | 2.1 | 0.6 | 1.2 | 脚部一部欠損 |
| 9 | 石鏃 | 14号竪穴住居跡 | 黒曜石 | 2.0 | (1.7) | 0.3 | 0.7 | 脚部一部欠損 |
| 10 | 石鏃 | 41・42号土坑切り合い部分 | 黒曜石 | 1.8 | (1.9) | 0.3 | 0.6 | 先端部、脚部一部欠損 |
| 11 | 石鏃 | 71号土坑 | 黒曜石 | 1.9 | (1.9) | 0.25 | 0.7 | 脚部一部欠損 |
| 12 | 石鏃 | 包含層 | 黒曜石 | 1.6 | 1.1 | 0.35 | 0.5 | |
| 13 | 石鏃 | 包含層 | 黒曜石 | 1.9 | 1.7 | 0.3 | 0.9 | |
| 14 | 石鏃 | 23号土坑 | 黒曜石 | 3.1 | 2.3 | 0.7 | 5 | |
| 15 | 石鏃 | 包含層 | チャート | (1.8) | 1.6 | 0.4 | 0.8 | 先端部一部欠損 |
| 16 | 石鏃 | P-221 | 安山岩 | 2.9 | 2.2 | 0.5 | 1.9 | |
| 17 | 石鏃 | P-201 | 安山岩 | 3.1 | 3.0 | 0.4 | 1.6 | |
| 18 | 石鏃 | 包含層 | 安山岩 | 2.6 | (1.7) | 0.4 | 1 | 脚部一部欠損 |
| 19 | 石鏃 | 包含層 | 安山岩 | 2.7 | 2.0 | 0.4 | 1.1 | |
| 20 | 石鏃 | 21号土坑 | 安山岩 | 2.3 | (1.9) | 0.4 | 1 | 脚部一部欠損 |
| 21 | 石鏃 | 37号土坑 | 安山岩 | 2.0 | 1.7 | 0.35 | 0.8 | |
| 22 | 石鏃 | 3号竪穴住居跡 | 安山岩 | 2.6 | (1.7) | 0.4 | 1.3 | 縁辺部一部欠損 |
| 23 | 石鏃 | 15号竪穴住居跡 | 安山岩 | 3.8 | 2.1 | 1.0 | 5.7 | |
| 24 | 石鏃 | 6号竪穴住居跡 | 安山岩 | (3.5) | (3.0) | 0.6 | 3.9 | 先端部、脚部一部欠損 |
| 25 | 石鏃 | 12号竪穴住居跡 | 安山岩 | 4.2 | (2.2) | 0.85 | 5.1 | 脚部一部欠損 |
| 26 | 石鏃 | 17号土坑 | 安山岩 | (2.4) | (1.3) | 0.45 | 1.1 | 先端部、脚部一部欠損 |
| 27 | 石鏃 | 包含層 | 安山岩 | (3.0) | 0.9 | 0.45 | 1.2 | 基部欠損 |
| 28 | 石鏃 | 包含層 | 安山岩 | (1.9) | (1.2) | 0.35 | 0.7 | 先端部、脚部一部欠損 |
| 29 | 石鏃 | 包含層 | 黒曜石 | 2.4 | (1.7) | 0.4 | 1 | つまみ部一部欠損 |
| 30 | 石鏃 or 石鏃 | 包含層 | 黒曜石 | (2.3) | (1.6) | 0.4 | 1.2 | 一部欠損 |
| 31 | 楔形石器 | 10号土坑 | 黒曜石 | 2.1 | 1.6 | 0.7 | 1.8 | |
| 32 | 剥片石器 | 71号土坑 | 黒曜石 | 4.6 | 1.9 | 0.8 | 4 | |
| 33 | 剥片石器 | P-209 | 黒曜石 | 3.4 | 2.0 | 0.6 | 3 | |
| 34 | 剥片石器 | P-132 | 黒曜石 | 2.5 | 1.7 | 0.4 | 1.1 | |
| 35 | 剥片石器 | 77・78号土坑切り合い部分 | 黒曜石 | 2.8 | 2.4 | 0.60 | 4.8 | |
| 36 | 剥片石器 | 51号土坑 | 黒曜石 | 3.4 | 1.6 | 0.5 | 2.1 | |
| 37 | 剥片石器 | 36号土坑 | 安山岩 | 4.3 | 2.5 | 1.0 | 8 | |
| 38 | 剥片石器 | 包含層 | 安山岩 | (2.3) | 1.8 | 0.45 | 1.7 | 下半部欠損 |
| 39 | 剥片石器 | 5号竪穴住居跡 | 安山岩 | (4.8) | 4.8 | 1.2 | 29.1 | 下半部欠損 |
| 40 | 石核 | 包含層 | 黒曜石 | 2.7 | 2.4 | 1.7 | 14.8 | |
| 41 | 石核 | 34号土坑 | 安山岩 | 7.2 | 4.9 | 1.0 | 61.4 | |
| 42 | 石匙 | 87号土坑 | 安山岩 | 5.7 | 5.8 | 1.0 | 35.6 | |
| 43 | 磨製石斧 | P-17 | 安山岩 | 9.5 | 3.9 | 1.9 | 104.1 | |
| 44 | 磨製石斧 | 77・78号土坑切り合い部分 | 玄武岩 | 14.7 | 6.6 | 2.6 | 517.5 | |
| 45 | 柱状片刃石斧 | 9号土坑 | 粘板岩 | 8.2 | 1.2 | 1.6 | 37.6 | |
| 46 | 柱状片刃石斧 | 78号土坑 | 粘板岩 | 5.8 | 1.0 | 0.8 | 9.9 | |
| 47 | 扁平片刃石斧 | 13号竪穴住居跡 | 粘板岩 | (3.9) | (2.8) | 1.2 | 26.9 | 一部のみ |
| 48 | 石庖丁 | 包含層 | 片岩 | (4.9) | 4.2 | 0.5 | 21.6 | 一部のみ |
| 49 | 石庖丁 | 6号竪穴住居跡 | 凝灰岩 | (5.1) | (4.1) | 0.8 | 55.5 | 一部のみ |
| 50 | 石庖丁 | 包含層 | 片岩 | 11.6 | (4.2) | 0.8 | 24.4 | 刃部一部欠損 |
| 51 | 石庖丁 | 包含層 | 凝灰岩 | (13.4) | 4.9 | 0.8 | 79.1 | 一部欠損 |
| 52 | 石庖丁 | 包含層 | 頁岩 | (5.2) | 3.4 | 0.8 | 21.9 | 半分欠損 |
| 53 | 石庖丁 | 5号竪穴住居跡 | 片岩 | 8.2 | 5.0 | 1.1 | 45 | |
| 54 | 磨製石剣 | 包含層 | 頁岩 | (7.7) | (2.9) | 1.5 | 34.4 | 一部のみ |
| 55 | 磨製石剣 | 39号土坑 | 頁岩 | (5.7) | 3.6 | (0.9) | 28.7 | 一部のみ |
| 56 | 磨製石剣 | 36号土坑 | 頁岩 | (3.6) | (4.0) | 0.9 | 15 | 基部のみ |
| 57 | 磨製石剣 | 包含層 | 頁岩 | (6.2) | 3.8 | 1.3 | 42.1 | 先端部のみ |
| 58 | 礫石錘 | 包含層 | 結晶片岩 | 6.4 | 6.3 | 1.1 | 67.6 | 一部欠損 |
| 59 | 磨製石鏃 | 3号竪穴住居跡 | 頁岩 | 3.8 | 1.8 | 0.35 | 3 | 一部欠損 |
| 60 | 砥石 | 61号土坑 | 細粒砂岩 | 28.1 | 8.0 | 4.2 | 876.7 | |
| 61 | 砥石 | 表採 | 砂岩 | (22.0) | 16.5 | 8.0 | 3810.3 | 一部欠損 |
| 62 | 砥石 | 包含層 | 砂岩 | 20.2 | 7.1 | 7.1 | 1614.7 | |
| 63 | 砥石 | 包含層 | 砂岩 | (18.4) | 11.1 | 1.8 | 796.7 | 一部欠損 |
| 64 | 砥石 | 5号竪穴住居跡 | 砂岩 | (6.0) | (5.6) | 1.6 | 89.1 | 一部のみ |
| 65 | 台石 | 3号竪穴住居跡 | 玄武岩 | 30.6 | 18.6 | 11.4 | 8800 | |
| 66 | 凹石 | 5号竪穴住居跡 | 玄武岩 | 10.7 | 9.0 | 5.5 | 953 | |
| 67 | 凹石 | 5号竪穴住居跡 | 玄武岩 | 8.2 | 7.9 | 5.5 | 520.8 | |
| 68 | 凹石 | 5号竪穴住居跡 | 玄武岩 | 8.9 | 8.6 | 3.8 | 396.8 | |
| 69 | 凹石 | 10号土坑 | 玄武岩 | 10.0 | 9.2 | 5.4 | 829.6 | |

錐か石鏃であろうか。黒曜石製でやや大きな剥離で突出部を作り出す。

31～36は黒曜石の剥片である。31は両側面に細かい剥離が見られ、楔形石器かと思われる。32・33は縦長剥片の側面に微細剥離が見られる。34は小型の縦長剥片の両側面に細かい調整剥離を行う。35は自然面が残る剥片で、一部調整剥離を行う。36は縦長剥片の側面に調整剥離を行う。37・38は安山岩の剥片である。37は縦長剥片の側面に微細剥離が、38は細かい調整剥離が見られる。39は安山岩の大型剥片の側面に粗い調整剥離を施す。

40・41は石核である。40は黒曜石で2面に自然面が残る。41は安山岩で、様々な方向から大きな剥片素材を取っていることが分かる。周囲に自然面が残る。

42は安山岩製の横型の石匙である。大きな剥離面を残し刃部とつまみ部付近のみ調整剥離を行う。つまみ部頂部と側面に自然面が残る。43・44は伐採斧である。43は小型で断面は楕円形を呈する。刃部は両刃である。44の断面は長方形に近い形状を呈し、基部から刃部までほぼ同じ幅のままである。刃部は片刃ぎみである。45～47は加工斧である。45・46は柱状片刃石斧、47は扁平片刃石斧で、刃部との境界は稜を持たず緩やかである。

48～53は石庖丁である。48は両刃であるがやや一方が傾く。49は両刃で研磨痕がよく残る。50は片刃ぎみになる。51・52は両刃である。53は両側面に抉りを入れるもので、中央は窪む。刃部は両刃でこの部分はよく研磨する。

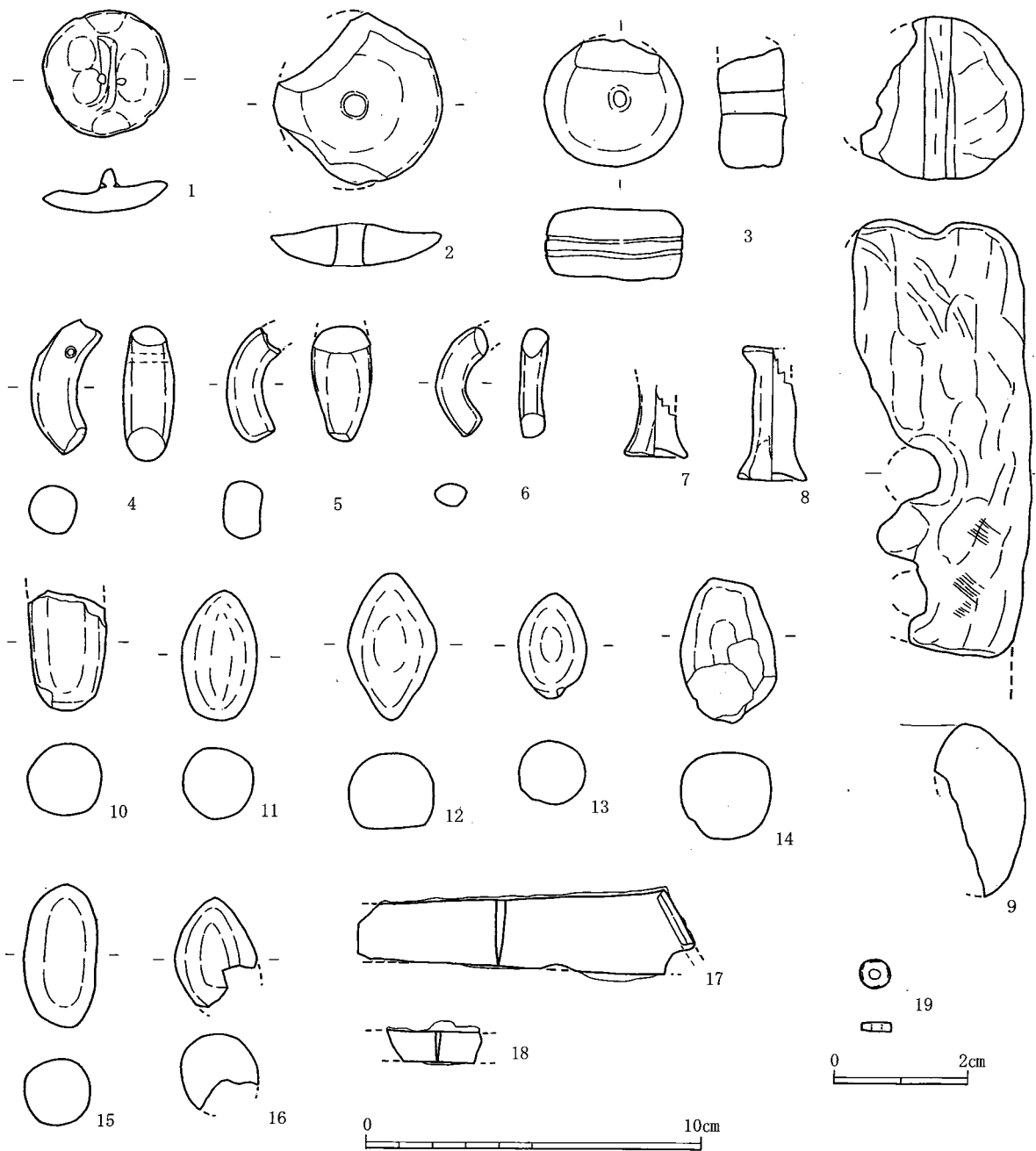
54～57は磨製石剣である。54は稜が甘く刃部も平坦面を持つことから、基部付近のものと思われる。55は裏面が剥がれているため断面形態はよく分からない。刃部は刃をつけておらず、基部付近のものかと思われる。56は表面は基部まで稜がしっかり通るが、裏面は基部の部分が平坦となる。57は刃部を持つが一方は刃をつけておらず、先端部は自然の丸みをそのまま残している。58は礫石錘である。平らな自然石を利用し4ヶ所を打ち欠く。59は磨製石鏃で基部は浅く窪む。稜は明確ではないが研ぎ分けている。

60～64は砥石である。60はいびつな形態であるが、砥面はよく使用してある。61は砥面は3面で裏面はいびつである。端部付近は大きな剥離が見られ、粗く打ち欠いて成形している。62は砥面は3面で、裏面は円形に窪む箇所が見られ、凹石と同様の用途が考えられる。表面に3ヶ所鋭いV字状のスジが見られる。63は砥面は4面で特に表裏両面はよく使用され窪む。細かなスジが縦方向に入る。64は欠損部分が多いが平面形態は不整形と思われる。砥面は2面でわずかに赤色顔料の痕跡が残る。

65は台石である。平面は楕円形を呈し底面はやや凸状に丸みを持つ。表面は緩やかにカーブを持ち、よく使用され平滑である。端面の一部も平滑であり、使用のため窪む。66～69は凹石である。67は大きく深く窪む。68は断面三角形を呈し、使用面はあまり窪まない。

(7) 土製品・鉄製品・玉類 (図版68、第99図)

1は鏡形土製品である。つまみ部分の両脇にユビオサエを施す。孔は両側から穿つが貫通しない。
2・3は紡錘車である。2は断面が扁平で中心部分が盛り上がる。端部は図上の上側に傾く。3は側面に2条の沈線を巡らす。4～6は土製勾玉である。5は中央付近が厚くなる。7・8は用途不明でつまみ上げたような小さな脚がつく。9は円柱状の土製品で、2ヶ所を穿孔し一方の端部に紐掛けのような溝がつく。表面はユビによるナデで仕上げる。10～16は投弾である。10・15は特に細長い形態をなし、12はレモン形となり両端部が尖る。



第99図 出土土製品、鉄製品、玉類実測図（1～18は1/2、19は1/1）

17・18は鉄製品である。17は鉄鎌で基部を折り返す。先端部は欠損している。18は先端部、基部とも欠損しているが刀子であろうか。

19は滑石製の白玉である。

第6表 第2次調査出土土製品、鉄製品、玉類観察表

| 番号 | 種類 | 出土位置 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | 備考 |
|----|-------|-------|--------|-------|--------|-------|-------|
| 1 | 鏡形土製品 | 包含層 | 3.8 | 3.8 | 0.7 | 11.6 | |
| 2 | 紡錘車 | P-351 | (5.1) | 5.1 | 1.3 | 22.5 | 一部欠損 |
| 3 | 紡錘車 | 包含層 | 4.1 | (3.8) | 2.0 | 37.7 | 一部欠損 |
| 4 | 土製勾玉 | 包含層 | 4.0 | 1.3 | 1.5 | 8.5 | |
| 5 | 土製勾玉 | 包含層 | (3.5) | 1.1 | 1.7 | 7.7 | 一部欠損 |
| 6 | 土製勾玉 | 包含層 | (3.4) | 0.9 | 0.7 | 3.0 | 一部欠損 |
| 7 | 不明土製品 | 包含層 | (2.2) | 1.1 | 1.1 | 3.9 | 上半部欠損 |
| 8 | 不明土製品 | 包含層 | 4.1 | 1.3 | 1.3 | 8.0 | 一部欠損 |
| 9 | 不明土製品 | 包含層 | 13.2 | (5.2) | 5.0 | — | 半分欠損 |
| 10 | 投弾 | 包含層 | (3.5) | 2.1 | 2.1 | 16.8 | |
| 11 | 投弾 | P-384 | 3.9 | 2.1 | 2.1 | 19.5 | |
| 12 | 投弾 | 52号土坑 | 4.4 | 2.7 | (2.3) | 23.5 | 一部欠損 |
| 13 | 投弾 | 包含層 | 3.2 | 2.0 | 1.9 | 9.8 | |
| 14 | 投弾 | 72号土坑 | 4.4 | 2.8 | 2.6 | 27.8 | 一部欠損 |
| 15 | 投弾 | P-186 | 4.3 | 2.0 | 1.9 | 18.9 | |
| 16 | 投弾 | 72号土坑 | (3.3) | 2.3 | (2.2) | 11.2 | 一部欠損 |
| 17 | 鉄鎌 | 包含層 | (10.0) | 2.0 | 0.3 | 35.0 | 先端部欠損 |
| 18 | 刀子 | 包含層 | (2.8) | 0.9 | 0.2 | 2.6 | 一部のみ |
| 19 | 滑石製白玉 | P-218 | — | 0.46 | 0.18 | 0.1 | |

(8) 小結

これまで報告したように海津横馬場遺跡第2次調査では、狭い調査面積にもかかわらず、実に多くの弥生時代の遺構及び遺物を確認することができた。遺構密度が高く、埋土の特徴等から切り合い関係が確認できなかつたものもあるが、今回の調査成果の若干のまとめを行っておきたい。なお、当遺跡は平成15年度に第3次調査も実施しており、全体のまとめは来年度刊行予定の『海津横馬場遺跡Ⅱ』で行う予定である。

竪穴住居跡は弥生時代中期中頃～後期後半の方形プランの住居跡を多く確認できた。他の遺構と切り合うものが多く、住居内の付属施設等を特定するのに苦慮したが、3～5号竪穴住居跡等で見られるように、基本は二本柱で中央に炉を配置し、壁面には数ヶ所屋内土坑を設ける構造である。ベッド状遺構は6号竪穴住居跡でその可能性のあるものが見られるが、他は明確には確認できなかった。これは竪穴住居内の埋土が暗褐色粘質土に地山ブロックを含むものであり、また当遺構の特徴でもあるが埋土が全体的に硬いことも相俟って、ベッド状遺構を構築する際の土との峻別ができなかつた可能性が高い。

また12号竪穴住居跡は弥生時代中期初頭～前半の円形プランで、他の竪穴住居跡と時期及び構造が全く異なる。中央に深い土坑、その両脇にピットを有するいわゆる松菊里タイプと呼ばれるもので、柱穴と思われる小ピットが放射状に配されるようである。この時期の住居跡はこれのみであるが、おそらく弥生時代中期中頃～後半に竪穴住居跡の形態が円形プランから方形プランへと変化したと思われる。

また、非常に整った正方形ないしは長方形プランの深い土坑が多く確認できたことも特筆される。これは調査区の北寄りに偏って分布し、36、40、44、46、53、58、62、66、67、77、78、79号土坑が

該当する。長軸140cm～66cm、短軸117cm～60cmの長方形プランが多く、壁面が垂直で床面は平坦なものが多い。埋土は暗褐色粘質土に地山ブロックを多く含む特徴を持つ。当初は掘立柱建物跡の柱掘り方かとも想定したが、柱筋が通らず建物を構成しないこと、また土層断面を観察しても柱痕及び抜き取り痕等を確認できないことから、そのようなものは考えにくい。その深さを考えると貯蔵穴の用途を想定すべきであろうか。時期はまとまった土器の出土がないため特定できない。わずかに46号土坑で中期前半、78号土坑で中期初頭の土器で占められる土坑があるが、他の土坑では鋤先口縁や後期の土器も出土していることから、現段階で特定することは不可能である。この種の土坑は第3次調査の際に隣接地でも数基確認しており、長期間にわたるものなのかも含め、時期の特定や用途等を来年度の報告で再度考えることにしたい。

その他、ピット25では軽石の集積が確認された。時期は特定できないが、稀有な例のため注目できよう。今回の調査では軽石製品は出土していないが、その原材料となりうるものである。なお軽石に加工痕等は見られない。

弥生時代以外の遺構は明確には確認できなかった。包含層中には奈良時代～中世にかけての遺物も確認できており、包含層を切り込む当該期の遺構の存在が想定されるものの、土の色調等の問題もあり確認できなかった。一部包含層を切り込む上層遺構として4～8号土坑を確認したが、出土土器はいずれも弥生土器のみであり、時期を特定するには至らなかった。また、今回の調査では縄文土器と思われる土器片（第57図15）が出土しているが、明確な縄文時代の遺構は確認できなかった。

出土遺物では打製石器及び剥片の多さが特筆される。石材は黒曜石及び安山岩でほとんどを占める。石核も出土していることから、当遺跡で石器製作が行われたことは確実である。当遺跡では弥生時代後期の遺構からも剥片等が出土するが、これは共伴とは言えない。当遺跡では弥生時代中期初頭の遺物量が多く、おそらく打製石器のほとんどはこの時期に伴うものであり、混入という形で弥生時代後期の遺構からも確認されるものと思われる。剥片も細かい調整剥離や微細剥離が見られるものが特に黒曜石に多く、石核は黒曜石よりも安山岩の方が大きいという特徴がある。石材の希少価値の問題も含め興味深い。

IV. 自然科学的分析

海津横馬場遺跡第2次調査では報告で触れたように、弥生時代前期後半に比定できる34号土坑の埋土から、多くの炭や炭化物と共に多量の炭化種子が出土した。その出土状況からは単純な自然堆積ではなく、短期間のうちに廃棄されたものであることが判断でき、出土土器から時期も明確に判断できることから、非常に良好な資料と思われる。今回は弥生時代の植物質食料、及び周辺の植生環境を理解する一助として、資料の分析を株式会社古環境研究所に依頼した。資料は土坑より出土した炭化種実と、土坑埋土の土壌である。以下株式会社古環境研究所の分析結果を収録する。(宮地)

海津横馬場遺跡における種実同定

株式会社古環境研究所

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

2. 試料

試料は弥生時代前期後半の遺跡で、34号土坑から出土した水洗選別済みの試料1点と堆積土壌試料2点の計3点である。

3. 方法

試料(堆積物)に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行った。

- 1) 試料2000cm³に水を加え放置し、泥化を行う。
- 2) 攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mmの篩で水洗選別を行う。
- 3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数を行う。

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

4. 結果

(1) 分類群

樹木1、草本1の計2分類群が同定された。学名、和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記す。

〔樹木〕

イチイガシ *Quercus gilva* Blume 炭化子葉 ブナ科

炭化していて黒色で、楕円形を呈する。表面はなめらかで、縦方向に一条の凹線が入る。

〔草本〕

イネ *Oryza sativa* L. 炭化果実 イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。

(2) 種実群集の特徴

1) 34号土坑（水洗選別済み）

イチイガシ完形96、半形11、破片16が同定された。

2) 34号土坑（土壌）

イチイガシ完形13、半形16、破片118、イネ35が同定された。

5. 考察

海津横馬場遺跡の種実はいずれも炭化しており、イチイガシ、イネが同定された。イチイガシは西南日本の照葉樹林を構成する主要高木で、カシ類の中でアク抜きなしに食べられる唯一の種類である。イネは栽培植物で弥生時代以降比較的よく検出され出土例が多い。

参考文献

- 笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類. 弥生文化の研究第2巻生業, 雄山閣 出版, p.131-139.
 南木睦彦（1991）栽培植物. 古墳時代の研究第4巻生産と流通I, 雄山閣出版株式会社, p.165-174.
 南木睦彦（1993）葉・果実・種子. 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版会, p.276-283.
 渡辺誠（1975）縄文時代の植物食. 雄山閣, 187p.

表1 海津横馬場遺跡における種実同定結果

| *水洗選別済み | | | |
|---------------------|-------|----------|---------------|
| 分類群 | | 部位 | 34号土坑 |
| 学名 | 和名 | | |
| Arbor | 樹木 | | |
| Quercus gilva Blume | イチイガシ | 炭化子葉（完形） | 96 |
| | | （半形） | 11 |
| | | （破片） | 16 |
| Total | 合計 | | 123 |
| *土壌 | | | |
| 分類群 | | 部位 | 34号土坑（2000cc） |
| 学名 | 和名 | | |
| Arbor | 樹木 | | |
| Quercus gilva Blume | イチイガシ | 炭化子葉（完形） | 13 |
| | | （半形） | 16 |
| | | （破片） | 118 |
| Herb | 草本 | | |
| Oryza sativa L. | イネ | 炭化果実 | 35 |
| Total | 合計 | | 182 |

（2000cm³中0.25mm篩）

海津横馬場遺跡の種実



1 イチイガシ炭化子葉 2 イチイガシ炭化子葉 3 イチイガシ炭化子葉 4 イチイガシ炭化子葉

— 5.0mm



5 イチイガシ炭化子葉 6 イチイガシ炭化子葉 7 イチイガシ炭化子葉 8 イチイガシ炭化子葉

— 5.0mm



9 イネ炭化果実 10 イネ炭化果実 11 イネ炭化果実 12 イネ炭化果実

— 1.0mm

版 圖

1. 第2次調査区南半
空中写真（北から）



2. 第2次調査区北半
空中写真（北から）



3. 上層遺構
4～8号土坑（南から）





1. 3号竪穴住居跡
(南西から)



2. 4号竪穴住居跡
(南東から)



3. 5・6号竪穴住居跡
(南西から)



1. 7号竪穴住居跡
(南東から)



2. 8号竪穴住居跡
(南東から)



3. 9号竪穴住居跡
(南西から)



1. 10・11号竪穴住居跡
(南東から)



2. 12号竪穴住居跡
(南東から)



3. 13号竪穴住居跡
(南東から)

1. 14号竪穴住居跡
(北西から)



2. 15号竪穴住居跡
(南西から)



3. 16号竪穴住居跡
(南東から)





1. 17号竪穴住居跡
(南西から)



2. 4号土坑 (南東から)

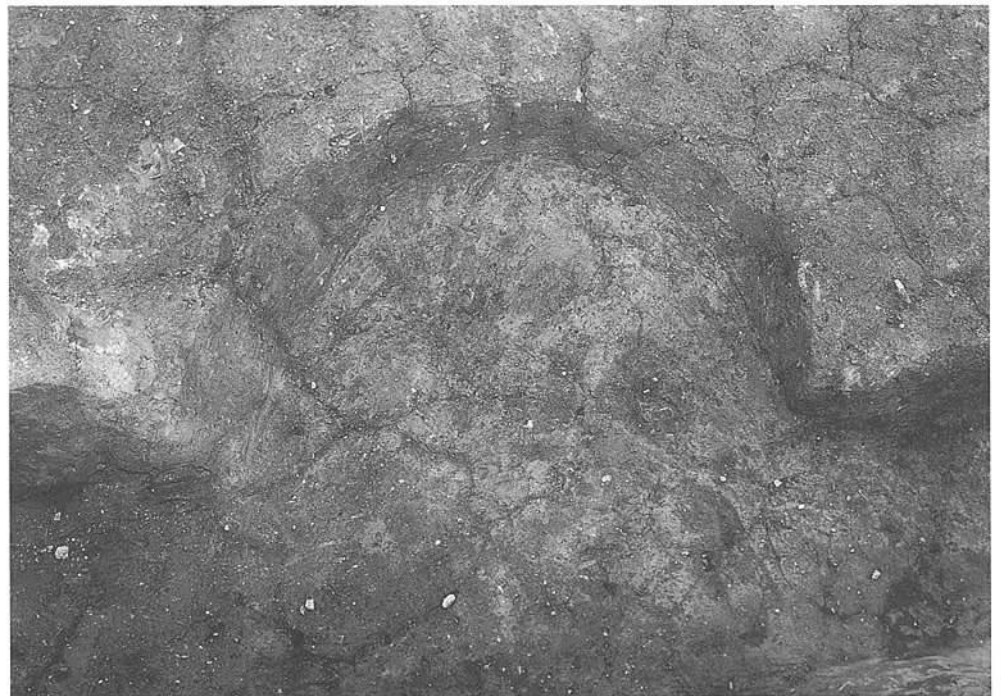


3. 5号土坑 (南から)

1. 6号土坑 (南から)



2. 7号土坑 (西から)



3. 8号土坑 (南から)





1. 9号土坑（北西から）



2. 10・11号土坑（北から）



3. 12号土坑（南東から）

1. 13号土坑
土器出土状況
(南西から)

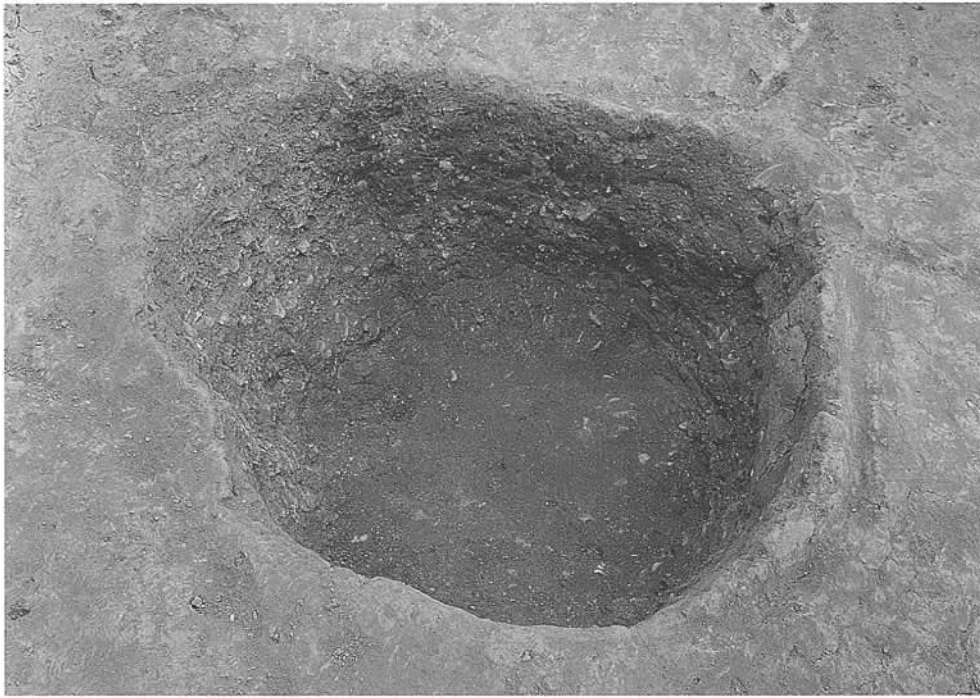


2. 13号土坑 (北西から)



3. 14号土坑 (南東から)





1. 15号土坑 (北から)



2. 16号土坑 (西から)



3. 17号土坑 (北西から)



1. 18号土坑 (北から)



2. 19号土坑 (北から)



3. 20号土坑 (北西から)



1. 21号土坑（北西から）



2. 22号土坑（南から）



3. 23号土坑（西から）



1. 24号土坑 (南東から)



2. 25号土坑 (北東から)



3. 26号土坑 (南から)



1. 27号土坑（西から）



2. 28号土坑（南から）



3. 29号土坑（北東から）



1. 30号土坑 (東から)



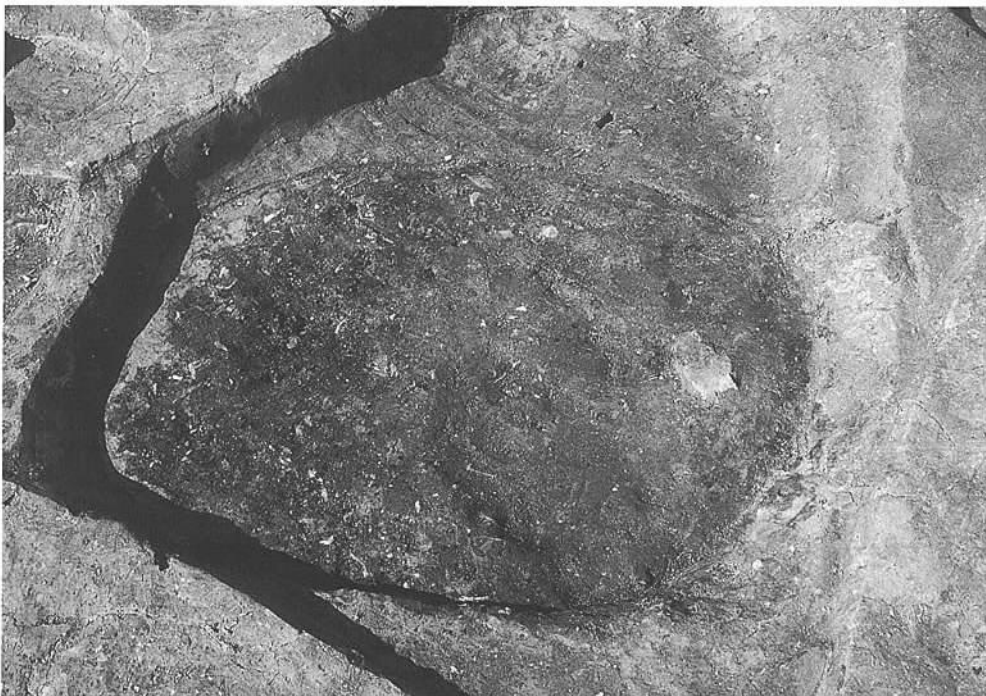
2. 31号土坑 (南西から)



3. 32号土坑 (南西から)



1. 33号土坑 (南西から)



2. 34号土坑検出状況
(東から)



3. 34号土坑 (北東から)



1. 35号土坑 (北西から)



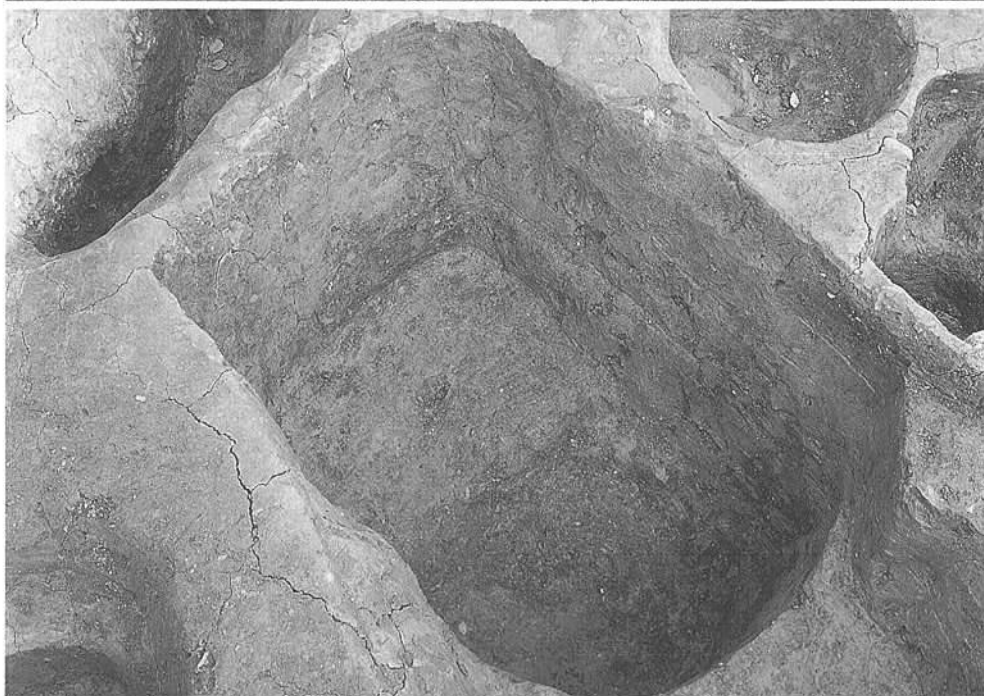
2. 36・37号土坑 (南東から)



3. 38号土坑 (北から)



1. 39号土坑 (北西から)

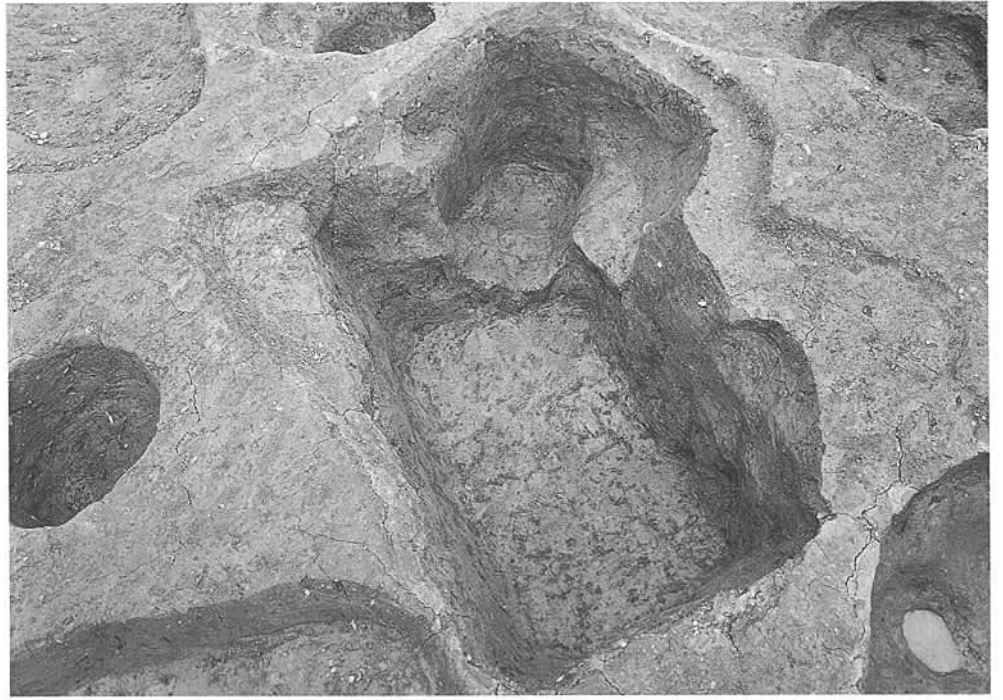


2. 40号土坑 (西から)



3. 41・42号土坑 (北東から)

1. 43・44号土坑 (北西から)

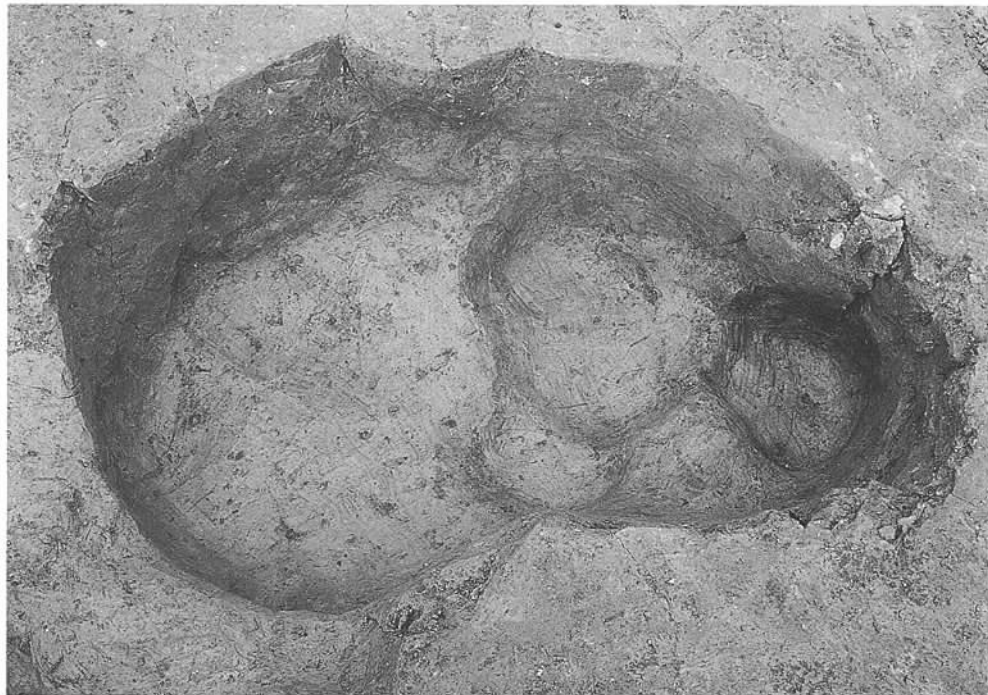


2. 45号土坑 (東から)



3. 46号土坑 (南西から)





1. 47号土坑（南東から）



2. 48号土坑（南東から）



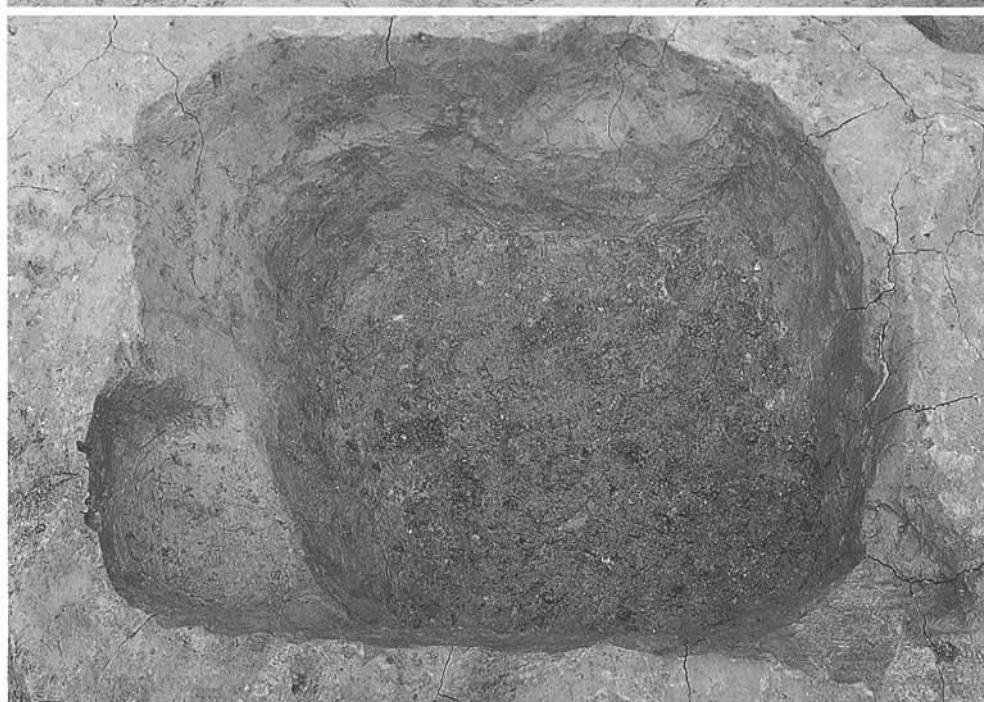
3. 50号土坑（北西から）



1. 51号土坑 (東から)



2. 52号土坑 (北東から)



3. 53号土坑 (東から)



1. 54号土坑（北から）



2. 55号土坑（東から）



3. 56号土坑（南西から）

1. 57号土坑（北東から）



2. 58号土坑（西から）



3. 49・59号土坑
（北西から）





1. 60号土坑（北から）



2. 61号土坑（北から）



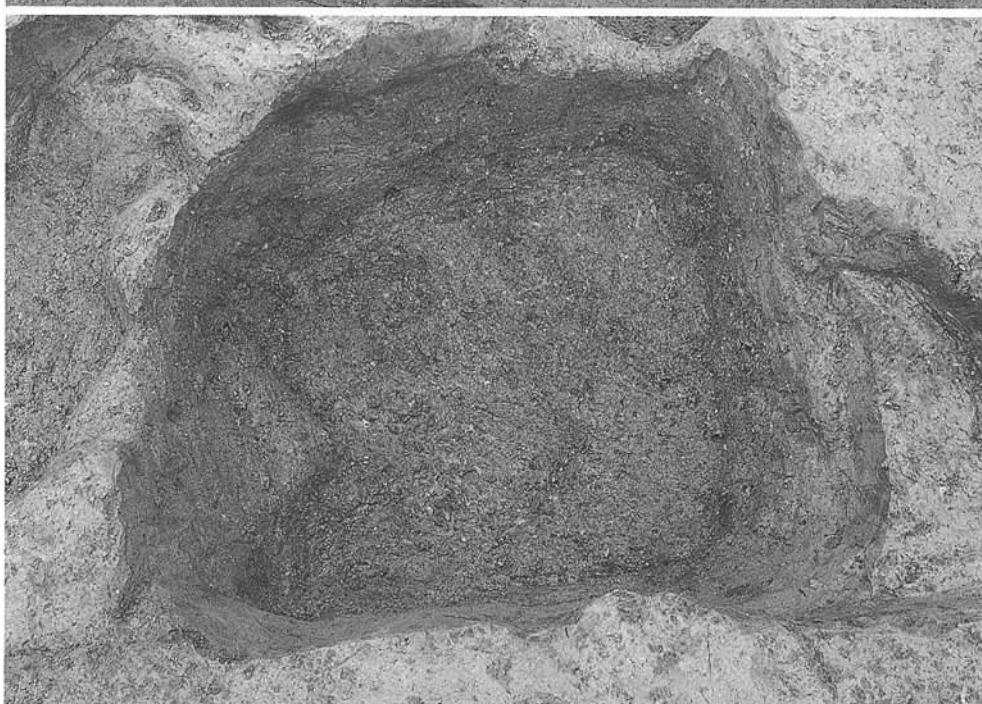
3. 62号土坑（北西から）



1. 63号土坑 (西から)



2. 64号土坑 (南から)



3. 65号土坑 (東から)



1. 66号土坑（南東から）



2. 67号土坑（西から）



3. 68・69号土坑（西から）



1. 70号土坑（北東から）



2. 71号土坑（南西から）



3. 72号土坑（南から）



1. 73号土坑（北から）



2. 74号土坑（西から）



3. 75号土坑（北から）



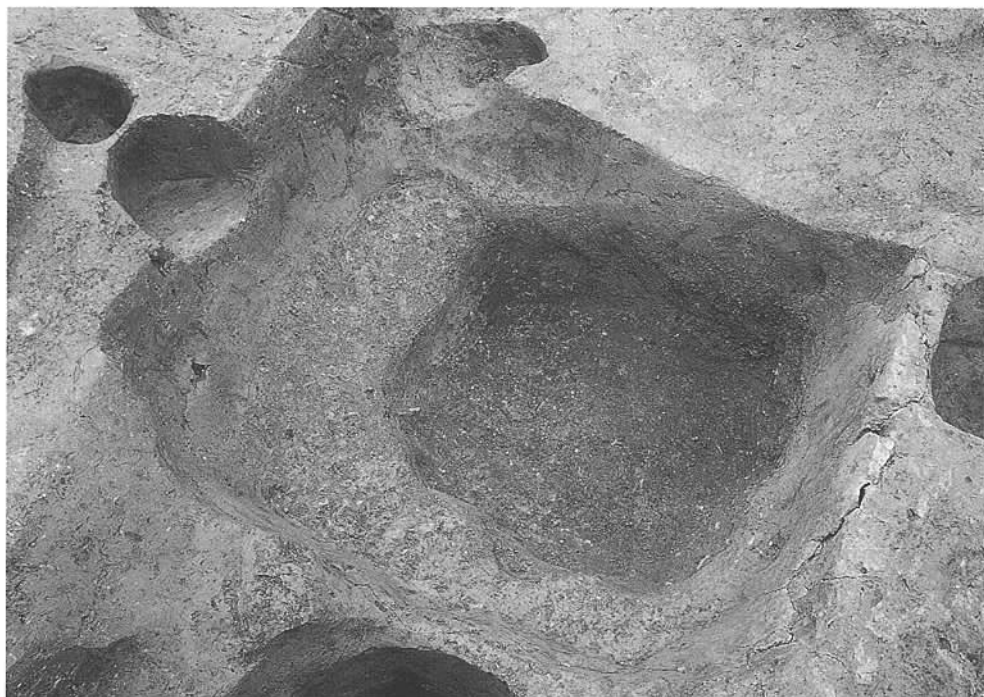
1. 76号土坑 (南から)



2. 77号土坑 (南から)



3. 78号土坑 (北東から)



1. 79号土坑 (東から)



2. 80号土坑 (北から)



3. 81号土坑 (北から)



1. 82号土坑（北東から）



2. 83号土坑（南から）



3. 84号土坑（北西から）



1. 85号土坑（南から）



2. 86号土坑（西から）



3. 88号土坑（北東から）

1. 89号土坑
土器出土状況
(北から)



2. 89号土坑 (南から)



3. 90号土坑 (北から)





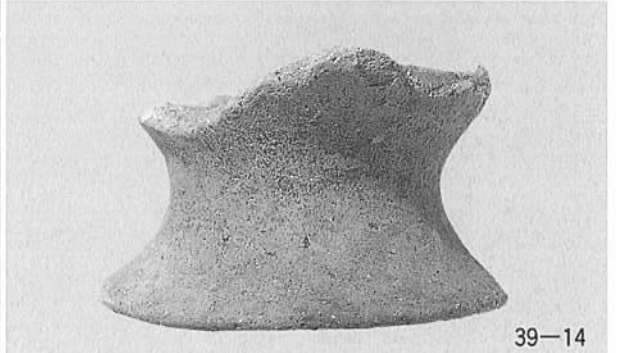
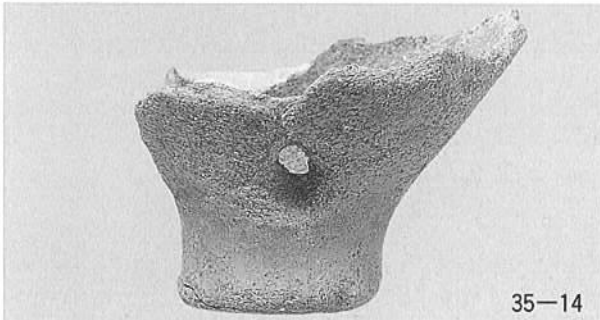
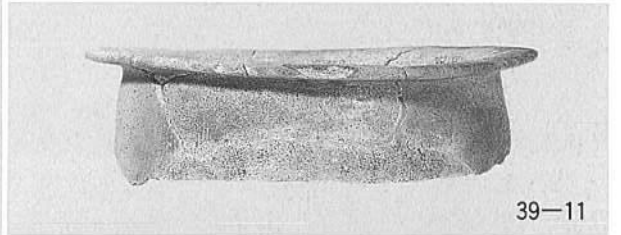
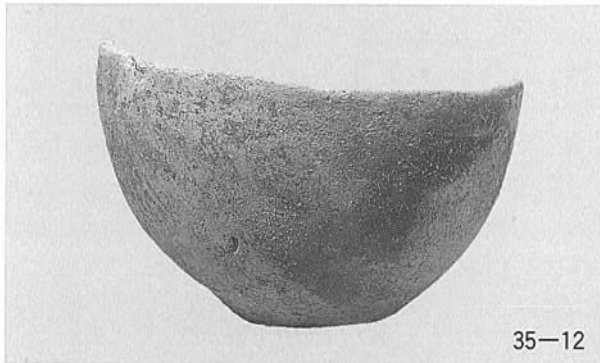
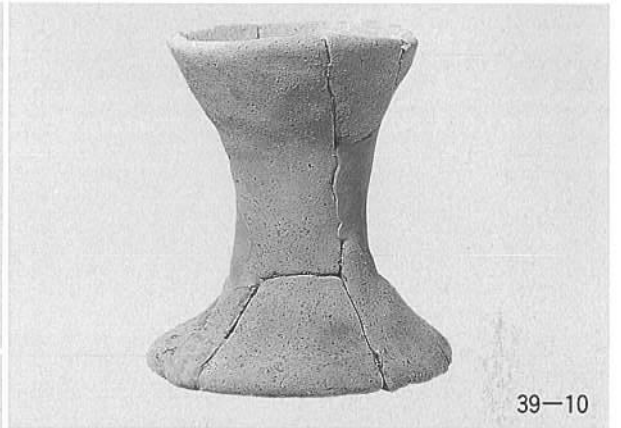
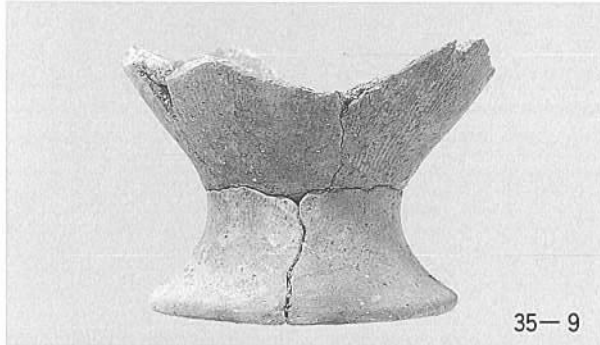
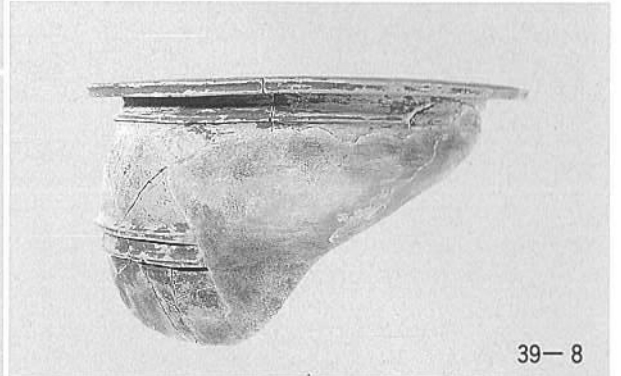
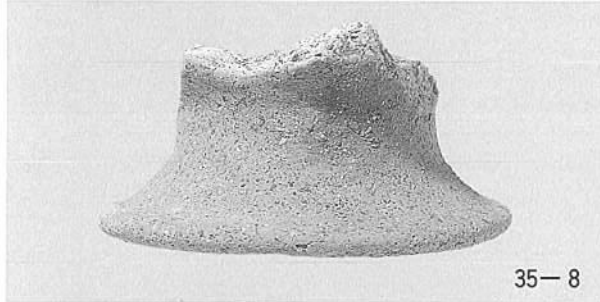
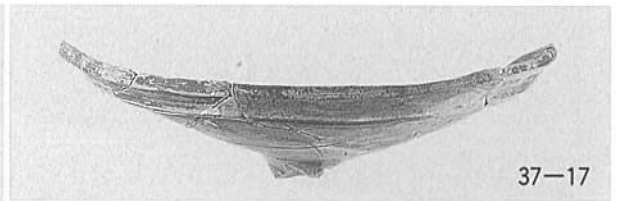
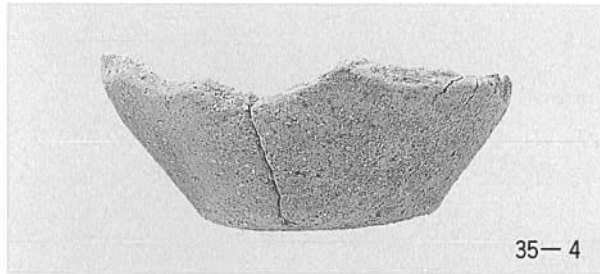
1. 91号土坑（東から）



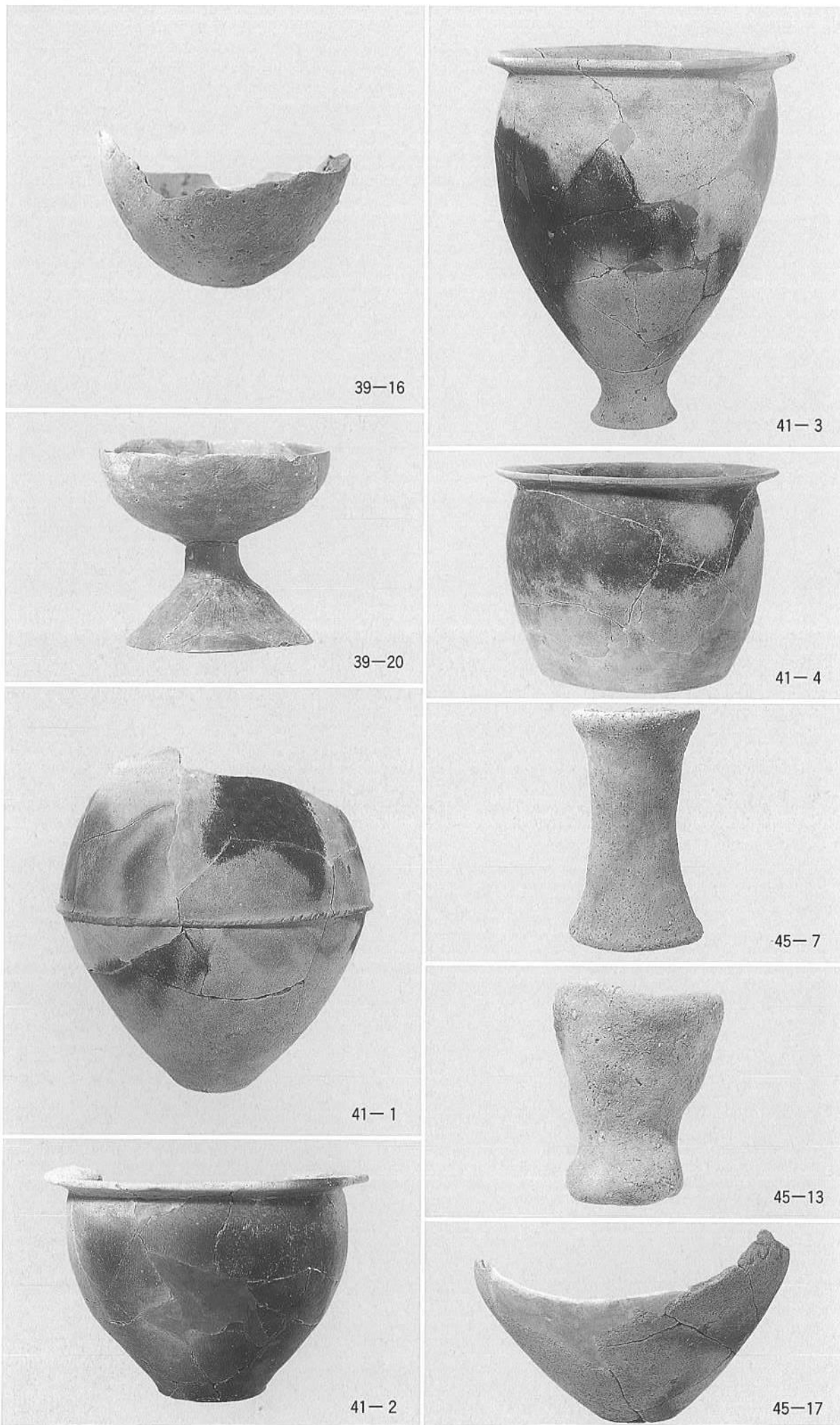
2. 92号土坑（東から）



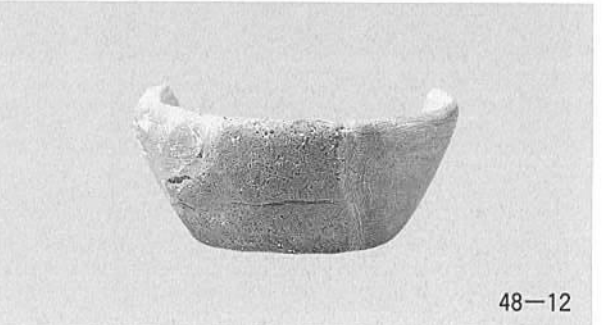
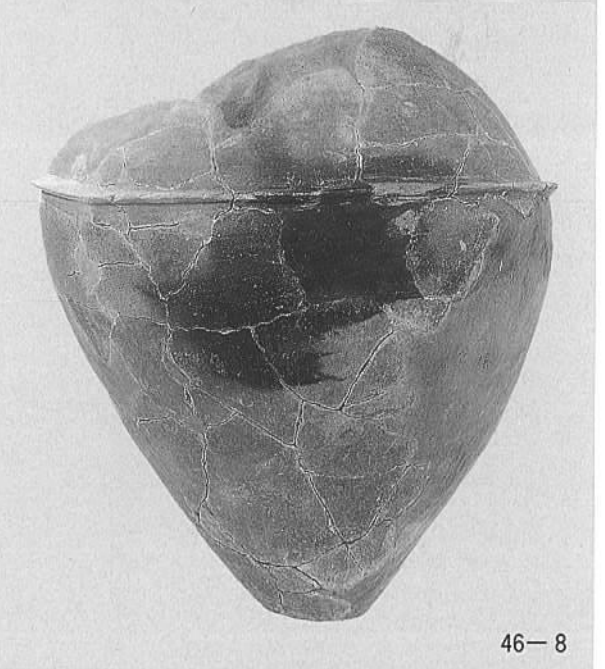
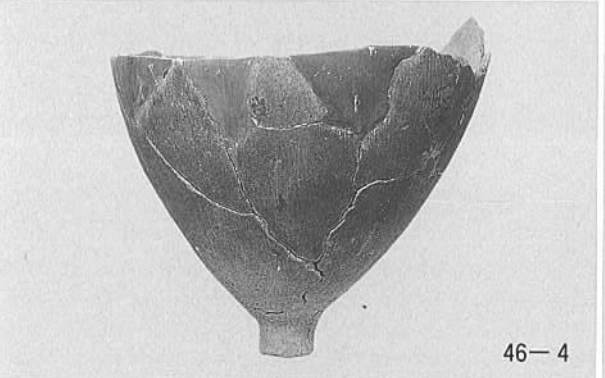
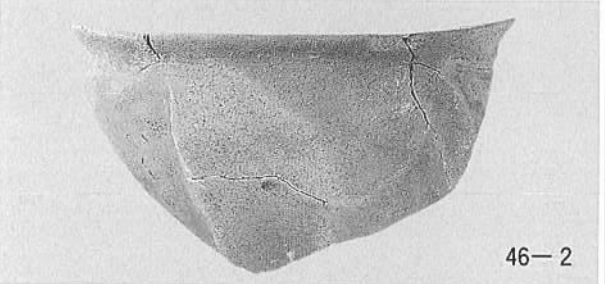
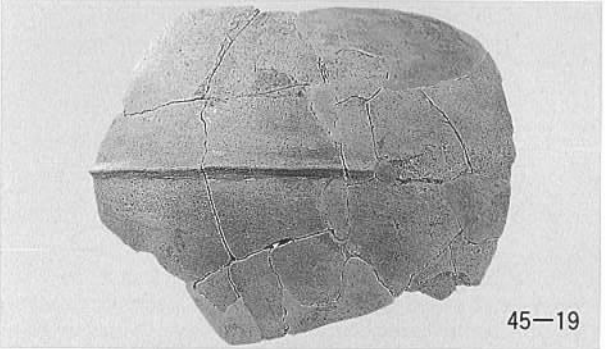
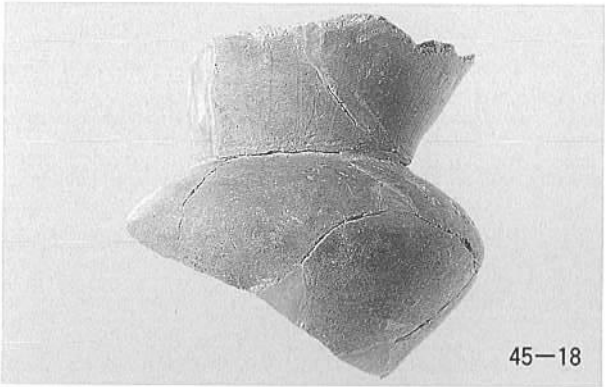
3. ピット25
軽石出土状況（南東から）



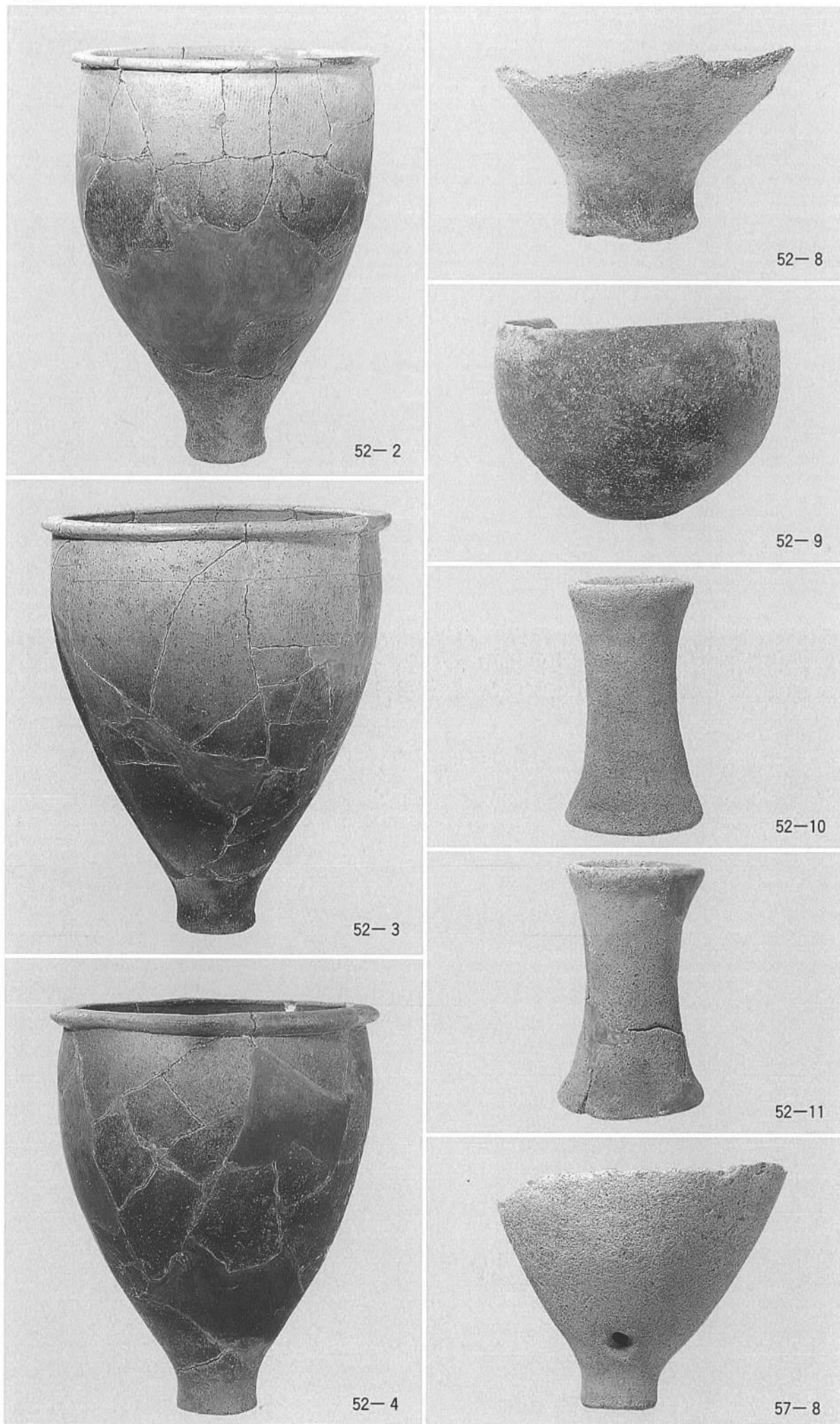
3~6号竖穴住居跡出土土器

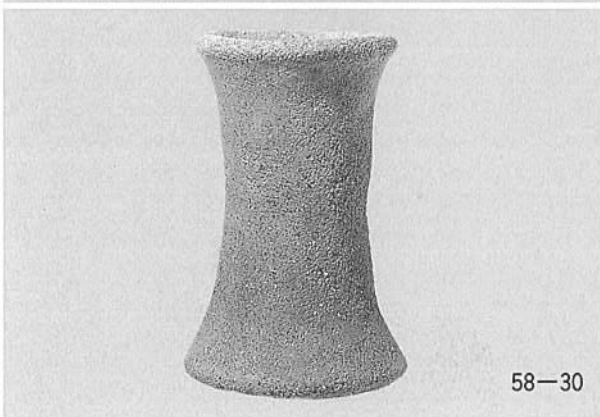
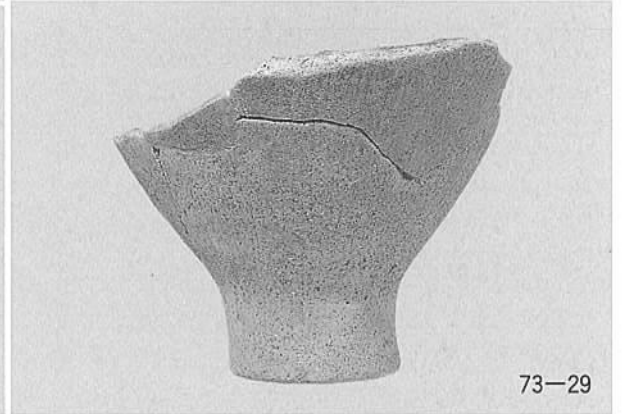
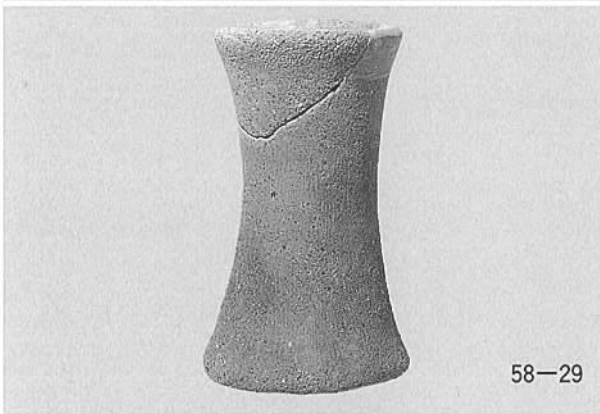
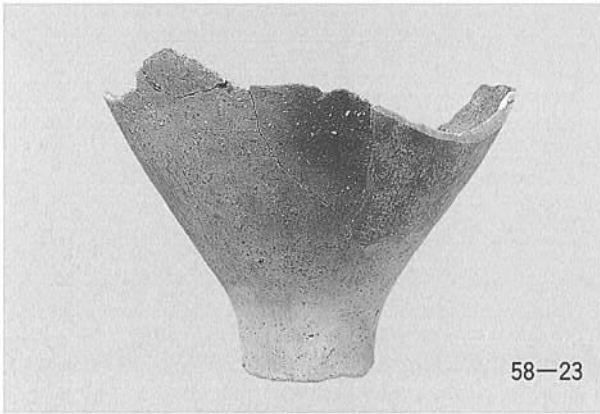
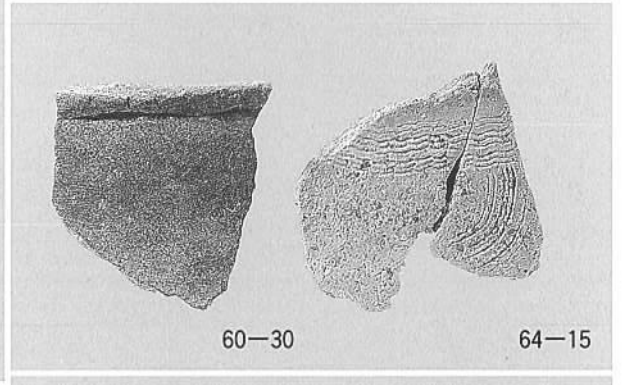
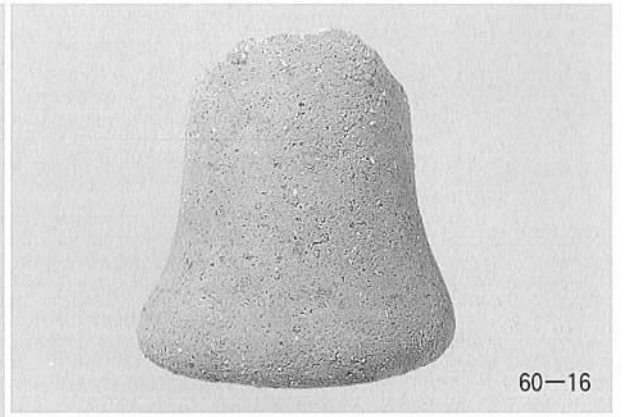
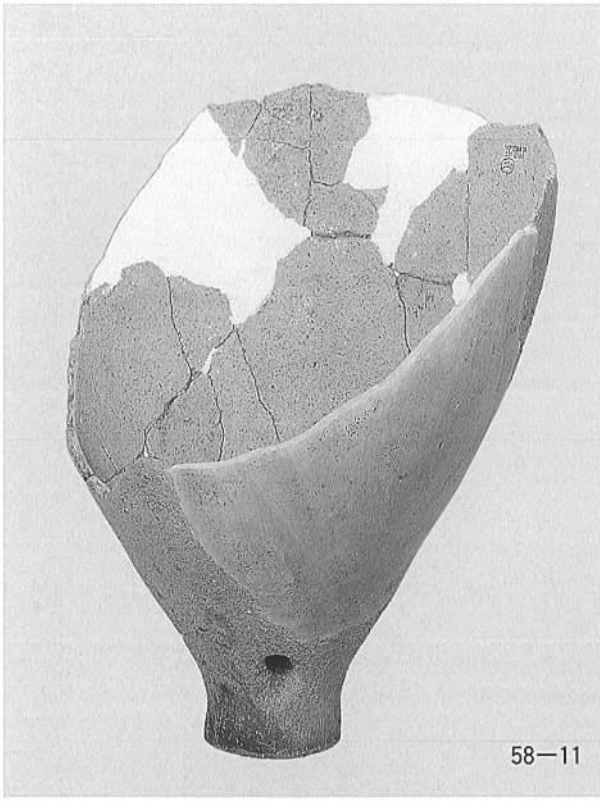


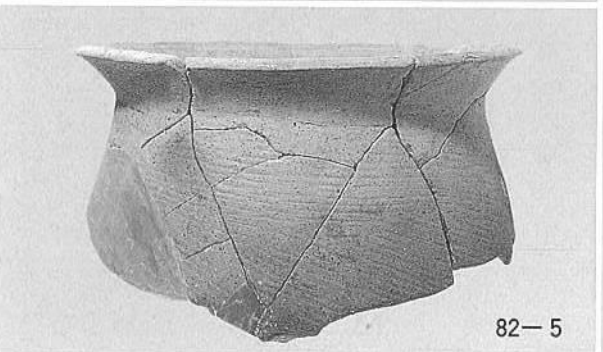
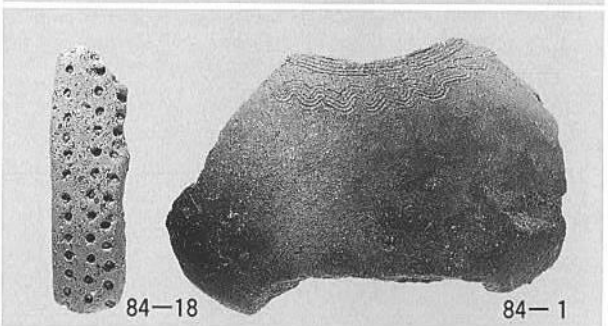
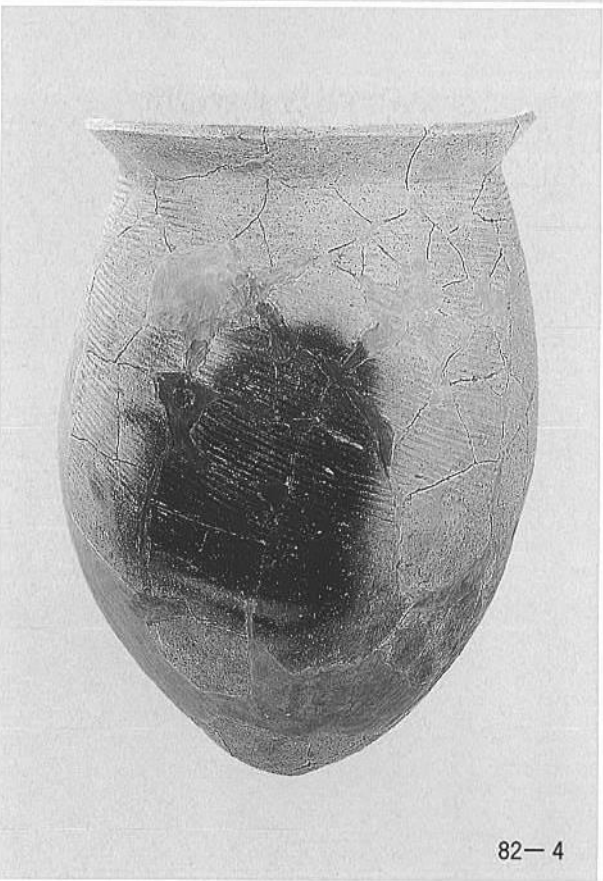
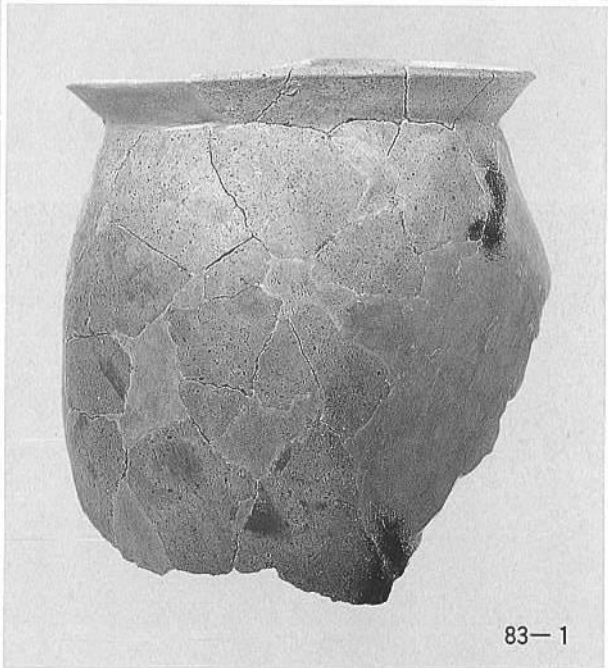
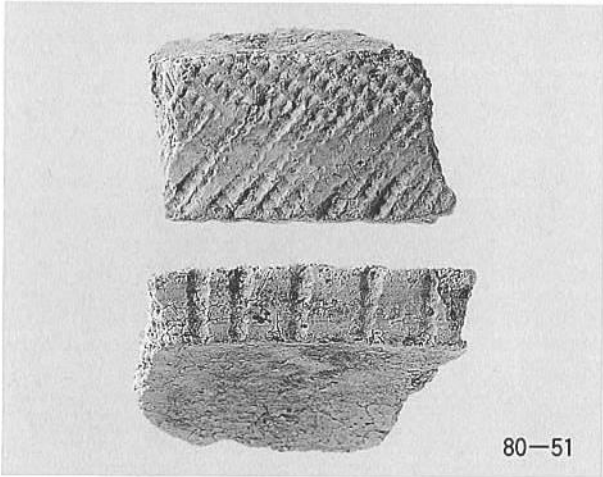
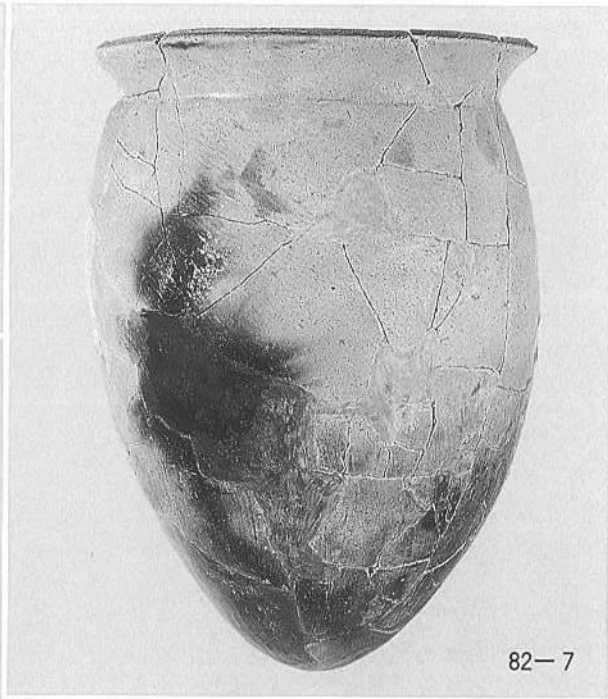
5 ~ 8 · 12 · 13 · 15号竖穴住居跡出土土器



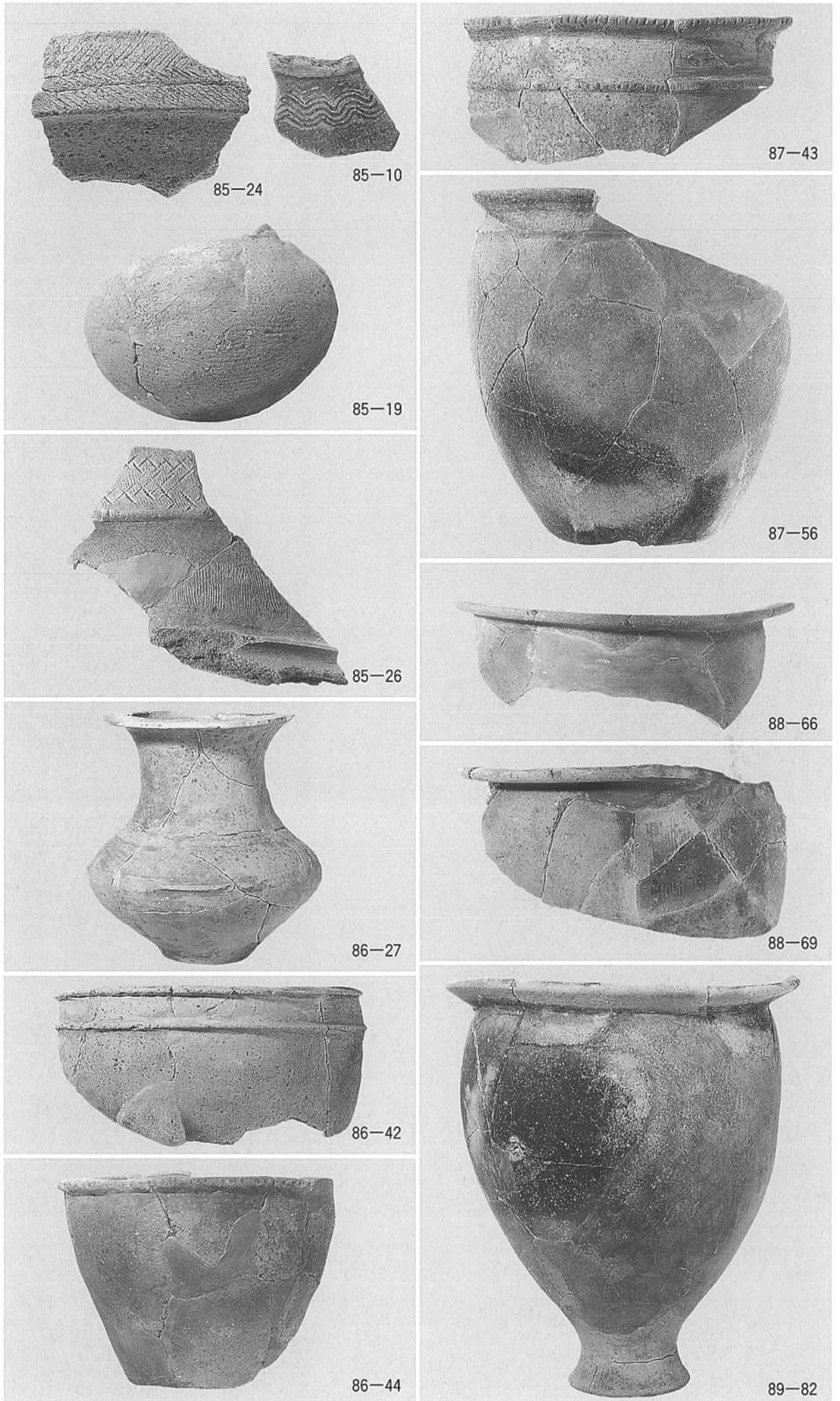
15号竖穴住居跡、5号土坑出土土器



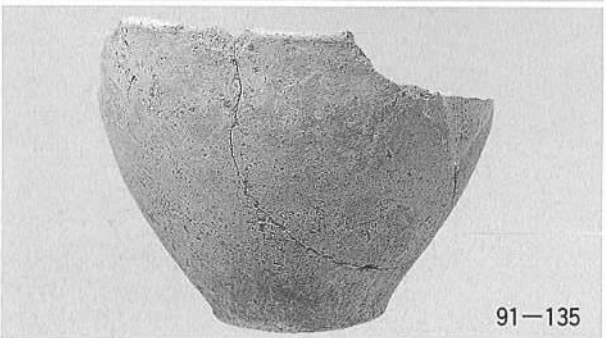
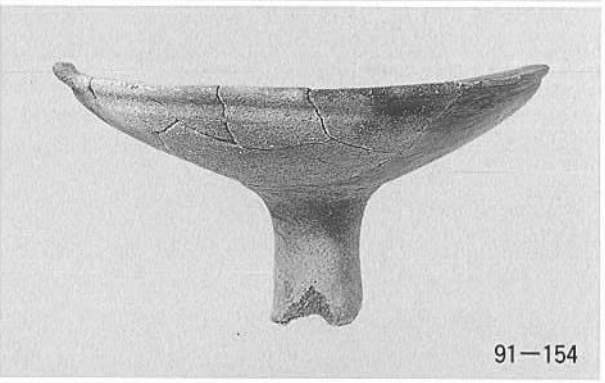
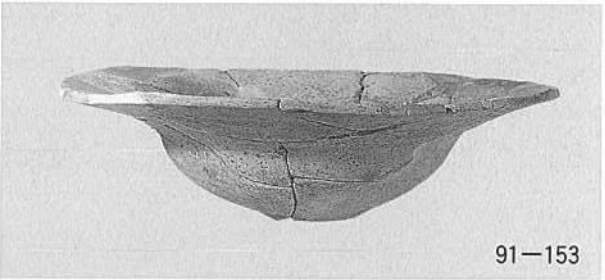
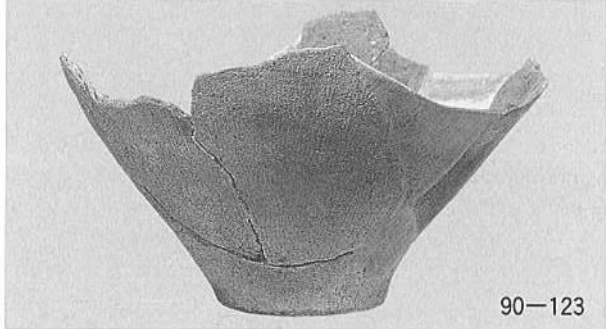
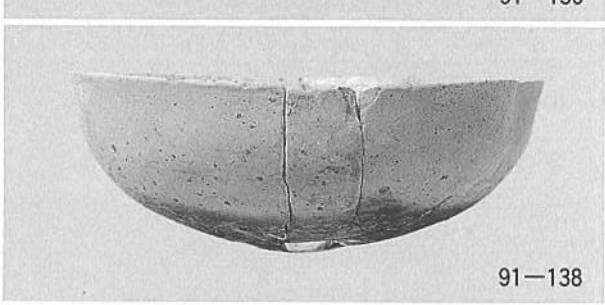
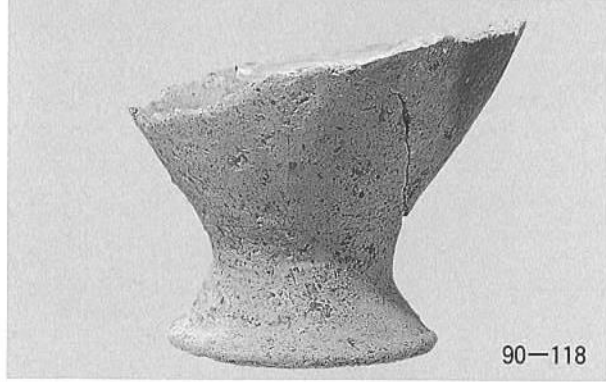
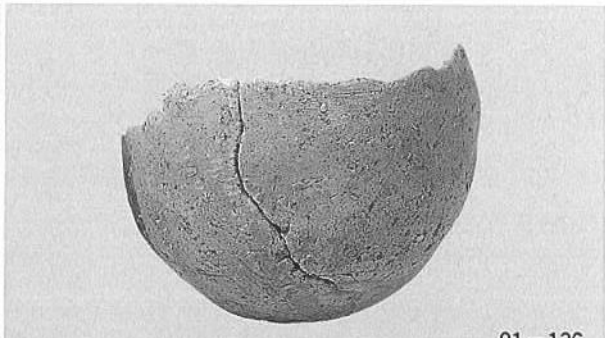




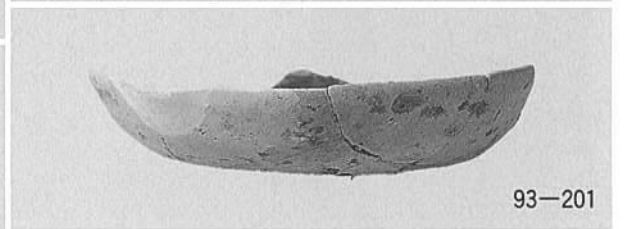
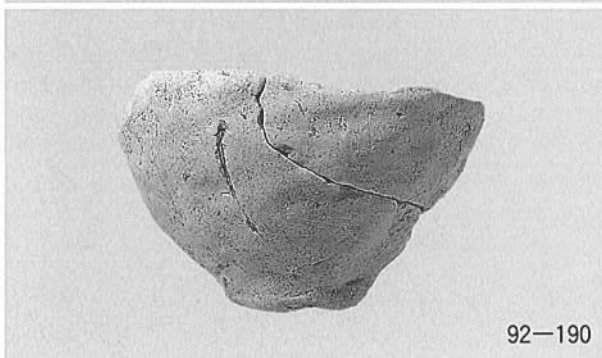
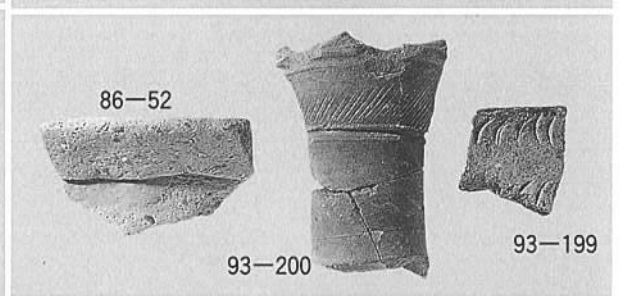
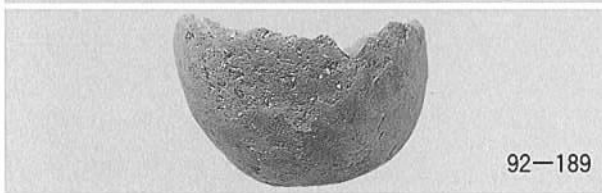
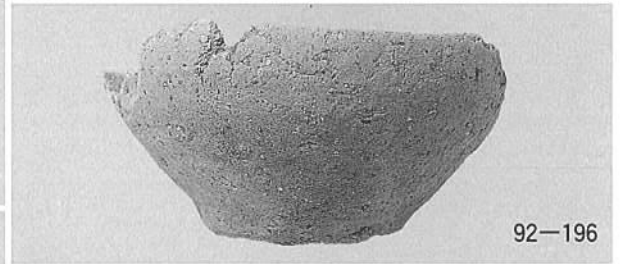
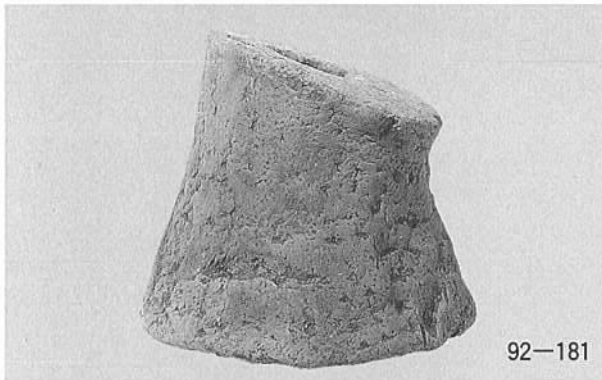
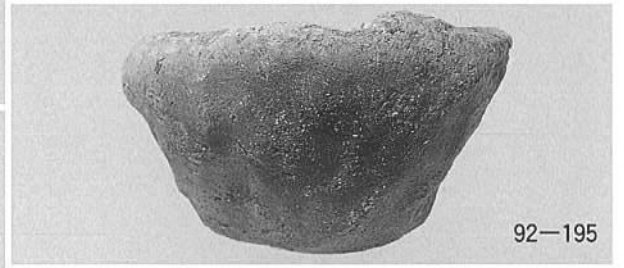
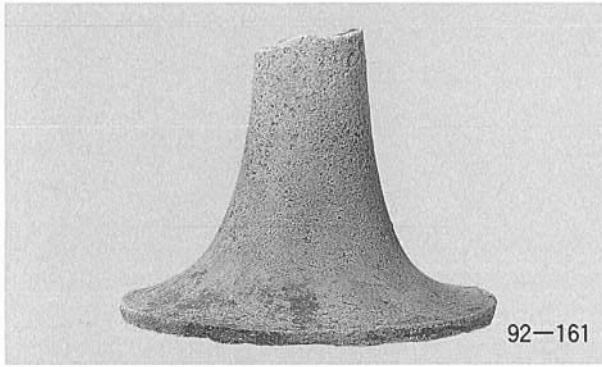
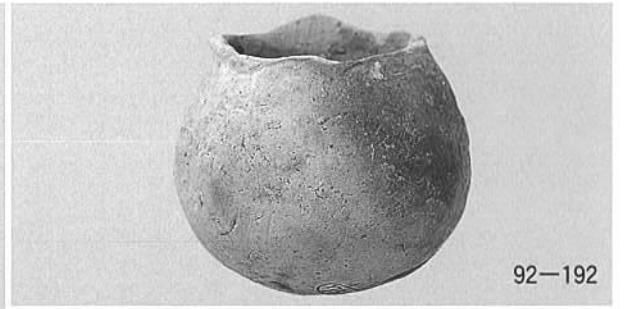
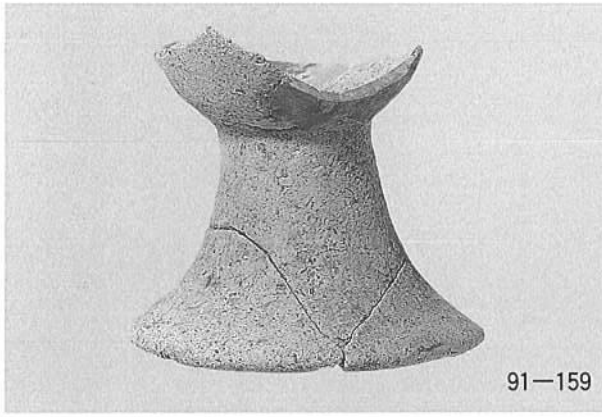
79・84・89号土坑、ピット出土土器、包含層出土土器①



包含層出土土器②

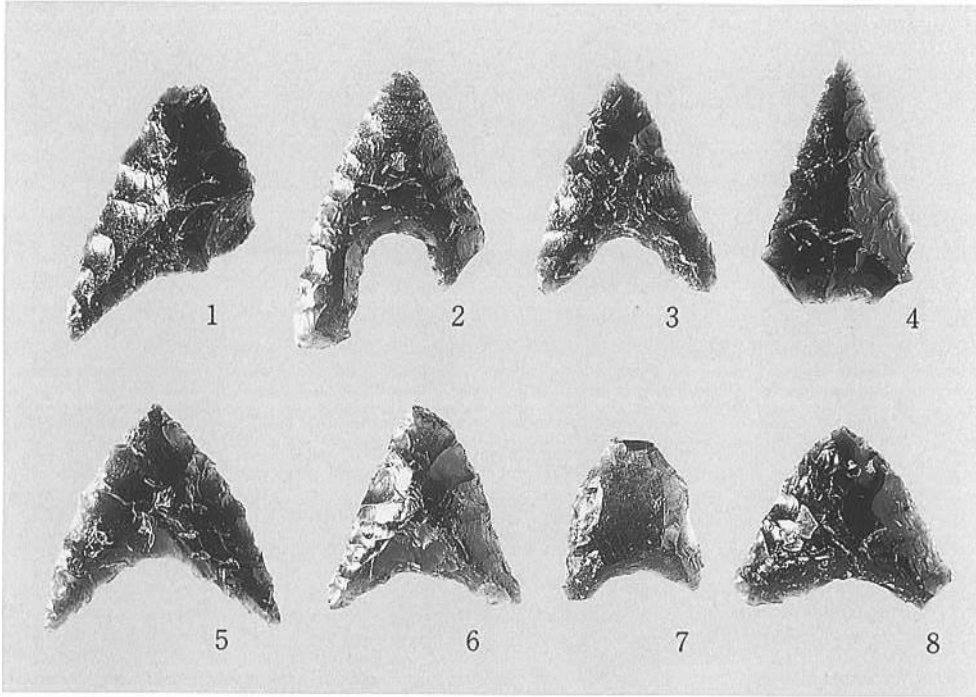


包含層出土土器③

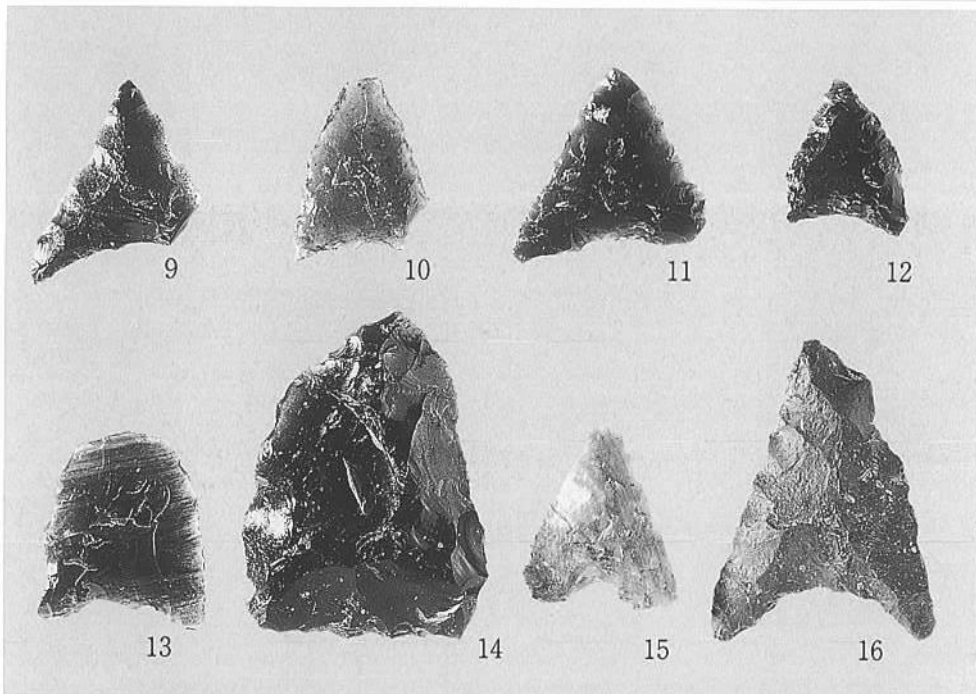


包含層出土土器④ ピット25出土軽石

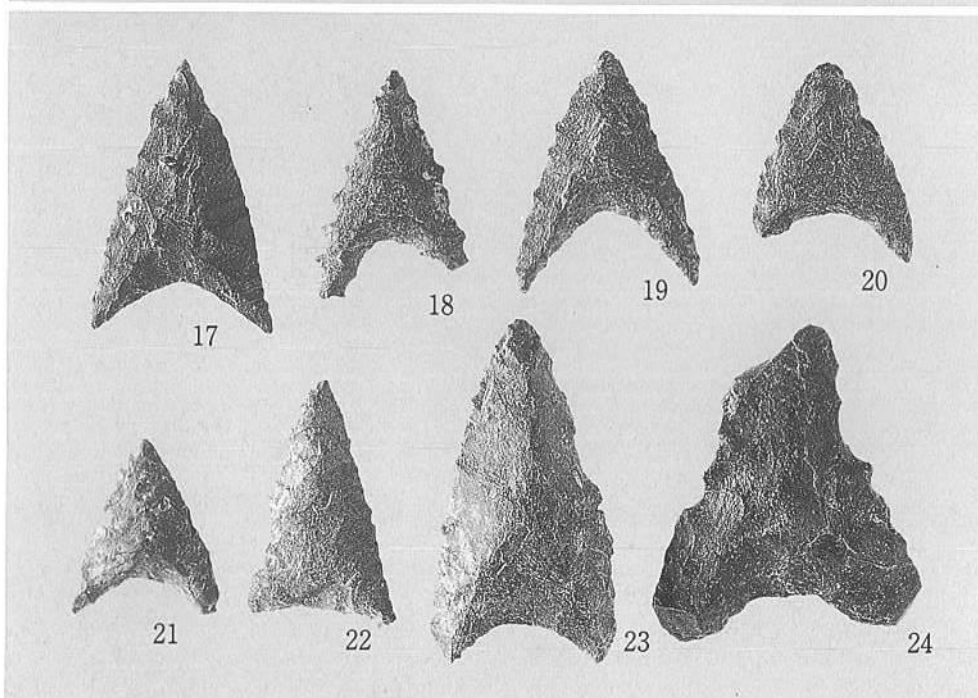
ピット25出土軽石



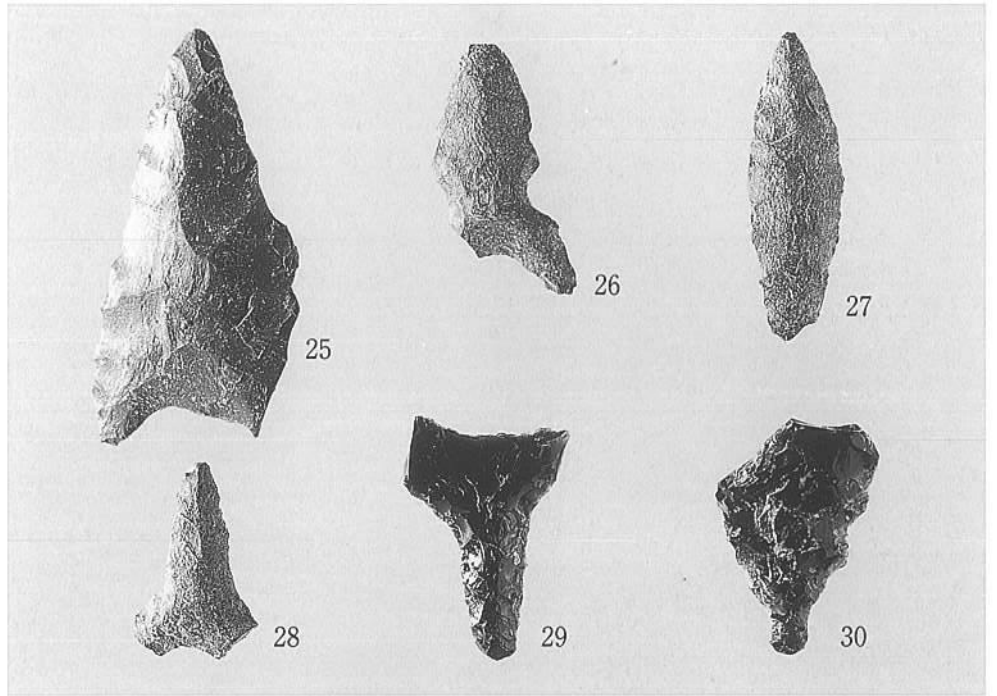
1. 出土石器①



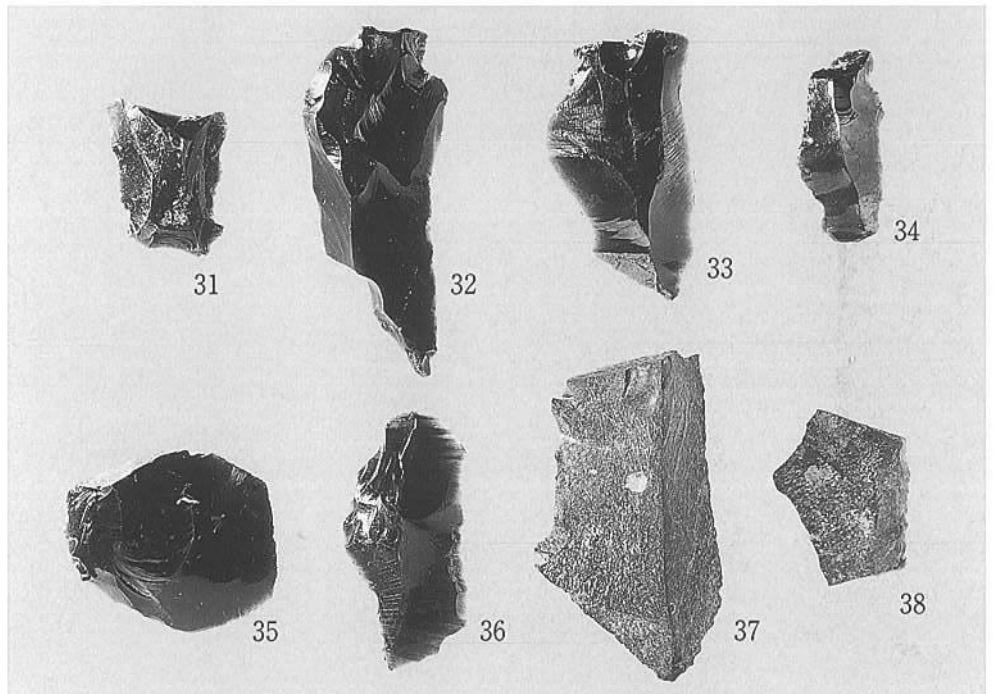
2. 出土石器②



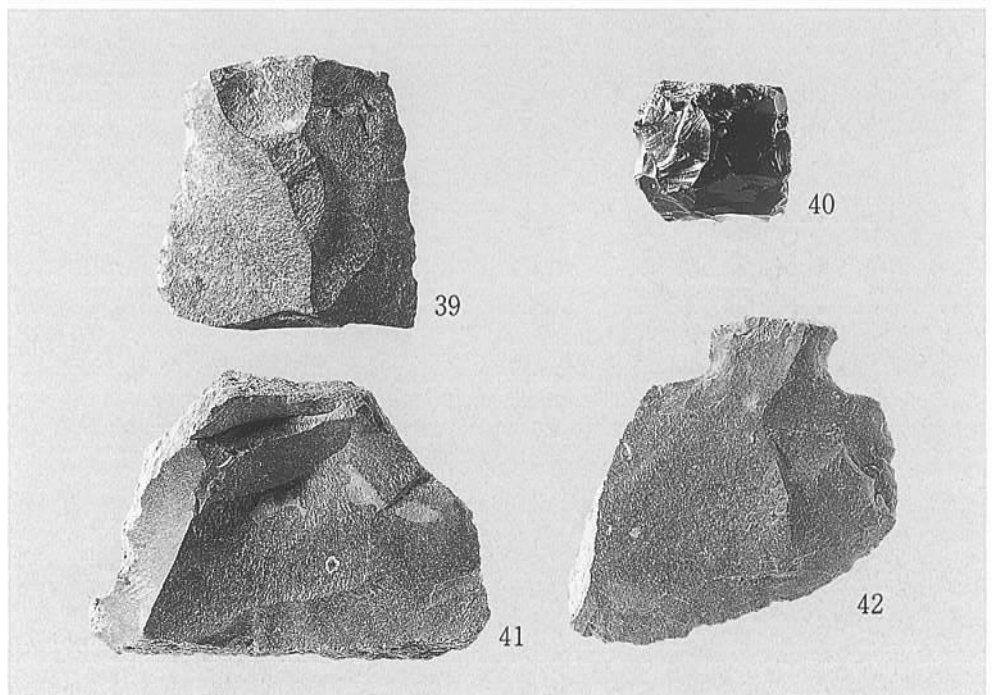
3. 出土石器③



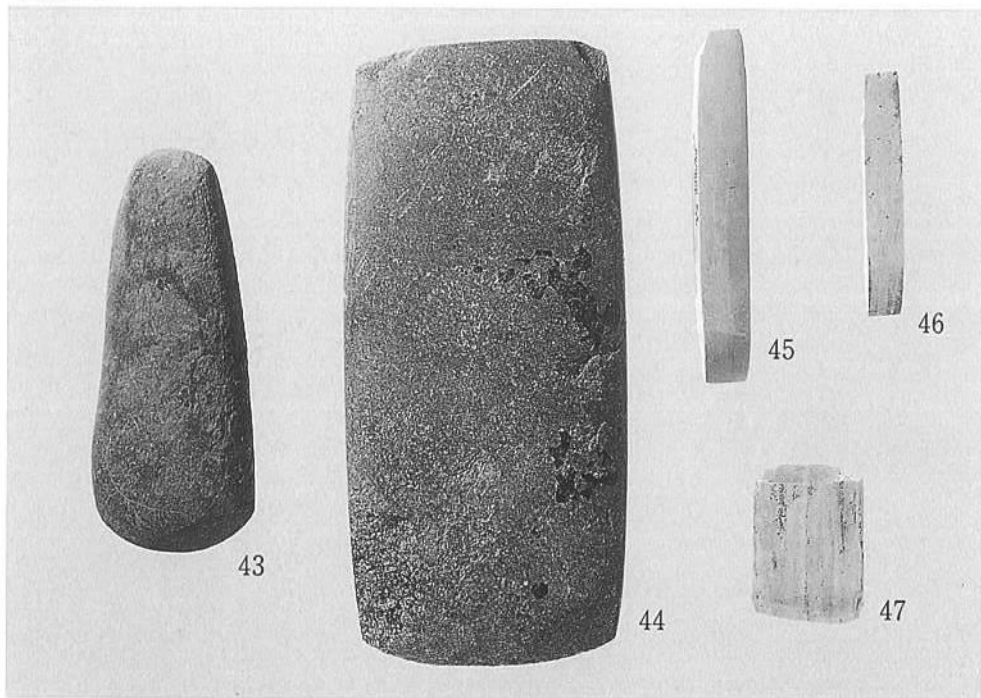
1. 出土石器④



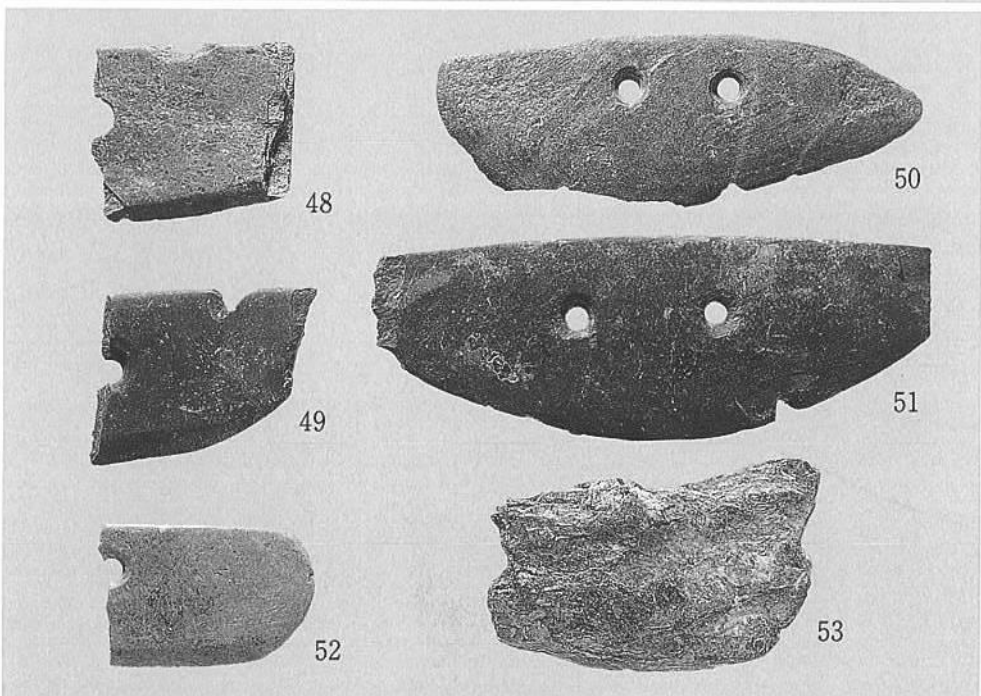
2. 出土石器⑤



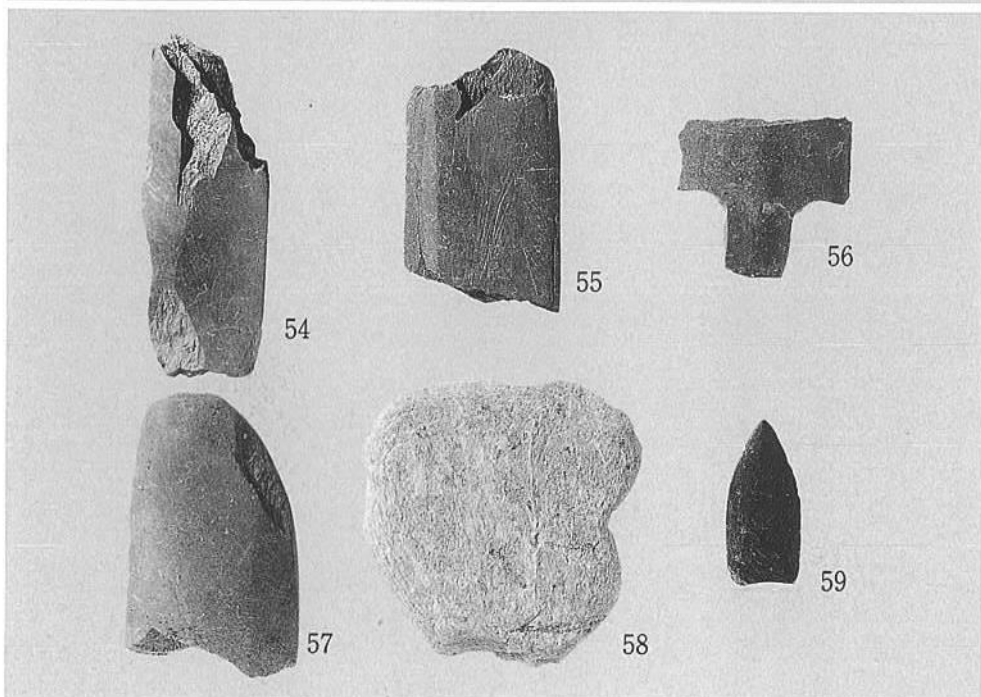
3. 出土石器⑥



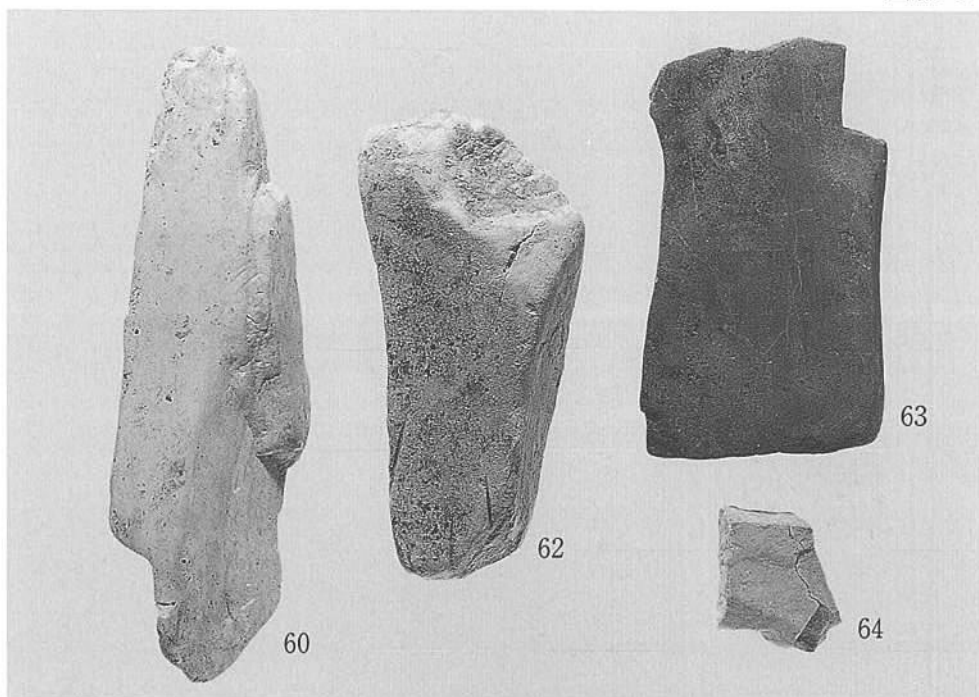
1. 出土石器⑦



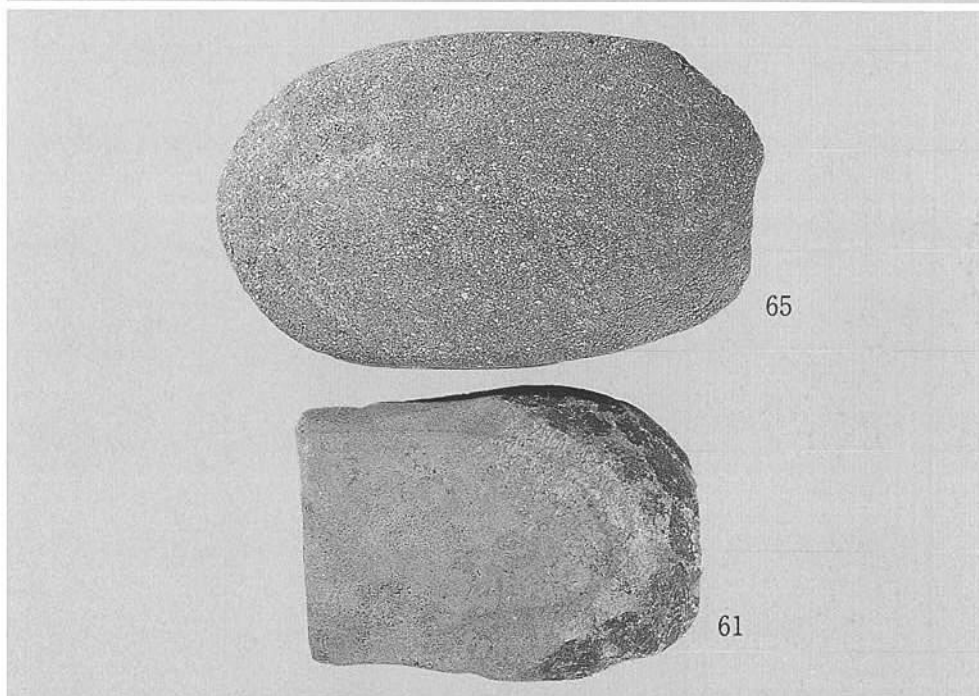
2. 出土石器⑧



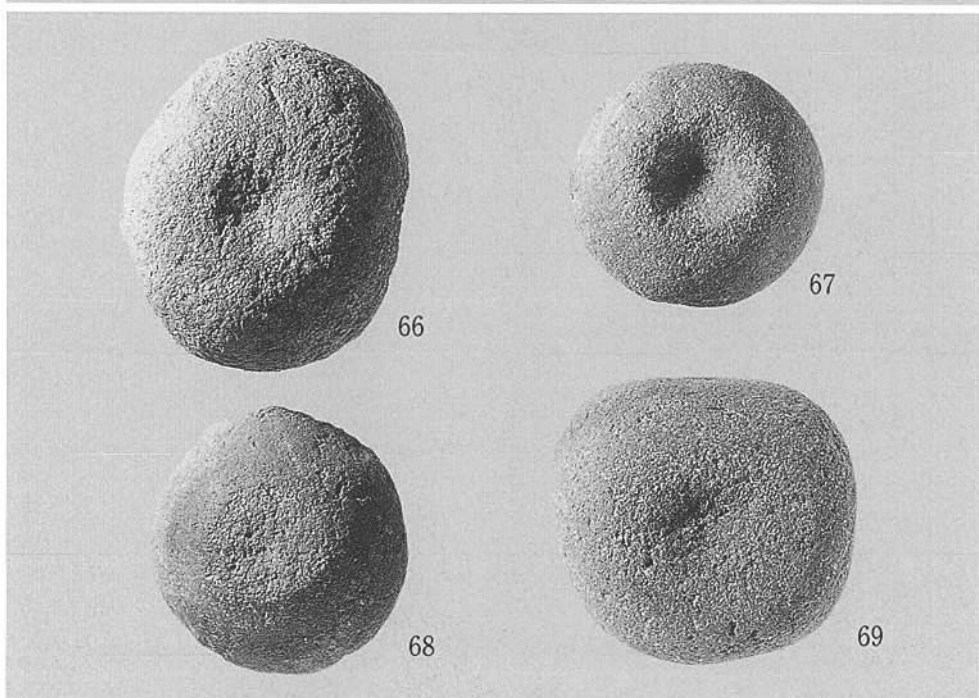
3. 出土石器⑨



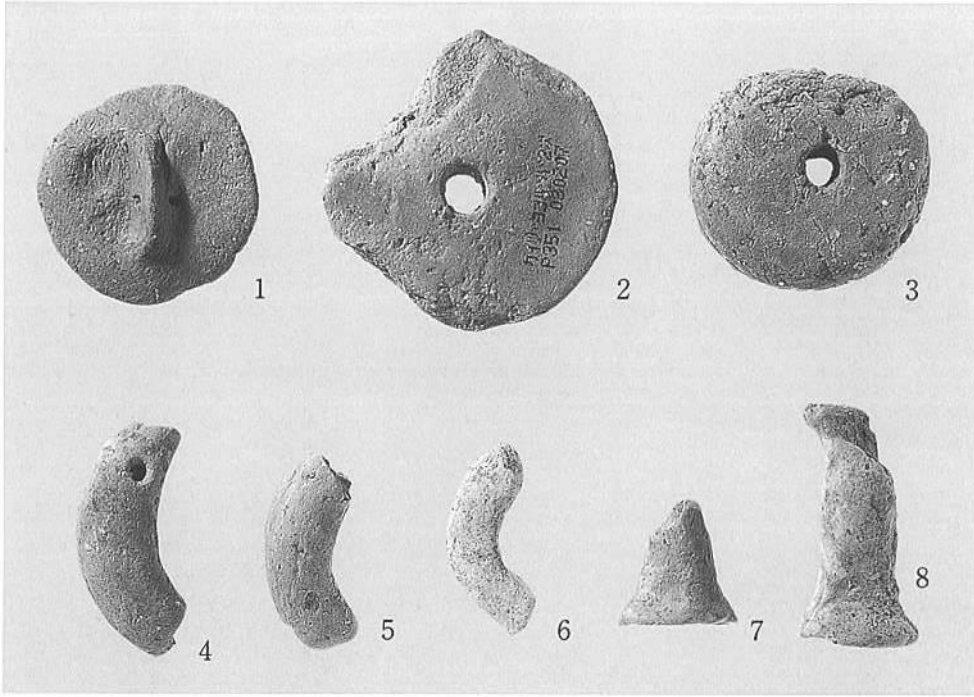
1. 出土石器⑩



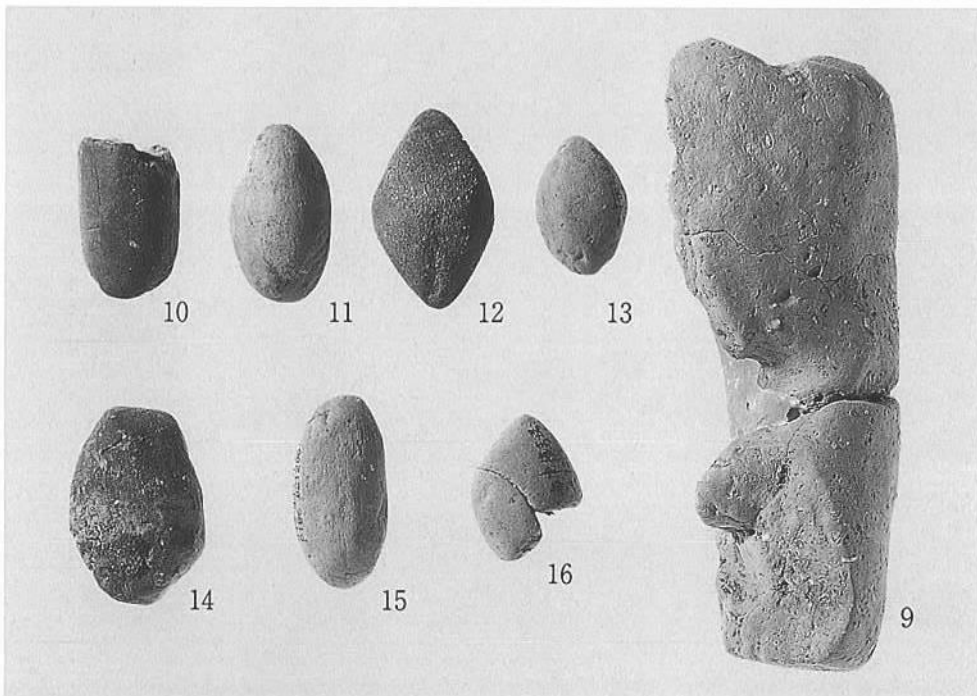
2. 出土石器⑪



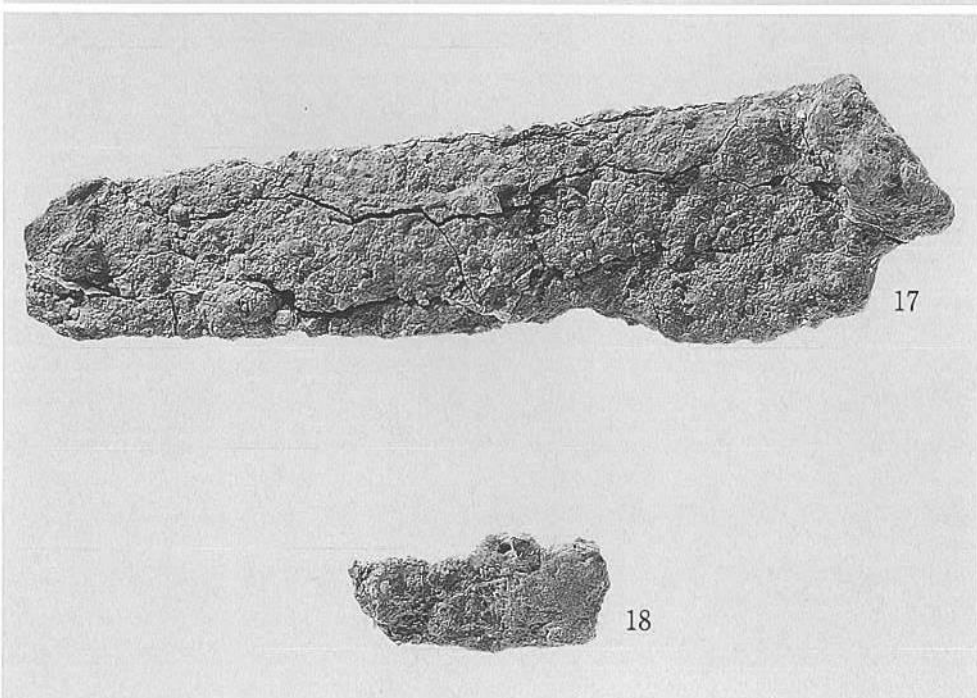
3. 出土石器⑫



1. 出土土製品①



2. 出土土製品②



3. 出土鉄器

報告書抄録

| ふりがな | かいづよこばばいせき | | | | | | | |
|-------------------------------|--|----------------------------|-------------------------|---|--------------------|--|--------------------|-------------|
| 書名 | 海津横馬場遺跡 I | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第 1 集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 進村真之、宮地聡一郎 | | | | | | | |
| 編集機関 | 福岡県教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒812-8577 福岡県福岡市博多区東公園 7 番 7 号 TEL092-651-1111 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 2005年 3月31日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| かいづよこばば 海津横馬場 いせき 遺跡 | ふくおかけん みいけぐん 福岡県三池郡 たかた まちおおあざかいづ 高田町大字海津 あざよこばば 字横馬場 | 40581 | 800156 | 30° 07' 03" | 130° 29' 36" | 2001.11.20 } 2002.03.08 2002.06.03 } 2003.03.14 | 約950m ² | 九州新幹 線建設 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | | |
| 海津横馬場 遺跡 | 集落 | 弥生時代 古墳時代 奈良時代 中世 | 竪穴住居跡 石棺墓 土坑 溝 | 弥生土器 土師器 須恵器 石器 土製品 金属製品 | | | | |

| 福岡県行政資料 | |
|-------------|------------------|
| 分類番号 J H | 所属コード 2114107 |
| 登録年度 16 | 登録番号 11 |

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第1集

海津横馬場遺跡 I

平成17年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 信光社印刷有限会社
〒838-0065 福岡県甘木市大字一本32-1
TEL 0946-22-2831 FAX 0946-26-1186